

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Language survey in Turuoka city, Yamagata pref.

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所, The National Language Research Institute メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001214

国立国語研究所報告 5

地域社会の言語生活

—— 鶴岡における実態調査 ——

株式会社 秀英出版

1953

国立国語研究所報告 5

地域社会の言語生活

— 鶴岡における実態調査 —

株式会社 秀英出版

1953

は し が き

国立国語研究所では昭和24年に、福島県白河市および附近の農村において言語生活の実態調査を行い、幾多の知見を得た。しかし、それが果して一般的なものかどうかをたしかめるには、他の地点で調べてみる必要がある。そこでわれわれは、昭和25年に山形県鶴岡市および附近の農村において、再び言語生活の実態調査を試みた。

この鶴岡地域の調査は統計数理研究所との共同研究として立案企画したものであり、幸に文部省の科学試験研究費補助金の交附を受け、主として昭和25年10月から11月にかけて現地におもむいて調査を実施し、その結果の主要な部分を整理したものがこの報告書である。

白河地域における調査の成果を報告した国立国語研究所報告2「言語生活の実態」(昭和26年刊、秀英出版)と共に、本報告書は、一部分ながら、国民の言語生活の現状を明らかにしたものである。

前にも述べた通り、この調査研究は終始、統計数理研究所と共同で行われたものであるが、国立国語研究所としても、大部分の所員がこの仕事に従った。特に、研究第一部長岩淵悦太郎、所員中村通夫、同柴田武、および統計数理研究所第三部長林知己夫氏が、調査研究を立案し、報告書を執筆するまで、絶えず仕事の中心となって力を尽した。

最後に、非常な熱意をもって協力して下さった、鶴岡市の学務課長門田正則氏をはじめ鶴岡地域の関係者の方々に、心から感謝の意を表わしたい。このような調査は、現地の人々の協力なくしてはとうてい完成するものではないのである。一々氏名を挙げることをしないが、謹んでお礼を申し上げる。

昭和28年3月

国立国語研究所長 西 尾 実

目 次

は し が き

I 調査の概要	1
1 調査の目的	2
2 調査の地点	2
2.1 地点を選ぶ基準	2
2.2 庄内地方と鶴岡市・山添村	3
3 調査の計画	5
4 結果の処理と報告書の作成	7
5 成果のあらまし	8
5.1 共通語化の要因と過程	8
5.2 鶴岡方言の特徴	8
5.3 個人の一日の言語生活	12
II 共通語化の要因と過程	13
1 は し が き	14
2 調査の計画	14
2.1 課 題	15
2.2 地 域	15
2.3 調査票の作成	15
2.31 要因のための項目	16
2.32 要因を知る手がかりのための項目	34
2.33 言語的特徴のための項目	35
2.34 調 査 票	36
2.4 被調査者のサンプリング	36
2.41 あらまし	36
2.42 母集団の構成	43
2.43 サンプリングの方法	44
2.44 サンプリングの精度	47
2.45 第1次サンプルの抽出	50
2.46 第2次サンプルの抽出	51
2.47 山添村のサンプリング	52
2.48 調査できなかった者について	52
2.49 サンプリングの実施	57
3 調査の結果	58

3.1	共通語化の度合を表わす指標	58
3.2	共通語化の要因	79
3.21	共通語化の度合の分布	80
3.22	要因別分析	86
3.23	要因の比較	102
3.24	要因の重み	109
3.25	おもな要因	118
3.3	要因としての新語の理解度	119
3.4	山添村と鶴岡市	121
3.5	共通語化の過程	125
3.51	どういふ場面から変るか	125
3.52	どういふ人から変るか	126
3.53	どういふ音声の特徴から変るか	127
4	結 び	140
Ⅲ	鶴岡方言の特徴	143
1	音 声	144
1.1	はしがき	144
1.2	鶴岡方言の音声の特徴	144
1.3	ひとつひとつの特徴	146
1.31	両くちびるの摩擦音	146
1.32	鼻音化音	147
1.33	中舌母音と狭い前舌母音	149
1.34	[si]	149
1.35	口蓋化した摩擦音	150
1.36	ある有声音	151
1.37	くちびるの音化音	152
1.38	/aj, ae/ に当る [e]	152
1.39	[kɕ]	153
1.310	/ju/ に対応する [jo]	153
1.4	調査語を選ぶまで	153
1.5	ひとつひとつの特徴の文化的条件による違い	155
1.6	簡略かな表記法	161
2	アクセント	163
2.1	鶴岡アクセントの体系	163
2.11	単音節名詞	164
2.12	二音節名詞	165
2.13	三音節名詞	167
2.14	名詞に附く種々の助辞のアクセント	168
2.15	動詞・形容詞のアクセント	169
2.16	動詞・形容詞の変化形のアクセント	170
2.2	鶴岡アクセントと東京アクセントとの主な差異点	171
2.3	アクセント調査のためにほどんな語を選んだらよいか	175

3	文法	184
3.1	代名詞	184
3.2	動詞・形容詞の活用	188
3.21	動詞の活用	188
3.22	形容詞の活用について	199
3.3	助詞・助動詞・その他	201
3.31	～サ という言いかたについて	201
3.32	～ダカス ～デラ という言いかたについて	207
3.33	～サケ ～ハケ ～スケ という言いかたについて	209
3.34	～ドモ という言いかたについて	215
3.35	～ケ という言いかたについて	218
3.36	～ダバ という言いかたについて	222
3.37	その他さまざまな言いかたについて	226
4	語彙	228
4.1	日常基本語彙の方言形	228
4.11	日常基本語彙の選定	228
4.12	調査の方法	229
4.13	調査の結果	231
4.14	日常基本語彙表	232
4.15	「共通語の調査」のための調査語と調査の結果	237
4.2	特徴的な語の庄内地方における分布	244
4.21	あらし	244
4.22	二、三の語の分布	248
4.3	江戸時代の庄内語彙との比較	258
4.31	結果のあらし	258
4.32	「浜荻」の語彙一覧表	259
IV	個人の一日の言語生活	266
1	「24時間調査」とその被調査者	267
2	一日にどれくらい話すか	269
2.1	話題の数, 文の数, 文節の数	269
2.2	言語量の時刻別分布	270
2.3	一日に使う異なり語数	270
3	どんなことばをよく使うか	272
4	どのくらい読み, 書き, ラジオを聞くか	280
5	文の長さ, 文節の長さはどれほどか	285
6	10回以上使われたことばの度数順一覧表	288
7	手書きと録音とはどんな違いがあるか	298
	索引	304

I 調査の概要

1 調査の目的

国民は、一体、地域社会において、どのような言語を、どのように使って生活を営んでいるのであろうか。その実状を明かにすることは、今後、国民の言語生活の改善と向上とを図る上に欠くことの出来ないことである。

ところで、国民のこのような言語生活の実状を明らかにしようとする場合、国民全体の実状をそのまますぐとらえることはむずかしい。そこで可能な手段として、ある特定の地域社会をモデル地域として取り上げ、その地域における実状を明らかにすることによって、国民全体の言語生活の有様を推しはかろうと考えた。

こうして、その第1回の調査地点として選んだのが、福島県白河市である。白河市を選んだのは、わが国において普通に見られる小都市の一見本としてである。この白河地域において、昭和24年に行った調査、および調査から得た成果については、国立国語研究所報告2「言語生活の実態——白河市および附近の農村における——」（1951年秀英出版刊）にくわしく述べてある。

白河地域の調査において、われわれが最も重点をおいたのは、地域社会の生活において、共通語がどれほど、またどのように行われているかということである。実際に調査してみて、われわれは多くの新しい知識をうることが出来た。しかし、白河以外の地域でも同じように認められるものかどうか、白河地域の特異性に影響されているところがないかどうか、このことを明らかにするためには、他の地点において同様な調査を行う必要がある。このことは、白河地域の調査にとりかかる前にすでに考えていたことである。さいわい、1950年、再び文部省科学試験研究費補助金を受けることが出来たので、他の地点で、さらに調査方法に改善を加えて、言語生活の実態を一層くわしく調査しようと試みた。

2 調査の地点

2.1 地点を選ぶ基準

こうして白河地域に次ぐ調査地点として取り上げたのは、山形県鶴岡市と周

辺の地域とである。後に述べるように、鶴岡ではいろいろな調査を行ったが、地点は、もっぱら白河地域の調査と同じような共通語化の調査を行うのに適当なところという観点から選んだのであった。

調査地点を選ぶに当っては、白河地域の調査における経験と結果とに基づいて、まず次のような基準を立てた。

1. 人口および社会的機能が白河市と同じような都市あるいは町（市に準ずるような）であること。
2. 著しい方言的特徴が数多く見られる地域社会であること。
3. 現在東京語の影響しか受けていないと考えられる地域であること。

1. は、あまりに白河市と条件の違っている都市を選んだ場合には、そこでの調査の結果が、はたして白河市の調査から得られたものと比較しうるかどうか疑問になるからである。

2. は、白河地域における調査の経験により、共通語がその地域社会でどのように話されているかを知るには、特に方言が共通語へ移っていく過程を明らかにするには、きわだった方言的特徴が数多くある地点の方が、豊かな成果を期待しうると考えたからである。

3. は、もし、京阪語の影響下にあるような地域であると、京阪語は東京語とかなり違ったものであるから、そういう地域では、その土地における地の言葉と、京阪語と、さらに東京語を基盤とする共通語と、この三つの言語がからみ合って複雑であり、分析が困難になると考えたからである。

さて、以上の三つの条件にあてはまるような地点は、いくつか考えられたが、結局、实地踏査も試みた上で、鶴岡市およびその周辺の地域ということに決定した。

2.2 庄内地方と鶴岡市・山添村

山形県の西部、日本海に面して広がる平野が庄内平野である。北部には鳥海火山がそびえ、東南部には月山がある。この庄内平野は水田が発達し、現在良質の米を多量に生産するが、この地帯は昔からの米産地であって、酒井氏十四万石の藩地であった。

庄内平野を、最上川その他の川が流れているが、最上川より北の方を川北（飽海郡）、南の方を川南（東田川郡、西田川郡）と称し、川北の中心は酒田市、川南の中心は鶴岡市である。酒田は古くから港町として商業で栄えたのに対して、鶴岡は城下町として発達した。今でも、その市街は、士族屋敷のあった住宅地区と、町人町のあった商業地区とに、大体分れていて、昭和23年現在、人口4万の都市である。米の集散地であると共に、羽二重等の機業も盛んであり、また文化上でも、この地方の一中心をなしている。

国鉄の羽越線が市の北端を通っていて、京都大阪方面からの交通も便利であるが、それよりも東京方面との交通の方がはげしい。

鶴岡は明治維新まで、酒井氏が藩主として居住していた。酒井氏が庄内に移封されたのは元和8年酒井忠勝の時であるから、約25年間、藩主が変らなかったわけである。明治の廃藩置県以後は、旧藩士は四散し、一時は鶴岡における空家が1000軒を数えたと言われる。一部の旧藩士は、中央の進出を考えず藩主酒井氏を中心に一団となり、鶴岡地方で事業を起し、この地方の産業経済界に一勢力を占めるようになった。この旧藩士の一団は「御家録」と呼ばれている。

概して鶴岡は、他の多くの旧城下町と同様に保守的な町であり、人口の移動もさほどはげしくないとと言える。

鶴岡地方の言語は、昔からかなり特異性があったようである。江戸時代においても当時の標準的言語である京都語、それから当時幕府のあった江戸の言語とかなりの相違があったので、それらと庄内方言とを対比したような著作がいくつが出てくる。それらのうち、堀季雄が1767年（明和4年）に著した「浜荻」はとくに名高い。

明治以後においても、鶴岡地方の方言的発音を矯正する教育が行われた。これは東北地方全般にわたっての教育を指導した伊沢修二氏（1851—1917）に指導されたものである。

鶴岡市の周辺地域のうちからは山添村を選んで調査を行なうこととした。

山添村は鶴岡市の南方約6キロ、東田川郡の西部にある。その西南は山地で西田川郡に接しているが、その東北部は庄内平野の南端部に属し、水田が広くひらけている。村の東の境を赤川が、その中央部を青龍寺川が、いずれも北に

流れている。道路は村のほゞ中央部を南北に通じ、鶴岡市へはバスの便がある。米、まゆの産地として知られ、また養鶏・養鯉も行われ、特産物としてぶどうがある。古くは加藤清正の子忠広の謫居したところろとしても知られている。この村を選んだ理由は、この村が庄内地方の代表的な農村の一つであり、かつ故斎藤秀一氏によって、この地の言語がある程度明らかにされていたためである。

3 調査の計画

調査は、次のような調査員がそれぞれの課題を担当した。調査の実施上の単位に分けて示す。

1. 共通語の調査

中村 通夫、柴田 武、飯豊毅一、北村 甫、島崎 稔、山之内り、
金田一春彦（以上国立国語研究所）

林 知巳夫、青山博次郎、西平 重喜（以上統計数理研究所）

2. パーソナリティの調査

浅井 恵倫、森岡 健二（以上国立国語研究所）、林 知巳夫

3. マス・コミュニケーションの調査

浅井 恵倫、森岡 健二

4. 学校における共通語指導状態の調査

上甲 幹一（国語研究所）

なお、鶴岡地域における調査の全般的な企画運営には岩淵悦太郎が当った。

昭和24年の白河地域の調査では、共通語が行われることをはばむのは、どのような条件であるか、方言から共通語へ移るのには、どのような過程をとるか、ということを中心として追究した。今度の鶴岡地域の調査は、この白河地域の調査で得た結果を確かめることがおもな目的である。この目的のもとに企画されたのが「共通語の調査」である。白河市の場合と同様に、鶴岡市民のなかから500人の被調査者をサンプルし、一定の調査票によって、ひとりひとり面接して調べた。

また、「共通語の調査」の結果を吟味するために、特定の個人について1日の言語行動を観察、記録して、断面的見渡しにとどまる「共通語の調査」を別

の面から補うことを考えた。これは、白河市でも行った「言語生活の24時間調査」である。これによって、面接によって得られた個人個人の共通語化の度合が、この個人の言語生活全体の上でどのような意味を持つものであるかが明かになると同時に、個人の言語生活上の種々の問題にある程度の見通しを与えうることにもなった。

「共通語の調査」の課題に答えるための準備として、鶴岡市および周辺の地域の方言の特徴を明らかにした。すなわち、「共通語の調査」の調査票に盛る項目を決めるために、言語構造を各面から調べた。特に、語彙については、庄内地方の各地に調査員を委嘱して、特徴的な語の地理的分布を明らかにするとともに、今から180年ほど前の庄内語彙を集めた「浜萩」（庄内藩主堀秀雄著、明和4年成）が現在どれだけ残っているかをも調べた。

白河地域の調査のときに、共通語化の要因に心理的なものが考えられていなかったもので、今度は共通語化に心理的条件がどのように影響しているかを明らかにするために「パーソナリティの調査」を企画した。パーソナリティとして取りあげたのは、ロールシャッハ(Rorschach)テストと暗示性(suggestibility)テストによる心理の深層である。

なお、ロールシャッハ・テストでは「共通語の調査」における要因としてのパーソナリティにとどまらず、文化変容(acculturation)としての共通語化とパーソナリティとの関係を調べるために、鶴岡市と他の村や集団との比較を考えた。

放送を聞き、新聞を読むことは共通語化の要因の一つとしてもとりあげられたが、これは言語生活で重要な役割を演ずるものであるから、特に「マス・コミュニケーションの調査」として、鶴岡市民が放送、新聞で伝えられるものをどれほど理解し、利用しているかを調べようとした。

共通語化の要因として学歴が重要であることは、白河地域の調査で分かっているが、今度はこれを特にとりあげて、学校における共通語指導が共通語化にどのように役立ったかを明らかにしようとした。前にも述べたように、伊沢修二氏の発音教育については教育に当たった人からの聞き取りや文献による調査を試みたが、学校における共通語指導一般については、現在の状況を知るにとど

まった。「学校における共通語指導状態の調査」がそれである。

4 結果の処理と報告書の作成

この調査の結果の処理は昭和26年6月から始めたが、集計分析は次のような人々が担当した。

1 共通語化の要因と過程

柴田 武, 北村 甫, 岡部 英子, 山崎 英子 (国立国語研究所);
林 知巳夫, 田熊 雅子 (統計数理研究所)

2 鶴岡方言の特徴

音声 柴田 武; アクセント 金田一春彦; 文法 中村 通夫, 飯豊 毅一; 語彙 島崎 稔, 山之内り, 野元 菊雄 (国立国語研究所)

3 個人の一日の言語生活

中村 通夫, 山之内り

4 共通語化とパーソナリティ

森岡 健二, 山本 尚美, 安藤舎予子 (国立国語研究所); 林 知巳夫,
田熊 雅子 (統計数理研究所)

5 学校における共通語指導の現状

上甲 幹一, 寺島 愛 (国立国語研究所)

集計分析の全般的運営と、これら各調査項目および担当者相互の連絡には岩淵悦太郎が当たった。

本書では、上の1. ないし3. について報告することにしたが、この報告書の執筆に当たったのは次の人々である。

I 調査の概要 岩淵悦太郎

II 共通語化の要因と過程 柴田 武, 林 知巳夫

III 鶴岡方言の特徴

音 声 柴田 武 文法 中村 通夫, 飯豊 毅一

アクセント 金田一春彦 語彙 柴田 武, 島崎 稔, 野元 菊雄

IV 個人の一日の言語生活 中村 通夫, 山之内り

なお、編集・印刷・刊行については、

5 成果のあらまし

5.1 共通語化の要因と過程

共通語化の要因として目立つものは、年齢、学歴、新聞の利用、居住状況である。白河地域の調査と同じように、学歴がふたたび強く要因として出て来た。白河地域の調査と違って、父母の出身地が強い要因として出て来なかったのは、今度の分析では、本人の生育地を要因から除いたためであろう。白河地域の調査では目立たなかった「新聞の利用」が目立つ要因として出たことは、きわめて重要である。国語政策の立場からは、学歴以下の諸要因よりも、はるかに意味の深い要因だからである。

いろいろな要因をいかに組み合わせても、予測の立場からは、決定的なことが言えない。この点は白河地域の調査と変らない。そのために、心理的要因をとりあげたのであるが、今度は、ロールシャッハ・テストによるパーソナリティが社会環境的要因と密接な関係にあることと、それに対し、暗示性はそれとは独立のものであることが知られたにとどまる。この点は今後の調査に期待しなければならない。

共通語化の過程については、白河地域の調査と一致するところが多い。場面の過程については、特にそうである。ひとつひとつの音声の特徴については、クッ(スイクッ 水瓜)が一番よく直っており、フィ(フィゲ ひげ)が一番直っていないことが分かった。

5.2 鶴岡方言の特徴

5.2.1 音 声

鶴岡方言の代表的な音声上の特徴、すなわち、鶴岡なまりは次のようである。一、二の代表例をもって説明することにする。

1. ヘビ(蛇)をフェビ、ヒゲ(毛)をフィゲのように発音する。
2. マド(窓)をマンド、オビ(帯)をオンビのように発音する。

3. イキ（息）の二つの母音を中舌母音の i で発音する。
4. スナ（砂）のスの母音を中舌母音の i で発音する。
5. セミ（虫）をシェミのように発音する。
6. マト（弓の）をマド、ツキ（月）をツギのように発音する。
7. カジ（火事）をクヰジのように発音する。
8. ハヤイ（早い）をハエ（エは開いた e）のように発音する。
9. キタ（北）のキの子音は口蓋化が著しく、摩擦音を伴っている。
10. ユキ（雪）をヨキ、キュウ（肩などにすえるおきゅう）をキョウのように発音する。

これらのうち、1ないし7が「共通語の調査」の調査項目として取りあげられた。

5.22 アクセント

本調査において、アクセントを調査するための調査語としては、どんな語を選んだらよいであろうか。

まず、鶴岡市のことばと東京のことばとを較べてみると、アクセントの同じ語もあれば違う語もある。このうちからアクセントの違う語で、しかも次のようなものを選べば調査上効果が上るはずである。

- (1) 鶴岡式の発音と、東京式の発音とが、聴覚的になるべく顕著に違う語
- (2) その語のアクセントが鶴岡式（あるいは東京式）であるということになると、他のなるべく多くの語も、それに呼応して鶴岡式（あるいは東京式）であると推定することのできる語

(3) 調査しやすい語

(2)のような語は、はたしてありうるかと疑われるが、鶴岡・東京両地方のアクセントの違いが、ただ個々の単語の上のみ現れているのではなく、一群の語の上に規則的に現れているのであるから、そのような語を見出すことは至って容易である。

以上(1)(2)(3)のような考慮を経た上で選び出した語は次の5語である。

ねこ からす うちわ せなか はた

5.23 文 法

1. 代名詞では対称のぞんざいな言いかたに「ワ」「ワネ」(お前), 複数には自称にも対称にも「～ガタ」, また場所を表わすとき「コサ・ソサ・ドサ」(ここに・そこに・どこに)などが用いられる。

動詞の活用(用法)には「サねー」(しない)「ミレ」(見ろ)「コエバ・ケバ」(来れば), 「セバ」(すれば), 「イクドモ」(行くけれども), 「イコーバ」(行くなら), 「ミローバ」(見るなら)などの形が見られた。

形容詞には「ハいえバ」(早ければ), 「ハいえケ」(早かったっけ)などがある。

助詞・助動詞には「ミサ」(見に), 「～デラ・～ダカス」(…やら), 「～サケ・ハケ・～ステ」(…するから), 「～ケ」(…たっけ), 「～ダバ」(…ならば), 「～エル・～ラエル」(…れる・…られる), 「～ハル・～サハル」(尊敬)などをはじめとして, 文末助詞の「～チャ」「～ス」「～ノー」など多くの特徴的な言いかたが見られる。

2. これらのうち10項目を選び「共通語の調査」で調べた結果, 一般には, 「サねー」(しない), 「ツイエケ」(強かったっけ)などで反応したものは36%, 44%であったが, 「オキレ」(起きろ)「イクドモ」(行くけれども), 「スズカダバ」(静かならば)などの方言形はそれぞれ80%, 72%, 71%の高率であった。

3. なお, 2. に選ばれた特徴を中心にして161事項について庄内30地点で地理的分布を調べた。それらのうちには「イクドモ・イクドモ」「～デラ・～ダカス」のように飽海郡と東田川・西田川郡との間に違いの見られるものもあった。

5.24 語彙

1. 日常生活における最も基本的な語として選ばれた406語のうち, 10%ないし20%が方言形で反応した。全般に, 年齢の高い者ほど, 男よりも女のほうが, 御家祿よりも町人のほうが方言形で多く答える傾向がある。

2. 日常基本語彙406語から, 方言形が相当出ると予期される10語を選んで, 「共通語の調査」で調べたところ, 「いらっしゃい」「驚く」「もう」が最もよく方言形であられる。10語とも各要因についてほぼ同じ分布が見られる。

3. 日常基本語彙語 406 から選んだ 221 語を庄内地方30地点について地理的分布を調べたが、221 語のうち85%~90%は共通語形で答えられた。方言形で答えているものも、各地点とも同じ形で、庄内地方に特定の地理的分布を示すのはごくわずかの語である。

4. 江戸時代(1767年)の庄内語彙「浜荻」427 語について、庄内地方の30地点(回収できたのは27地点)で調べたところ、平均して、20歳台の男は、191語、60歳台の男は226語となり、両者の間に相当の差がある。427語のうち、全地点で失われているのが33語(7.7%)全地点に残っているのが18語(4.2%)である。残存について地域的な傾向は認められない。

調査地点と委託した調査員は次の通りである。

鶴岡市(00)山崎 誠助	同(00')田村 哲夫
〔西田川郡〕	
袖浦村(01)佐藤 武	京田村(02)阿部 辰男
大山町(03)前田 光俊	加茂町(04)井上 謙二
田川村(05)今野 清太	豊浦村(06)五十嵐作太郎
温海町(07)佐藤鶴治郎	福栄村(08)榑原 武
念珠関村(09)本間辰五郎	
〔東田川郡〕	
大泉村(10)金丸 文雄	黒川村(11)荒沢登志雄
斎 村(12)阿部 純一	手向村(13)井上 長雄
清川村(14)佐藤 豊彦	藤島町(15)菅原 謙治
押切村(16)加藤 悌治	余目町(17)八木 清
新堀村(18)加藤 悌治	
〔飽海郡〕	
飛 島(20)渡辺 三郎	高瀬村(22)小林 知彦
吹浦村(21)後藤 潔	日向村(24)高橋 要
西遊佐村(23)遠田 博	東平田村(26)富樫 礼三
本楯村(25)宮下 湖舟	田沢村(28)進藤 敏
大沢村(27)鳥海 宗晴	
上郷村(29)石黒 良士	
酒田市(30)小山松勝一郎	

番号は本文（Ⅱ, 3 とⅡ, 4）にある分布図の地点を示す。

被調査者は、下記の、庄内地方の全市町村および飛島の合計30地点の20歳台、40歳前後、60歳前後の各年齢層男女1名ずつ、合計150名である。

調査員は市町村1名ずつ（鶴岡市は特に2名）の合計31名に、昭和25年度国立国語研究所庄内地方調査員を委託して調査したものである。調査の方法は、221語を盛った一定の調査票について、面接・質問によって調べてもらった。ことばは「本人がふだん使っていることば」と限定し、その用例も記入させた。一日、全調査員に鶴岡市への参集を求め、調べ方を指示した。

以上の30箇市町村のうち12, 14, 27地点以外は回収することができた。また、地点では、性、年齢について指示通りの被調査者が得られないものもある。

5.3 個人の一日の言語生活

談話生活を中心とする個人の一日の言語生活の調査において白河地域の調査の2例に対し、さらに3例を加えたわけであるが、それらの分析の結果を見ると、一般に、話題・文・文節の延べ数、異なり語の数ともに白河地域の調査によって得られた数と比べて、はるかに下回っていることが注目された。文の長さにおいても同様の結果があらわれた。また、言語量の多い少いを時刻別に見ると、食事の時間に関係するよりも、より職業的なものにかかわりを持つらしいこと、読み書きに費やす時間が1.5時間または3.5時間であったことは、白河地域の調査の場合の2例と比べていちじるしい対比を示した。しかしながら、一日のうちで50回以上もくりかえして使われることばが、返事のことばや指示するための副詞、代名詞、感動詞、基本的な用言、形式的な名詞などであることなど類似を示すものもすくなくない。

なお、一文の音節の長さが4音節程度であったこと、ラジオを聞く時間が30～50分程度であったこと、言語行動に費す時間が一日の行動の65%または80%であり、言語行動の60%または75%が会話に費されていたこと、録音器による記録と比べた場合手書きによる記録には文節を単位として10%以上の誤りが見出され、かつその誤りの多くは、共通的ないくつかの類型としてあらわれたことも注目される。

多文化社会の形成は、異なる文化背景を持つ人々の相互理解と尊重を促進する必要がある。教育は、この過程において重要な役割を果たす。多文化理解教育を通じて、学生は異なる文化の価値観や習慣を学び、相互尊重の態度を養うことができる。また、異文化コミュニケーション能力を高めることで、グローバル社会で活躍するための準備を整えることができる。教育現場では、多様な文化背景を持つ学生を受け入れるための柔軟な対応が求められる。教師は、それぞれの文化背景を理解し、その長所を活かしながら学習を進めるべきである。また、異文化間の対話を促進するための場や機会を提供し、学生が実際に異なる文化の人々と交流する機会を創出することが重要である。

II 共通語化の要因と過程

共通語化とは、異なる言語や方言を持つ人々が共通の言語を話し合うようになる過程を指す。この過程には、歴史的・社会的・経済的・教育的な要因が複雑に絡み合っている。歴史的には、貿易の発展や移民の増加によって異なる文化圏が接触し、共通の言語が必要となった。社会的には、都市化や工業化が進むにつれて、異なる地域出身の人々が集まり、共通の言語を話すようになる。経済的には、グローバル化が進むにつれて、国際的なコミュニケーションのために共通の言語が求められるようになった。教育的には、学校教育を通じて標準語が普及し、共通の言語が身につけられるようになった。共通語化の過程には、言語の接触、相互理解の促進、そして言語の標準化といった段階がある。異なる言語を話す人々が頻りに接触し、お互いの言語を学ぶようになる。この過程で、お互いの文化や習慣を理解し、尊重するようになる。最終的に、共通の言語が標準化され、広く使われるようになる。共通語化は、多文化社会の形成に重要な役割を果たす。異なる文化背景を持つ人々が共通の言語を話し合うことで、相互理解と尊重が促進され、多文化社会の形成が加速される。教育は、この過程において重要な役割を果たす。多文化理解教育を通じて、学生は異なる文化の価値観や習慣を学び、相互尊重の態度を養うことができる。また、異文化コミュニケーション能力を高めることで、グローバル社会で活躍するための準備を整えることができる。教育現場では、多様な文化背景を持つ学生を受け入れるための柔軟な対応が求められる。教師は、それぞれの文化背景を理解し、その長所を活かしながら学習を進めるべきである。また、異文化間の対話を促進するための場や機会を提供し、学生が実際に異なる文化の人々と交流する機会を創出することが重要である。

1 はしがき

1949年の「白河市および附近の農村における言語生活調査」*で得た結果のうち、「共通語化の要因と過程」に関するものは次のようである。**

1. 共通語を話すこととはばむ、または、共通語を話すことを進める文化的条件は、学歴、父母の出身地、本人の生育地であると認められる。

2. しかし、共通語を話す度合を決定する要因は一つ一つの要因ではなく、いくつかの要因が寄り集まったものと考えたほうが、いっそう妥当である。

3. いくつかの要因の寄り集まったものは、共通語を話させるようにする地域社会そのものの社会的要求を形成すると考えられるから、白河市民の共通語を話す度合は、白河市が城下町から近代都市へ成長し、地方的な商工業が全国的な規模のものに発展するならば、おのずから高まるであろう。

4. 共通語を話す度合の高まるのは、知らない人や旅行者などの場面から始まり、家庭の場面が最も遅れると見られる。

5. 共通語を話す度合の高まるのは、いわゆる「ブーズー弁」でない地域で生育した集団からであって、これに比べて、西白河郡で生育した集団はかなり遅れるとみなされる。

6. 無声化、ヒとシとの混同のような特徴は早く共通語へ移っていくが、イとエとの混同というような特徴は最も強く抵抗するようである。

この結果は白河市および附近の農村だけで得たものであって、これが他の小都市にあてはまるかどうかを知るためには、少なくとももう1か所について、同じ方法で調べてみる必要がある。

2 調査の計画

今度の調査は、「白河地域の調査」と同じ課題について、山形県鶴岡市および東田川郡山添村において行った。調査の方法も、「白河地域の調査」と同じように、一定の調査票に基いて、約600人のサンプルを、ひとりひとり戸別に訪ね、

* 国立国語研究所報告2「言語生活の実態—白河市および附近の農村における—」1951以下「言語生活の実態」と略す。

** 昭和25年度国立国語研究所年報2 1951 46-

面接した上で質問するという調査を主体にした。

2.1 課題

今度の調査でも、共通語を話す度合を決定する要因と、方言が共通語へ変っていく過程とを、調査の課題とした。

2.2 地域

調査の地域は、この課題にうまく答えられそうな所を探した。まず、現在、東京語の影響しか受けていない地域を考えた。もし、調査地域に東京語と京阪語との両方の影響を受けているところを選ぶと、共通語化の分析がかなり困難になる。まだ、われわれはそういう分析のための方法を用意していないからである。これによって、調査の地域は近畿地方よりも東ということになった。

さらに、著しい方言的特徴、特に音声の特徴（いわゆる「なまり」）が数多く見られる地域であることを考えた。共通語化の過程を調べるのには、どうしても音声の特徴が数多く見られることが必要だからである。白河地域では音声の特徴は比較的少なかった。音声の特徴のもっと多い所で調べるならば、共通語化のいっそう詳しい過程が明らかになるだろうと考えたのであった。そこで、秋田県、山形県などが候補にあがった。

最後に、白河市と同じような都市あるいは町ということも考えた。人口も社会的機能も白河市になるべく類似した所と言えば、秋田県、山形県のうちでは鶴岡市が最も有力な候補にのぼる。

その他の二三の地域も候補に入れて、情報・資料の収集のために1回、方言の予備的調査のために1回、合計2回、鶴岡市を含む各地を回った結果、1950年の調査地域は、山形県鶴岡市と東田川郡山添村とに決めることにした。鶴岡市の近くの村として山添村を選んだわけは、この方言についてはかなりの報告^{*}（次のページの脚注を見よ）があるからである。

2.3 調査票の作成

今度の調査も、「白河地域の調査」と同じように、一定の調査票を作って、そ

れに基いて行うことにした。調査票として必要な条件はなるべく満たすようにしたことも、「白河地域の調査」と全く同様である。**

調査票に盛るべき内容は、

1. 要因
2. 要因を知る手がかり
3. 言語的特徴

である。以下、ひとつひとつについて述べよう。

2.31 要因のための項目

まず、共通語化に影響を与えると認められる文化的条件を選び出し、それを調査票の項目に盛ることを考えた。それらの文化的条件は、多く、白河地域の調査の一致する。

性、年齢、学歴、職業(本人と家との)、階層、現住所(居住地域)、出生地、父の出身地、母の出身地、配偶者の出身地、生育地とその後の居住状況、遠くへ行ったことがあるかどうか、新聞の利用、ラジオの利用、社会的態度

は白河地域の調査にも考えた文化的条件である。

なお、「場面による共通語と方言との使い分け」および「共通語を話す度合の主観的判定」を、要因を知る手がかりとしてとりあげたことも、白河地域の調査と同じである。

今度の調査で新しくとりあげたのは、

* 故齋藤秀一氏に次のような報告がある。

山形県山添村生業の方言 「文字と言語」 昭 10-5

山形県山添村の形容詞 「文字と言語」 昭 10-7

山形県山添村食物の方言 「土の香」 昭 10-7

山添村の副詞 「文字と言語」 昭 11-11

東田川郡山添 勘定からカンジョへ——方言の一考察 「国語研究」 昭 15-7

助詞のサとエ(東田川郡山添村方言) 「国語研究」 昭 15-9

その他に、同氏の庄内方言に関する多くの報告も山添村の方言を中心とした記述である。なお、庄内方言の研究文献は三春伊佐夫「山形県方言研究文献目録 追補(山羽方言研究月報) 昭 27-6 に詳しい。以上の文献もこれによる。

** 「言語生活の実態」 15頁以下

きょうだいの関係（長子かどうか）、役員かどうか、家の構え、
単行本を読むか、ラジオのニュースを一日何回聞くか、東京に知り合いが
あるか

の要因（文化的条件）と、さらに、

発音教育を受けたか、方言に気をつけているか、パーソナリティ
である。

白河地域の調査でとりあげた要因で今度省いたのは、共通語に対する態度と
意識とに関するいくつかの要因とである。これを省いたのは、白河地域の調査
によって、この要因は適応性(adequacy)が低いと見られたからである。すな
わち、共通語に対する態度と意識とは、今までの質問のしかたでは、結果にか
なりのゆがみが出てくるおそれがあるからである。

さて、今度とりあげた文化的条件のうち、いくつかのものについて、やや詳
しく説明しよう。

2.311 年 齢

まず、年齢については、正常な社会的活動を営んでいる人という意味で、15
歳から 69 歳までの男女を選び、それを、最も細かい場合は、六つの年齢層に
分けて考えた。すなわち、

15歳～19歳、	20歳～24歳、	25歳～34歳
35歳～44歳、	45歳～54歳、	55歳～69歳

なお、現在は数え年と満年齢とが混乱しているので、質問は、生まれ年を確
かめる形で出した。

2.312 職 業

職業は、

給料生活者（勤め人）；商店主・工場経営者；工員・運転手（労務者A）

日雇（労務者B）；農業

の五つと、さらに

主婦、学生、無職

の三つとに分け、あとの三つはさらに前の五つで下位分類して考えた。

2.313 階 層

階層については、鶴岡市には特殊な事情がある。それは、かつての武士の子孫の一部が、儒教思想のもとに、強固な特殊社会 (association) を作っていることである。かれらは、ゴカロク (御家祿) と呼ばれ、現在も鶴岡市の経済的・金融的主導権を握っていると言われる。御家祿の居住地はだいたい決まっており (おもに家中新町、鷹匠町)、言語も御家祿と町人 (平民) とでは違うと言われる。たしかに、次のような、対立する語がある。^{*}

東京語	御家祿語	町人語
そうだ	ンダニ、ンダノー	ンダジャン
でございます	デゴナンス	デガンス
父	オトハン	ダダハン、ダダジャ、ダダ
母	オカハン	カカハン

このように、両者の言語の違いはひとつひとつの語にとどまり、体系にまでは及ばない。御家祿語を話す人は鶴岡市民の 20% ぐらいだと言われる。

2.314 現住所

現住所 (居住地域) については、城下町のために、かなり細かく分かれた町を、次の四つの地域に分けて考えた。

1. 農家を主とする地域
2. 住宅・商店・農家・小工場のまざった地域
3. 商店を主とする、にぎやかな地域
4. 住宅を主とする地域

四つの地域に分けるためには、鶴岡市生え抜きの人、鶴岡市出身の人、市役所の学務課の判断を手がかりとし、さらに、われわれ自身が町を歩いて、それぞれの町の性格を決めた。

次に、それぞれの地域に属する町を示す。

1. 農家を主とする地域 — ^{しんさいぶ}新斎部, ^{しんまち}新町, ^{ぼんてん}番田, ^{やなぎだ}柳田, ^{ひええ}日枝, ^{しま}島, ^{だいほうじ}大宝寺第1～第4

2. 住宅・商店・農家・小工場のまざった地域 — ^{いずるまち}泉町, ^{おひろまち}大海町, ^{にいがた}新形, ^{かじまち}鍛冶町, ^{もとまがし}元曲師町, ^{まち}八日町, ^{よしか}銀町, ^{ぎんまち}檜物町, ^ひ七軒町, ^{しちけんちよう}南町, ^{みなみまち}十三軒町, ^{じゅうさんげんまち}紙漉町, ^{かみすきまち}八坂町, ^や柴町, ^{さかえまち}与

* III, 4.13 参照。ンダニ [ndanis], ンダノー [ndano:], ンダジャン [ndažan], デゴナンス [~de gonaŋsis], デガンス [~de gaŋsis], オトハン [odohan], ダダハン [dādahan], ダダジャ [dādaža], ダダ [dāda], オカハン [ogahan], カカハン [kagahan]

りきまち ひよりまち たからまち えきまえ なかまち
力町, 日和町, 宝町, 駅前, 仲道

3. 商店を主とする, にぎやかな地域 — 七日町, 一日市町, 二百八町, 十日町,

みつかまち いつかまち しもきかたまち はりけんまち ちんまち
三日町, 五日町, 下着町, 八間町, 荒町

4. 住宅を主とする地域 — 若葉町, 馬場町, 家中新町, 鷹匠町, 新屋敷町, 幸町,

かしままち ふしずみまち てんじんまち あたらしまち たかばたけまち もがみまち とりいまち なかまち
賀島町, 吉住町, 天神町, 新土町, 高畑町, 最上町, 鳥居町, 高町

出生地, 父の出身地, 母の出身地, 配偶者の出身地については, 調査の目的から考えて, 全国の地域を, 最も細かい場合で, 次の七つに分け, 必要に応じて, まとめるようにした。

1. 鶴岡市または山添村現住地 2. 庄内地方

3. 東北地方(ただし, 新潟県を含む) 4. 関東地方

5. 中部地方, 関西地方その他 6. 北海道, 外地 7. 京浜地方

2.315 生育地とその後の居住状況

生育地とその後の居住状況については, まず, 言語形成期を5歳~13歳(数え年)とし, この期間の大部分を庄内地方で過ごした者と, そうでない者とに分けることにした。9か年のうち何年以上をこの期間の「大部分」と考えるかは, 調査後, 被調査者(サンプル)の分布を見た上で決めることにした。なお, のちにも述べるように, 共通語化の要因分析は, もっぱら, 言語形成期の大部分を庄内地方で過ごした者だけについて行うことにした。

その後の居住状況については, 14歳から25歳(数え年)までの間に庄内地方に2か年以上在住したことがあるなしと, 26歳以後1950年11月の調査当時までの居住状況を取りあげた。後者は,

1. 東北地方の外には全然出ない

2. 26歳以後, 東北地方の外に出たのは, 全期間の半分以下

3. 26歳以後, 東北地方の外に出たのは, 全期間の半分以上

のように分けた。ただし, 26歳以下の者は, 当然, この場合のぞかれる。

2.316 遠くへ行ったことがあるかどうか

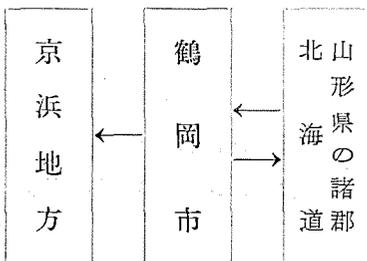
遠くへ行ったことがあるかどうかについては, 1950年1月から11月までの間(すなわち, 今年になってから)に, 秋田方面, 新潟方面, 山形市方面, 東京方面に行ったことがあるなし, その用件, 滞在日数などを考えた。

遠くへ行ったことがあるかどうかということに関連して、鶴岡市と他の地域との人の行き来を、鶴岡市全体として明らかにするために、二つの調査を試みた。一つは物資配給台帳に記されている転入・転出の人数を基準にしたものであり、一つは国鉄の着駅別切符売上枚数を基準にしたものである。

まず、前者の調査について述べよう。これは、1950年1月1日から同年10月11日（サンプリングを始めた日）までに鶴岡市へ転入して来た者と同じ期間に鶴岡市から転出した者の人数とを用いた。まず、日本全国を、東田川郡・西田川郡、飽海郡・最上郡、村上郡、置賜郡、酒田市、新庄市、山形市、米沢市、東北地方、京浜地方、関東地方・中部地方・近畿地方・北海道、中国地方・四国地方・九州地方に分けて、鶴岡市へ転入した者全体のうちで、何%がどこから転入したかを調べる。鶴岡市から転出した者についても、転入者・転出者全体についても、同じように調べて、これらを地図に示すと、図1—3のようになる。

これを見ると、転入者については、東西両田川郡から最も多く、飽海・最上郡、村上郡、置賜郡、北海道がそれに次ぎ、以下、東北地方、さらに、京浜地方、関東・中部・近畿地方と続く。転出者については、東西両田川郡が最も多いことでは、転入者の場合と同じであるが、それに次ぐのが京浜地方であることは注目し得る。転入者・転出者合計についても、東西両田川郡に次ぐのは京浜地方である。

上のことを図示すると、次のようになる。

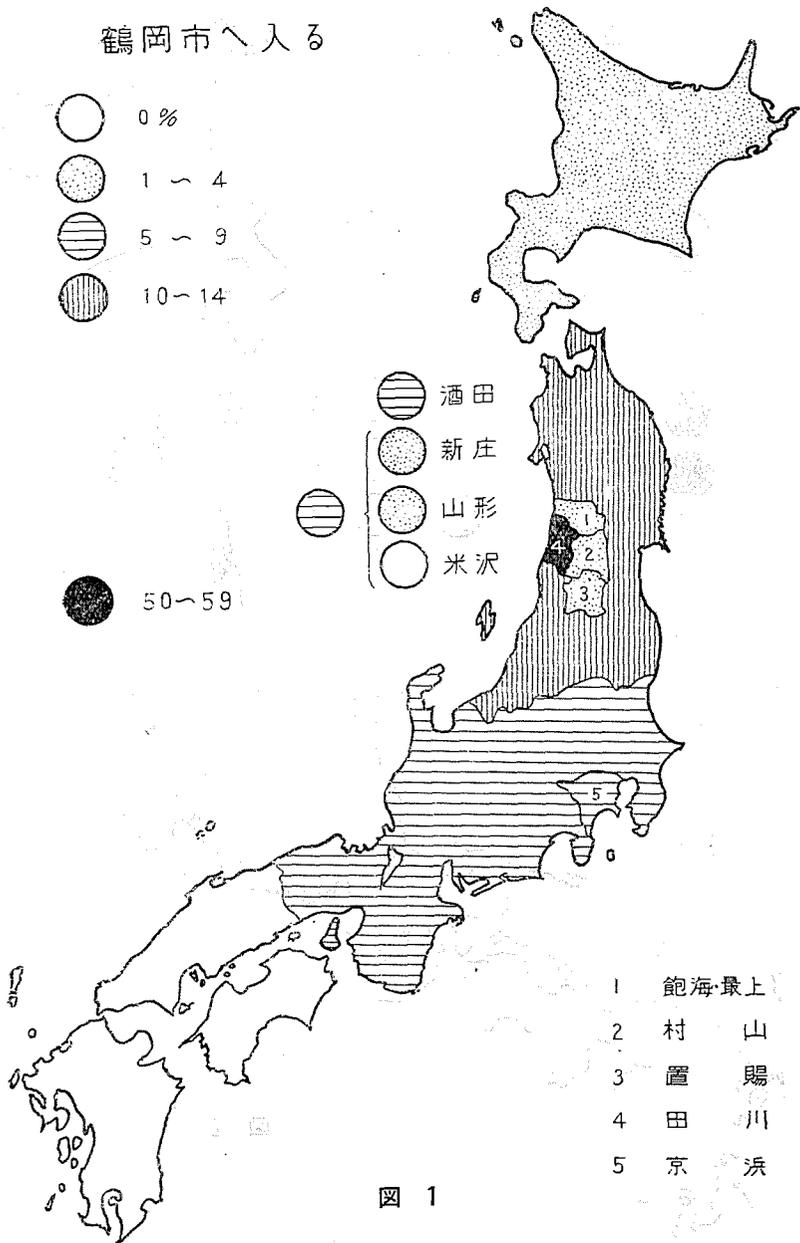
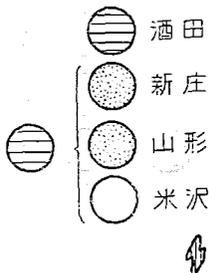
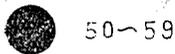
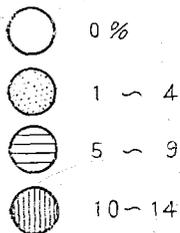


また、転入・転出を別の面から分析してみよう。まず、転入者について、各地域のどのくらいの人が鶴岡市へはいて来るかということ調べよう。すなわち、各地域について、

$$\frac{\text{転入者の数}}{\text{各地域の人口}} \times 1000$$

を計算してみた。その結果は下に示す表のようになる。東田川・西田川郡から転入するものが圧倒的に多く、次いで、酒田市、新庄市、山形市などである。

鶴岡市へ入る



- 1 飽海・最上
- 2 村山
- 3 置賜
- 4 田川
- 5 京浜

図 1

鶴岡市から出る

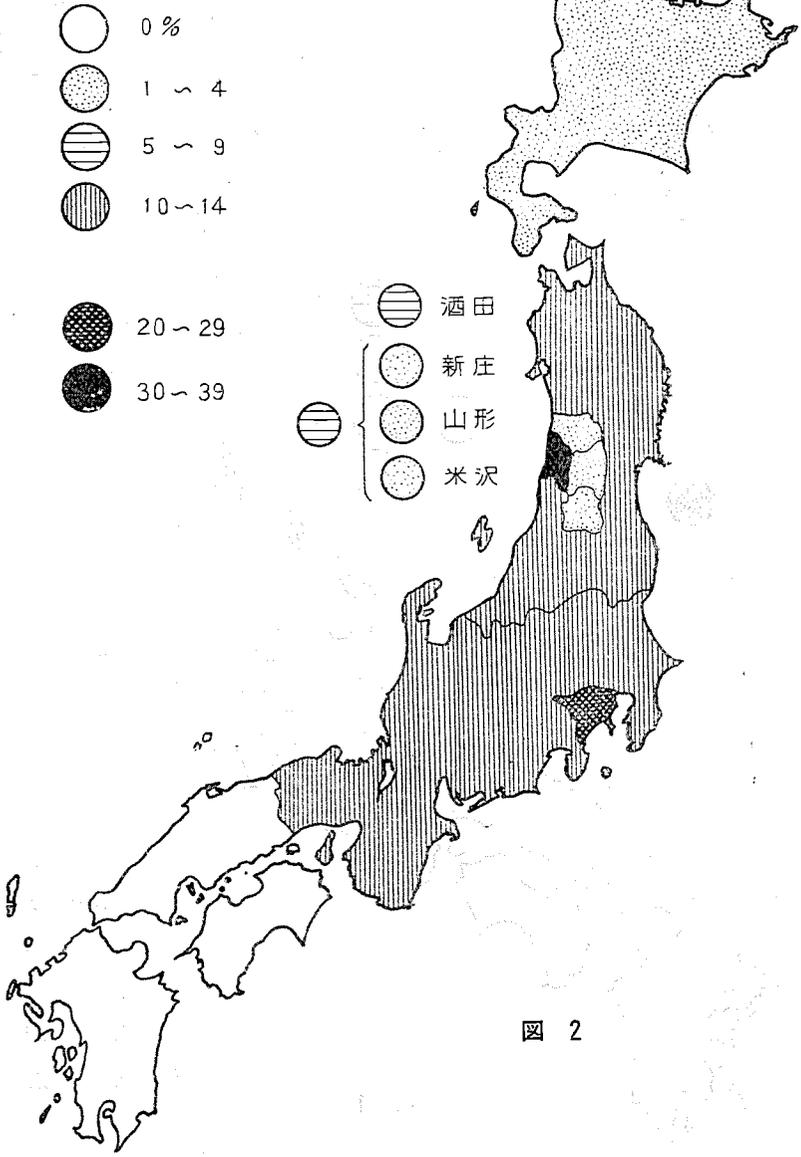


図 2

出る・入る合計

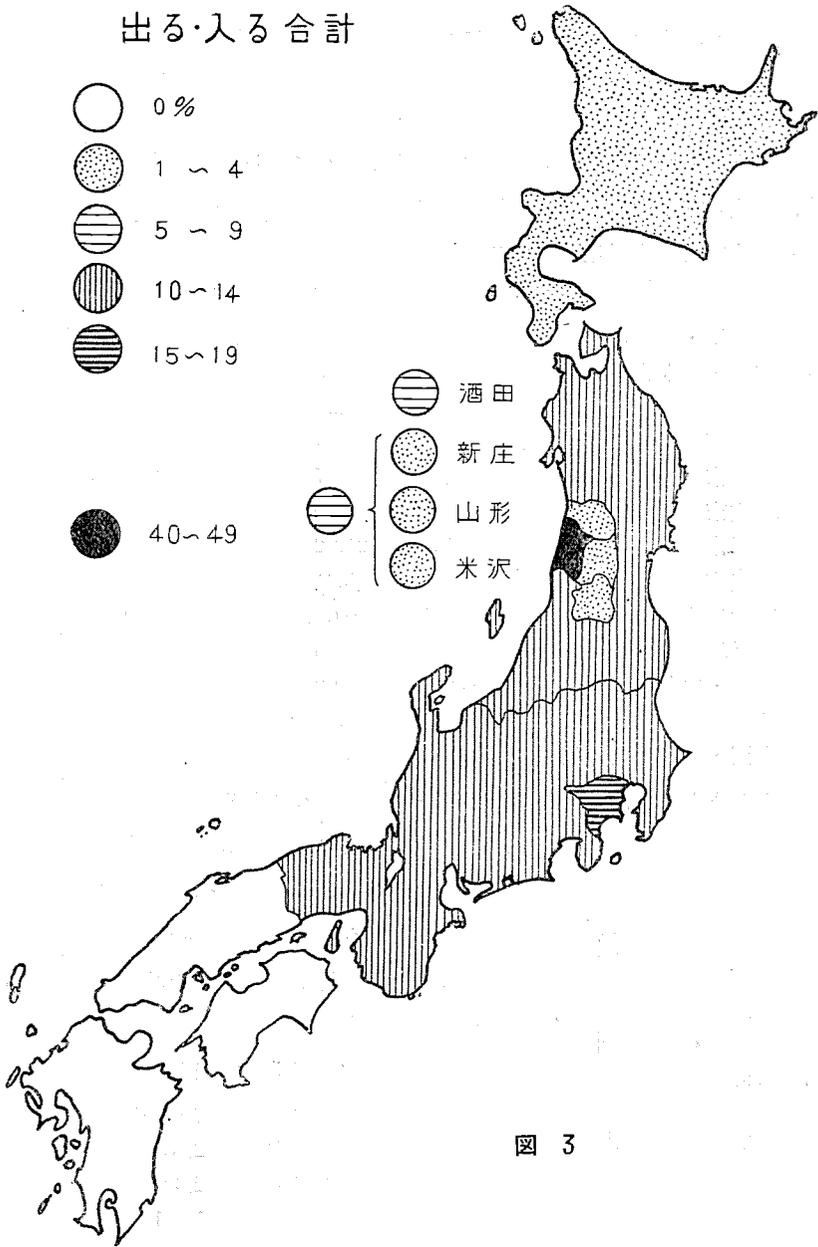
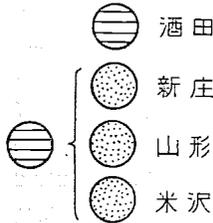
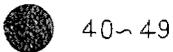
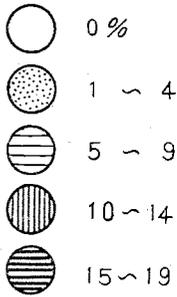


図 3

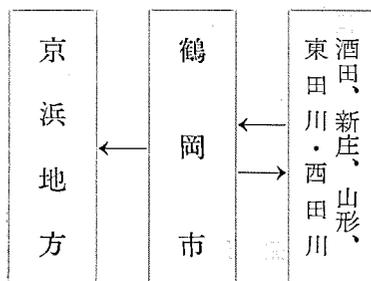
今度は、転出者について、各地域へどのくらいの人が鶴岡市から出ていくかを調べよう。すなわち、各地域について、

$$\frac{\text{転出者の数}}{\text{各地域の面積}} \times 1000$$

を計算してみた。その結果は下に示す表のようになる。酒田市、山形市、米沢市、新庄などの近くの都市へ転出する者が多く、次いで、東田川・西田川郡、それに次いで、京浜地方である。

	転入者	転出者
東田川・西田川郡	0.371	3.66
飽海・最上郡	0.0283	0.166
村上郡	0.0044	0.233
置賜郡	0.004	0.040
酒田市	0.147	35.97
新庄市	0.064	3.60
山形市	0.057	21.92
米沢市	0	5.41
東北地方	0.0015	0.027
京浜地方	0.0013	1.001
関東・中部・近畿地方	0.0003	0.021
北海道	0.0001	0.0089
中国・四国・九州地方	0	0

以上をまとめて、これを図示すると、次のようになる。



次に、国鉄の着駅別乗車券売上枚数を基準にして調べた場合について述べよう。これは、1949年1か年間の鶴岡駅発行の乗車券（普通乗車券と往復乗車券）について調べたものである。その着駅別乗車券売上枚数は、

秋田市	2.848枚
新潟市	2.169
山形市	12.390
東京都	7.081
cf. 仙台市	1.812

のように、山形市が目立って多い。山形市方面とは、言語の点でも民俗の点でもかなり違うようであるけれども、このような交通上の関係が密接なのは、おもに行政関係の行き来のためと考えられる。東京都との関係も著しいが、白河市の場合とはかなり違う。^{*}

いま、秋田方面、山形方面、新発田方面に分けて、売上切符枚数の累積和をグラフに示すと、図6のようになる。これを見ると、秋田方面は酒田、山形方面は狩川^{かりかわ}、新発田方面は温海^{あつみ}で、それぞれ急に交通量が小さくなる。これらの駅は、鶴岡市から出ているバスの終点とほぼ一致し、また、定期券の購入される範囲ともほぼ一致する。

なお、このグラフから分かることは、交通量の減り方について、山形方面とその他との間に、かなりの差が見られることである。山形方面は、山形市まで、各駅とも、ある程度の乗車券が売れているが、他の2方面は、酒田または温海より向こうは、きわめてわずかになる。

乗車券売上枚数を、行先都道府県別に見ると、図7のように、新潟県、秋田県が最も多く、東京都がそれに次ぐ。東京都との関係が密接なのは、商業の地盤が東京方面に握られているためと考えられる。昔は、日本海沿いに京阪との関係が密接で、方言にもそれが反映しているが、かなり以前から、少なくとも経済的には、大阪よりも東京と堅く結びついている。新潟県から来て住みついた商人はあっても、大阪から来て住みついた商人はほとんどないそうである。

そこで、東京との関係を重く見て、調査票では、特に1項目を設け、「東京にお知りあひがありますか。」と質問し、その反応を、

つきあわない

つきあう（行き来によって、文通によって、行き来と文通とによって）

知りあひがない

のように分けて考えた。

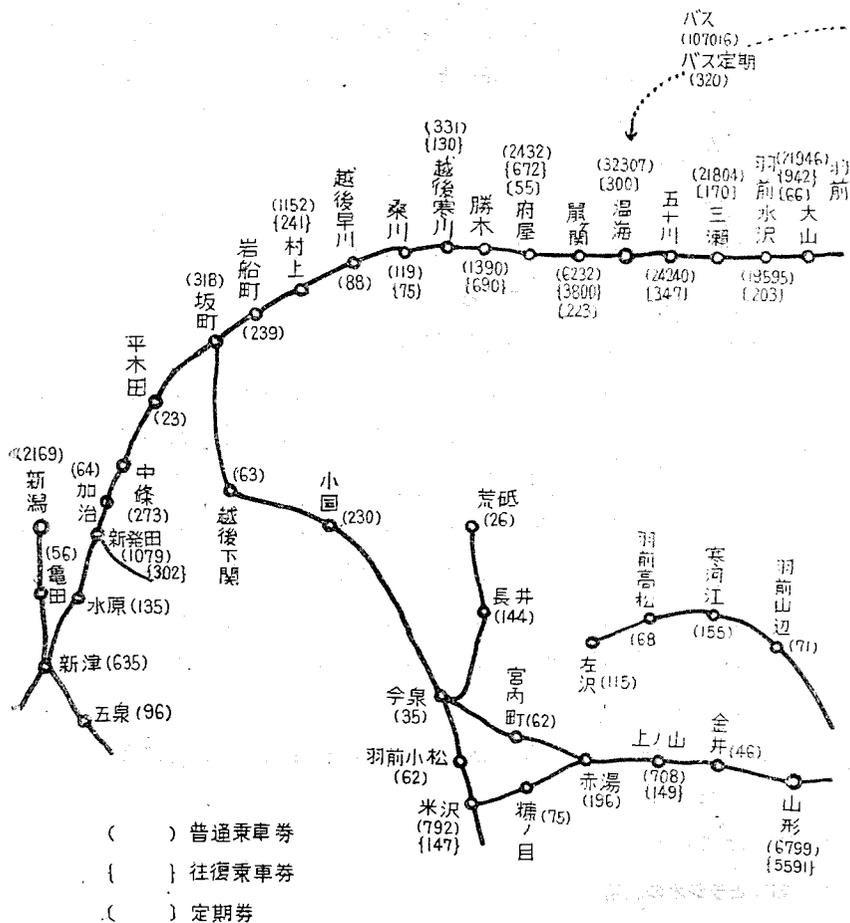
2.317 新聞とラジオの利用

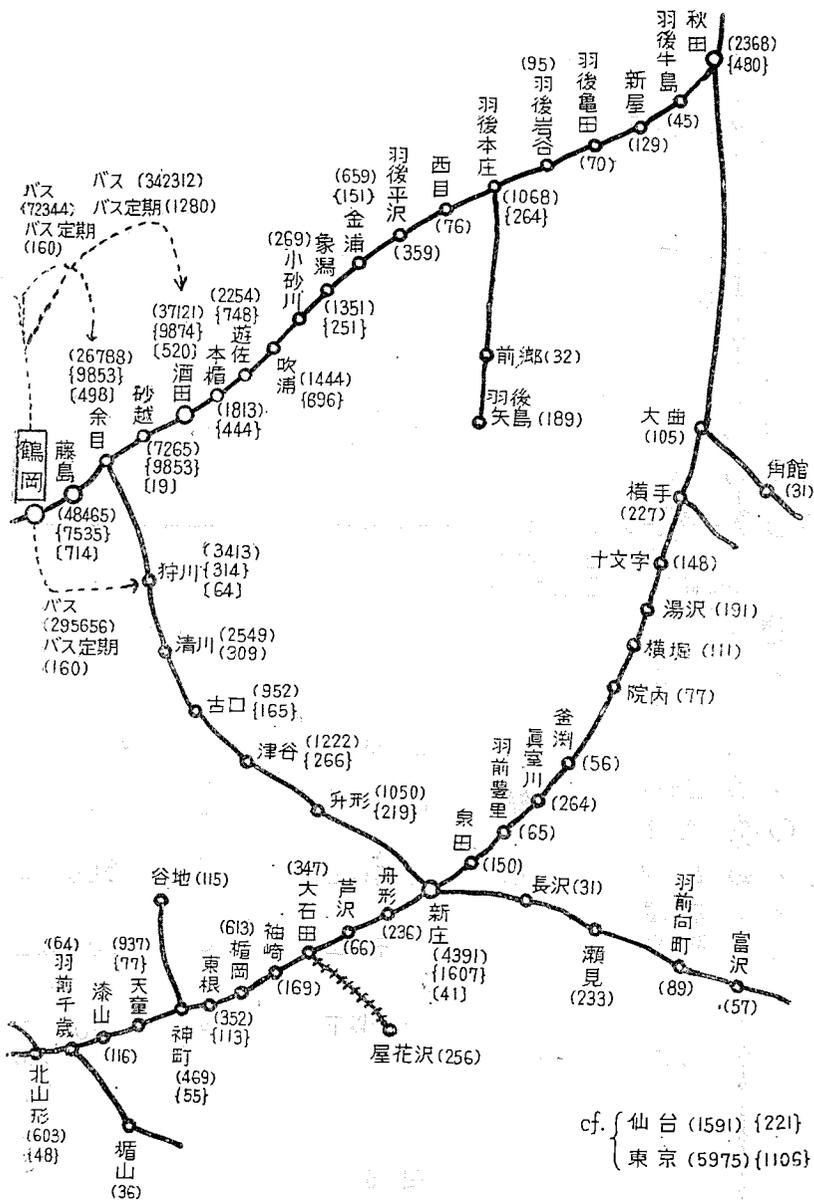
新聞とラジオについては、「マス・コミュニケーションの調査」（I参照）の

^{*} 「言語生活の実態」 66ペ

図 4

鶴岡駅発行乗車券着駅別売上枚数 (1949年)





cf. { 仙台 (1591) {221}
 { 東京 (5975) {1105}

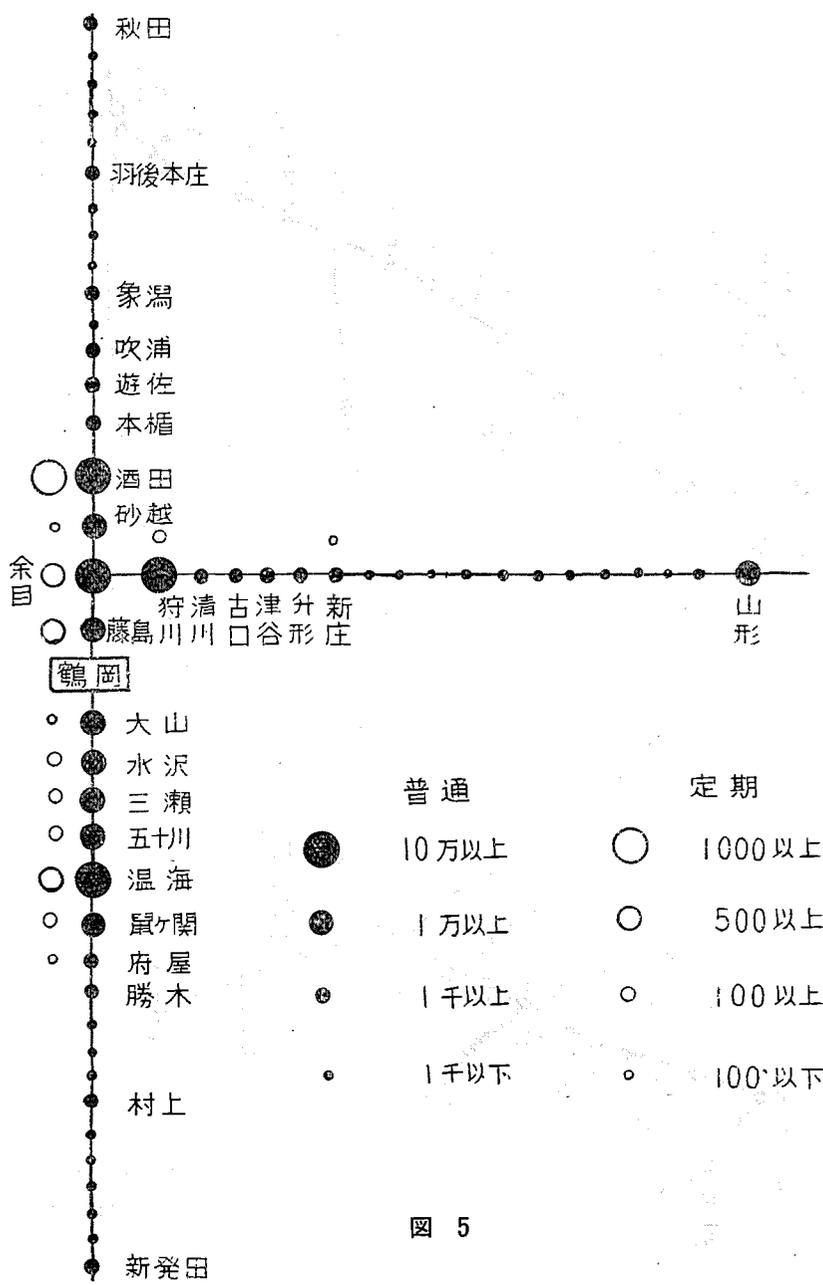


图 5

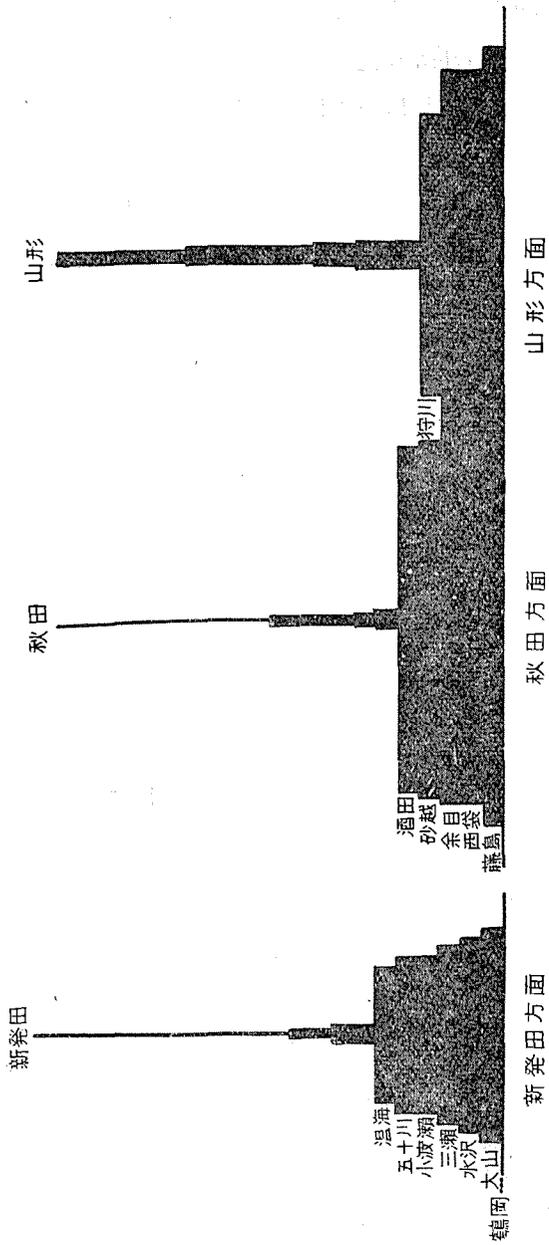


图 6

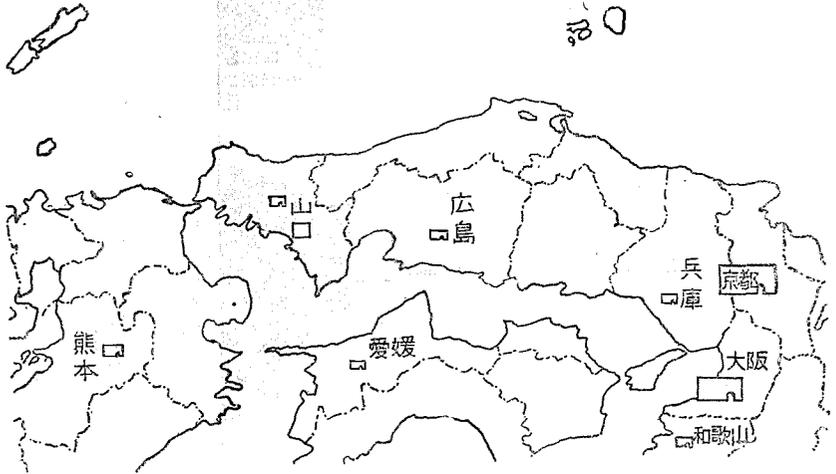
0.1万 5万 10万

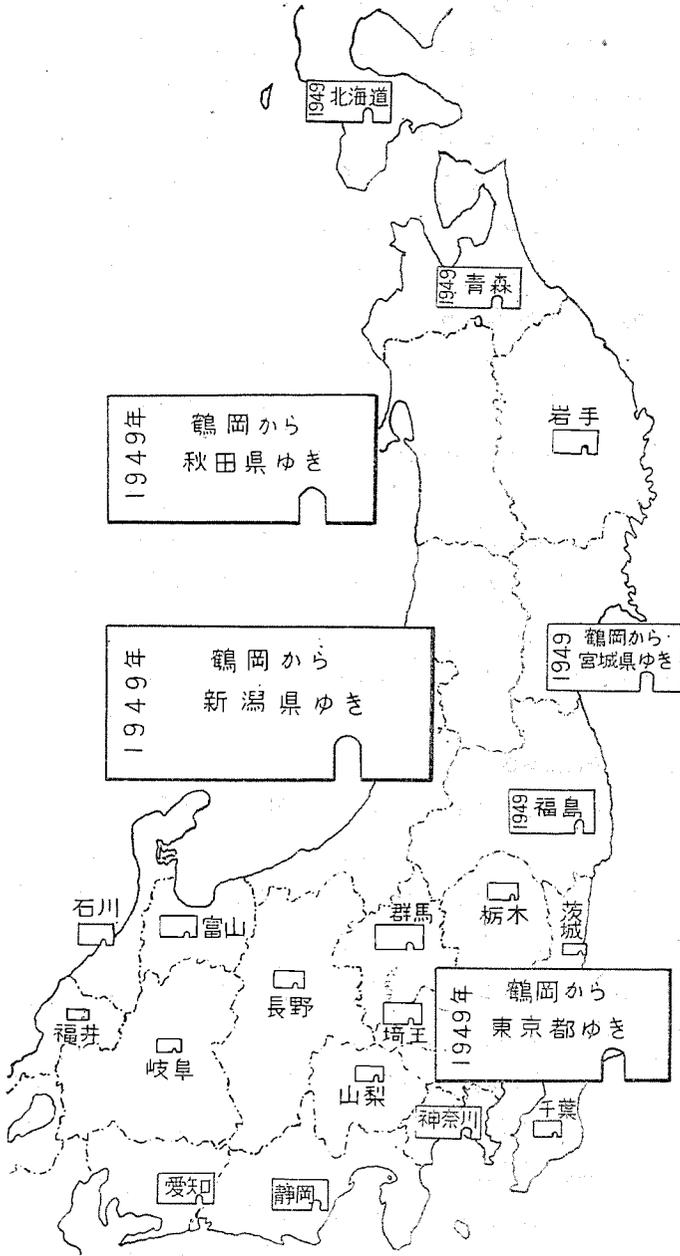
鶴岡から行先県（都道府県）別

切符売上枚数の分布

1949年1月～12月

図 7





関係でやや詳しく調べた。新聞については、

毎日よむがどうか；よむのは中央紙か地方紙か；合計何部よんでいるか
ラジオについては、ニュース（ニュース解説を含む）を、

ほとんど毎日きくかどうか；何時と何時とに、そして、合計何回きくか
について調べることにした。ラジオの利用は白河地域の調査では強い要因として
出て来なかった。その原因は質問の方法にあるのではないかと考えられた。
しかし、今度も、質問の方法に新しい工夫を加えることはできなかった。

2.318 きょうだいの関係、その他

今度の調査で新しく、きょうだいの関係（長子で長男・女か、長男・女か、
その他か）、役員かどうか（納税組合長、民生委員などの公の役員）、家の構え
（りっぱな住宅、普通の住宅、店、農家のいずれか）を加えたのは、これらの
文化的条件がなんらかの意味で共通語化に影響を与えているのではないかと考
えられたからである。単行本を読むかどうかを調べたのは「マス・コミュニケ
ーションの調査」(I参照)のために特に設けたものである。小説類、史書類、
学術書の三つに分けた。

その他、性、学歴、父・母・配偶者の出身地、社会的態度については特に記
すことはない。

2.319 発音教育と言語関心

この地方で特に注目すべきことは、明治 30 年 (1897) ごろから盛んに行わ
れた、いわゆる「発音矯正の教育」である。発音教育を受けたかどうかは共通
語化の要因として重要と考えられるので、朝陽第一小学校の山崎誠助氏に委嘱
して、これについて詳しく調べてみた。

文献として残っているのは、「東田川郡藤島小学校沿革史」の明治 33 年(1900)
のところに、「東田川郡小学校教育講習会に於て、発音矯正法の講習会をひら
いた。他郡市からも参加。」とあるのが最も古い。以後、発音矯正などを目的
として、毎週 1 回各学級で、毎月 1 回全校で、児童の談話練習会を開いたり
(明治 38 年〔1905〕、鶴岡市朝陽第五小学校沿革史)、父兄懇談会を開いて児童
の発音教育に協力を求めたり(明治 39 年〔1906〕、同書)しているが、明治 41
年 (1908) からは発音教育が特に盛んになった。指導者は「視話法」で有名な

伊沢修二氏である。明治41年(1908)には次のような催しがあった。

1. 「山形市で、県主催の発音矯正の講習会が開かれ、各郡市から代表者が参加受講し、帰校後は全職員に伝達した。講師は伊沢修二氏であつた。」(東田川郡藤島小学校沿革史)

2. 「伊沢修二氏は発音講習会員三十余名を引率して当校の談話会を参観した。」(西田川郡大山小学校沿革史)

3. 「発音矯正は目下の急務であるから、四十一年度より、四十三年度に至るまで、本校全職員は前後三回の講習をし、児童に極力矯正につとめた。」(東田川郡余目小学校沿革史)

4. 「十月、東田川郡小学校教員講習会において、発音矯正講習会をひらいた。」(東田川郡藤島小学校職員履歴)

明治42年(1909)以後も伊沢修二氏の指導のもとに講習会がしばしば開かれている。大正4年(1915)の東田川郡藤島小学校の教授方針には「児童の言語粗野であるので、毎朝十分間発音の練習をする。」とある。(同校沿革史)なお、同校では今日までひき続き行われているそうである。大正5年(1916)には同校で「発音矯正指導案」が作成され、講習会は毎年盛んに行われたが、このころから単に発音の矯正だけを取りあげるのではなく、言語活動一般と関連して行われるようになった。

大正の始めに発音教育に実際に携った木村^{あきら}璋氏の談話によれば、次のようである。

「鶴岡市朝陽第一小学校では発音教育にそれほど困らなかつた。それは第一小学校は御家祿と官吏との子弟が多かつたためと思われる。御家祿や官吏は江戸との間をよく行き来していたので、その子弟も発音をはっきりしようという意識的態度をもっていた。ところが、第二小学校ないし第五小学校ではなかなか困難であつた。発音教育は、朝礼の時15分間、昼食後15分間、全校生徒そろって発音練習した。これを『口の体操』と言っていた。音節単位に大声で唱えたが、のちには単語単位とした。指導者は伊沢修二氏で、5か年くらい続けて鶴岡市へ指導に来た。発音の指導に際しては、鏡やへらを使ったこともあり、『視話法の歌』というものを歌って発音矯正の意識をたかめるようにつとめた。最近では発音教育が行われないために、むしろ昔の児童よりも『なまり』がひどいように感ずる。いちばん直しにくかつたのは、[ゐ]の音、ついで [ço:]、鼻音化であつた。有声化や『シとスとの区別』は直しやすかつた。『イとエとの混同』については矯正ということを考えなかつた。発音教育の結果、男よりも女のほうが、低学年よりも高学年のほうが早く直つた。『なまり』は、文字にあらわれる限り、国語の点数を引いた。」

山形県立鶴岡高等女学校では「言語改良乃栞」という小冊子を作って、週に何回か、発音教育を含む特別の言語教育を施した。大正7年(1918)3月に出た「再訂 言語改良乃栞」は、横10.5cm、縦15cm、91ページの小冊子で、内容は4編14節から構成されている。

第一編 方言改良の標準	第九節 当地方固有の方言
第一節 名詞	第十節 清濁の混同
第二節 代名詞及代名詞を冠する熟語	第十一節 語格の誤り
第三節 動詞及熟語動詞	第二編 不正確なる発音
第四節 形容詞	第三編 表様矯正の標準
第五節 副詞	第四編 発音矯正の標準
第六節 其他(助詞、接続詞感動詞等)	第一節 しとす
第七節 語尾につけるもの	第二節 ちとつ
第八節 誤用乱用	第三節 じ、ぢとず、づ

第四編には混同するおそれのある語が対照的に並べてある。たとえば、

「し [○] し [○] 獅子、孜々、志士	す [○] し [○] 鯨
か [○] ら [○] し [○] 芥子	か [○] ら [○] す [○] 烏
ち [○] じ [○] 知事	つ [○] じ [○] 辻
くち [○] 口、朽ちる	くつ [○] 靴
かじ [○] 家事	かず [○] 数
すぢ [○] 筋	しづ [○] 賤の女

このような発音教育が共通語化の要因としていかにきいているかということはきわめて興味深い問題である。したがって、調査票に1項目を設けて次のことをたずねた。学校を卒業後、ことばあるいは方言に気をつけているかどうか、すなわち、言語関心があるかどうかについて質問したのである。

2.32 要因を知る手がかりのための項目

「場面による共通語と方言との使い分け」については、白河地域の調査の時の「家族、近所の人、在の人、仕事仲間、買いつけの店、郵便局や役場、知らない人・旅行者」を整理して、「家族、近所の顔見知り、鶴岡の町で顔見知りでない人、旅の人」とした。

「共通語を話す度合の主観的判定」は、白河地域の調査の経験から、5段階をさらに細かく9段階とした。つまり、「共通語だが、どことなくちがう」、「共

通語がまざる」をそれぞれ3段階に分けた。

2.33 言語的特徴のための項目

音声の特徴のために32の項目、アクセントのために五つの項目、語彙の特徴のために10の項目、文法の特徴のために10の項目、新語のために五つの項目を用意した。音声の特徴のために最も多くの項目を設けたが、それは、測定の尺度として最も妥当性が高いと認められるからである。*

2.331 音声

音声の特徴を調べるのには、Ⅲ, 1.4で述べるように、七つの特徴を調べるのに都合のいい、合計32語を選んだ。それらの代表語としての意味を示すために、各語について、注目する部分を対照的にあげた。

1.01 ひげ [ŋi-]	4.11 知事 [tʃi:zi-]	6.22 税務器 [zè-]
1.02 蛇 [ŋé-]	4.12 地図 [tʃi:zi]	
1.03 百 [ŋa-]	4.13 島 [sim-]	6.23 柿 [-gi]
	4.14 墨 [sim-]	6.24 猫 [-go]
2.04 窓 [-~d-]	4.15 鳥 [karasie]	6.25 旗 [-da]
2.05 鈴 [-~z-]	4.16 辛子 [karasie]	6.26 鳩 [-do]
2.06 帯 [-~b-]	4.17 狐 [-zi-]	6.27 蜂 [-azi]
	4.18 団扇 [-zi-]	6.28 口 [-u:zi]
3.07 息 [ig-] 2モーラ		6.29 靴 [-u:zi]
3.08 駅 [ég-] 2モーラ	5.19 背中 [šé-]	6.30 松 [-azi]
3.09 糸 [id-] 2モーラ	5.20 汗 [-šé]	
3.10 煙突 [én-] 3モーラ	5.21 障子 [ʃo:-]	6.31 水瓜 [-ka] ^v ***
		6.32 火曜日 [ka-] ^v

2.332 アクセント

アクセントを調べるのには、「猫」、「旗」、「鳥」、「団扇」、「背中」の5つの語を選んだ。多くの語からこれらの語を選び出すまでの過程については、Ⅲ, 2.3に述べるが、これらの語の持つ代表語としての意味は次のようである。

ネコ 東京で上下型、鶴岡で下上（起乙）型の語の代表として

ハタ 東京で下上（起）型、鶴岡で下下型の語の代表として

カラス 東京で上下下型の語、鶴岡で下上下型の語の代表として

* 「言語生活の実態」 4.1

** 表などでは、便宜的にkwaと表わした。

ウチワ 東京で下上下型, 鶴岡で下下上型の語の代表として

セナカ 東京で下上上(平)型, 鶴岡で下上下型の語の代表として

2.333 文法

文法の特徴を調べるためには, Ⅲ, 3で説明する文法的事実のうち, 日常よく用いられ, しかも調べやすいと思われたもの10を選んだ。その項目は

1. 動詞の活用のうちから二つ(調査票81, 82)
2. 人称代名詞のうちから一つ(調査票83)
3. 格助詞のうちから二つ(調査票84, 86)
4. 接続助詞のうちから三つ(調査票87—89)
5. 助動詞のうちから一つ(調査票85)

の九つと, それに, 妥当性(validity)を見るための応答の語(調査項目7と90)を加えた。

2.334 語彙

特徴的な語について調べるためには, Ⅲ, 4.1で述べるように, 日常基本語彙407語(Ⅲ, 4.14を参照)から, 方言形でもあらわれそうなもの10語を選び, これを調査語とした。調査票の66—75がそれである。

2.335 新語

新語を調べるためには, 次の5語を選んで調査語とした。

コンクール, アルバイト, 六三制, 鉄のカーテン, アプレ・ゲール

最後のを除いた4語は白河地域の調査でも調べたものである。比較ができるように, これらの語を選んだ。

2.34 調査票

以上のようにして作成した調査票は次のようである。

2.4 被調査者のサンプリング

2.41 あらまし

われわれの調査には熟練した調査員が必要である。こういう調査員を現地で得ることは困難である。これは白河地域の調査で経験したところである。そこで, 調査員はすべて国立国語研究所と統計数理研究所の職員から選ぶことにし

共通語の調査

	A.M P.M	2	1
調査日	調査開始時刻	調査者	No.

3	性 ¹ 男 ² 女	現住所	町(字)	番地	4
---	---------------------------------	-----	------	----	---

※ずっとここにお住いで
すか。お生まれは?そこから
すぐこちらへいらっしや
ったのですか。

出生地					

※何年生まれで
すね。

6	頭大昭	年
7	返草	年

※今のあなたのお仕事は
へです。ほかになにか
やっておいでですか。
うちのお仕事は?

本人の職業		家の職業	
専業			
兼業			

※学校の発音教育や方言を直す教育
を受けたことがありますか。どこでう
けましたか。暗誦は?教科書がありましたか。

1	ある	1小	1毎日	1教科書	
2	ない	2高小	2週 同	あつた	
		3中	3月 同	2なかつた	

※(きの後)ことはあるいは方言に気を
つけていらっしやいますか。

1	気をつけている	
2	気をつけていない	

※学校はどこまで"おいで"
になりましたか。

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	卒
なし	小	高小	新中	旧中	新高	旧高	専	大	その他	2退 3任

※お父さんのおくには?
お母さんのおくには?
あなたの奥さん(へ御主人)は
どちらの御出身ですか。

父	母	配偶者

※ごさようだいはおありになりますか。御長男(女)です
か。上に兄(姉)さんはおありになりますか。

1	長子・長男(女)	2	長男(女)	3	他
---	----------	---	-------	---	---

※納税組合長、民生委員などの
ような役職をなさっていますか。

--	--	--	--	--	--

※土俵でいらっしやいますか。

1	土族	2	以外	19	家の構え	1	住A	2	住B	3	店	4	農
---	----	---	----	----	------	---	----	---	----	---	---	---	---

1 はあらかじめ分かっている項目を示す。3. 4. 19については直接質問しない。

<p>※ 十月中に映画をごらんになりましたか。 何を ごらんになりましたか。</p>	1	2		20					
<p>※ 映画は日本のものがお好きですか。外国のものがお好きですか。 お子さんにはどんな仕事をやらせたいとお考えですか。別の土地に住んでみたいと思いませんか。</p>	見ない	見た		21					
<p>判定 1 満足 2 無関心 3 不満</p>									
<p>※ お家で家族の方たちといろいろお話をなさる時のことは土地のことは(～土地のふつうのことは)ですが。標準語(よせゆきのことは)ですか。いろいろまどりますか。</p>	1	2	3	22					
<p>※ 近所の顔見知りの方とお話をするときは？</p>	1	2	3	23					
<p>※ 鶴岡の町で顔見知りでない方もおありでしょうが、そういう人とお話をなさるときは？</p>	1	2	3	24					
<p>※ 報の人などに話をするときはず？</p>	1	2	3	25					
<p>※ 新聞は毎日お読みですか。 何新聞をお読みですか。 (何種類お読みですか。)</p>	1 毎日よむ	2 よんだりよまなかったり	3 よまない	26					
	1 中央紙(11朝日 12毎日 13読売)	2 地方紙	合計	種					
<p>※ 十月中に、本をお読みになりましたか。 どんな本をお読みになりましたか。</p>	小説類	冊	歴史類	冊	学術書	冊	計	冊	27
<p>※ ラジオのニュース(ニュース解説を含む)はお聞きになりますか。</p>	1 ほとんど毎日さく	2 さいたりさか なかったり	3 さか ない	(31 32 33 34 35)	28				
<p>※ ラジオのニュースは一日何回お聞きになりますか。</p>	6.00, 7.00, 9.00, 12.00	P.3.00, P.5.00, P.7.00, P.9.00, P.9.30,	回	29					
<p>○ ことしになってから遠くへおいでになったことがおありますか。秋田方面は？ 新潟方面は？ 山形方面は？ 東京方面は？</p>	場	所	用	件	滞在日数	30			
<p>※ 東京にお知り合いがありますか。</p>	1 つきあわない	2 行き来	3 交通	4 行き来と交通	5 全くない	31			
<p>● この部落で用たりないことは何ですか。その時はどこへ？ 重い病気や大きなけがのときはどこへ行きますか。そして……</p>	用	場	所	用	件	滞在日数	32		
<p>● 先月のあいだよそへおいでになったことがありますか。</p>	場	所	用	件	滞在日数	33			

2 ○は市だけで聞く項目

●は村だけで聞く項目

ひ け	1. $\zeta i-$	2. $\phi \zeta i-$	3. その他 []	34
蛇	1 $x e-$	2 $\phi \zeta e-$	3 []	35
百	1 $\zeta a-$	2 $\phi \zeta a-$	3 []	36
窓	1 $-d-$	2 $-z-$	3 []	37
鈴	1 $-dz-$	2 $-z-$	3 []	38
帯	1 $-b-$	2 $-b-$	3 []	39
背 中	1 $se-$	2 $\zeta e-, \zeta e-$	3 []	40
	1 	2 	3 []	
夏 棚	く と 背 中 から だ ら だ ら 流 れ る も の を 何 と お っ し ゃ い ま す か。 1 ase 2 $ase, a\phi e$ []			41
障 子	1 $jo:-$	2 $\zeta o:-, \zeta o:-$	3 []	42
	税 金 を と り た て る 所 を 何 と お っ し ゃ い ま す か。 1 $dze:-$ 2 $z\acute{e}:-$ 3 []			43
	口 から ハー ツ と は く も の, こ れ を 何 と お っ し ゃ い ま す か。 1 $i-$ 2 $i-, e-$ 3 []			44
駅	1 $e-$	2 $i-, e-$	3 []	45
系	1 $i-$	2 $i-, e-$	3 []	46
煙 突	1 $e-$	2 $i-, e-$	3 []	47
	市 で い ち ば ん 上 の 人 を 「市 長」と 言 い ま す が, 県 で い ち ば ん 上 の 人 と 何 と お っ し ゃ い ま す か。 1 $t\zeta id\zeta i$ 2 $-z\acute{i}$ []			48
地 図	1 $-dztt$	2 $-z\acute{i}$	3 その他 []	49
島	1 $fi-$	2 $si-$	3 []	50
墨	1 $stt-$	2 $si-$	3 []	51
烏	1 $-stt$	2 $-s\acute{i}e$	3 []	52
	1 	2 	3 []	
	こ ち ら の 名 産 の 小 さ い 茹 子 を つ け る 辛 い 粉 を 何 と お っ し ゃ い ま す か。 1 $karg\acute{i}$ 2 $-s\acute{i}e$ 3 []			53
狐	1 $-ts\acute{t}t-$	2 $-z\acute{i}-$	3 []	54
団 扇	1 $-ts\acute{r}-$	2 $-z\acute{i}-$	3 []	55
	1 	2 	3 []	

3

34 - 36	37 - 39	40 - 43	44 - 47	48 - 55	56 - 63	64 - 65

柿	1-k-	2-g-	3{ [] }	56
猫	1-k-	2-g-	3{ [] }	57
	1↘	2↗	3{ [] }	
旗	1-t-	2-d-	3{ [] }	58
	1↗	2→(↘)	3{ [] }	
鳩	1-t-	2-d-	3{ [] }	59
蜂	1-tf-	2-z-	3{ [] }	60
口	1-tf-	2-z-	3{ [] }	61
靴	1-ts-	2-z-	3{ [] }	62
松	1-ts-	2-z-	3{ [] }	63
水瓜	1-ka	2-ǵa, -k̄a	3{ [] }	64
曜日のなまえについておたずねしますが、 日曜日 のつきは月曜日 、月曜日 のつきは 何とおっしゃいますか。			1 ka- 2 k̄a- 3 { [] }	65
「あの人はいつも遅れてくる」というとき、「いつも」ということをふつう何とおっしゃいますか。			1 ^{its} mo. 2 ^{sott} fa? to: s̄ie 3{ [] }	66
「わたくしが 留番番をしています」と言うとき、「留番番」ということをふつう何とおっしゃいますか。			1 ^{ru} st̄aban 2 ^{jos} ir̄i 3{ [] }	67
「どうぞこちらへいらっしゃい」とていねいに言うとき、「いらっしゃい」ということをふつう何とおっしゃいますか。			1 ^{ira} ffai 2 ^{gō} zax̄e 3{ [] }	68
「おなががいばいになった。もうたくさんです」と言うとき、「もう」ということをふつう何とおっしゃいますか。			1 ^{mo} : 2 ^{ado} 3{ [] }	69
「あんまり大きいので驚いた」というとき、「驚いた」ということをふつう何とおっしゃいますか。			1 ^{odoro} ita, 2 ^{obo} yēda. 3{ [] } bikkuri f̄ito kimogēda	70

4

ア ク セ ン ト

「そんなことするのははずかしい」と言うとき、「はずかしい」ということをふつう 何とおっしゃいますか。

1 hadzwa:kafi 2 čō:si:, očō:si: 3{ }

「このおかしはずいぶん甘い」と言うとき、「ずいぶん」ということを、ふつう 何とおっしゃいますか。

1 dzwibw:N, de:bw 2 ko:de 3{ }

「そこにすわっていらっしやい」と言うとき、「すわって」ということをふつう 何とおっしゃいますか。

1 Swatte 2 nematte 3{ }

「朝から晩まで野球ばかりしてはだめだ」と言うとき、「だめだ」ということを、ふつう 何とおっしゃいますか。

1 dame da 2 jāzanane 3{ }

「うるさいからさわぐな」と言うとき、「さわぐな」ということをふつう 何とおっしゃいますか。

1 Sawanuna 2 hogoruna 3{ }

こんどは近ごろのことはについて少しおたずねしたいと思いますが
 ……「コントロール」ということはをお聞きになったことがありますか。

1 正しく理解されている 2 正しく理解されていない 3 知らない

「六三制」ということはこの辺でもお聞きになりますか。

1 2 3

東京では学生などの「アルバイト」(バイト アルバイ) がさかんですが、この辺でもそういうことを お聞きになったことがありますか。

1 2 3

「鉄のカーテン」は?

1 2 3

「アプレ・ゲル」ということはをお聞きになったことがありますか。

1 2 3

71
72
73
74
75
76
77
78
79
80

5

語	い	新	語

子ども(～崩～姉)にむかって「朝寝坊をしないで早く起きろ」と言うとき、ふつう何とおっしゃいますか。

1 okiro 2 ogire 3 { }

「どうもこの子は勉強しないで困る」と言うとき、「勉強しないで」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 benjjo: sinaide, sinede 2 benjjo: sane Sanaigata 3 { }

「わたくしたちもいっしょに行きましょう」と言うとき、「わたくしたち、ということをおつう何とおっしゃいますか。

1-tatji-datji-domo 2 yada 3 { }

「おもしろい映画だつてね」「では、いっしょに見に行かないか」と言うとき、「では見に行かないか」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 mi ni, miw 2 mi sa 3 { }

友達にむかって「あの人はすいすいもうが強かったなあ」と昔のことを話するとき、「強かったなあ」ということを、ふつう何とおっしゃいますか。

1 tsarjokattana: 2 tsjieké 3 { }

「あそこですずめやら烏やらとんびやらたくさん飛んでいる」と言うとき、「すずめやら烏やらとんびやら」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 Jara, dano, ja(etc) 2 dagaste, déra 3 { }

「(もし)海が静かならいいんだがなあ」と言うとき、「静かなら」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 nara(ba) 2 aaba, dar'ab(ba) 3 { }

「わたくしも行くから、ちょっと待って下さい」と言うとき、「行くから」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 kara 2 sage, sigé, hagé 3 { }

「わたくしも行くけれども早くは行けません」と言うとき、「行くけれども」ということをふつう何とおっしゃいますか。

1 keredomo 2 domo 3 { }

わたくしなどから「あなたは～年生まれですね」と言われて「そうです」、または「はい」と答えるとき、ふつう何とおっしゃいますか。

1 so: des, 2 nda, 3 { }
hai ndé, n'ausis,
so: de n'ausis

どうもありがとうございました。～さん(取 前後所、郵便局)のお宅はどちらでしょうか。 1 2 3

1正しい 2共通語だが 3共通語が 4共通語を 5共通語が
共通語 ことなくちがう まざる 話さない 通じない

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

6

A.M.

P.M.

調査終了時刻

語	法	語い・語法の計

調査時間

た。したがって、これらの調査員の滞在費、出張に当てうる日時などの制限から、被調査者は、白河地域の調査と同様、500ぐらいに抑えなくてはならなかった。

調査員は7人、1日に調査できる人数は、白河地域の調査の経験から、1人約10人（調査の実施時間は被調査者1人について40分以内、調査票はこの点で適応性の高いものにする）、調査日数は8日。これから考えて、調査できる人数は $7 \times 10 \times 8 = 560$ となる。しかし、すべて1回の訪問だけで調べられるとは限らない。なかには2回、3回とたすねなくてはならないこともある。このような追求(follow up)を考慮すると、500人程度がせいぜいということになる。

以上のような制限のもとに、能率のいいサンプリング計画をたてることにする。

2.42 母集団の構成

1950年10月現在、山形県鶴岡市に在住し、正常な社会生活を営む、明治15年(1882)から昭和11年(1936)までの間に生まれた、男と女すべてを調査対象(universe)とする。もっとも、鶴岡市と言っても、新たに市に編入された農村地帯、すなわち、^{どわがた}道形、^{ほおだし}文下、^{ちばら}茅原の諸部落は除外する。

これらの人人の標識は、調査票における各項目に対する反応の模様であると考え、各人に等しいサンプリング確率を与えて、母集団(population)を構成することにする。このとき、各種の母集団平均、特に共通語化の度合を推定するものとして、サンプリングの計画をたてる。調査の実施にとって必要な、他の統計量の推定に際しても、全く同じような考えで行う。また、分析のときに作る種種の統計量を推定する信頼度も、以下に述べるサンプリング方式に基いて、そのときどきに計算することができる。

さて、白河地域の調査（「言語生活の実態」30ページ以下）で、500のサンプルがあれば、どのくらいの精度が得られるかを考察した。それによれば、たとえば、母集団の変異係数が0.05であれば、サンプル平均の変異係数は、95%の信頼度のもとで44%となり、母集団の変異係数が0.03であれば、サンプル平均の変異係数は、等しい信頼度のもとで2.6%となる。

2.43 サンプルングの方法

さらに精度をあげるために、層別を施すことにする。共通語化の度合を決定する要因は、学歴、父母の出身地、本人の生育地、さらに、年齢×性、職業などであった。しかし、これらの文化的条件は1人1人については、あらかじめ分らないものがある。前もって利用できるのは、年齢、性、職業、現住所にすぎない。これらのうち、特に年齢は、種種の分析を行うときに基本となるものであることが分かっているので、層別には、年齢を第1次の基準とし、その他のものも第2次以下の層別の基準として採用することにしよう。

鶴岡市の人口は、1948年の国勢調査によれば、41,817である。このうち、われわれの universe に当るもの、すなわち、15歳から69歳までのものは、白河市で63.7%であるから、鶴岡市でもこの程度と考えるならば（残念ながら、鶴岡市ではこの比率が明らかでなかった）、26,650となる。この26,650は物資配給台帳にすべて記載されているはずであるが、この26,650人すべてを台帳のなかから拾い、カードにとり、これを層別することは、調査員、時間、費用などの制限から全く不可能である。そこで、能率的な重ね抜き法(double sampling)を用いて、層別の効果をあげることを考えた。

重ね抜き法は、第1次サンプルとして m 人を抽出し、その人人をあらかじめ分かっている基準によって層別し、それからサンプル n 人を抽出する方法である。実際には、現地において、台帳から m 人を抽出し、その人人のカード（しかるべき事項を記入する）を作り、これを東京へ持ち帰って層別し、サンプルを決定するのである。

それでは、第1次サンプル m 人をいかに決めたいであろうか。まず、鶴岡市の男女別・年齢別人口は、サンプルング計画をたてる時には分かっていたので、白河地域の調査のような層別の効果を期待することはできない。*

* 2回目の調査（準備調査）の時に、昭和23年度（1948）の男女別・年齢別の人口表を見ることができたが、これは、市としては資料が古い（転入・転出が相当あるから）上に、われわれが対象とした以外の部落を含んでいる。この資料によって白河市の調査と同じような方法によって、現在の母集団に対する推定を作るならば、かたよりが生ずることになる。このかたよりは修正のしようがない。したがって、この資料は参考程度にとどめることにした。

さらに、共通語化の度合は居住経歴に影響されるところが大きいので、要因分析の立場からは、若い層よりも壮年・老年のサンプルを多くする方が有効である。したがって、層別サンプリングに際して、比例割当ての立場を多少変更することが望まれる。^{*} そのとき、全体の集計が複雑にならないように心がけなくてはならない。

以上のこと、さらに、サンプル抽出のために滞在しうる日数などを考えて、 m を決めていくのである。いま、若い層（15歳から24歳まで）の比率を p_1 とする。サンプルが m 個あるとすれば、平均が mp_1 、分散がほぼ $m\sqrt{\frac{p_1(1-p_1)}{m}}$ となるような比率 p_1' をもって、母集団の比率 p_1 を推定することができる。

ここで、若い層のサンプルは、比例割当て法で得らるべきサンプル数の1/2しか割当てないことにしよう。1/2ならば、集計に困難を来たすことはなからう。すなわち、同じカードを2枚作りさえすれば、集計が可能である。

大きさ m の第1次サンプルを層別してひとまず第2次サンプル n' を抽出し、それから n' のうちの若い層を1/2にすることを考える。しかも、最後のサンプル（調査されるべきサンプル）が500（これを A とする）程度におさまるようにするのである。

このようにして、 A 、すなわち、調査すべき人数は次のように推定される。

$$\frac{n'p_1'}{2} + n'(1-p_1') = n'\left(1 - \frac{p_1'}{2}\right) = A$$

信頼度99%のときに、この数は

$$\left[n' \left\{ 1 - \frac{1}{2} \left(p_1 + 3\sqrt{\frac{p_1(1-p_1)}{m}} \right) \right\}, n' \left\{ 1 - \frac{1}{2} \left(p_1 - 3\sqrt{\frac{p_1(1-p_1)}{m}} \right) \right\} \right]$$

と推定される。若い層（15歳から24歳まで）の比率 p_1 は、鶴岡市ではあらかじめ分かっていないので、白河市に準じて、33%とした。

次に、この関係をさらに見やすくするために、

$$n' \left(1 - \frac{p_1'}{2} \right) = A \qquad p_1' = p_1 \pm 3\sqrt{\frac{p_1(1-p_1)}{m}}$$

$$A = 480, 490, 510, 520$$

^{*} 白河地域の調査における重ね抜き法では、第1次サンプルを層別してから、比例割当て法によって第2次サンプルを抽出した。

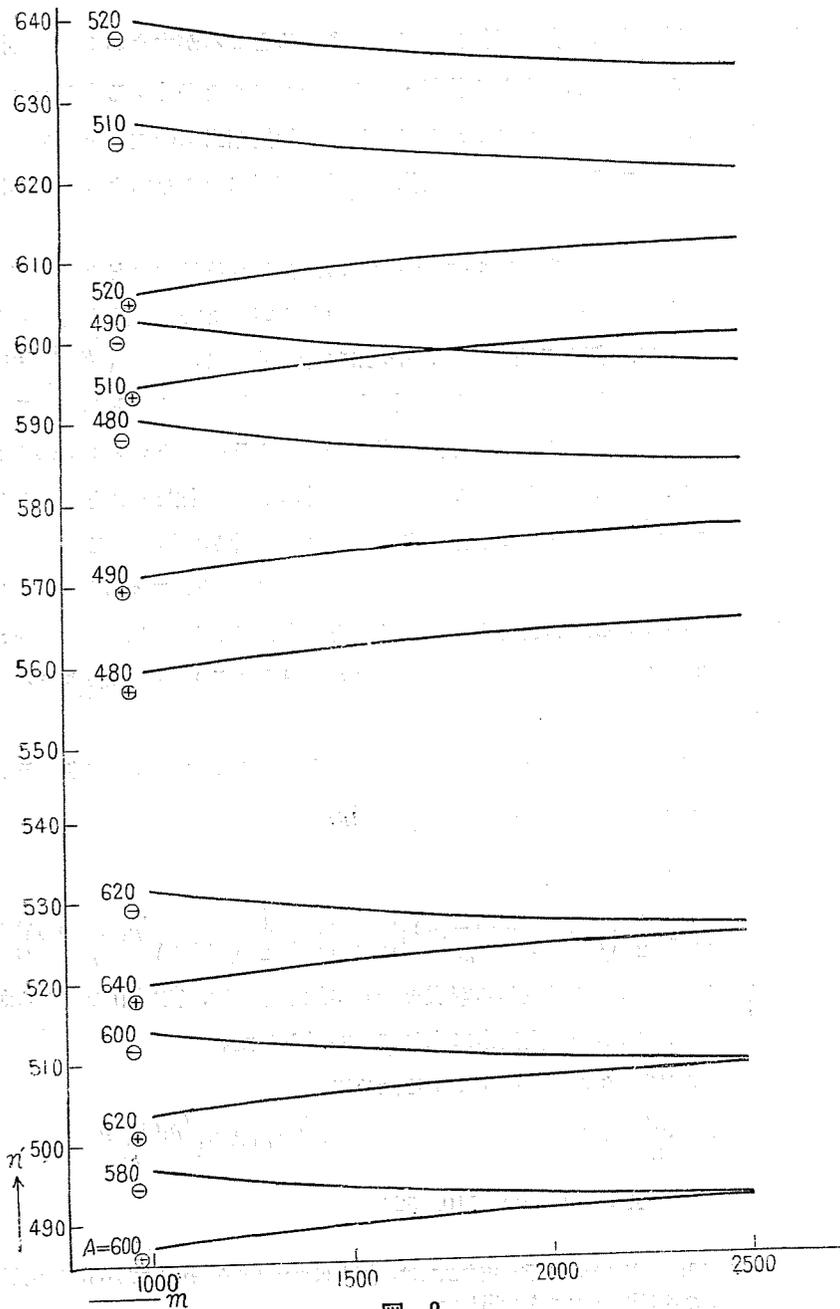


图 8
— 46 —

と置いて、 m と n' とのグラフを描いてみると、次のようになる。

このグラフと精度の計算式とから、

$$m=1700, \quad n'=600$$

と、ひとまず決めてサンプルすることにした。

2.44 サンプリングの精度

大きさ m の第1次サンプルを抽出し、これを職業、年齢、性、現住地によって R 個の層に分け、若い層はこれを $1/2$ にするという、重ね抜き法をとるとして、その精度をなるべくよくするためにはどうしたらいいか。

R 個の層に分けた時、第 i 層に属するサンプルの大きさを m_i とすると、

$$m = \sum_{i=1}^R m_i$$

となる。第2次サンプル n を抽出するのに、第 i 層から n_i だけのサンプルを抽出するものとして、

$$\frac{m_i}{n_i} = k$$

とするならば、共通語化の度合の推定値を表わす「点数」の母集団平均 \bar{X} の推定値としてつくるかたよりのない推定値 \bar{x} は、

$$\bar{x} = \sum_{i=1}^R \bar{x}_i \frac{m_i}{m}$$

ただし、 \bar{x}_i は i 層のサンプル平均

となる。比例割当をしたときの分散を $\sigma_{\bar{x}}^2$ とし、若い層を $1/2$ としたときの分散を $\sigma'_{\bar{x}}^2$ とする場合、 $\sigma_{\bar{x}}^2$ が $\sigma'_{\bar{x}}^2$ よりも大きくなるのが望ましいから、

$$\sigma_{\bar{x}}^2 - \sigma'_{\bar{x}}^2 > 0$$

となるような条件を満たすように、第1次サンプル m と第2次サンプル n とを決めればよい。*

*
$$\sigma_{\bar{x}}^2 = \frac{\sigma^2}{n} - \sigma_b^2 \left(\frac{1}{n} - \frac{1}{m} \right)$$

$$\text{ただし } \sigma_b^2 = \sum_{i=1}^R p_i \bar{X}_i^2 - \bar{X}^2$$

(次のページへ続く)

いま

$$\frac{n'}{n} = 1 + \beta$$

と置くと、

$$\beta > \frac{p_1 \sigma_1^2}{\sigma^2 - \sigma_b^2}$$

ならば有利である。

$$\sigma_1^2 = b\sigma^2 \quad b < 1$$

$$\sigma_i^2 = \sigma^2 \quad (i \neq 1)$$

と置くと、

$$\beta > \frac{p_1 \sigma_1^2}{\sum_{i=1}^R p_i \sigma_i^2} = \frac{p_1 b}{1 - p_1(1-b)}$$

となる。

このグラフを描いてみると、図9のようになる。ただし、 $p_1 = 0.33$ とする。

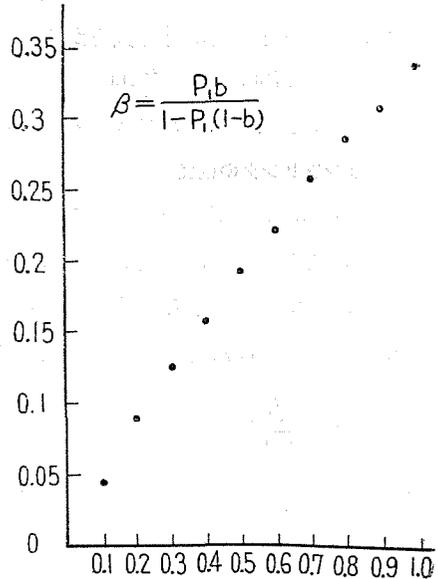


図 9

(前のページから続く) \bar{X}_i は第 i 層の平均

N_i は第 i 層の大きさ

$$p_i = \frac{N_i}{\sum_{i=1}^R N_i}$$

われわれの場合は $\frac{m_i}{n_i} \doteq k$ であり

$$n_i = a_i n' \frac{m_i}{\sum_{i=1}^R m_i} \quad \text{であるから}$$

$$\sigma_x'^2 \doteq \frac{1}{n'} \sum_{i=1}^R \frac{1}{a_i} \sigma_i^2 p_i^2 + \frac{\sigma_b^2}{m}$$

$$\doteq \frac{1}{n'} 2\sigma_1^2 p_1^2 + \sum_{i=2}^R \sigma_i^2 p_i^2 + \frac{\sigma_b^2}{m} \quad \left(a_1 = \frac{1}{2} \quad a_i = 1 \quad i \geq 2 \right)$$

$$= \frac{1}{n'} \sum_{i=1}^R \sigma_i^2 p_i^2 + \frac{\sigma_b^2}{m} + \frac{1}{n'} \sigma_1^2 p_1^2$$

$$\therefore \sigma_x^2 - \sigma_x'^2 = \frac{\sigma^2}{n} - \sigma_b^2 \left(\frac{1}{n} - \frac{1}{m} \right) - \frac{\sigma^2}{n'} + \sigma_b^2 \left(\frac{1}{n'} - \frac{1}{m} \right) - \frac{p_1 \sigma_1^2}{n'} > 0$$

白河地域の調査では、共通語化の度合は年齢別に見ると、次のようである。*

年 齢	\bar{x}_i	σ_i^2
15歳～19歳	20.9	15.53
20歳～24歳	21.5	13.29
25歳～29歳	20.2	17.33
30歳～34歳	20.0	16.13
35歳～39歳	19.0	15.44
40歳～44歳	19.3	13.76
45歳～49歳	18.8	16.03
50歳～54歳	16.9	24.09
55歳～59歳	16.7	20.30
60歳～69歳	17.4	22.36
全 体	19.6	18.85

この資料を使って β の見当をつける

$$\beta > 0.290$$

のとき、有利となる。したがって、

$$n = 500, \quad n' > 645$$

のとき、有利となるわけである。

われわれのサンプリング計画は共通語化の度合を測定するとともに、複雑な要因分析も行うのが目的である。そこで、要因

分析の立場を重んじつつ、なお、かつ、共通語化の度合を推定する精度もよくしようと考えた。そのためには、 n' として645以上が必要である。しかし、645の n' をとると、

$$n' \left(1 - \frac{p_1}{2}\right) = 539$$

となり、調査能力を上回るおそれがある。

以上のことを考えると、

$$m = 1,700, \quad n' = 600$$

の程度が適当であろうと考えられた。

なお、第1次サンプルから抽出したサンプルを n とすると、最後に得られるサンプル、すなわち、調査されるべきサンプルの

$$\text{平均は } n' \left(1 - \frac{p_1}{2}\right), \quad \text{標準偏差は } \frac{n'}{2} \sqrt{\frac{p_1(1-p_1)}{m}}$$

となるから、

$$n' = 600$$

とすると、

* 「言語生活の実態」 115頁、109頁

平均は 510, 標準偏差は 3.6

となる。これはわれわれの調査能力の範囲内にある。

2.45 第1次サンプルの抽出

抽出の結果, 第1次サンプルとして得たのは, 次のようである。

男	789
女	1,021
計	1,810

予定したサンプル数よりも多く抽出されたが, これは鶴岡市においては白河市におけるよりも, universe に対する母集団の大きさの割合が大きいためである。

参考までにこの人口表とサンプルとを比べてみよう。まず, 男女の比率について比べてみると,

	サンプル	昭和23年の人口
男	43.6%	44.9
女	56.4	55.1

のようになり, χ^2 検定* によっても, $\chi^2=1.2$ (自由度1) となって, 有意差は認められない。なお, 女の比率がいちじるしく大きいのが注目される。

次に, 年齢別の比率について比べてみると,

年 齢	サンプル	昭和23年
15歳~24歳	28.0%	30.4
25歳~34歳	22.5	22.0
35歳~44歳	20.9	18.9
45歳~54歳	14.4	14.9
55歳~66歳	14.2	13.8

のように, かなりよく一致している。

また, 前に $p_1=33\%$ として種々の計算を行ったのであるが, 昭和23年の資料を使うと, $p_1=30\%$ となり, 第1次サンプルの大きさは1,810であったから,

* χ^2 検定の考え方については, 3.112のところでも具体例について説明する機会がある。

ここに改めて n' の計算をしてみよう。それには、まず、

$$n' \left(1 - \frac{p'_1}{2}\right), \quad p'_1 = p_1 \pm 3\sqrt{\frac{p_1(1-p_1)}{m}}, \quad p_1 = 0.3$$

として、 n' と m のグラフを描くと、次のようになる。

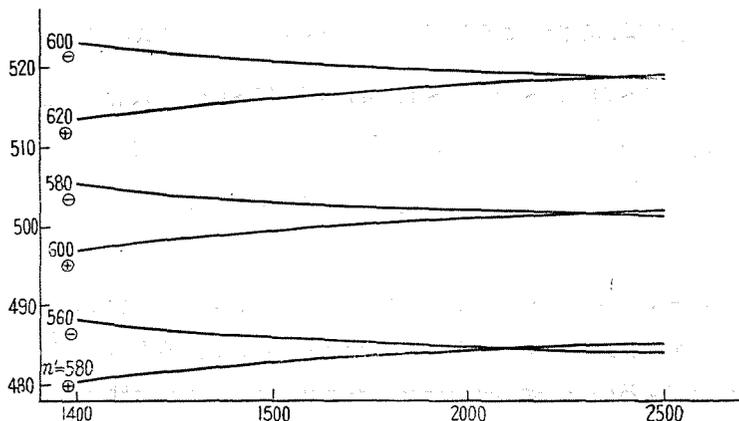


図 10

このグラフから見て、 $n'=580$ 見当が適当であろうと考えられた。こうすると、調査すべきサンプルの

$$\text{平均は } n' \left(1 - \frac{p_1}{2}\right) = 493, \quad \text{標準偏差は } \frac{n'}{2} \sqrt{\frac{p_1(1-p_1)}{m}} = 3.1$$

となり、調査能力を越えない大きさになる。

なお、この資料を使って β を計算すると、 $\beta > 0.27$ のとき、重ね抜きのほうが有利となる。

したがって、われわれのサンプリングによると、母集団の共通語化の程度を推定するにはやや精度の落ちることを認めなければならなくなるが、他の有利な点を考えると、この程度で満足すべきではないかと思われる。

2.46 第2次サンプルの抽出

第1次サンプルから第2次サンプルを抽出するには、次のようにした。

まず、層別は、最初に、性別、年齢別に分類し、次に、最近移動して来た者だけを取り出して一つの層を作る。続いて、居住地域別に分け、さらに、その

なかを職業別に分けた。

このようにして、580のサンプルを得るように、1,809の第1次サンプルから等間隔抽出法の考えで抽出することにした。この場合、間隔は、31を1サイクルとして、3, 3, 3, 3, 3, 3, 3, 3, 3, 3, 4の間隔のくり返しによって第2次サンプルを抽出した。その結果、584のサンプルを得た。ついで、15歳～24歳のサンプルを1/2にした。こうして、調査すべきサンプルは次のようになる。

年 齢	15～24	25～34	35～44	45～54	55～69	転入者	計
人 数	83	115	111	83	82	27*	501

* 15歳～24歳は除く

なお、ロールシャッハ・テストおよび暗示性テストの被調査者は次のようにしてサンプルされた。このテストは1人1時間ぐらにかかると共に、調査に専門的な技術を要するので、せいぜいサンプルは100ぐらにしなければならなかった。このテストは「共通語の調査」が終ってから実施することになったので、この調査でわかった、学歴、居住経歴などの文化的条件および共通語化の度合を基準にして層別を行った。層別の上で、重ね抜きの考えによって100のサンプルを抽出した。このようなサンプリングは、調査しつつ整理し、抽出するという方法と言うことができる。ロールシャッハ・テストをサンプルについて行ったのは、世界にもあまり例がないのではないかと思われる。

2.47 山添村のサンプリング

山添村は県道沿いに細長く人家が分布している上に、山添村の本調査には1日しかさき得ないので、全村12部落(字)から役場附近の九つの部落だけをとりに出した。すなわち、^{かみやまぞい}上山添、^{なかつ}中田、^{とぎわ ぎ}常盤木、^{にしあらや}西荒屋、^{かつらおらまた}東荒屋、^{まるおか}桂荒俣、丸岡の9部落である。この9部落の住民(3,461人—15歳以下の者、70歳以上の者を含む)を等間隔抽出法の考えに従って、79人を抽出した。

2.48 調査できなかった者について

われわれのサンプリング計画は、理論的に細かく組み立てられた重ね抜きの方法を用いているので、調査のできない者があっては、その結果にかたよりが

生ずる。しかし、実際には、やむをえない理由のために調査に応られじない者が出る。本当にやむをえない理由で調査できない者は、その比率が小さければ、調査不能の理由から考えて、結果にそれほどかたよりを与えないものである。^{*}しかし、なお、なんらかの操作を加えて、かたよりを小さくすることを考えるべきである。

そこで、調査の前に、やむを得ない理由で調査できないと認められた者は、代りの者と入れかえることにした。代りの者とは、調査できない者が出た同じ層から、等しい確率でランダムに抽出されたもので、これを「代りサンプル」と呼ぶことにする。代りサンプルに該当する者は、8.6%(50名)にすぎなかった。調査が始まってからも、どうしても調べられない者が4名出たが、これも、同じように、代りサンプルで当てた。しかし、この4名のうち1名が調査できなくなり、さらに、代りサンプルを用意した。このようにして、合計55名が代りサンプルで調査されたわけである。

ところが、このようにしても、すべてのサンプル、すなわち501名全部を調べることはできなかった。どうしても調べられなかった者が4名出た。調べられなかった理由は、

拒否 3 転出 1

である。拒否というのは、調査をいやがって、面接に応じない人たちである。これらの人を入れかえることは、結果にゆがみを与える危険があるので、あくまで追求したが、調査が終るまで面接できなかった。転出の1人は、はじめ拒否していると見られたために、追求を重ねていたが、最後になってはじめて転出ということの分かった者である。

以上のようなわけで、実際に面接して調べることでできた者は497名である。

さて、調査できなかった者について、いろいろな面から分析してみよう。ここで、調査できなかった者と言うのは、代りサンプルで代用した者と最後まで調べられなかった者を含む。

まず、調査できなかった者と調査できた者との比較をしてみよう。第1に、

* 「日本人の読み書き能力」1951年、321.02、501.0を参照

性および年齢について考えることにする。すなわち、調査できなかった者の性×年齢の比率と調査できた者のそれとの間に、有意な差があるかどうかを見るために、 χ^2 検定をすると、自由度9で、

$$\chi^2 = 8.404$$

となり、これより大きい χ^2 を得る確率は 50% である。両者の間に有意な差があるとは認められない。

第2に、家族人数について考えることにする。すなわち、調査できない者は、その世帯の家族人数が少ないのではないか。家族の少ない世帯は転住しやすい、故障が起りやすい（したがって、調査に応じられない）ということがあるのでないか。これについて調べるために、まず、調査できなかった者と調査できた者との間に、家族人数の分布について、有意な差があるかどうかを見ることにした。 χ^2 検定を行ってみると、自由度7で、

$$\chi^2 = 8.502$$

となり、これより大きい χ^2 を得る確率は 30% である。したがって、この点からは、両者の間に有意な差を認めることはできない。

次に、家族人数の分布の代りに、平均家族人数について、両者の間に差があるかどうかを見ることにしよう。調査できなかった者の平均家族人数は 5.1 人、調査できた者のそれは 5.6 人である。両者の差が有意かどうかを見るために、

$$\frac{5.6 - 5.1}{\sqrt{\frac{\sigma_1^2}{n_1} + \frac{\sigma_2^2}{n_2}}}$$

n_1, n_2 はサンプル数
 σ_1^2, σ_2^2 は分散

を作ると、1.19 となり、有意な差があるとは認められない。したがって、調査できなかった者と調査できた者との間には、家族人数の点では著しい差が見られないということになった。

このように、差の出そうな三つの標識について調べても、両者の間に有意な差が見られなかったということは、はなはだ興味深い。

さて、次に、代りサンプルを用意する以前に、調査できないと分かっていた者について考えよう。それは、代りサンプルの 50 名と、調査が始まってから調査不能となった者 4 名、計 54 名である。これらについて分析することは、今後のサンプリング計画において、どのような調査不能者を予期しなければな

らないかということを知るのに役立つであろう。

まず、調査に応じられなかった理由によって分けてみると、次のようになる。なお、15歳～24歳のサンプルは、すべて2倍にした。かつこの外は、そういう意味の実数であり、かつこの内はその比率である。

理由 性, 年齢	死亡	病気	不具	服役	転出	旅行	拒否	不明	計
男		5 (14.3)	4 (11.4)	3 (8.6)	7 (20.0)	12 (34.3)	2 (5.7)	2 (5.7)	35 (100.0)
女	1 (3.5)	9 (31.0)	2 (6.9)		9 (31.0)	4 (13.8)	2 (6.9)	2 (6.9)	29 (100.0)
15歳～24歳		4 (20.0)		2 (10.0)	10 (50.0)	4 (20.0)			20 (100.0)
25歳～34歳		4 (20.0)		1 (5.6)	3 (16.7)	7 (38.8)	1 (5.6)	2 (11.1)	18 (100.0)
35歳～44歳		2 (28.6)	2 (28.6)			1 (14.2)		2 (28.6)	7 (100.0)
45歳～54歳		2 (20.0)	2 (20.0)		1 (10.0)	3 (30.0)	2 (20.0)		10 (100.0)
55歳～69歳	1 (11.1)	2 (22.2)	2 (22.3)		2 (22.2)	1 (11.1)	1 (11.1)		9 (100.0)
計	1 (1.6)	14 (21.9)	6 (9.4)	3 (4.7)	16 (25.0)	16 (25.0)	4 (6.2)	4 (6.2)	64 (100.0)
計/584	(0.2)	(2.4)	(1.0)	(0.5)	(2.7)	(2.7)	(0.7)	(0.7)	(10.9)

上の表によると、調査できなかつた者は 10.9% である（信頼度 95%、信頼幅 2.5%）。理由のうち、転出、旅行および病気の多いのは、他の調査の場合も同様である。男で旅行の比率が大きく、女で病気、転出の比率が大きいが、これも他の調査の場合に見られるところである。*

これらの理由のうち、かたよりに関係あるものは、旅行、拒否、不明であり、これは 4.1% にすぎない。理由のうち、病気は調査にとって重大な意味を持つとは考えられないし、その他の、死亡、不具、服役、転出は、対象外と言うべきものであるから、代りサンプルで調べても、いっこうに差支えないと考えられる。一応かたよりを生ずると見られる者 4.1% も、白河地域の調査の分析の

* 「日本人の読み書き能力」1951年、451、「言語生活の実態」47べ

結果からすると、さして大きいものでないと考えられる。

調査できなかつた理由を職業別に見ると、次の表が示すようである。これによると、農業に調査不能者がなく、無職に病気が多く、給料生活者に転出、旅行が多い。これらはすべて常識を裏書きする。

職業	理由								計
	死亡	病気	不具	服役	転出	旅行	拒否	不明	
給料生活者					4	3		1	8
経営者, 商業			1			2	1		4
工員など			1	1	3	5		1	11
日雇など					1	1	1		3
農業									0
学生						1			1
無職 (主婦を含む)	1	10	1		5	2	2		21
不明		4	3	2	2	3		2	16
計	1	14	6	3	15	17	4	4	64

今度は観点を変えて、性×年齢別に調査不能率を見ることにしよう。ここで調査不能率とは、調査できなかつた者の数をサンプル数で除したものを言う。

性	年齢					計
	15歳～24歳	25歳～34歳	35歳～44歳	45歳～54歳	55歳～69歳	
男	13.5	18.4	7.7	17.5	12.8	13.8
女	10.9	11.3	4.5	6.7	8.7	8.8
計	12.0	13.9	5.9	11.8	10.6	10.9

壮年層に調査できなかつた者の多いことが目立つ。また、女のほうが少なめなのは面接調査のためではないか。集合調査ならば、これと逆であろう。*

最後に、代りサンプルのうち調査不能となつた者について述べよう。さきに述べたように、代りサンプルは合計55名となり、そのうち調査できなかつた者が5名ある(最後まで調べられなかつた者はこのうち4名)。これは全体の9.1%に当る。この比率は、代りサンプルの調査不能率と見ることが出来る。この比率が、調査前の調査不能率10.9%と大差ない事実は注目に値する。

代りサンプルの調査できなかつた理由は、

* 「日本人の読み書き能力」1951年, 451

拒否 2 病気 1 転出 2

であり、性別、および年齢別に見ると、次のようである。

男 4 女 1

15歳～24歳 1, 25歳～34歳 1, 35歳～44歳 0, 45歳～54歳 2, 55歳～69歳 1

以上のいろいろな面からの分析と考察とによって、始めのサンプルと実際に調査されたサンプルとの間には、著しい差はないものと見られる。したがって、サンプルの入れかえも、結果には、それほどのかたよりは与えていないものと考えられ、もし、あるとしても、実際には無視しうるほどのものと考えられる。

2.49 サンプリングの実施

さきに試みた理論的考察によって、重ね抜き法が有利であるという保証を得た。その上、豊富な結果は壮年・老年の分析によって得られるので、この年齢層のサンプル数もしかるべく確保する必要がある。したがって、サンプリングは重ね抜き法が妥当であろうと思われる。

まず、第1次サンプルとして約1,700を抽出することにした。その抽出は白河地域の調査と同様、物資配給台帳からのランダム・スタートの等間隔抽出法によることにした。

さきに述べたように、われわれの母集団の総数は26,650と推定されるので、これから1,700のサンプルを抽出するためには、15.5の間隔で抽出する必要がある。なお、市の平均家族人数は4.6であるから、この間隔で抽出しても同調することはなく、ゆがみのない抽出が可能であろうと思われる。15.5の間隔で抽出するために、最初は15の間隔、次は16の間隔、次は15の間隔、次は16の間隔、……というように抽出していくのである。*

このように抽出していったら、指定された番号のものが対象内のものである。すなわち、昭和11年—明治15年生まれのものであれば、サンプルとして抽出し、そうでないものはそのままにして、さらに次の間隔で数えていくようにした。

* この方法は、実施上かなり困難で、抽出能率が普通の等間隔抽出法による場合よりも、はるかに落ちる。今後、注意すべきところであろう。多数のサンプルを抽出するには、単純な機械的操作が望ましい。

3 調査の結果

3.1 共通語化の度合を表わす指標

白河地域の調査で、共通語化の度合を表わす指標として最もいいのは、音声の方言的特徴に関する反応の数であると認められた。^{*} 今度もこのような音声の特徴をおもな指標として分析しようと考えた。ただし、音声の特徴と他の特徴との関係を見るために、また、それぞれの特徴の文化的条件による分布の違いを調べるために、文法、語彙、アクセントのそれぞれの特徴についても調査語を用意し、その反応の数を点数として出した。

3.11 指標としての音声の特徴

3.111 他の特徴との関係

まず、音声の特徴の点数と文法の特徴の点数との関係を見よう。以下、前者を「音の点数」、後者を「文法の点数」と呼ぶことにする。

試みに両者の相関係数を求めると、0.42であり、たいした関係とは認められない。

また、主観的判定^{***}の段階ごとに、音の点数と文法の点数との関係を、図11のようにプロットしてみても、^{***}両者の関係はさして著しいものではない。す

* 「言語生活の実態」4.1

** 面接して調査している間に、被調査者の話す言語を、調査員が主観的に判定したものの、大きく分けて四つの段階に分かれる。(1)正しい共通語 (2)えせ共通語 (3)共通語に方言がまざる (4)共通語が話せない。なお、ここでは、「共通語」が古い定義に従って用いられている。すなわち、共通語はいわゆる「標準語」である、という考えである。しかし、われわれは、鶴岡の調査実施後に書いた「言語生活の実態」において、共通語と「標準語」とをはっきり定義し分けた（「言語生活の実態」6ページ～8ページ）。一つの調査で、同じ用語が二様に定義されることは許されない。これは修正しなければならない。そこで、この四つの段階は、(1)と(2)とをいっしょにして、次のような3段階に整理すべきである。

1 共通語を話す（方言を話さない）

2 共通語に方言がまざる

3 共通語を話さない（方言を話す）

*** 図11は次のようにして描かれた。たとえば、判定が4で、文法の点数が9点の者が作る集団の音の点数の平均は、ちょうど13点になるので、文法の点数9と音の点数13とがクロスするところに、図のようにプロットする。また、判定が2で、文法の点数が1点の者が作る集団の音の点数の平均は、ほぼ24.5であるので、文法の点数1と音の点数24.5とがクロスするところに、図のようにプロットする。判定1の集団では、たまたま、文法の点数が8点の者しかなかった。

なわち、音の点数の高い者は文法の点数も高く、音の点数の低い者は文法の点数も低いという、増加・減少函数の関係が著しくは現われていない。これを白河地域の調査の場合（「言語生活の実態」の図23を見よ）と比べると、いっそうはっきりする。白河地域の調査の場合と今度の場合とを、模型的に誇張して示すならば、図 12 のようになる。

さらに、判定の段階ごとに、文法の点数の平均と音の点数の平均と関係を見ると、図 13 のように、傾向性がやや目立って来る。

次に、音の点数と語彙の特徴の点数（これを以後「語彙の点数」と呼ぶ）との関係を見ても、文法の点数の場合と同様、もしくはそれ以上に、両者の関係は著しくない。ちなみに、両者の相関係数は 0.43 である。

なお、文法の点数と語彙の点数との関係は、相関係数 0.55 で示されるほどであり、判定の段階ごとにプロットしてみても、やや目立つ傾向性を認めうる程度である。

以上によって、音の点数は、文法の点数とも語彙の点数とも増加・減少函数の関係を持たないこと、ただし、文法の点数と語彙の点数とは一応の関係を持つことが明らかになった。これは、以上の三つの特徴についての調査方法の違いに基くものと考えられる。音声の特徴は、絵を見せて、「これは何ですか？」という質問に答えさせる、という方法、すなわち、被調査者の言語行動を直接観察するという方法をとっているのに対し、文法の特徴と語彙の特徴とは、「『どうもこの子は勉強しないで困る』と言うとき、『勉強しないで』ということをつつ何とおっしゃいますか。」のように質問して、内省を發表させるという方法をとっていることが影響していると思われる。

以上によって、音の点数と文法の点数あるいは語彙の点数とを合わせて一つの指標にすることのできないことが明らかである。それでは、三つの点数のうちどれをとりあげて指標にすべきか。次の理由から、音の点数を指標とすべきであると思われる。

1. 言語行動を直接観察した結果であること
2. 異なる種類の特徴を含んでいるので、共通語化の過程を見るのに適当な指標であること

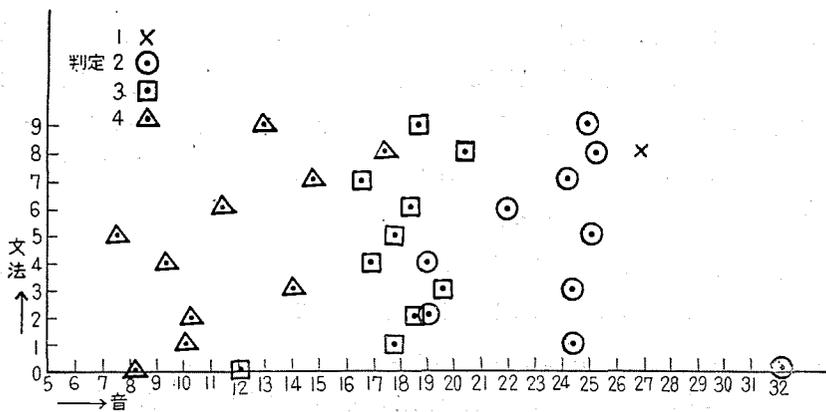


图 11

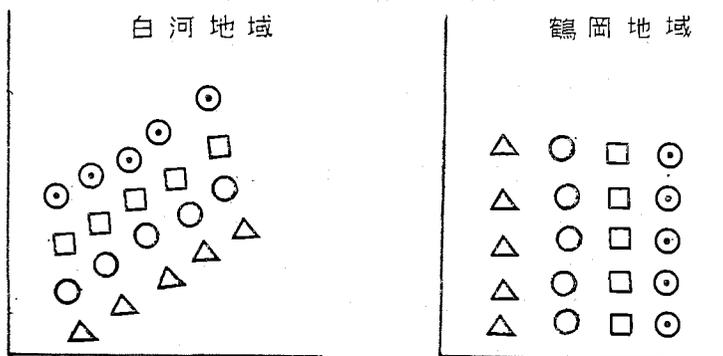


图 12

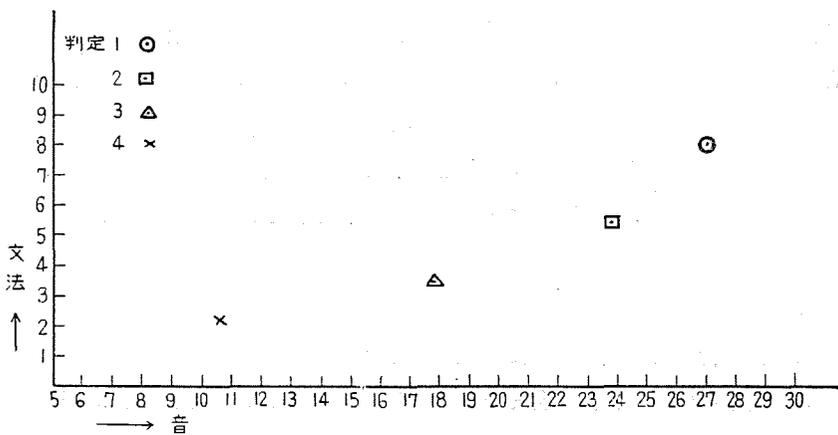


图 13

3. 0から32までの点数で表わしうるので、統計的分析が容易であること
 3.112 妥当性

音声の特徴が共通語化の度合を測定する指標として、はたして妥当であるかどうかを見るために、いろいろな面から検討してみよう。まず、主観的判定との関係を調べてみよう。

判 定	サンプル数	平均点	中央値	分 散
共 通 語	119	24.4	25.6	33.51
方言がまざる	227	19.2	18.4	49.85
方 言	160	10.9	9.8	56.12

これによると、共通語、方言がまざる、方言 の三つの段階の間に有意な差が認められる。また、分散が、共通語、方言がまざる、方言 の順に大きくなる点が注目される。

以上のことは、共通語化の度合を客観的に観察した結果（点数）と主観的に判定した結果とが密接な関係を持っていることを示している。すなわち、音声の特徴、すなわち音の点数を指標にすることが、共通語化の度合の測定にとって、なんらかの意味で妥当であることを示していると言えよう。

さらに、別の面から妥当性を検討してみよう。それは、調査の場面で調べたことと実際の日常生活における言語行動とを比べることである。

そのために、鶴岡市民から3人を選んで、その人の一日じゅうの言語行動を記載して、一日じゅうにどれだけの共通語を使っているかを調べ、それと、同じ人の音の点数とを比べてみた。

3人のうち2人は、「共通語の調査」とほぼ平行して、1950年の11月に調べた。2人のうち、ひとり（これをPと呼ぶ）は、共通語をよく使うと予想された人、もうひとり（これをRと呼ぶ）は、共通語をあまり使わないと予想された人である。この2人について分析したところ、ほぼ満足しうる結果を得たので、調査の結果わかっている文化的条件から考えて、PとRとの中間に当る人を、被調査者約500人のうちから十数人を選び、そのうちから1人を現地（市役所学務課）で選んでもらった。これをQと呼ぶ。Qを調べたのは、1951年10月である。

P, Q, R 3人の文化的条件は, 267 べ(IV). の表を見よ。

共通語化の度合を表わす

音の点数と共通語化の度合を知る手がかりとを比較すると, 次のようになる。

このようなP, Q, Rの1日じゅうの共通語を使う割合と特に外来語を使う割合(総文節に対する割合)

	P	Q	R
音の点数	28点*	12点	6点*
主観的判定	共通語**	方言がまざる**	方言ばかり
場面による使い分け	どの場面でも共通語	どの場面でも方言	どの場面でも方言
新語***	四つとも知っている	二つしか知らない	ひとつしか知らない

とを比べると次のようになる。

	P	Q	R
共通語の割合	97%	31%	39%
外来語の割合	10.3%	0.08%	0.03%
音の点数	28点	12点	6点

これによると, 6点・12点と28点との差は, 日常の言語生活のきわめて著しい差に当ることが明らかである。6点・12点を示す者は, 日常の言語生活において, 一日の言語行動全体の31%ないし39%しか共通語で話していないのに対し, 28点を示す者は, 97%は共通語で話している。外来語の割合につい

* 同時に4人の調査員が観察した結果の平均点である。詳しくは次のとおり。

	P (被調査者)	Q
k (調査員)	28	4
l	29	7
m	28	5
n	28	9

** 詳しくは次のとおり。

P 2.1 (正しい共通語に近いえせ共通語)

Q 3.2 (えせ共通語に近い方言のまじり)

*** 詳しくは次のとおり。知っているものを○で, 知らないものを×で表わす。

	P	Q	R
アルバイト	○	○	○
ユンクール	○	○	×
鉄のカーテン	○	×	×
アプレ・ゲール	○	×	×

** 話題単位に数えた。詳しくは,

P 97% (=426/437)

Q 31% (=66/216)

R 39% (=152/391)

のようである。なお, これは手書きによって得た資料を分析した結果である。Qについては, 録音器とステノタイプ(ソクタイプ)とを並用したが, これによって得た資料について分析すると, Qの共通語の割合は24%に低下する。それは, 細かいところまで記録するので, いきおい共通語による話題と判定されるものが少なくなったのであろう。

ても、6点・12点を示す者は、一日じゅうのことば（正確には文節）のうち0.3%ないし0.08%の外来語しか使っていないが、28点を示す者は、10.3%も外来語を使っている。

このように、6点・12点と28点との間には著しい差が見られるが、6点と12点との間にはほとんど差が見られない。外来語の割合については、被調査者QとRとの間に差が見られるが、共通語の割合については、被調査者QとRとがむしろ逆の関係になっている。これは、われわれの尺度（音の点数による指標）が線状ではないことを表わしているのであって、決してわれわれの指標の妥当性を低めるものではない。解釈の上で注意すればよいのである。

ここで、さらに別の面から、われわれの指標の妥当性を確かめてみよう。今度は、音声の特徴だけについて、両者の関係を見ることにする。それには、音の総点数と音声の特徴それぞれの使用度の重みをかけて加えた総点数との相関を調べるという方法が考えられる。この重みをかけたものは、その限りにおいて、音の点数の立場から見た場合、人人の耳に感じられる共通語化の度合を表わすものと考えてよい。

音声の特徴	調査語数	被 調 査 者			計	重 み
		P	Q	R		
∅	3	134 (1.6)	94 (1.6)	135 (3.2)	363 (2)	0.66
~	3	1188 (14.3)	931 (15.5)	606 (14.4)	2725 (15)	5.0
i	4	1381 (16.6)	946 (15.8)	773 (18.4)	3100 (17)	4.2
si	8	1781 (21.4)	896 (15.0)	617 (14.7)	3294 (18)	2.2
palatalized	4	435 (5.2)	98 (1.6)	77 (1.8)	610 (3)	0.75
voiced	8	3234 (38.9)	2996 (50.1)	1976 (47.1)	8206 (44)	5.5
k	2	167 (2.0)	24 (0.4)	15 (0.4)	206 (1)	0.5
計	32	8320 (100.0)	5985 (100.0)	4199 (100.0)	18504 (100)	

かっこの外の数字は、該当する音節の総数。かっこの中の数字は%を示す。

重みは $\frac{\text{計の\%}}{\text{調査語数}}$ によって計算された。

音声の特徴それぞれの使用度の重みは、24時間調査の被調査者3人の記録を分析して、現われうる限りの、つまり、実際に現われようと現われまいと、現われるならば現われうる可能性のある音声の各特徴を音節単位に数えたものから計算した。

図14は個人個人についてプロットしたものであるが、これをさらに見やすくするために、図15を描いてみた。これは重みをかける前の音の点数の得点ごとに、該当者の平均をとって描いたものである。これを見ると、重みをかける前の音の点数の低いところ（ほぼ10点以下）で、重みをかけた音の点数がやや低目に出ているが、だいたい直線的と見ていい。これは、両者の間、すなわち、調査の場面で得た結果と実際の言語行動との間に密接な関係のあることを示すもので、これによって、音の点数が共語通化の尺度として妥当性の高いことが理解される。

また、間接的ではあるが、文法の特徴について妥当性を検討してみよう。われわれは、あらかじめ調査票に妥当性を検討するための、2組の項目を設けた。項目7と90、項目25と91がそれである。

まず、前者では、項目7で、あらかじめわかっている資料を確かめるような形で、「何年生まれですね。」と生まれ年を尋ね、その返事が

ソーデス、ハイ

のように、共通語の形で発せられるか、

ンダ、ンデ ガンス、ソーデ ガンス

のように、方言の形で発せられるかを観察している。それに対して、項目90では、「わたくしなどから『あなたは～年生まれですね。』と言われて、『そうです。』、または『はい。』と答えるとき、ふつう何とおっしゃいますか。」と質問している。この両者の結果を比較すると、次のようになる。

項目7において共通語形で答えた者が、項目90においても共通語形を答え、項目7において方言形で答えた者が、項目90においても方言形を答えるという関係が、なんらかの意味で認め

項目90 項目7	共通語形	方言形	計
共通語形	296	114	410
方言形	22	48	70
計	318	162	480

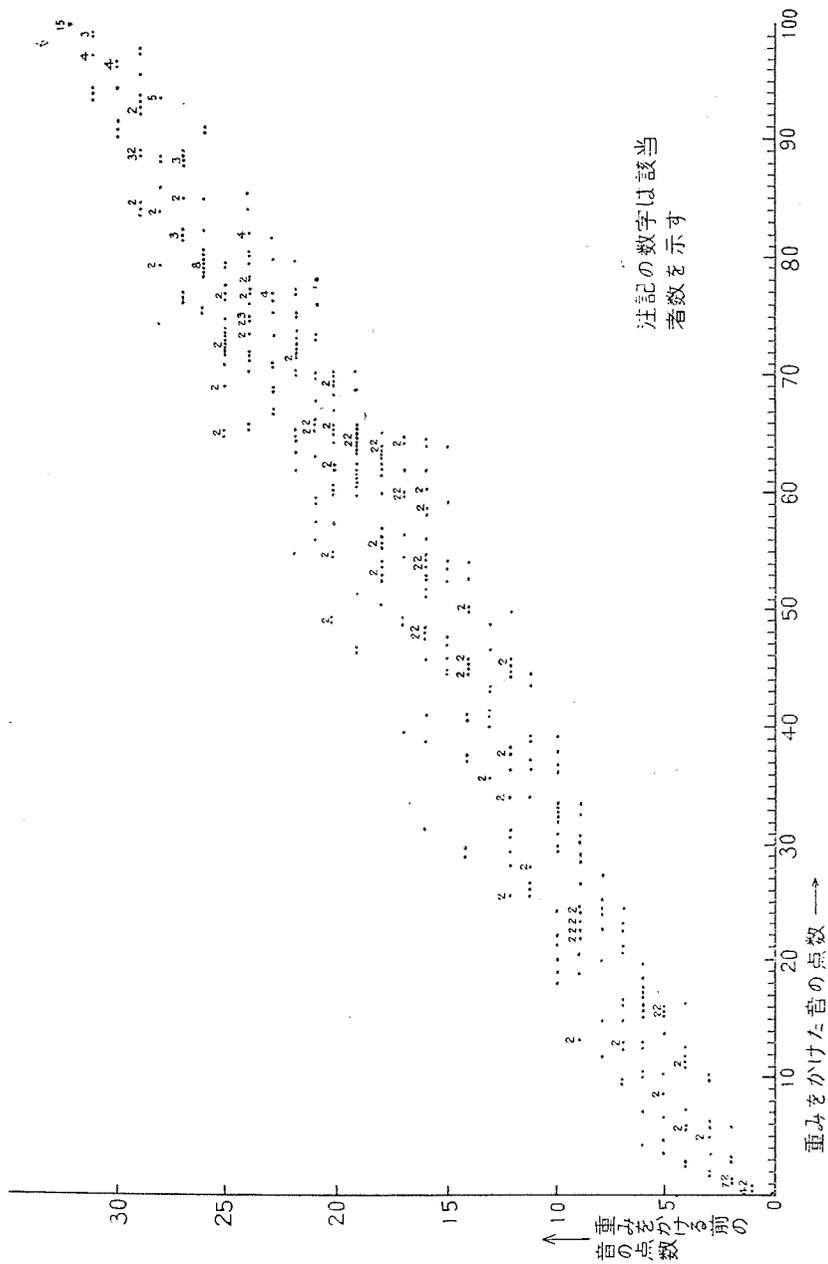


図 14

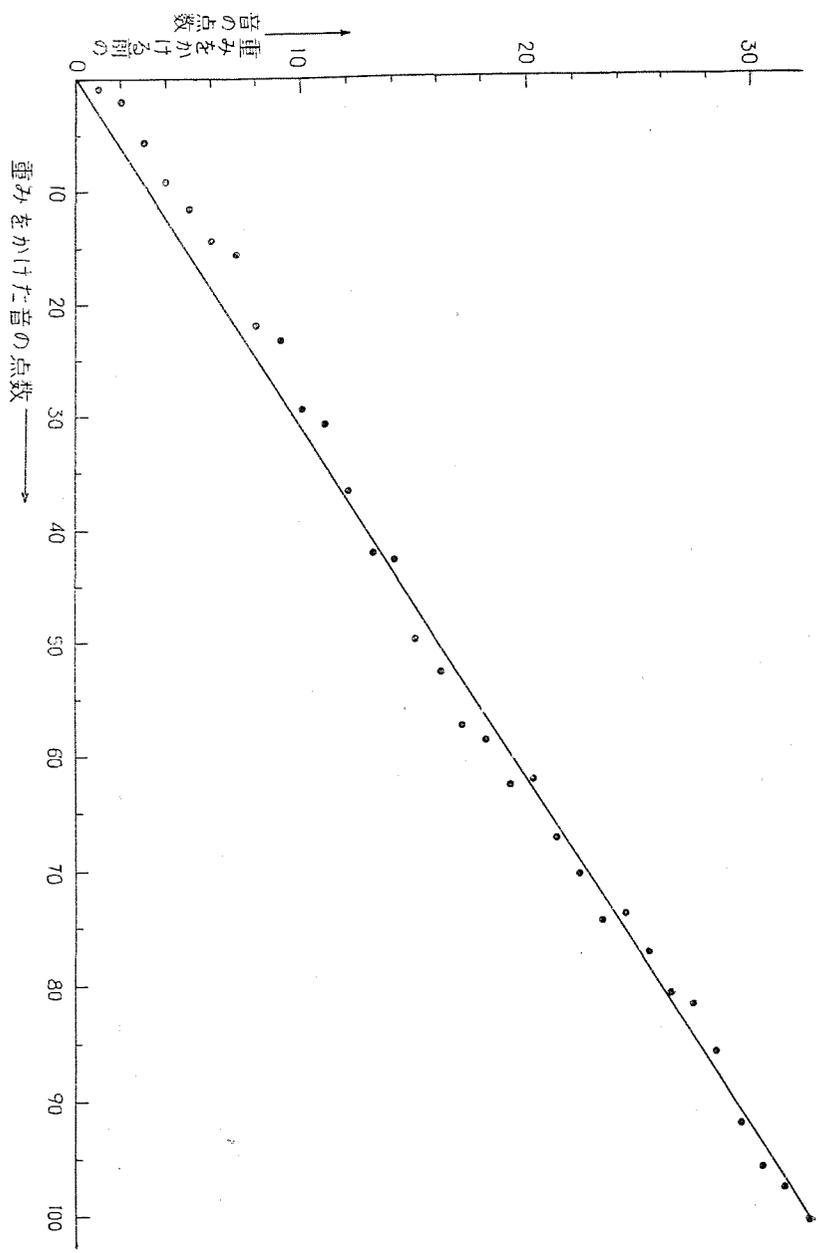


図 15

られるかどうか。上の表で、296 のところが 318、48 のところが 162 となり、したがって、22 と 114 のところが 0 となれば、われわれの求める関係は明らかに認められるわけであるが、実際には上の表のような状況である。そこで、こう考えてみる。いま、項目 7 と項目 90 とが無関係であると仮説して、その際、上の表に見られるように数が現われる確率は何のくらいであるかを調べる。それが、この仮説のもとでは、めったにない場合を表わしているならば、この仮説を捨てる。すなわち、項目 7 で共通語形で答えた者は、項目 90 でも共通語形で答えていると言ってさしつかえなかりと、消極的に両者の関係を認めようとするのである。はたして、われわれの場合、そういう関係が認められるかどうか。

これを調べるのに、 χ^2 検定 (Yates) という統計数理的方法を用いると、 $\chi^2 = 42.64$ (自由度 1) となり、確率 0.001 における χ^2 の値よりもはるかに大きくなる。これは、上の表に見られるような数の関係が現われる確率は 0.001 より大きくないことを示す。すなわち、現われても、それはごくまれな場合にすぎない。したがって、両者が無関係であるという仮説は捨てなければならない。これによって、われわれの求める関係は、上のような意味で、一応認められるというわけである。

次に、項目 25 で、「旅の人などに話をするとき、ことばは土地のことばですか。標準語ですか。いろいろまじりますか?」のように質問し、それに対して、項目 91 で、実際に、「~さんのお宅はどちらでしょうか。」と聞いている。この両者の結果を比べると、次のようになる。

前と同じように、 χ^2 検定を行うと、 $\chi^2 = 90.21$ (自由度 2) となつて、確率 0.001 における χ^2 の値よりもはるかに大きくなる。したがって、ここでも、項目 25 において共通語形で答えた者は、項目 91 においても共通語形を答え、項目 25 において方言形で答えた者は、項目 91 においても方言

項目 25 \ 項目 91	共通語	まじり	方言	計
共通語	88	28	24	140
まじり	72	69	24	165
方言	26	76	72	172
計	186	173	120	479

形で答えるという関係を認めないわけにいかない。

以上の分析から、文法の特徴について、妥当性のある調査票と云いうる。文法の特徴と音声の特徴との関係は、さきに (3.111) 見たように、増加・減少函数の関係ではないので、以上の結果から、ただちに、われわれの指標の妥当性を明らかにすることはできない。しかし、文法の特徴でさえもこの程度の妥当性が得られるから、音声の特徴——われわれの指標——については、もっと高い妥当性が得られると期待することは許されるであろう。

3.1113 再現性

音の点数が共通語化の度合を測定するのに妥当な指標であるとしても、それが、はたして再現性のあるものかどうかが問題となる。音の点数は、七つの音声の特徴のそれぞれを調べるのに適切と考えて用意した 32 の語が共通語形で反応した数の総数である。もし、七つの音声の特徴のうち次元の異なるものがあれば、それらを合わせた総数は意味のないものになる。総数は各特徴の模様 (pattern) をよく表わしうるようなものでなければならない。すなわち、われわれの指標は高い再現性を持っていなければならない。

はたして、どうであろうか。それを見るために、L. Guttman の尺度解析 (Cornell technique による scale analysis) を応用して、図 16 のような表を作った。これを作るには、被調査者* を点数の高い順に並べ、次に、被調査者それぞれが各特徴についてどのような点数をとっているかを調べ、この点をプロットしていった。

この表を見ると、palatalized (背中をシェナカと言う特徴) と i (駅を [igi] または [égi] と言う特徴) とは、特徴の内部で左右にかなり揺れている。再現性が高いほど、この揺れは小さく、少なくなるはずである。

ところで、この二つの特徴のうち、後者は、別に述べるように (Ⅱ. 1.33), 音素としては、

息 /'iki/

駅 /'eki/

* 特に断らないかぎり、被調査者とは、言語形成期の大部分を鶴岡市を含む庄内地方で過した者とする。詳しくは、3.2 のはじめを見よ。

響を与える。それを防ぐには、あらかじめ観察と判定の基準を調整し合うことが必要である。白河地域の調査では、こういう調整を幾分試みることができたが、今度の調査では、時間的に余裕がなかった上に、調査員にいろいろな故障が重なったために、技術的に未熟な者が臨時に参加するという事になった。そのため、調査員によるくいちがいは今度の調査ではかなり深刻であった。

そのことは調査の実施中に気づかれたので、適当な市民4人を選んで、5人ないし7人の調査員が同時に観察し、判定して、その結果を比較してみた。それによると、個人によって、いつも辛く見る人と、いつも甘く見る人とがあることがわかった。4人のうちの1人については、その差が救いがたいほどでもあった。

そこで、調査票を1枚1枚点検して、2人の調査員について補正を加えた。すなわち、調査員Aは、「水瓜」について [k̥a] と聞き取りすぎていた。調査員Aに聞きただしたところ、[si:ga] ([si:ḡa] でない) のように有声音で現われる場合を大部分 [k̥a] と聞き誤ったらしい。したがって、調査員Aが調べた被調査者は、「水瓜」についてはすべて [ka] の形で答えた、ということになった。他の調査員では20%以上 [ka] と聞き取っていることはないので、調査員Aの記録は、補正したほうが、補正しないよりは、全体としてくいちがいを小さくすることになるであろう。

また、調査員Bは、方言形と聞き取って、それに印をつけながら、ある時には、これは「共通語形に近い」ということを注記している。この調査員はいつに観察が辛いので、注記のある場合はすべて、共通語形に補正した。

このようにしても、調査員によるくいちがいを完全に補正することはむずかしい。まず、調査員をひとりひとり、主観的判定の段階ごとに、音の点数に関する広がり (range) を見ることにした。図 19, 図 20 を参照。ある調査員は、広がりが判定の段階によってほぼ一定しているが、ある調査員は、それが著しく違う。前者はくいちがいが小さく、後者はくいちがいが大きいと言いうる。^{*}

* 広がりの中央を走る折線は、判定の段階それぞれの平均点を示す。

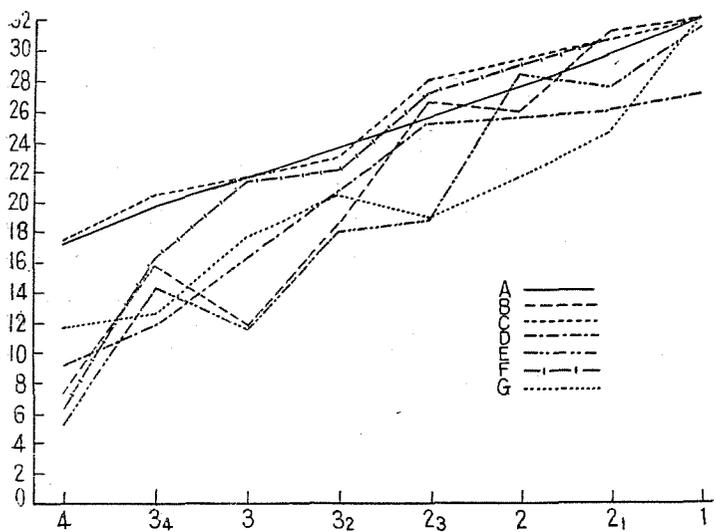


图 18

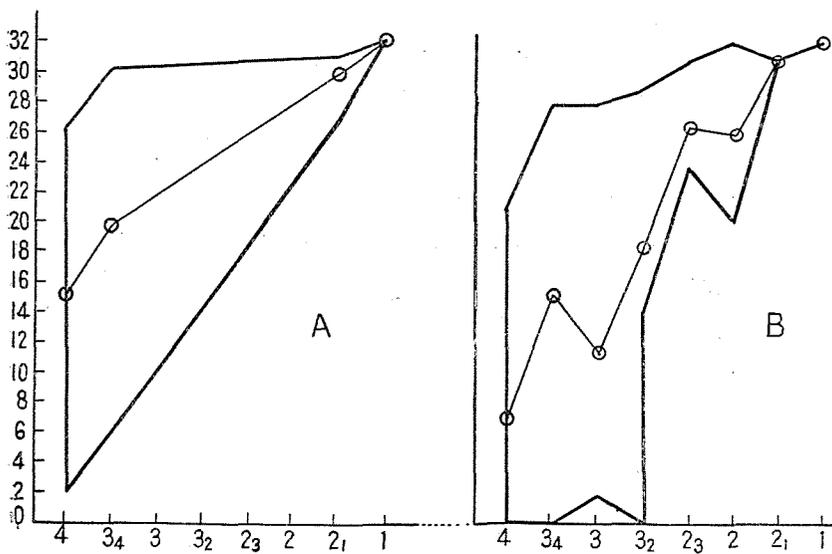


图 19

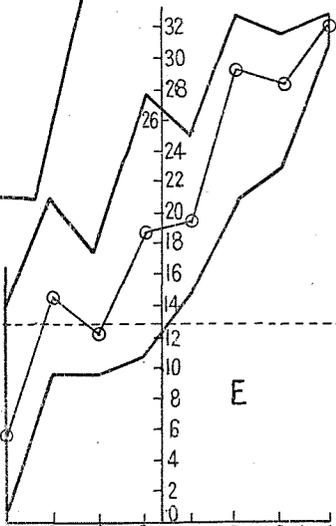
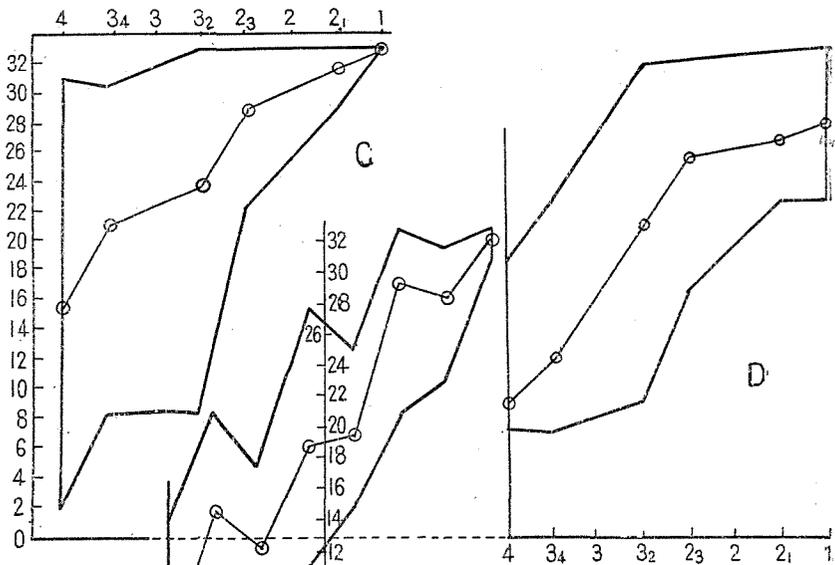


图 20

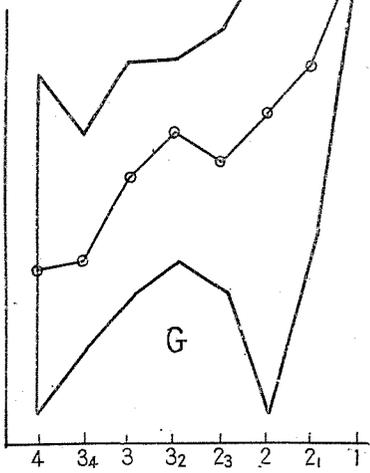
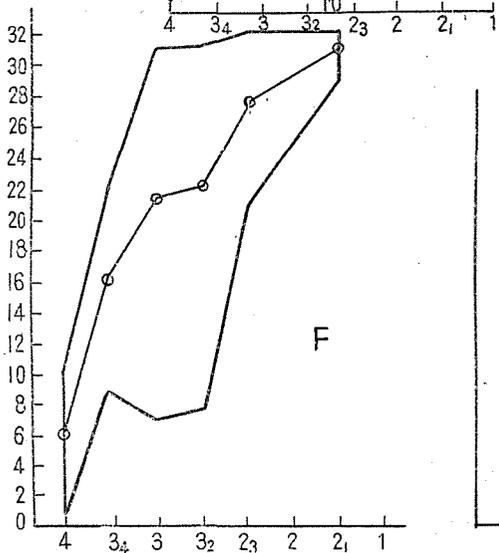
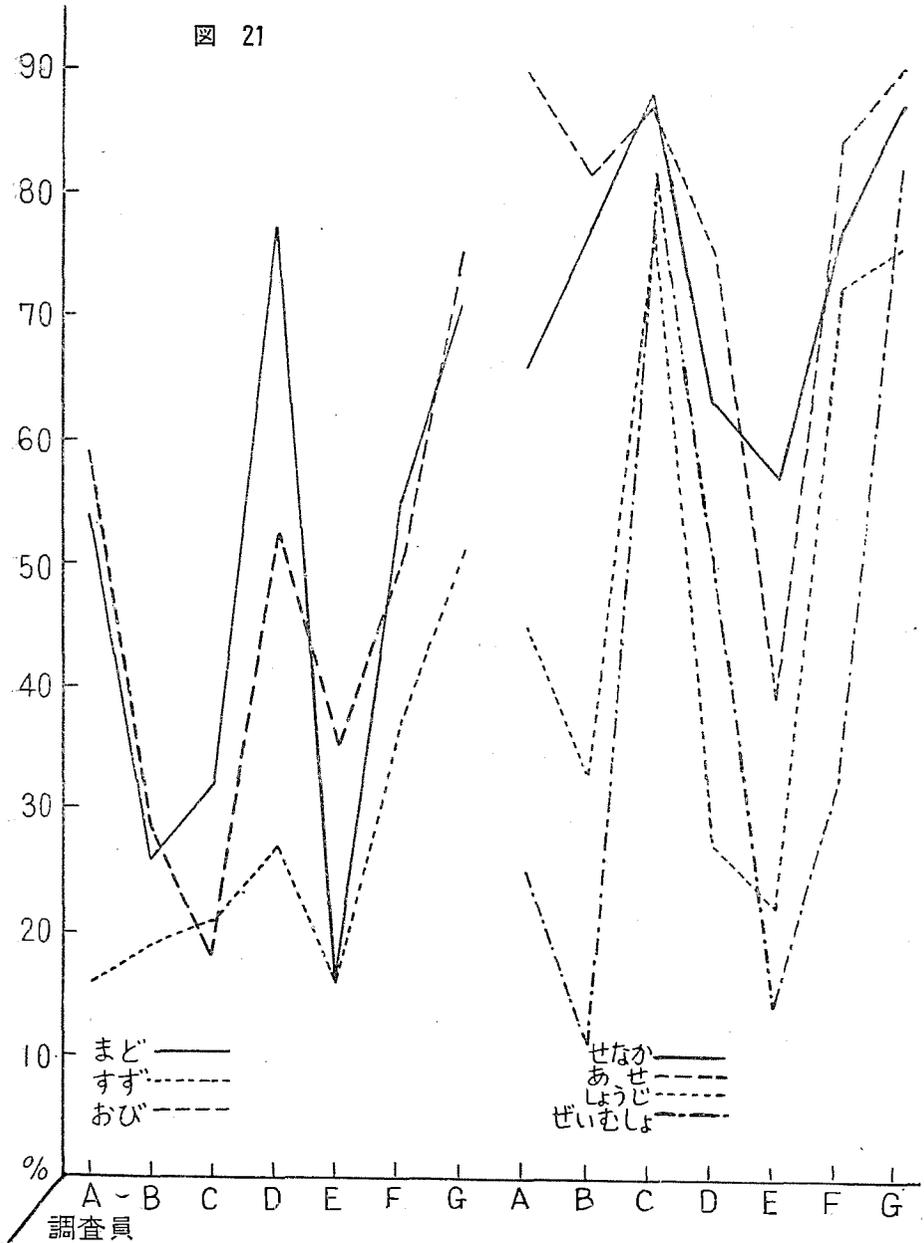
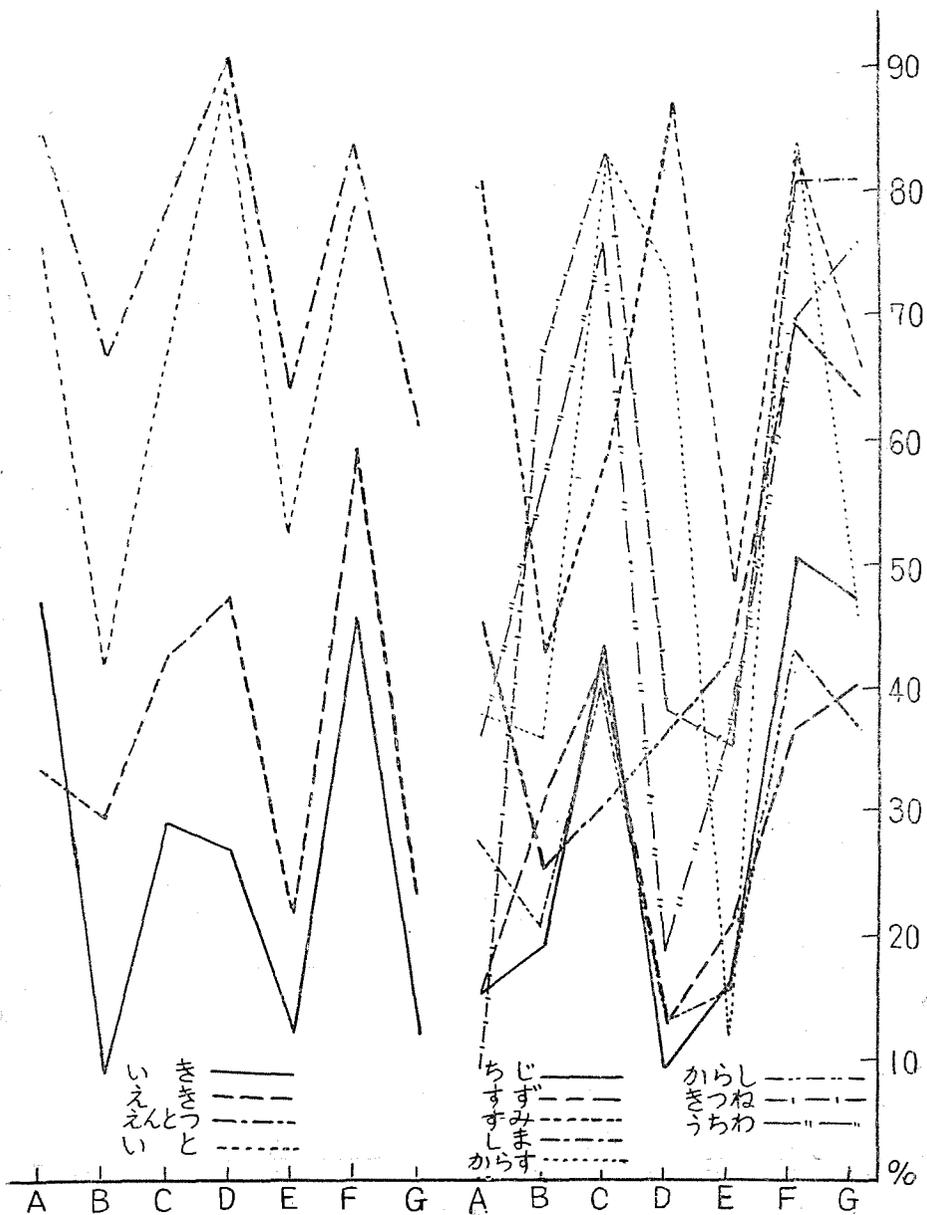


図 21





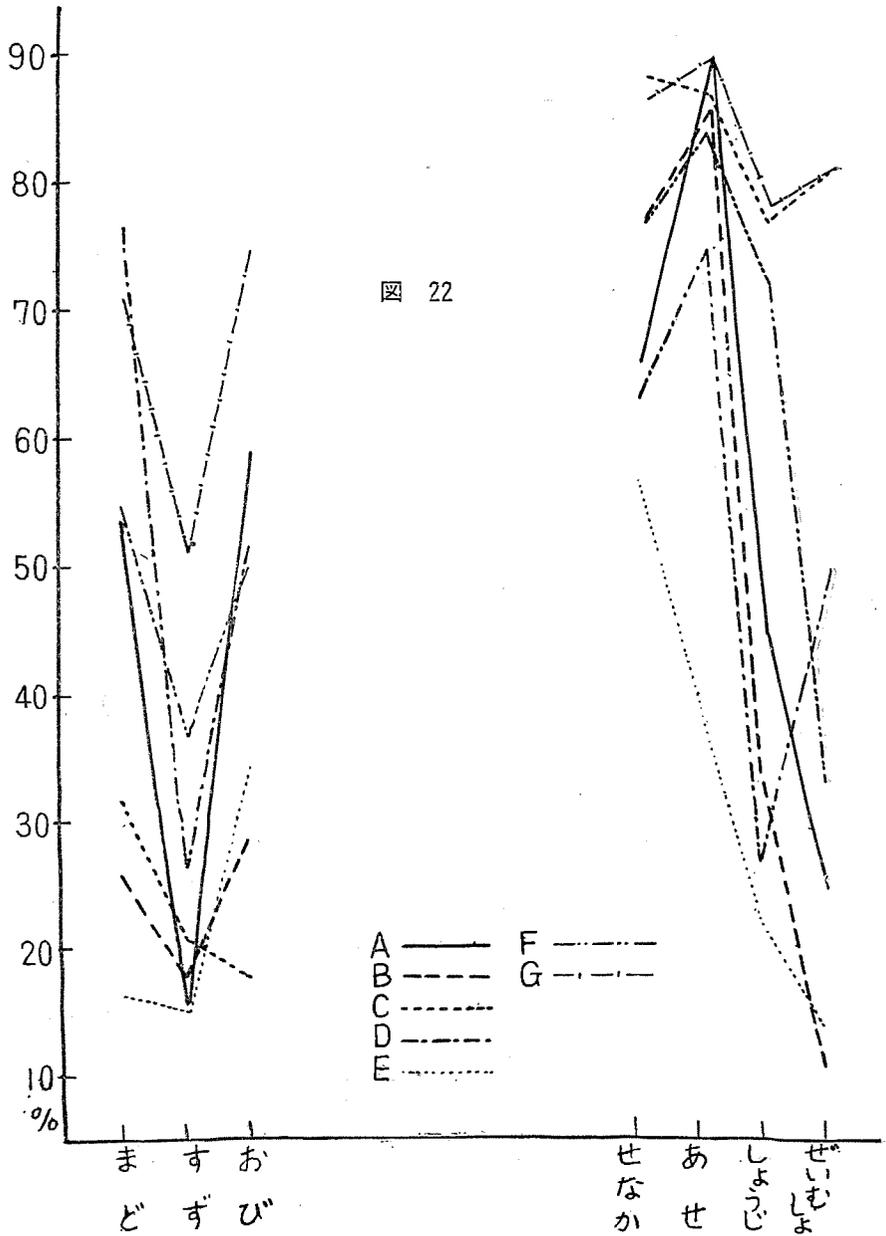
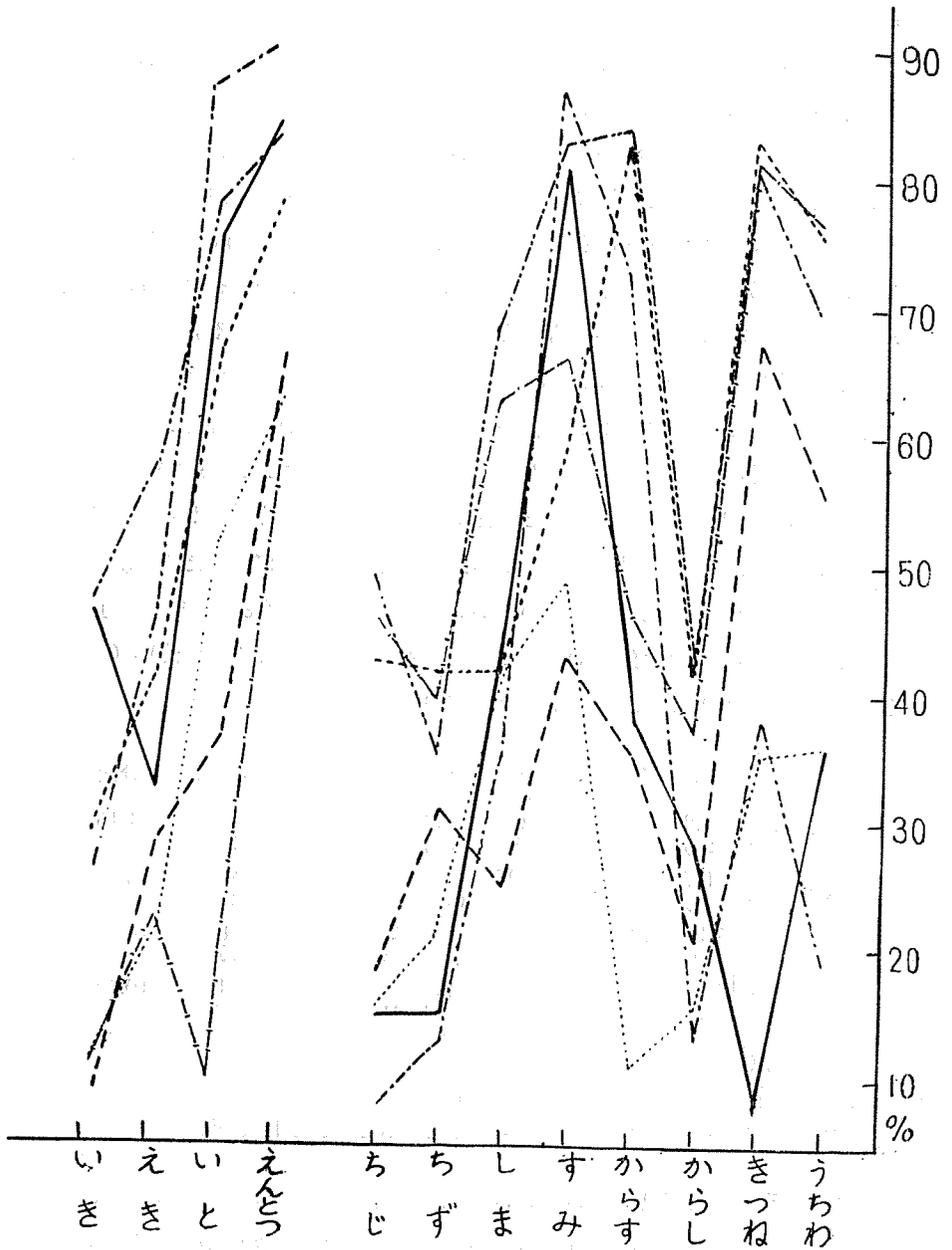


図 22



これによると、調査員D、E、Cはくいちがいが比較的小さいが、B、Aは
かなり大きい。

平均点だけを取って、調査員全部を一つの表にして見ても、調査員D、E、
Cのくいちがいが小さいことがわかる。

ここで、さらに詳細に調査員のくいちがいを分析してみよう。まず、各調査
員が調査語のひとつひとつについて、担当の被調査者の何%を共通語形と認め
たか、ということグラフに示そう。図21がそれであるが、これを見ると、調
査員のくいちがいは方方に見られる。もし、くいちがいが全然なければ、各線
がクロスすることがなく、しかも、その型が相似するはずである。「いき、え
き」の類だけはやや理想的である。ここでも、調査員D、Eはすぐれている。

また、調査語ひとつひとつが各調査員について、担当の被調査者の何%共通
語形と認められたか、ということグラフに示そう。図22がそれであるが、
これを見ると、A、F、Eがときどき他の調査員と著しくくいちがっている。

以上の分析では、調査員のくいちがいは相当あると認めざるをえない。

さらに、別の面から調査員のくいちがいを分析してみよう。まず、調査員に
よるくいちがい（これを分散で表わそう）と被調査者の年齢による違い（これ
も分散で表わそう）とを比べてみると、次のようになる。

調査員 年齢	A	B	C	D	E	F	G	平均点	分散
15歳～24歳	17.2 (26)	13.6 (14)	23.1 (26)	20.9 (16)	13.2 (26)	26.8 (12)	23.4 (24)	19.4 (144)	21.15
25歳～34歳	16.7 (17)	15.3 (16)	23.0 (13)	19.7 (15)	19.1 (10)	26.3 (21)	22.5 (23)	20.7 (115)	13.83
35歳～44歳	16.7 (10)	17.0 (18)	22.1 (16)	20.2 (17)	9.8 (11)	21.7 (14)	21.6 (14)	18.8 (100)	14.63
45歳～69歳	14.7 (19)	8.2 (22)	12.5 (16)	13.0 (24)	6.3 (24)	15.4 (25)	11.9 (19)	11.6 (149)	10.42
平均点	16.4	13.1	20.4	17.9	11.7	21.7	20.1		
分散	1.21	12.6	18.84	12.2	14.16	24.51	21.7		
サンプル数	(72)	(70)	(71)	(72)	(71)	(72)	(80)	(508)	

これによると、調査員のくいちがい（各調査員の分散）の平均は15.03であ
り、これに対して、年齢によるくいちがい（各年齢層の分散）の平均も15.01

となる。調査員によるくいちがいと見たものうちには、個人差以外のものももちろん含まれているが、それが年齢によるくいちがいと同じ程度に差があらっては思わしくない。理想的には、個人差はゼロに近づき、年齢差はなるべく大きくなるのが望ましい。

これによって、調査員の個人差が意外に大きいことが明らかになった。

そこで、調査員ひとりひとりについてももう少し詳しく見てみると、まず、調査員Aはどの年齢層についても、ほぼ同じ点数を与えている。これは、彼が他の調査員に比べて弁別力に欠けていることを意味する。Aを除けば、こういう弁別力はどの調査員にも見られ、全体の弁別力の模様(19.4→20.7→18.8→11.6)が各個人にパラレルに見られる。また、調査員Aを除くと、BとEとは傾向的に辛い(点数が低い)。

以上から考えると、調査がA、B、Eを除いた調査員で実施されていれば、もっと個人差の少ない結果が得られたであろう。

このようなことは、学歴によるくいちがいと比べてみても認められるところである。その表を示そう。

調査員 年齢	A	B	C	D	E	F	G	平均点	分散
小学卒以下	14.6 (22)	9.7 (20)	14.9 (19)	15.6 (35)	5.7 (20)	14.9 (19)	14.0 (18)	13.0 (148)	11.69
高小卒 新制中卒以下	15.8 (27)	11.9 (26)	19.9 (28)	18.9 (25)	11.6 (28)	22.5 (35)	18.6 (30)	17.3 (199)	14.99
旧制中学 新制高校以上	18.7 (23)	17.3 (24)	25.5 (24)	23.3 (11)	17.2 (23)	27.1 (17)	23.5 (37)	21.6 (159)	13.59
平均点	16.4	13.1	20.4	17.9	11.7	21.6	20.1		
分散	2.93	9.21	17.04	7.84	19.30	19.87	12.15		
サンプル数	(72)	(70)	(71)	(71)	(71)	(71)	(80)	(506)	

3.2 共通語化の要因

以下の要因分析においては、特に断らないかぎり、言語形成期(5歳～13歳)の大部分を、鶴岡市を含む庄内地方で過した者(以後この集団を「庄内グループ」あるいは簡単に、「庄内」と称することにする)だけについて分析を

進めることにする。なぜならば、共通語化の要因は、そういう集団について求めてこそ意味があると考えられるからである。もし、そうでない集団（以後それを「非庄内グループ」あるいは簡単に「非庄内」と称することにする）もいっしょにして分析するときは、言語形成期の居住地という要因が最も目立つものの一つになってくることは白河地域の調査^{**}で明らかになっている。今度はこれを要因として考えないで、これを基準にして集団をあらかじめ二つに分けることにしたわけである。

なお、

庄内グループ	508人
非庄内グループ	70人

である。これらの人数は、若い層（15歳～24歳）は2倍にして計算してある。以下、特に断らないかぎり、庄内グループだけについて論ずることにする。

3.21 共通語化の度合の分布

まず、共通語化の度合の分布を全体的にながめると、図23と図24のようになる。前者は3点間隔にまとめた場合であり、後者は、さらにある部分をまとめたものである。これを見ると、山が一つしかないような分布であることがわかる。白河地域の調査^{**}の場合には、山が二つ見られたのと比較される。これは、この分布が、土地育ちの者、すなわち、庄内グループだけについて描いたものだからであろう。

この分布の各数値をあげれば、

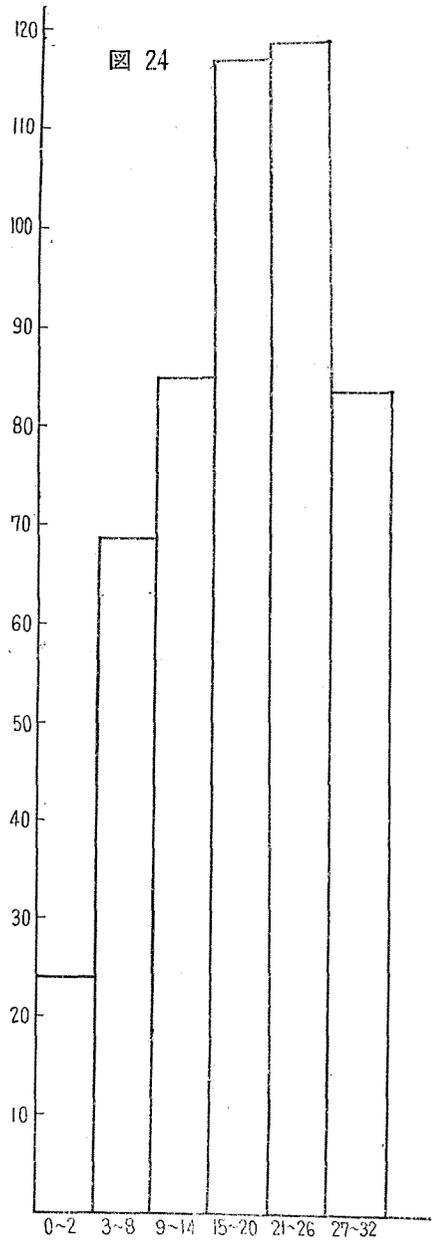
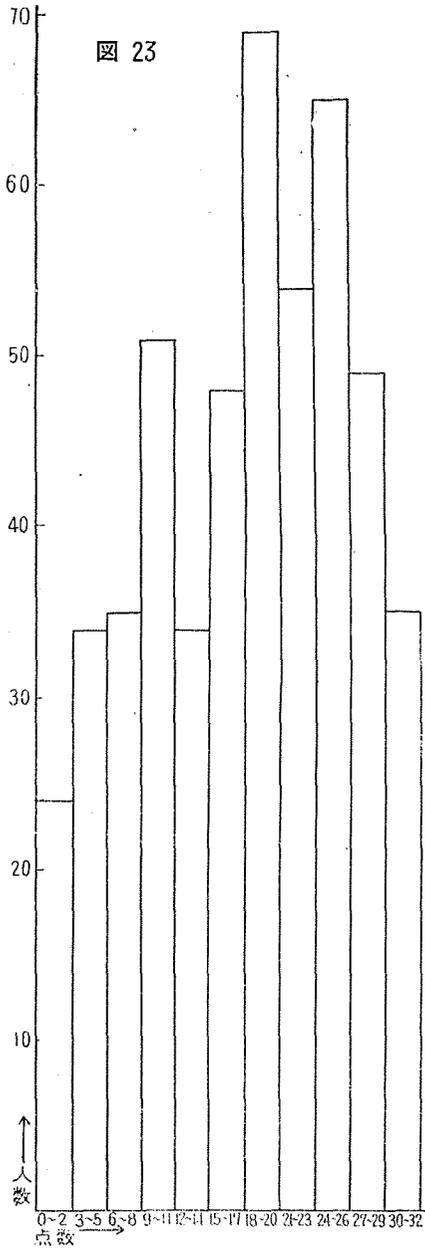
サンプル数	508
平均値	17.4 (cf. 満点32)
中央値	18.6
分散	73.44 (cf. 偏差8.57)

である。

今度の分析では、いつも、これらの数値をあげておいた。ここで問題となるのは、平均値のほか中央値をいつも出す必要があるかどうかという問題であ

* 「言語生活の実態」155 べ、166 べ

** 「言語生活の実態」108 べ



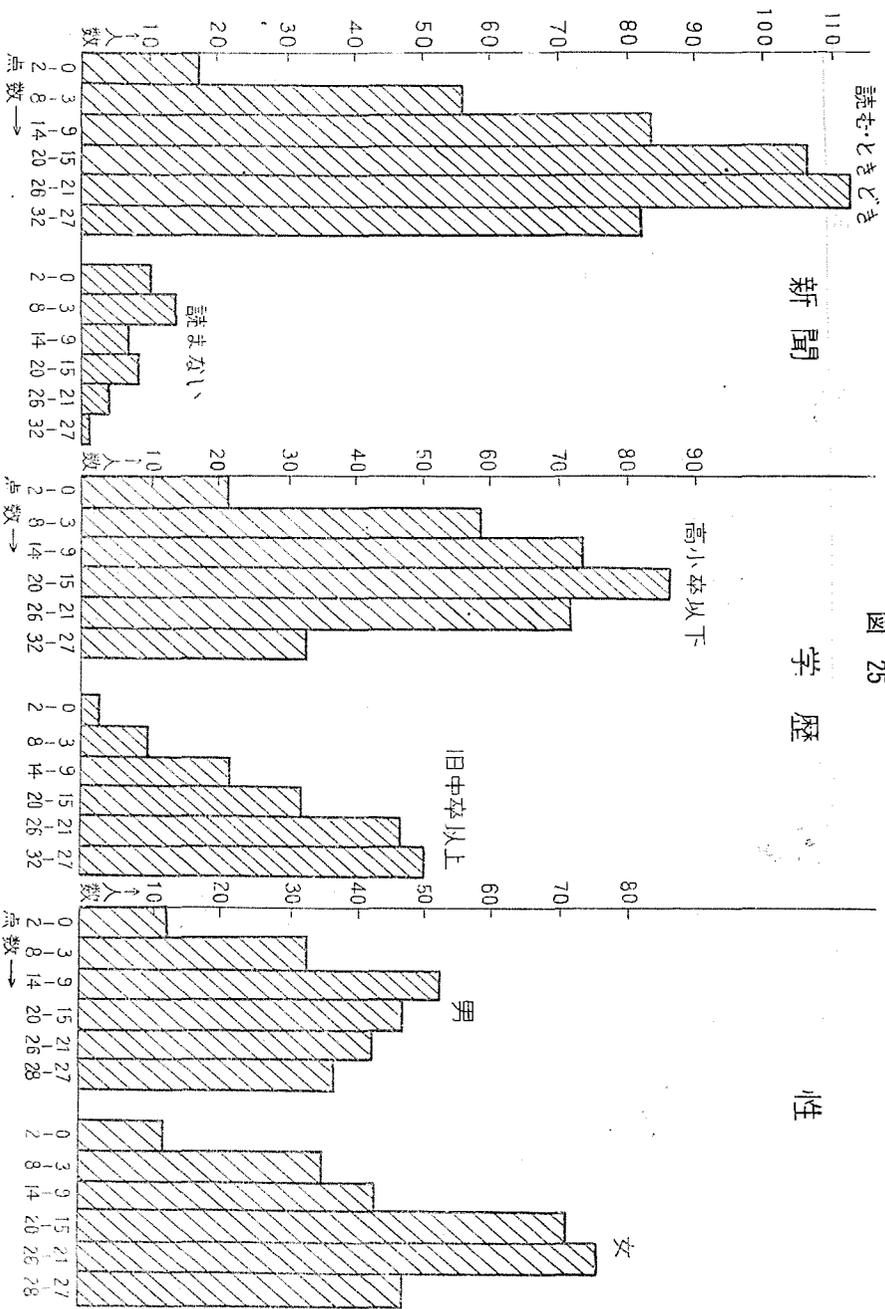


図 25

新聞

学歴

性

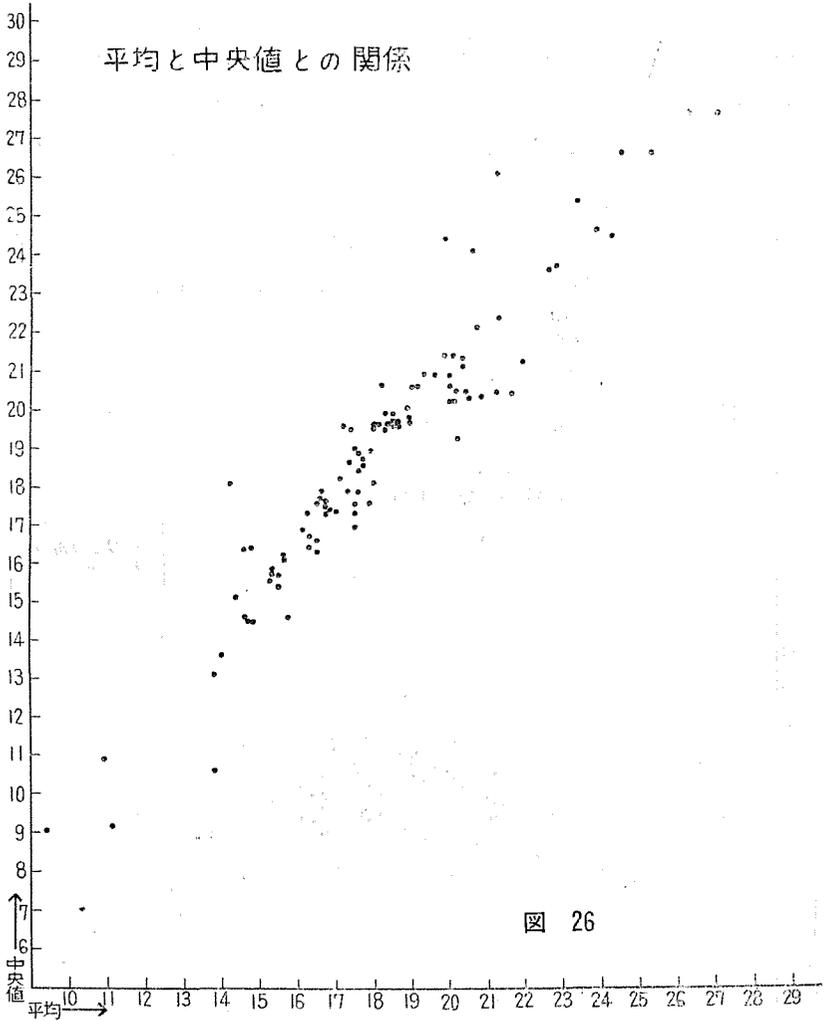


図 26

る。これについて少し考えてみよう。

まず、集団をいろいろな文化的条件を基準にして二つずつの部分集団に分けて、それぞれの部分集団を相互に比べると、分布の型がほぼ相似であることが分かる。図 25 参照。

さらに、平均値と中央値との関係を、今度得られたいろいろな数値について描いた図 26 を見れば、そこに、一応きれいな増加・減少函数の関係を見ることが出来る。したがって、今後、この種の分析では、便宜的に平行的値だけで済ましていくことにする。

なお、平均点と分散との関係を見ると、図 27 のように、一応投物線の分布をなす。これは「日本人の読み書き能力」(図第 65, 図第 66, 図第 68 参照)でも同様に見られた。

これらを考えると、平均点が指標として相当深い意味を持つことがわかり、平均点だけでも大体の模様をうかがいうるようである。

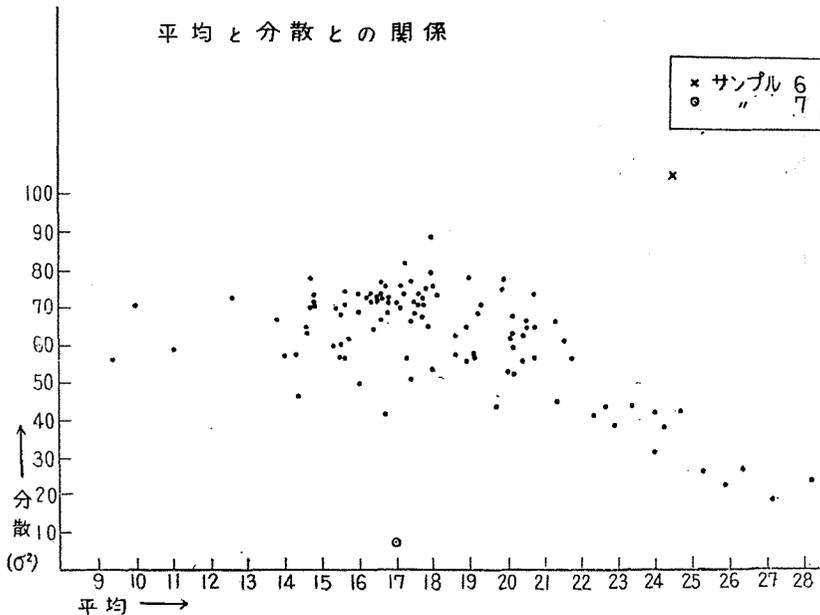


図 27

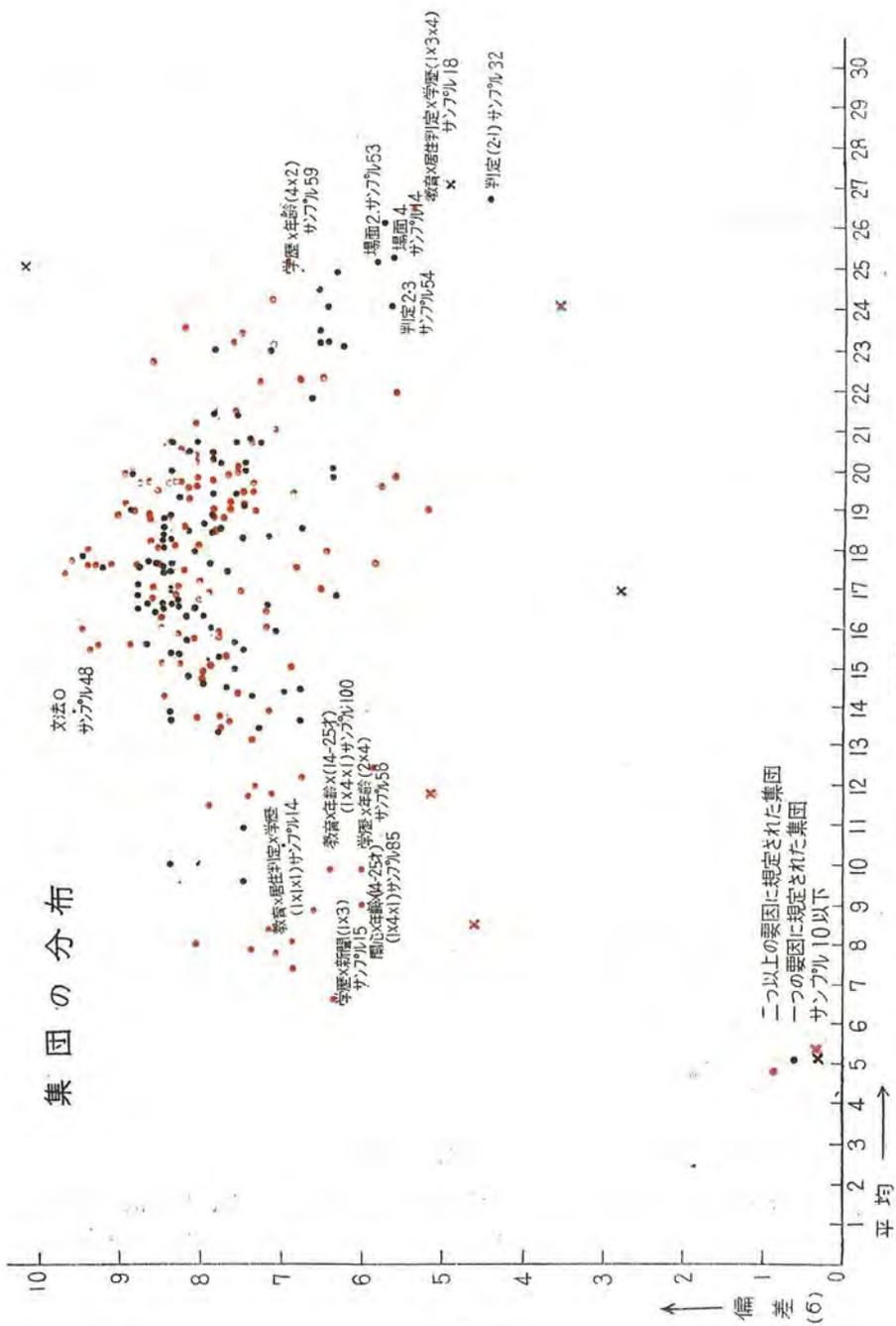


図 28

次に、各要因（文化的条件）によっていろいろに分類した集団の分布を、平均点と偏差とについて見ると、図 58 のようになる。これによれば、平均点が大きくなるにつれて分散の小さくなる傾向が認められないでもないが、さしてはっきりした傾向は示していない。

3.22 要因別分析

要因別分析は、白河地域の調査* のときと同じように、統計数理における「相関関係」の考えを利用した。すなわち、鶴岡市民という集団を、ひとつひとつの要因を基準にしていくつかの部分集団に分け、それぞれの部分集団が示す音の点数の平均値を比較して、そこに差があるかどうかを調べた。もし差があれば、その要因は共通語化の度合に影響を与えていると考えるのである。差があるかどうかを見るのには、「有意な差」の考えを使うことができる。たとえば、今度の調査において、次のページにあるように、女の方が男よりも点数が高くなっているが、それはサンプルについてのことで、はたして、母集団においても、男女の間に差があると認められるかどうか。そこで、次のように考えることにする。母集団において、男と女の平均値（あるいは中央値あるいは分散）に差があると考えるとき、サンプルでこのような差の現われることは、確率論的に言って、よくあることかどうか。もし、よくあることならば、母集団において男と女との間に差があるとは言えないことになる。もし、まれにしかないとすれば、母集団において男と女との間に差があると言えることになるのである。

そういうことを知るために、統計理論では有意な差を検定する方法（計算）が考えられている。以後、「有意な差がある」とか「有意な差がない」とか言うときは、上に述べたような意味である。

ところが、有意な差があると言えるときでも、その差が実質的な差に該当するかどうかを考えなければならない。一体に、サンプル数が大であると、サンプルにおけるわずかな差も有意な差として出て来る。しかし、それは計算の上で出て来ることで、実際上は意味のない差であることがある。実質的な差があるかどうかは、おおざっぱではあるが、24時間調査などの妥当性の調査の結果

* 「言語生活の実態」111 頁以下

によって判断することにする。以後、実質的な差のある場合は「著しい差がある」と言い、そうでない場合は「著しい差がない」と言うことにする。

(1) 性

まず、性について見ると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
男	226	16.4	16.4	75.65
女	282	18.1	19.3	70.35

のようであるが、男女の間に平均値* について、有意な差は認められない。

(2) 年齢

次に、年齢について見ると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
15歳～19歳	92	18.9	19.8	57.22
20歳～24歳	52	20.5	23.7	78.71
25歳～34歳	115	20.7	21.9	55.03
35歳～44歳	100	18.7	19.5	63.33
45歳～54歳	75	13.3	12.3	61.43
55歳～69歳	74	10.5	10.5	48.85

のようになり、隣り合う集団の間では、35歳～44歳と45歳～54歳との間にかなり有意な差があると認められるだけである。しかし、15歳～19歳と20歳～24歳との間を除けば、平均値は年齢とともに小さくなっていく。すなわち、年齢の高まるにしたがって平均値が低くなるという、一定の傾向が見られる。この傾向は意味のあるものかどうか。いま、各年齢層を同一母集団のサンプルと考えると、四つの年齢層間の差が、年齢の高いものから見たとき、いつも下向きであることは、きわめてまれであるとしか考えられない。すなわち、以上の傾向は有意な傾向と言うことができる。以後、「有意な傾向性がある、ない」と言うときは、上のような意味である。

このような年齢層における有意な傾向性は、白河地域の調査でも同様に見られた。

ここで、年齢層を四つにまとめてみると、

* 3.21 (図 26) において述べたように、平均値と中央値との間には、一応、きれいな関係が見られるから、以後、平均値だけについて、有意な差のあるなしを確かめていくことにする。

	サンプル数	平均値	中央値	分散
15歳～19歳	92	18.9	19.8	57.22
20歳～34歳	167	20.6	22.6	62.41
35歳～44歳	100	18.7	19.5	63.33
45歳～69歳	149	11.9	10.6	57.20

のようになって、15歳～19歳と20歳～34歳、20歳～34歳と35歳～44歳、それぞれの間には有意な差が認められないが、35歳～44歳と45歳～69歳との間には著しい差が認められる。

さらに、性と年齢とを組み合わせさせた集団を作り、平均値の順に並べると、次のようになる。

これをみると、隣り合		サンプル数	平均値	中央値	分散
う集団相互の間には有意	女 20～24歳	34	22.4	24.5	77.75
な差が認められない。同	女 25～34歳	72	21.2	22.5	47.39
じ年齢層の男女の間にも、	女 15～19歳	44	19.9	20.0	29.32
また、ほかのいずれの場	男 25～34歳	43	19.9	21.7	64.45
合にも、有意な差は認め	女 35～44歳	54	19.4	19.0	56.45
られない。しかし、女の	男 35～44歳	46	18.0	19.0	70.43
20歳～24歳と女の45歳～	男 15～19歳	48	18.0	19.5	81.04
54歳との間にはじめて有	男 20～24歳	18	17.1	17.5	63.45
意な差を認めることがで	女 45～54歳	36	14.7	15.5	57.69
	男 55～69歳	31	12.2	11.5	50.72
	男 45～54歳	39	11.9	10.3	61.28
	女 55～69歳	43	9.2	9.0	43.48

きる。また、女の55歳～69歳と女の45歳～54歳との間にも有意な差が認められる。したがって、女については、

15歳～44歳

45歳～54歳

55歳～69歳

の三つの段階の間には著しい差を認めることができる。男については、

15歳～44歳

45歳～69歳

の二つの段階に著しい差を認めることができる。

いま、男女に分けて、年齢層別に平均値のグラフを描くと、図 20 のように

なり、これを見ると、男女の差が若い層では著しいのに、老年になるに従って小さくなるのが分かる。さらに、一般に、女のほうが男よりも点数が高いが、55歳～69歳のところでは逆になる。

これは白河地域の調査でも認められたところである。

以上、性、年齢について、まとめて述べるならば、性による差は、著しいほどではないが、一応の開きが見られ、年齢にも有意な傾向性を認めることができる。男女ともに、15歳～44歳と45歳～69歳との間の差はきわめて著しいことが注意される。白河地域の調査で見られたとほぼ同様な結果と言うことができるが、白河のように、若い男女の間には有意な差を認めることができなかつた。

これは鶴岡では、15歳～24歳を、分

析のとき2倍にするような操作を加えたためではないかと考えられる。

性、年齢のような自然的要因は、共通語化の要因として、著しいというほどのものではないが、一応、注目すべきものと考えられる。

(3) 学 歴

次に、学歴について見ると、

	サンプル数	平均値	中央値	分 散
学歴なし	21	9.6	8.0	55.72
小 学 卒	127	13.6	13.8	53.68
高 小 卒 新 制 中 卒	199	17.3	18.4	68.01
旧 中 卒 新 制 高 卒	137	21.1	23.5	61.58
旧 高 卒 大 学 卒	22	23.9	25.5	42.00

のようになり、小学卒業と高等小学・新制中学卒業との間、高等小学・新制中

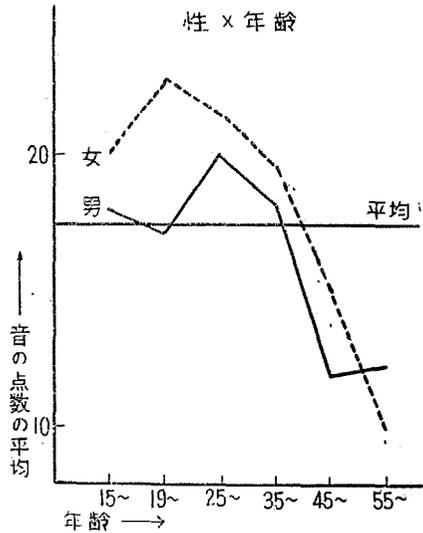


図 23

学卒業と旧制中学・新制高校卒業との間および高等小学・新制中学卒業と高等専門学校卒業・大学卒業との間にそれぞれ、かなり有意な差が認められるばかりでなく、全体として有意な傾向性が認められることに注目すべきである。

次に、同じ年齢層について、学歴による差をながめてみよう。該当サンプルが10以下のものは除く。

	サンプル数	平均値	中央値	分散
15歳～19歳				
高小卒	54	18.7	20.5	59.71
旧制中卒以上	32	19.7	19.7	52.36
20歳～34歳				
小学卒	35	17.8	18.5	31.73
高小卒	70	19.1	20.5	72.86
旧中卒以上	59	24.4	25.3	48.40
35歳～44歳				
小学卒	28	14.7	13.5	70.78
高小卒	31	18.1	19.8	40.38
旧制中卒以上	39	22.4	23.0	51.12
45歳～69歳				
学歴なし	17	8.5	6.5	48.17
小学卒	58	10.2	9.8	35.57
高小卒	44	12.1	11.7	54.81
旧制中卒以上	28	16.7	18.0	58.72

上の四つの集団において、いつも、学歴の段階による有意な傾向性が認められる。

以上の分析だけでも、学歴はかなり目立つ要因と考えられる。

(4) 発音教育

鶴岡地方では、明治の末から大正の初めにかけて、きわめて熱心な発音教育が行われたことは、すでに述べた(Ⅱ, 2.319)。これは、庄内なまりを直そうという努力で、これが、なまりの程度(共通語化の度合)にどれほど影響を与えているかは、今度の調査における最も興味深い課題の一つであった。

調査の結果、発音教育を受けたことのある者は、全体の約1/6、パーセントにして16.5%になる。これらの発音教育を受けた者を、受けなかった者と比べると、前者の方がサンプルの上でわずかに平均値が高いことが見られる。

	サンプル数	平均値	中央値	分散
発音教育を 受けない	418	17.2	18.4	68.38
受けた	83	18.5	19.7	74.86

しかし、この差は有意でない。しかも、分散についても、両者がよく似ていることが注意される。

次に、同じ学歴の者について、発音教育を受けた・受けないによる差をながめてみよう。

	サンプル数	平均値	中央値	分散
小学卒以下				
受けない	126	13.0	12.3	69.52
受けた	18	13.7	14.5	31.71
高小卒				
受けない	162	17.3	18.7	63.56
受けた	36	16.6	16.7	83.38
旧制中卒以上				
受けない	129	21.0	22.4	61.40
受けた	29	23.8	25.8	47.59

上の三つの集団において、発音教育を受けた・受けないによっては、有意な傾向性も見られない。

さらに、同じ年齢層について、発音教育を受けた・受けないによる差をながめてみよう。

	サンプル数	平均値	中央値	分散
20歳～34歳				
受けない	129	20.3	21.4	60.26
受けた	35	21.8	24.7	66.04
35歳～44歳				
受けない	82	19.0	19.4	61.58
受けた	18	18.3	19.5	70.22
45歳～69歳				
受けない	121	12.9	10.9	70.48
受けた	24	15.5	15.5	67.75

このように、三つの集団において、発音教育を受けた・受けないによって、有意な傾向性を認めることはできない。

以上の分析の限りでは、かつて鶴岡地域で行われたような発音教育は、共通語化の要因、すなわち、なまりを直す要因として強力なものとは認められない。

(5) 言語関心

言語関心については、関心を持っているかないかによって、集団を分けてみると、

言語関心	サンプル数	平均値	中央値	分散
あり	148	20.0	21.0	66.70
なし	325	15.7	16.0	68.59

のようになり、二つの集団の間に著しい差が見られる。したがって、言語関心はやや目立つ要因と認められる。

(6) 職業

まず、本人の職業について見ると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
給料生活者	78	20.0	20.3	60.76
商店主・工場経営者	64	14.7	14.5	74.95
工員・運転手	93	15.6	16.2	65.47
日雇	14	14.4	15.0	46.26
農業	14	14.2	18.0	55.22
主婦	124	17.5	18.5	70.87
学生	56	20.5	20.5	63.98
無職	61	17.4	19.2	89.56

のようになる。給料生活者とその他との間に有意な差が見られる。白河地域の調査でも同様であった。

家の職業については、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
給料生活者	132	19.2	20.7	64.95
商店主・工場経営者	180	17.4	17.7	78.08
工員・運転手	84	16.8	16.5	70.02
日雇	29	15.5	15.3	55.63
農業	21	14.4	16.5	68.16
無職	39	17.5	18.0	81.84

のようになる。集団相互のいずれの場合にも有意な差は認められない。

ここで、本人が主婦、学生、無職である者を、家の職業が給料生活者ないし農業のいずれであるかによって細分した集団を作ってみよう。それには、まず、

給料生活者	1	主婦	6
商店主・工場経営者	2	学生	7
工員・運転手	3	無職	8
日雇	4		
農業	5		

のように表わし、さらに、たとえば本人が無職で、家の職業が日雇である者を84、本人が主婦で、家の職業が給料生活者である者を61で、それぞれ表わすならば、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
84歳～88歳	16	15.8	19.5	86.81
64歳～68歳	21	17.5	16.5	61.58
81歳～83歳	44	18.0	19.5	86.72
61歳～63歳	102	18.4	18.7	71.08
74歳～78歳	10	18.4	20.0	66.64

のようになるが、集団相互のいずれの場合にも有意な差は見られない。

以上により、家の職業は強い要因として働いていないと言えよう。この点は白河地域の調査でも同様に見られた。

(7) 役員

役員になったことがあるかないかによって、集団を分けてみると、

役員の経験	サンプル数	平均値	中央値	分散
ある	60	16.5	17.5	76.00
なし	416	17.4	18.5	70.90

のようになり、二つの集団の間には有意な差が見られない。したがって、役員になったことがあるかないかは、たいした要因とは認められない。

以上、学歴、発音教育、職業、言語関心、役員経験に分けて、いわゆる経歴的要因が共通語化にどれほど影響を与えているかを見た結果、次のことがほぼ明らかになった。

1. 学歴はかなり目立つ要因である。
2. 発音教育はたいした要因とは認められない。

3. 本人の職業はわずかに目立つ要因である。
4. 家族の職業はたいした要因ではない。
5. 言語関心はやや目立つ要因である。
6. 役員の経験はたいした要因ではない。

白河地域の調査でも、白河では調べなかった5と6を除いて、同様なことが言えた。

(8) 階層

士族であるか、平民であるか、あるいはその他であるかによって、集団を分けると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
士族	69	18.8	20.0	79.87
平民	186	17.8	18.3	64.61
その他	247	16.7	17.3	77.29

のようになり、集団相互のいずれの場合にも有意な差は見られない。したがって、階層はたいした要因とは認められない。

(6) 現住所

現在どこに住んでいるかということによって、集団を分けると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
農家を主とする地域	85	16.6	17.0	68.73
住宅・商店・農家・小工場のまざった地域	174	16.5	17.5	69.43
商店を主とする、にぎやかな地域	111	17.3	17.2	80.10
住宅を主とする地域	138	19.1	19.8	69.36

のようになり、集団相互のいずれの場合にも、有意な差は見られないが、傾向性は一応認めることができる。

いま、農家を主とする地域と山添村全体とを比べてみると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
鶴岡市農業地域	85	16.6	17.0	68.73
山添村	79	14.7	15.1	27.93

のようであって、二つの集団の間には有意な差が認められない。この点、白河市と五箇村・金山村との関係とは一致しない。

以上、階層、現住所に分けて、いわゆる社会的・地域的環境の要因の影響を

見たが、これは重要な要因とは認められない。

(10) 出生地

本人の出生地を、鶴岡市、庄内地方（鶴岡市を除く）、東北地方（鶴岡市、庄内地方を除き、新潟県を含む）の三つに分けて、それぞれに該当する集団の示す数値を比べると、次のようになる。

	サンプル数	平均値	中央値	分散
鶴岡市	326	18.1	19.5	72.92
庄内地方	163	15.3	15.7	68.76
東北地方	18	22.8	25.0	52.25

上の三つの集団それぞれの間に有意な差が認められる。特に、庄内地方に生まれた者と東北地方に生まれた者との間には、かなりの差が認められる。

(11) 父の出身地

父の出身地を、本人の出生地と同じように、三つの地方に分けると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
鶴岡市	241	18.4	19.9	72.27
庄内地方	234	16.4	16.3	72.94
東北地方	26	17.7	20.5	90.06

のようになり、集団相互のいずれの場合にも有意な差が見られない。白河地域の調査は、京浜地方とその他の地方との間に有意な差が見られたが、今度は、言語形成期の大部分を京浜地方などで過した者は除いたために、ここで該当する者は10人以上にならない。したがって、比較の対象にならない。同様なことは、次に述べる母の出身地についても言いうる。^{*}

以上により、父の出身地はたいした要因とは認められない。

^{*} 参考のために、鶴岡市のサンプル全員、鶴岡市を含む庄内地方で言語形成期の大部分を過した者（庄内グループ）および庄内地方以外で言語形成期の大部分を過した者について、種々の数値を比較しておく。

	サンプル数	平均値	中央値	分散
庄内グループ	508	17.4	18.6	72.44
非庄内グループ	70	25.4	29.2	53.66
全員	578	18.2	19.2	78.92

これによると、非庄内グループと庄内グループとの間には著しい差が認められる。生育地（言語形成期の大部分を過した地域）が重要な要因であることが分かる。白河地域の調査と比較すべきである。

(12) 母の出身地

母の出身地を、本人の出生地、父の出身地と同じように、三つの地方に分けると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
鶴岡市	210	18.3	18.5	68.19
庄内地方	265	16.5	17.4	70.21
東北地方	26	18.2	21.5	72.39

のようになり、集団相互のいずれの場合にも、有意な差は見られない。母の出身地もたいした要因とは認められない。

いま、父の出身地と母の出身地とを組み合わせてみよう。

父・母	サンプル数	平均値	中央値	分散
両方とも東北地方	13	19.5	22.5	77.17
両方とも鶴岡市	150	19.2	21.5	73.22
片方がその他の地方	14	19.1	17.5	24.56
鶴岡市と庄内地方	131	17.1	16.3	71.70
両方とも庄内地方	176	16.6	17.7	71.32
片方が東北地方	24	16.4	19.7	87.50

「両方とも東北地方」と「片方が東北地方」との間にも、「両方とも鶴岡市」と「両方とも庄内地方」との間にも有意な差は認められない。

(13) きょうだい

家庭の状況がいかに影響しているかを知る一つの手がかりとして、きょうだいの関係を考えてみた。長子で長男・長女であるか、長子ではないが長男・長女であるか、それともそれ以外であるかによって集団を分けてみると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
長子・長男(女)	122	18.5	20.3	63.83
長男(女)	64	15.0	14.5	64.75
その他	320	17.6	18.1	75.19

のようになり、集団相互のいずれの間にも有意な差は見られない。

以上により、きょうだいの関係はたいした要因とは認められない。

(14) 言語形成期以後25歳までの居住状況

言語形成期以後、つまり、14歳以後25歳までの居住状況は、要因として影響を与えるものかどうか。いま、この12か年の間に、庄内地方以外に2か年

以上在住したことのあつた者とない者とを比べてみると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
あつた	127	19.8	20.4	71.47
なかつた	380	16.5	16.8	72.22

のようになり、両者の間に有意な差が認められる。

同じ学歴の者を、言語形成期以後 25 歳までの居住状況（庄内地方へ出たことがあるかどうか）によって分けると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
小学卒以上				
あつた	28	17.2	16.5	61.42
なかつた	98	12.5	12.1	45.30
高小卒				
あつた	41	17.4	20.0	71.60
なかつた	158	17.2	18.5	67.12
旧制中卒以上				
あつた	53	23.6	25.1	54.00
なかつた	105	20.5	20.3	59.44

のようになり、上の三つの集団において、居住状況によって、いつも、有意な傾向性が見られる。

以上によって、言語形成期以後 25 歳までの居住状況は強い要因と認められる。

(5) 25 歳以後の居住状況

25 歳（25 歳を含まない）以後 1950 年 11 月の調査当時までの居住状況によって、次のような三つの集団に分けた。

「生え抜き」……鶴岡市ばかりに在住した者か、せいぜい東北地方の他の土地に 1 年か 2 年在住した程度の者

「転転」……東北地方以外にかなり長い間（指定の期間の半分以上）在住した者

「中間」……「生え抜き」と「転転」との中間に該当する者
この集団の数値を比較すると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
生え抜き	264	15.2	15.3	68.82
中間	55	18.3	20.8	62.22
転転	37	22.9	25.0	62.44

のようになり、生え抜きと転入との間には著しい差が認められる。

さらに、25歳までの居住状況と組み合わせて、集団を作ると、

25歳まで・25歳以後	サンプル数	平均値	中央値	分散
なし・生え抜き	212	14.1	13.9	63.56
なし・中間	16	15.2	12.0	63.42
あり・生え抜き	45	20.4	22.4	63.31
あり・中間	41	19.2	21.0	51.59
あり・転入	28	23.0	25.5	69.52

のようになり、なし・生え抜きと、あり・生え抜きとの間には、かなりの差が認められる。

以上により、25歳以後の居住状況は強い要因と認められる。

以上、本人の出生地、父の出身地、母の出身地、きょうだいの関係、言語形成期以後25歳までの居住状況、25歳以後の居住状況に分けて、いわゆる生育・居住環境の要因がどのように働いているかを見た。以上の分析によれば、

1. 本人の出生地、父の出身地、きょうだいの関係、母の出身地はいずれも強い要因とは認められない。
2. 言語形成期以後25歳までの居住状況も、25歳以後の居住状況も、ともにかなり目立つ要因と認められる。

今度の分析では、白河地域の調査と異なり、本人の生育地は考慮の外に置いた。また、したがって、父の出身地も母の出身地も、著しい要因としては出て来なかった。

(16) 新聞の利用

新聞を読むかどうかによって分けた集団について、その数値を比べると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
いつも読む	415	18.3	19.3	68.61
読んだり読まなかったり	44	15.3	15.0	62.32
読まない	40	10.0	6.7	69.80

「いつも読む」と「読まない」との間には、著しい差が認められる。

さらに、読んでいる新聞の部数で分けると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
いつも読む 3部	87	18.2	21.2	73.65

2 部	122	18.8	19.3	64.33
1 部	201	17.4	18.6	48.75
読んだり読まなかったり				
1 部	26	12.7	11.7	45.64

「いつも読む・2部」と「読んだり読まなかったり・1部」との間にはかなりの差が認められる。

さらに、言語形成期以後 25 歳まで庄内地方以外へ出たことのない者について、新聞の利用の程度によって集団を分けると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
読む	301	17.8	18.7	65.25
読んだり読まなかったり	38	15.5	14.0	66.74
読まない	33	7.8	5.5	47.15

のようになり、「読んだり読まなかったり」と「読まない」との間にさえ、かなりの差が見られる。

以上によって、新聞の利用はかなり目立つ要因と認められる。

(7) 映画の利用

映画を見る集団と見ない集団とに分けて、その数値を比較すると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
見ない	285	16.3	17.5	73.66
見る	223	18.7	19.4	69.85

のように、両者の間に有意な差が見られる。したがって、映画を見るか見ないかは、注目すべき要因と考えられる。

(8) 単行本

単行本（書物）を読む、読まないによって集団を分けて、その数値を比較すると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
読まない	366	16.2	16.5	71.62
読む	139	20.5	22.0	65.12

のように、両者の間に著しい差が見られる。したがって、単行本を読むか読まないかも注目すべき要因と認められる。

いま、新聞の利用、映画の利用、単行本を読む・読まないの三つの要因を組み合わせる集団を作り、その数値を比較すると、

新聞・映画・単行本	サンプル数	平均値	中央値	分散
1. 読まない・見ない・読まない	32	8.5	5.0	66.41
2. 読む・見ない・読まない	195	16.0	16.1	62.79
3. 読む・見る・読まない	128	18.4	20.0	65.85
4. 読む・見る・読む	81	19.6	20.8	65.65
5. 読む・見ない・読む	55	21.5	23.8	63.40

のようになる。集団1と2以下との間にかかなりな差が認められるのは、三つの要因のうちで新聞の利用がもっとも強いことを示すものである。集団2と3、集団3と4の間に有意な差の認められないことは、映画の利用と単行本を読む・読まないとの二つの要因がそう大きなものではないことを示すものである。集団2と集団4との間に有意な差が認められ、また、集団2と集団5との間にかかなりな差の認められることは、映画の利用と単行本を読む・読まないとでは、後者の方がやや注意すべき要因であることを示すものである。

(19) ラジオの利用

ラジオ（のニュース）を聞くか聞かないかで分けた集団について、その数値を比較すると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
いつも聞く	355	17.0	19.2	75.90
聞いたり聞かなかったり	64	16.2	16.5	68.13
聞かない	76	15.6	15.7	67.17

のようであって、集団相互のいずれの場合にも有意な差は見られない。なお、白河では、「いつも聞く」「聞かない」の間には有意な差が認められた。

(20) 遠くへ行ったことがあるか

今年になってから遠くへ行ったことがあるかどうかによって、三つの集団を作り、その数値を比較すると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
行かなかった	376	16.4	16.3	74.88
たまに出た	111	20.1	20.3	62.03
よく出た	21	19.7	19.0	41.48

のようであって、「行かなかった」と「たまに出た」との間にかかなりな差が認められる。遠くへ行ったことがあるか、ということも、一応注目すべき要因と見られる。

(20) 東京との行き来

東京に知りあいがあるかどうか、あればどの程度のつきあいをしているかによって三つの集団を作って、その数値を比較すると、

	サンプル数	平均値	中央値	分散
1. 知り合いがない あってもつきあわない	245	14.3	15.9	48.60
2. 交通だけのつきあい	121	19.2	20.0	61.56
3. 行き来している 行き来もし交通もしている	124	19.9	21.7	40.61

のようであって、集団1と集団2、3それぞれの間に著しい差が認められる。したがって、東京との行き来はやや目立つ要因である。

以上、新聞の利用、映画の利用、単行本を読む・読まない、ラジオの利用、遠くへ行ったことがあるか、東京との行き来に分けて、コミュニケーションの要因がどのように働いているかを見た。その結果、次のことが明らかになった。

1. 新聞の利用はかなり目立つ要因である。
2. 映画の利用、単行本を読む・読まないは、それぞれ一つだけでも目立つ要因ではあるが、1. ほどではない。しかし、それらが組み合わさると、さらに目立つ要因となる。
3. ラジオの利用はたいした要因ではない。
4. 遠くへ行ったことがあるか、東京との行き来は、やや目立つ要因である。

(22) 社会的態度

われわれは調査票の項目21において、映画は日本のものが好きか外国のものが好きか、子供に将来やらせたい職業、別の土地に住む希望のあるなしについて質問し、それによって、社会的態度を三つの段階に判定し、それぞれの集団の数値を比較した。

	サンプル数	平均値	中央値	分散
満 足	283	16.5	17.8	71.90
無 関 心	58	13.6	13.7	70.36
不 満	166	20.1	21.0	62.40

このように、「不満」とその他との間に著しい差が認められるから、社会的態度もやや目立つ要因と考えられる。

(23) 目立つ要因

以上の要因分析によって、一応、目立つ要因として出て来たものには、次のようなものがある。

- 年齢
- 学歴
- 本人の職業
- 言語関心
- 言語形成期以後25歳までの居住状況
- 25歳以後の居住状況
- 新聞の利用
- 映画の利用
- 単行本を読む・読まない
- 遠くへ行ったことがあるか
- 東京との行き来
- 社会的態度

これらの要因がいくつか組み合わせると、いっそう強い要因となる。次のようなものがそれである。

- 性×年齢
- 学歴×年齢
- 25歳までの居住状況×25歳以後の居住状況
- 新聞の利用×映画の利用×単行本を読む・読まない

3.23 要因の比較

以上23の要因のうち、どれが強く影響しているか。また、以上六つの要因群のうちどれが強く影響しているか。いま、強く影響するということを、著しい差をひき起すことと考えて、各要因の広がり (range), すなわち、各要因のカテゴリの最高値と最低値との差を比較してみよう。

I 自然的要因

- | | | | |
|-------|-----------------------------|----------|-----|
| 1. 性 | 1.7 | 5. 本人の職業 | 6.3 |
| 2. 年齢 | 10.2 (カテゴリ 6), 8.7 (カテゴリ 4) | 6. 家の職業 | 4.8 |
| | | 7. 言語関心 | 4.3 |
| | | 8. 役員 | 0.9 |

II 経歴的要因

- 3. 学歴 14.3
- 4. 発音教育 1.3

III 社会的・地域的環境の要因

- 9. 階層 2.1

[庄内]音の点数と各要因との平均値の広がり

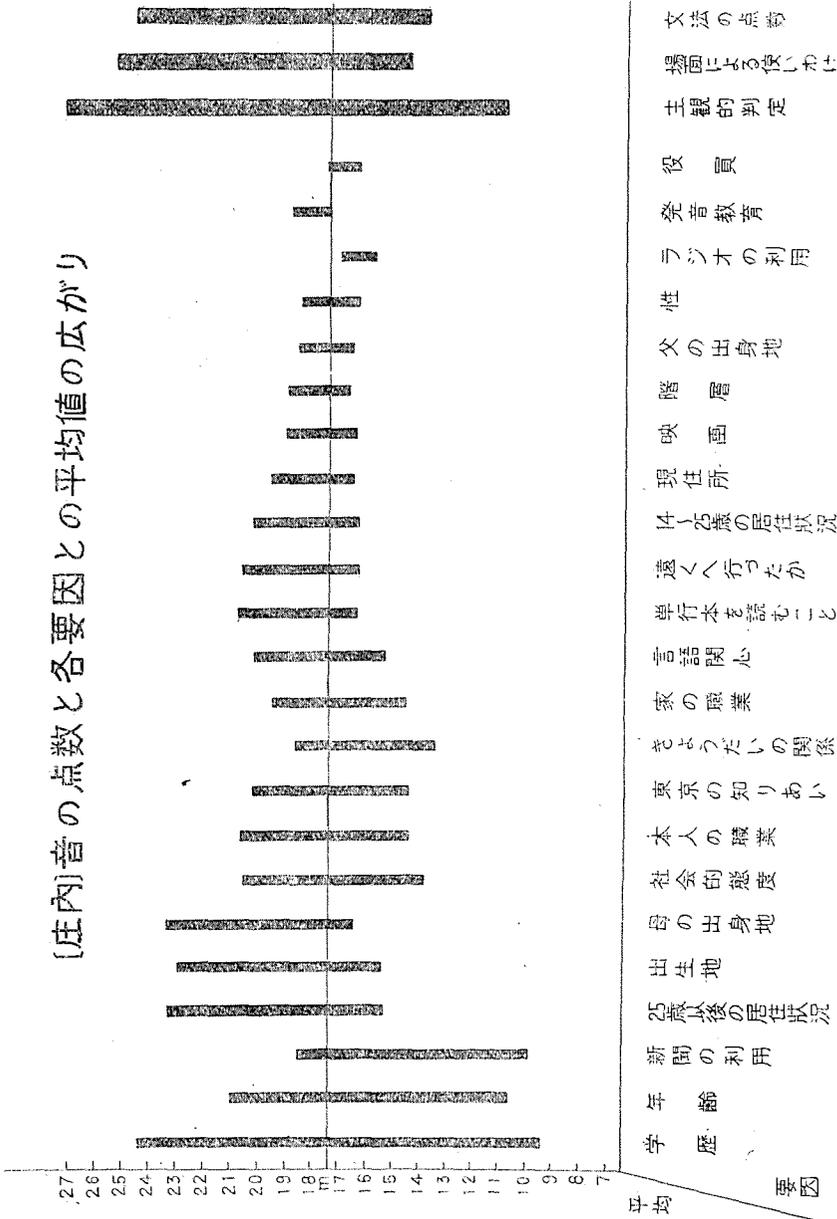


図 30

10. 現住所 3.4

Ⅳ 生育・居住環境の要因

11. 本人の出生地 7.5

12. 父の出身地 2.0

13. 母の出身地 1.8

14. きょうだい 3.5

15. 25歳までの居住状況 3.3

16. 25歳以後の居住状況 7.7

Ⅴ コミュニケーション

17. 新聞の利用 8.3

18. 映画の利用 2.4

19. 単行本を読む・読まない 4.3

20. ラジオの利用 1.4

21. 遠くへ行ったことがあるか 3.7

22. 東京との行き来 5.6

Ⅵ 社会的態度

23. 社会的態度 6.5

上に示した、ひとつひとつの要因をグラフにして示せば、図 30 のようになる。學歷、年齢、新聞の利用が強い要因であり、性、ラジオの利用、役員などは弱い要因であると認められる。白河地域の調査でも、學歷、年齢は強い要因として出て来たが、新聞の利用はそれほど著しい要因とは認められなかった。白河地域の調査では、生育地や父母の出身地が最も強い要因として出て来たが、前にも断ったように、今度の調査では、問題になっていない。それは、庄内育ちの者だけに限って分析し、たとえば東京育ちの市民は要因分析では除外されているからである。しかし、今度の調査でも、25歳以後の居住状況、出生地、母の出身地が新聞の利用について著しい要因と認められる。また、さきに示したように、庄内育ちの者と非庄内育ちの者との間には、著しい差の認められることを忘れてはならない。

なお、主観的判定、場面による使い分け、文法の点数などは、要因ではなく、共通語化の度合を知る手がかりとして考えたもので、参考までに並べておいた。

次に、いくつかの要因を組み合わせたものを含めて、その広がり进行比较してみた。図 31 を見よ。ここでは、カテゴリの数の等しいものどうしが比較してある。[2] は、新聞、25歳以後(の居住状況)、出生地、単行本(を読む)、遠くへ(行ったことがあるか)、25歳以前(の居住状況)、映画(の利用)、性、役員という要因が二つのカテゴリに分けて分析されていることを示し、[3] は、新聞ないしラジオという要因が三つのカテゴリに分けて分析されていることを示す。同じ要因が2か所以上で扱われることもあるのは、カテゴリの分け

〔庄内〕音の点数と各要因との平均値の広がり

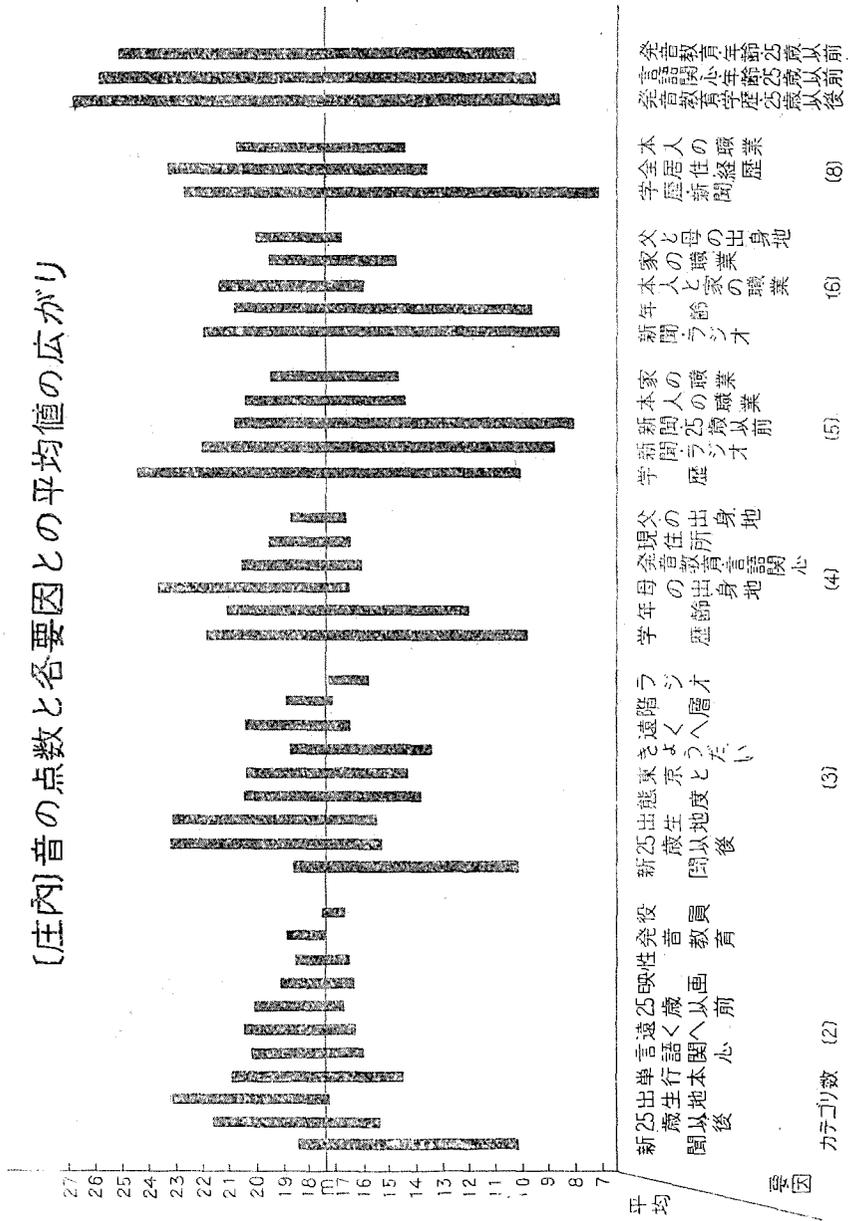


図 31

方が違うからである。たとえば、新聞の利用という要因は、

1. いつも読む と 読んだり読まなかったり
2. 読まない

のように、二つに分けることもできるが、また、

1. いつも読む
2. 読んだり読まなかったり
3. 読まない

のように三つに分けることもできる。

このように、要因のカテゴリの数の等しいものどうしを比較するのは、カテゴリの数が多ほど広がりが大きくなる傾向が一般に認められるからである。もっとも、多くのカテゴリに分けうるということ自身、その要因が重要であることを示しているとも思われる。

このグラフによると、学歴、新聞の利用、新聞×ラジオの利用、学歴×新聞、発音教育×学歴×25歳以後の居住状況などが目立つ。ラジオの利用や発音教育は、それぞれ一つの要因としては強くないが、新聞とか学歴などと組み合わせると、全体としてきわめて強い要因となる。

なお、各要因と各要因群とによっていろいろに分けた集団の分布を、平均点と偏差とについて見ると、共通語化の要因がいっそう明らかに浮びあがってくる。図 32 を参照。平均点が最も高いか低い、しかも、偏差の小さい集団を分けている要因が決定的なものと考えられる。すなわち、

発音教育×学歴×25歳以後の居住状況

学歴×新聞の利用

言語関心×年齢×25歳までの居住状況

学歴×年齢

発音教育×年齢×25歳までの居住状況

などである。これによっても、学歴、新聞の利用、年齢、居住状況などが強い要因と認められる。

以上の要因別分析と要因の比較とは、いわゆる「音の点数」を指標にして行

集団の分布

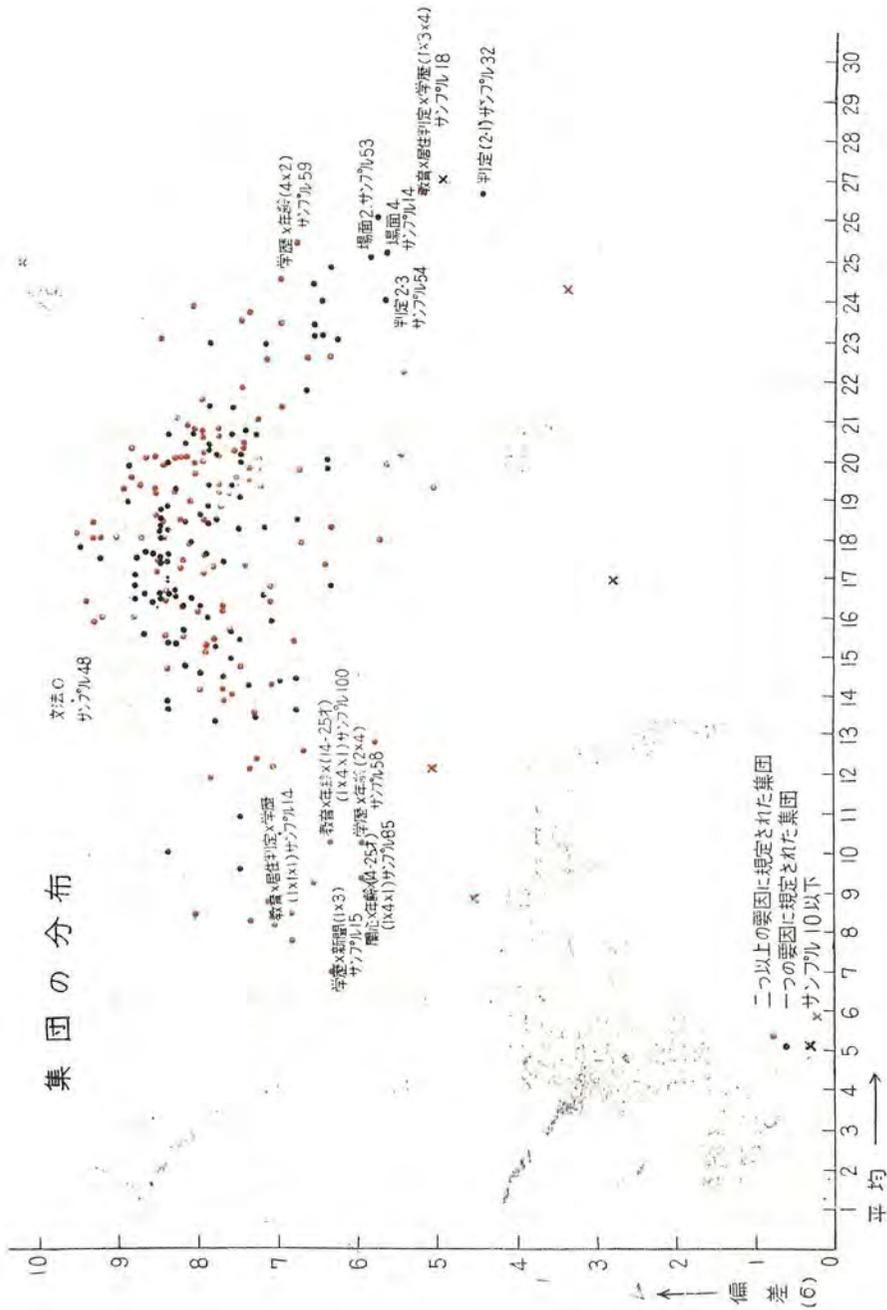


図 32

って来たが、ここで、「語彙の点数」(スケール:0—10)と「文法の点数」(スケール:0—9)とをそれぞれ指標にして、おもな三つの要因について分析してみた。

「語彙の点数」を指標とするときは、「音の点数」を指標するときとパラレルな傾向がはっきり認められる。すなわち、「新聞を読む」集団と「新聞を読まない」集団との間には著しい差があり、年齢、学歴それぞれについて、有意な傾向性が認められる。ところが、「文法の点数」を指標とするときは、必ずしもそのような傾向を認めることができない。以下の表を見よ。

「語彙の点数」を指標とするとき

	サンプル数	平均値	中央値	分散
新聞を読む	415	8.2	8.1	2.16
読んだり読まなかったり	44	8.0	8.8	2.86
新聞を読まない	40	7.0	7.5	4.45
15歳～19歳	92	8.5	8.3	1.42
20歳～24歳	52	8.8	9.3	1.70
25歳～34歳	115	8.3	8.3	3.16
35歳～44歳	100	7.9	8.5	3.26
45歳～54歳	75	7.6	7.7	3.87
55歳～69歳	74	7.3	7.5	4.28
学歴なし	21	7.0	7.4	4.38
小学卒	127	7.5	7.4	3.79
高小卒	199	8.1	8.6	2.95
旧制中卒	137	8.5	8.8	2.65
大学卒	22	9.3	9.4	1.16

「文法の点数」を指標とするとき

	サンプル数	平均値	中央値	分散
新聞を読む	415	3.7	3.2	7.30
読んだり読まなかったり	44	3.3	2.5	6.35
新聞を読まない	40	3.7	3.0	7.78
15歳～19歳	92	3.2	2.3	4.36
20歳～24歳	52	3.4	2.8	8.73
25歳～34歳	115	4.1	3.3	7.32
35歳～44歳	100	4.2	4.0	8.23
45歳～54歳	75	3.3	3.0	6.25
55歳～69歳	74	3.2	2.5	8.13

	サンプル数	平均値	中央値	分散
学歴なし	21	4.1	3.8	5.56
小 学 卒	127	3.3	2.3	7.14
高 小 卒	199	3.4	2.8	5.97
旧制中卒	137	3.8	3.2	7.27
大 学 卒	22	6.0	7.0	6.92

3.24 要因の重み

共通語化は一つの要因だけで決定されるものでなく、いくつかの要因がそれぞれの重みをもって、共通語化を決定すると考えるべきである。ここでは、共通語化を推測するという立場から、いくつかの要因がそれぞれ、どの程度の重みで共通語化を決定しているかということを考えてみよう。

それには、重相関関係の考えを利用することにする。そこで、まず、要因として次のものを取りあげる。以上の要因を全部取りあげるとしても、推測の精度があがることにならないから、共通語化を推測するのに力があると思われる五つを取りあげることにした。

1. 性×年齢
2. 学歴
3. マス・メディアの利用（ラジオの利用×新聞の利用×映画の利用×単行本を読む・読まない）
4. 居住状況（25歳までの居住状況×25歳以後の居住状況）
5. コミュニケーション（遠くへ行ったことがあるか×東京との行き来）

なお、その他に、要因ではないけれども、共通語化を探る手がかりとして、共通語化の主観的判定を加えても調べてみた。

また、この場合、状況分析を細かくするために、いわゆる「庄内グループ」（庄内育ちの者）だけをとりあげた。

次に、要因あるいは手がかりを数量化するには、白河地域の調査と同じように、音の点数を利用した。この方法が、妥当性ある数量化の第1次近似であることは、保証済みである。*

次の表は、各要因のカテゴリを数量化したものである。ただし、この数量

* 「言語生活の実態」57ページ脚注(*)参照。

は、計算を簡単にするために、平均点を四捨五入して得た整数値である。

性	男						女					
年齢	15	20	25	35	45	55	15	20	25	35	45	55
	{	{	{	{	{	{	{	{	{	{	{	{
	19	24	34	44	54	99	19	24	34	44	54	69
	18	17	20	18	12	12	20	22	21	19	15	9

学歴	なし	小卒	高 新	小 中	卒	旧 新	中 高	卒	旧 高	専 大	卒
	10	14		17		21		24			

ラジオ	聞かない		聞く・聞いたり聞かなかったり						
新聞	見ない		見る・見たり見なかったり						その他
映画	見ない	見る	見ない			見る			
単行本	読まない・読む		読まない	読む	読まない	読む	読まない	読む	
	9	17	16	22	19	20	14	20	

25歳までの 居住状況	庄内地方以外に居住したことなし				あり			
25歳以後の 居住状況	生え抜き	中間	転転	不明	生え抜き	中間	転転	不明
	14	15	22	20	20	19	23	13

遠くへ行ったことがあるか	出ない		出る・たまに出る	
東京との行き来	行き来なし	その他	行き来なし	その他
	15	18	17	22

主観的判定	正しい共通語	えせ共通語	まじり	方言
	27	24	18	11

さて、これらの値を使って、単純相関係数を計算すると、次のようになる。

	音の 点数	性× 年齢	学歴	マス・メデ ィアの利用	コミュニケ ーション	居住 状況	判定
音の点数	1	0.4454	0.3979	0.2970	0.2755	0.3613	0.5838
性×年齢		1	0.2779	0.2696	0.0618	0.2761	0.2663
学歴			1	0.4296	0.2886	0.3081	0.3610
マス・メディアの利用				1	0.2314	0.2701	0.2314
コミュニケーション					1	0.1917	0.2627
居住状況						1	0.3529
判定							1

これらを使って重相関関係を計算してみると、各要因の重みと偏相関係数とは次に示すようになる。なお、重み1は主観的判定を加えた場合、重み2は主観的判定を加えない場合である。

	性× 年齢	学歴	マス・メデ ィアの利用	コミュニケ ーション	居住 状況	判定	(常数)
重み1.	0.5832	0.2716	0.1339	0.3292	0.2094	0.7215	-21.6328
重み2.	0.7050	0.4949	0.1489	0.5417	0.4455		-23.2355
偏相関係数	0.35	0.19	0.05	0.18	0.19		

重みから見ても、偏相関係数から見ても、性×年齢が最も強い要因であり、マス・メディアの利用が最も弱い要因であることが明らかである。

いま、別の面から、要因の強さを見ることにする。それは、他の要因を一定としたとき、一つの要因が動くとき、推測の値がどう変るかを見ることである。そのために、まず各要因について、

(その要因のカテゴリ中最高点を示すものの点数) × (その要因の重み)
と

(その要因のカテゴリ中最低点を示すものの点数) × (その要因の重み)
とを尺度として調べてみよう。ここで、前者をx、後者をyとし、それぞれをx軸、y軸にとってグラフに描くと図33のようになる。

このグラフで、右下にあるほど強い要因とすることができる。これによっても、性×年齢の要因が最も強く、マス・メディアの利用のそれが最も弱い。性×年齢について、学歴、居住状況、コミュニケーションがこの順序に弱くなる。なお、判定はかなり強力な手がかりと見られる。

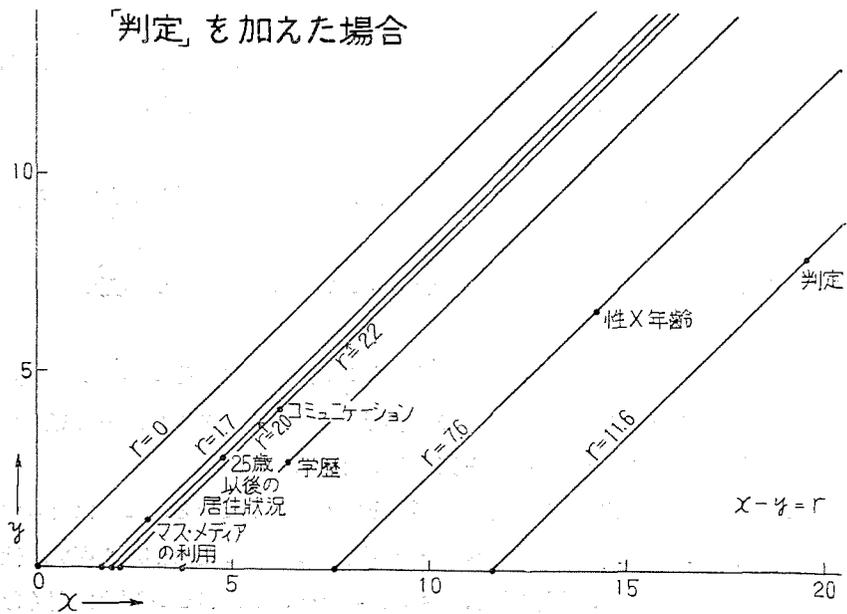
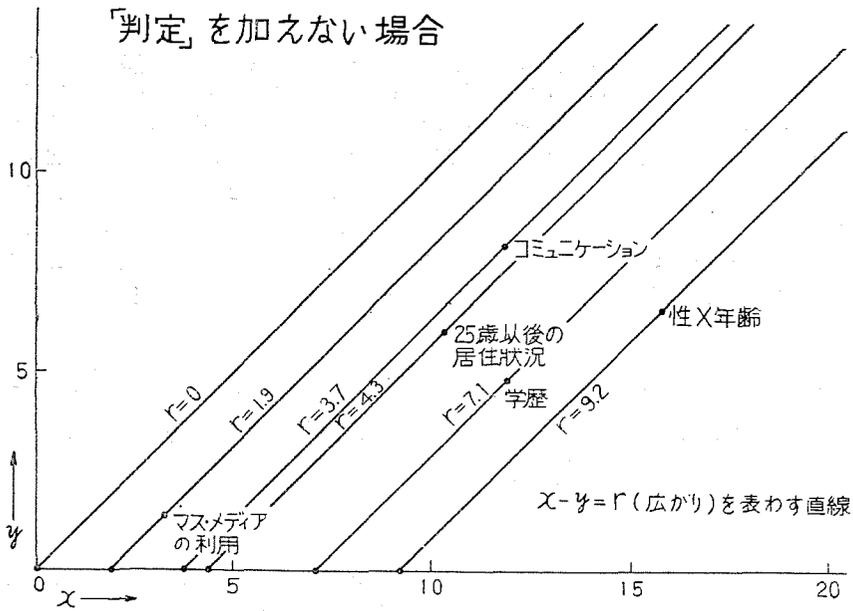


図 33

ここで、広がり、すなわち、(x-y)から見ることにしよう。与えられた要因から共通語化の度合(音の点数)を推測するに当たって、これらの要因の動きが、推測された音の点数の動きにどのように影響を与えるかを見るための手がかりとして、この(x-y)は意味をもつであろう。

判 定	—	11.6
性×年 齢	9.2	7.6
学 歴	7.1	3.8
居住状況	4.3	2.0
コミュニケーション	3.7	2.2
マス・メディアの利用	1.9	1.7

のようである。この広がり、かなり大きいものと認められる。

さて、重相関係数は、

判定を加えない場合	0.5818
判定を加えた場合	0.6848

のように、白河地域の調査における 0.69 に比べて、やや低目に出ている。これは、おそらく次の理由によるものと考えられる。まず、白河地域の調査においては、言語形成期を白河市(および周辺地域)以外で過した者をも含んでおり、しかも、これが最も強い要因であった。今度の調査では、この要因が強いということは、はっきり分かったものとして、この条件を一定にして、さらに分析を細かくしたのであった。このために、推測の精度があがらなかったのではないかと考えられる。第2の理由は、調査員によるくいちがいはないかと考えられる。調査員のうちに、ふなれな者があるとともに、調査の基準が本調査実施の初期において必ずしも一致していなかったためだろうと考えられる。

第2の理由についてはさらに詳しく分析する必要があると思われるので、ロールシャッハ・テスト(2.49を参照)の被調査者として選んだ100人のサンプルについて、推測値*と実際の調査値(実測値)との相関関係を調べてみた。なお、この場合は「判定」を加えなかった。図34を参照。

まず、相関係数を求めると、0.6363であって、重相関係数の0.5818にきわ

* 「言語生活の実態」159ページ

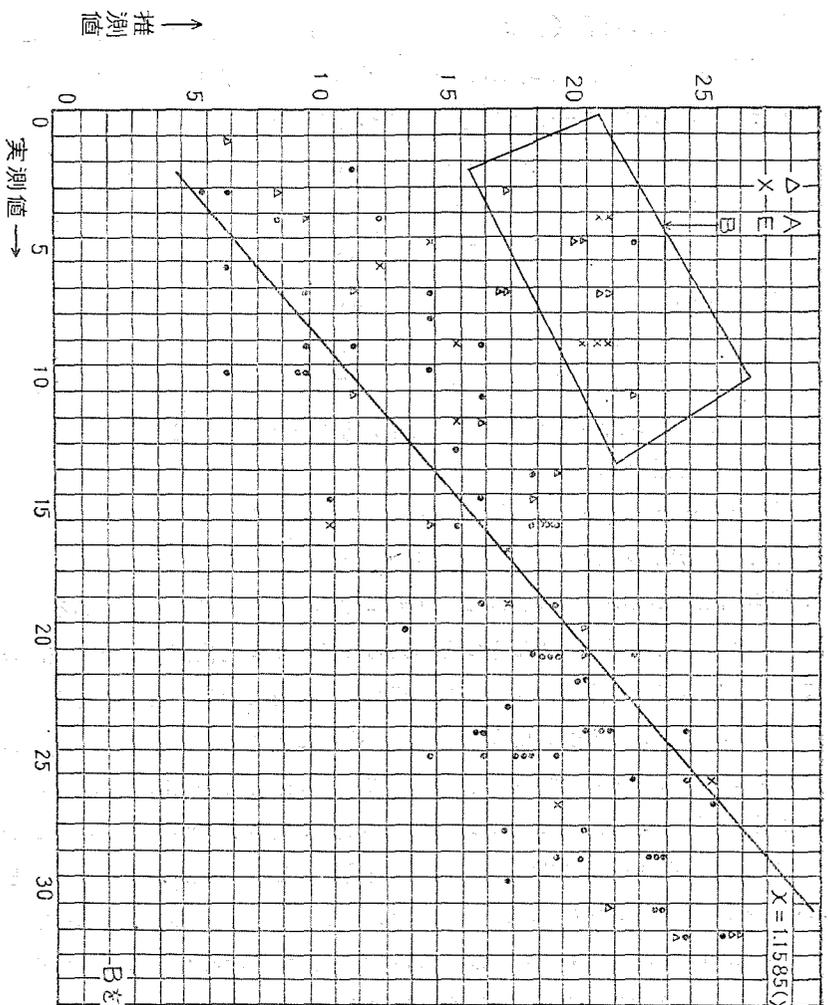


図 34

めて近い。この差は、サンプリングの誤差のうちにある。

この図において、注意すべきことは、□ のところが、はなはだしくはずれていることである。すなわち、実測値が推測値よりもはるかに低いこと、すなわち、調査員の判定が辛いことを示している。□ には入っているのは、

調査員Aのが 5

調査員Eのが 6

調査員Bのが 1

である。大部分が調査員AのとEのとである。調査員Bは、他の分析(3.114)から見て、一般に辛目ではあるが、相当なれているので、はずれることは少ない。調査員AとEは、ふなれな調査員であり、初めのうちは基準が動揺しており、一時きわめて辛目であった。このことは、調査の実施中に分かったのであるが、調整する暇がなかった。なお、いろいろな面から言って、調査員AとEはくいちがいのひどいことがわかっている。(3.114)

そこで、まず、□ を全部除いて、相関をとってみると、

$$\rho=0.83$$

となって、きわめて高くなる。また、調査員AとEとを除いて、相関をとってみると、

$$\rho=0.79$$

となって、かなり満足できる。(図 35 を参照)したがって、 ρ の低目なのは、調査員の問題に帰せられるところが多いと考えられる。

また、これで、生育地を一定にしても、かなりな推測が得られることも知りえたわけである。

上の議論は、ロールシャッパ・テストのためのサンプルに関するものであるが、このサンプルも、「共通語の調査」のサンプルからのランダム・サンプルであるから、「共通語の調査」全体についても、当然、上のことが言いうる。

以上述べた方法において用いた定性的な要因の数量化の方法は、その要因に属するものの平均値をとってゆくことであった。これが第1次近似として妥当なものと認められることは証明できる*。ここでは、第1次近似としてはな

* 林知己夫；統計数理的数量化の問題 補遺「統計数理研究所講究録VI—11」

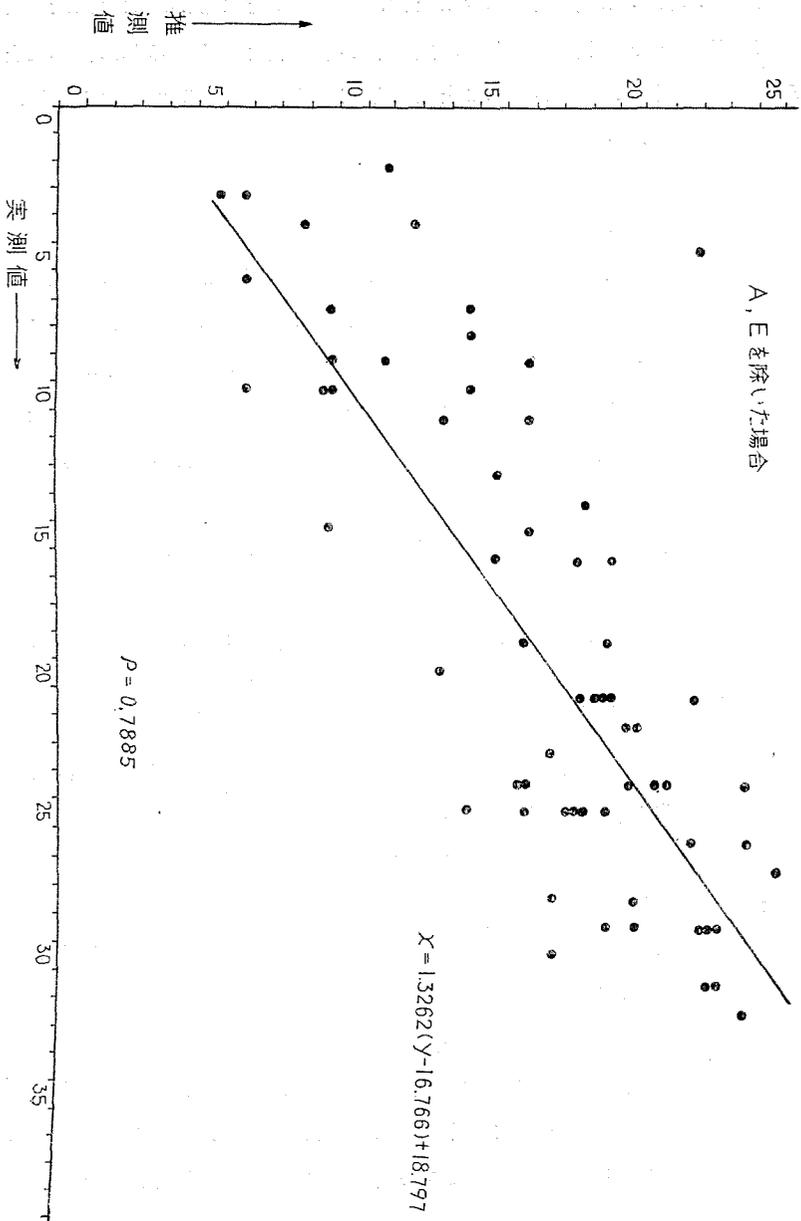


図 35

く、厳密な意味で適度な (optimum) 数量化を用いてみよう。

そのために、まず要因の数を減らし、カテゴリを整理して、次にあげるようなものを取りあげた。

性 (男), (女)

年齢 (15歳~24歳), (25歳~44歳), (45歳~69歳)

学歴 (学歴なし), (小学卒), (高小卒・新制中卒), (旧制中卒・新制高卒・旧高専卒・大学卒)

居住状況については、(a, b) のように表わそう。a は 25 歳までの居住状況を、b は 25 歳以後のそれを表わす。まず、a については、25 歳までに庄内地方以外に 2 年以上以上在住したことが、

ある 1

ない 2

のようにコードし、b については、

生え抜き 1

中間 2

転転 3

のようにコードする。このようにして、居住状況について分けた四つのカテゴリは次の通りである。

(1, ((1,2))), (2, ((1,2))), (((1,2)) 3), (((1,2)) 不明)

さて、このように分類しておいて、各要因のコードに得点 w_{lm} を与えることを考えるのである。ただし、

$l=1, 2, 3, 4$

$m=1, 2, 3, \dots, m_l$

要因の種類	要因に与える数量の総称	各コードに与える数値			
性	X_1	X_{11}	X_{12}		
年齢	X_2	X_{21}	X_{22}	X_{23}	X_{24}
学歴	X_3	X_{31}	X_{32}	X_{33}	X_{34}
居住状況	X_4	X_{41}	X_{42}	X_{43}	X_{44}

こうして、各個人の共通語化の点数 y と各個人の持つ要因の点数 ($x_1+x_2+x_3+x_4$) との被調査者グループについての重相関係数が最大になるように w_{im} を決めていくのである。これは、重相関係数を問題にするに当って適度 (optimum) なものである。

この結果は右のようになる。

そのときの各要因間の単純相関関係は次のとおりである。

性	
男	15.84 → 16.4
女	18.59 → 18.1
年齢	
15歳~24歳	18.88 → 19.4
25歳~44歳	19.03 → 19.8
45歳~69歳	13.50 → 11.9
学歴	
学歴なし	11.71 → 9.57
小学卒	14.57 → 13.5
高小卒	17.42 → 17.3
旧制中卒以上	25.28 → 21.6
居住状況	
(1, (1,2))	15.82 → 14.2
(2, (1,2))	19.91 → 19.7
((1,2) 3)	22.23 → 22.9
((1,2) 不明)	17.07 → 19.5

	音の点数	性	年齢	学歴	居住状況
音の点数		0.1021	0.4184	0.4037	0.2988
性			0.0419	-0.1134	-0.1660
年齢				0.3065	0.1251
学歴					0.1888
居住状況					

この場合の重相関係数は 0.57 となり、前の場合 (要因をより多くとった場合) と大差は認められなかった。たとえば、とりあげた要因の数が少ないとはいえ、この程度にしかすぎない。

このような w_{im} と重相関係数とは、要因から共通語化の度合を推測するときの機能的な働きをするものである。

3.25 おもな要因

以上の分析によって、おもな要因と考えられるものは、単純相関の立場から学歴、年齢、新聞の利用、居住状況、あるいは、学歴×年齢、学歴×新聞の利用、年齢×言語関心×25歳までの居住状況、年齢×発音教育×25歳までの居住状況、学歴×発音教育×25歳以後の居住状況 と認められる。

これらをまとめて、性×年齢、学歴、マス・メディアの利用 (ラジオの利用×新聞の利用×映画の利用×単行本を読む・読まない)、居住状況 (25歳までの居住状況×25歳以後の居住状況)、コミュニケーション (遠くへ行ったことがあるか×東京との行き来) として、重相関の立場から見ると、性×年齢の要因が最も強く、ついで、学歴、コミュニケーション、居住状況であると認めら

れる。

白河地域の調査と比較して、コミュニケーションが目立っているのが注目される。コミュニケーションも、遠くへ行ったことがあるか、東京との行き来に分けて、一つずつとして見ると、それほど著しくない。また、居住状況に、白河地域の調査のように、生育地の要因がはいってれば、この要因はもっと目立って来ると思われる。

3.3 要因としての新語の理解度

新語がどれほど理解されているかということは、共通語化を測る有力な手がかりであると考えられる。

今度の調査では、白河地域の調査で調べた「六三制、コンクール、アルバイト、鉄のカーテン」の4語に、「アプレ・ゲール」を加えた、五つの新語について、その理解度を調べた。調査の方法、理解の判定法などは白河地域の調査の場合と同じである。^{*}

いま、「正しく理解している」と認められた者の%について、各要因の広がり进行比较すると、下のようであって、どの要因も相当の影響を与えているが、とりわけ、学歴、年齢、新聞の利用が目立つ。このうち、前二者は、白河地域の調査でも同じように、強い要因として出て来たものである。なお、ここでは、庄内グループと非庄内グループとを加えた、全サンプルについて分析してある。また、上の2語（コンクール、鉄のカーテン）以外の広がり、図 36 について見よ。

新語の理解度を決定する要因として目立つものは、そのまま共通語化の度合（「音の点教」を指標として求めた）を決定する要因として目立つものである。いったい、新語の理解度と共通語化の度合とは、どういう関係にあるのだろうか。

* 「言語生活の実態」205頁、206頁

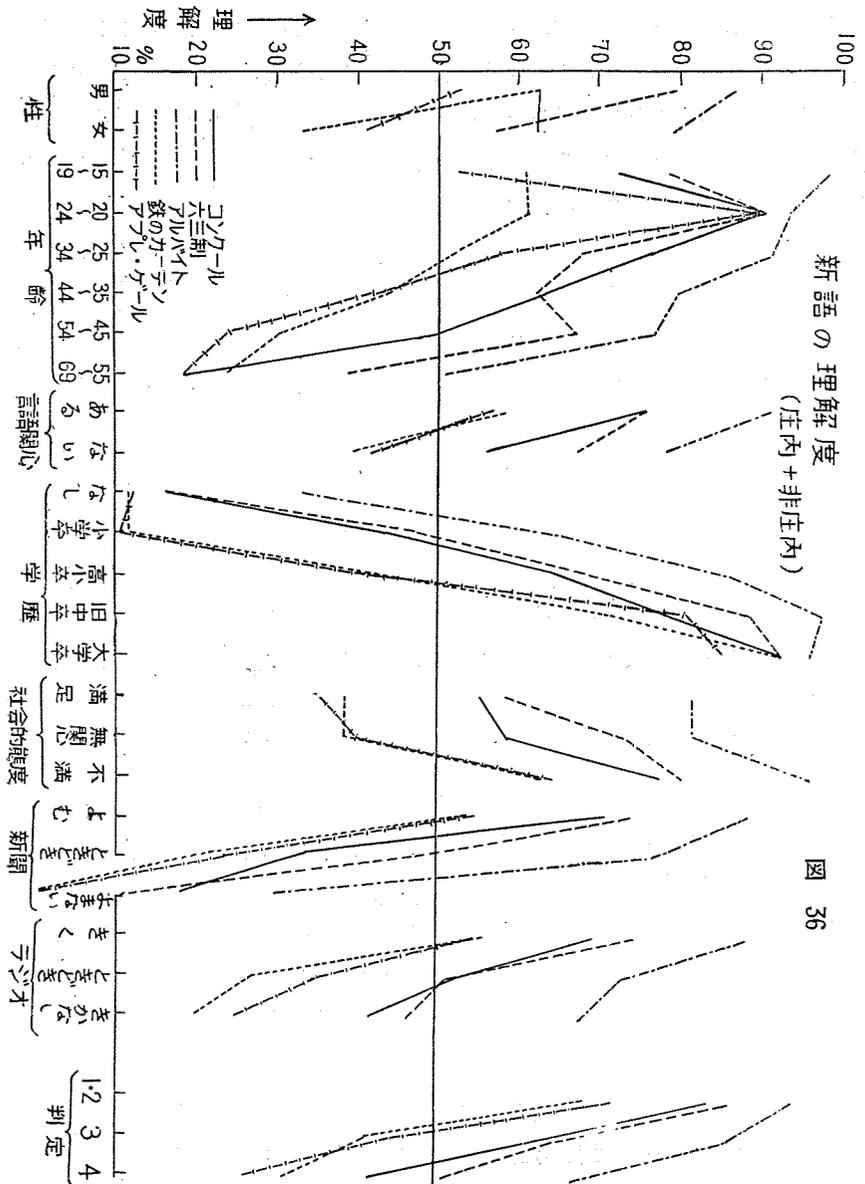


図 36

たまたま、コンクール以下の語を選んだために、このような要因が目立つだけのことであろうか。いま、アプレ・ゲールを除いた4語について、音の点数（共通語化の度合）との相関関係を見ると、その係数は0.42である。白河地域の調査では、同じ4語について、相関係数0.41と出ている。^{*}これはきわめて興味深い一致である。なぜならば、この一致は、上の四つの新語の理解度が共通語化の度合を測る、安定した一つの手がかりであることを意味するからである。

3.4 山添村と鶴岡市

山添村は鶴岡市の南方6キロにあって、当時バスが日に20回往復していた。鶴岡市とのコミュニケーションはかなり密接であると言える。いま、調査の際に調べた用足しの様子を分析してみよう。数字はすべての被調査者についての該当回数を示す。

用足しの場所 用足しの種類	病 気 け が	魚	肉	く す り	衣 類	農 具	理 髪	映 画
山 添	38	47	10	24	5	21	39	4
鶴 岡	25	9	38	16	57	37	3	41
齋村、本郷村 など附近の村	4	0	0	0	1	0	4	0
山 形 市	0	0	0	0	0	1	0	0
越 後	0	0	0	0	0	1	0	0
行 商	0	11	1	29	1	0	0	0
必要なし	0	1	15	0	0	3	10	15

山添村は自村でもかなり用足しができるけれども、衣類、農具、映画、それに、(あまり食べないようであるが)肉も鶴岡市で求められる。山添村が鶴岡市に依存している様子は、白河市に五箇村が依存しているのと全く相似である。^{**}

なお、市と村との依存関係は、ここにあげたような用足しについて尋ねれば、じゅうぶん明らかになるようである。今後の調査にもこのまま用いるものであると思う。

* 「言語生活の実態」194ページ

** 「言語生活の実態」77ページ

前月中にでかけた所について尋ねた結果も、圧倒的に鶴岡市である。

場所	人数(延べ)	滞在日数	用件
齋村	2	4	私用
余目町	1	3	商用
加茂町湯之浜	1	2	私用
本郷村	1	1	私用
黒川村	1	1	私用
鶴岡市	24	24	*

なお、どこへもでかけない 34人

さて、山添村の共通語化の度合を明らかにして、鶴岡市のそれと比較してみよう。

	サンプル数	平均値	中央値	分散
山添村	79	14.5	15.1	40.30
鶴岡市	508	17.4	18.6	13.44

両者の間には、平均値のみならず、分散についても有意な差が見られるのは注目される。^{*} なお、白河市の場合も、村との間に平均値について有意差があったのと比較される。^{**}

次に分布を見ると、鶴岡市と同じように山が一つしかないような分布である。(図 37 参照)

* 家事など 9, 娯楽 5, 商用 4, 公用 2, 通学 2, 病院通い 2

** 分散について有意な差が出て来た計算の過程を示しておこう。

$$\sigma_{s_1}^2 = \sigma_1^4 \frac{(\beta_2(1) - 1)}{n_1} = 29.5117$$

$$\sigma_{s_2}^2 = \sigma_2^4 \frac{(\beta_2(2) - 1)}{n_2} = 10.8251$$

ただし、

$$s_1^2 = 40.3003$$

$$s_2^2 = 73.4418$$

$$n_1 = 79$$

$$n_2 = 508$$

$$\text{尖度 } \beta_2(1) = 2.4355$$

$$\text{尖度 } \beta_2(2) = 2.0196$$

$$Z = s_1^2 - s_2^2 = -33.1415$$

$$\sigma_2^2 = \sigma_1^4 \frac{(\beta_2(1) - 1)}{n_1} + \sigma_2^4 \frac{(\beta_2(2) - 1)}{n_2} = 40.3368$$

$$\frac{|Z|}{\sigma_2} = 5.218$$

*** 「言語生活の実態」240へ

なお、山添村では、ほとんどすべてが農業であるから、本人の職業は要因としてとりあげなかったし、居住状況も、ほとんどすべてが「生え抜き」であるので、やはり要因としてとりあげなかった。言語関心については、別の理由から分析の対象にならなかった。

以下に分析表をあげよう。

	サンプル数	平均値	中央値	分散		サンプル数	平均値	中央値	分散
男	39	13.8	14.5	50.02	新聞をいつも読む	36	16.6	17.0	43.26
女	40	15.6	16.0	33.24	読んだり読まなかったり	25	14.6	14.5	36.29
15歳～19歳	20	13.6	14.5	56.24	読まない	17	11.0	12.5	29.61
20歳～24歳	14	15.6	16.0	9.68	映画を見ない	48	15.2	15.5	48.48
25歳～34歳	18	16.2	17.0	54.82	見た	31	14.1	15.2	32.07
35歳～44歳	15	16.2	16.5	28.82	単行本は読まない	58	14.5	15.5	41.35
45歳～69歳	12	11.7	10.5	45.58	読む	21	15.4	15.0	44.43
小学卒	20	12.8	11.5	21.06	ラジオをいつも聞く	46	16.4	17.1	37.82
高小卒新中卒	38	16.1	16.5	47.00	聞いたり聞かなかったり	19	12.1	13.8	39.80
旧中卒新高在その他	16	15.6	15.5	46.75	聞かない	14	13.0	13.0	37.71
発音教育を受けた	54	14.7	15.8	36.67	役員の経験なし	67	14.0	14.8	42.89
受けない	23	14.9	12.5	57.04	あり	12	18.8	18.5	19.34
出生地は山添村	64	14.9	15.3	41.34	遠くへ行かなかった	56	13.7	14.0	38.97
その他	13	12.5	12.5	33.98	行った	12	20.5	20.0	17.08
父の出身地は山添村	59	14.4	15.3	45.32	社会的態度満足	61	14.4	15.8	39.91
その他	18	15.8	16.2	35.37	無関心と不満	18	15.9	16.0	48.78
母の出身地は山添村	43	15.5	16.8	45.83	共通語	12	20.3	21.0	32.85
その他	32	12.8	12.5	30.62	共通語と方言	29	16.8	18.0	36.00
長子・長男(女)	18	15.9	16.5	41.45	方言	38	11.5	12.7	26.84
長男(女)	16	10.0	7.5	36.25	文法の点数				
その他	45	16.0	16.3	34.85	0～2	28	13.4	13.5	36.19
					3～5	37	15.3	16.8	44.30
					6～8	14	16.0	16.0	43.42

なお、ここで、鶴岡市民で、言語形成期の大部分、すなわち、言語形成期のうちの5年以上を東田川郡、西田川郡、酒田市を除く飽海郡で過した者(T)

と山添村民で、言語形成期のすべてを山添村で過した者（Y）とを比べてみよう。

	サンプル数	平均値	中央値	分散
T	138	14.9	15.2	68.69
Y	76	14.5	15.5	40.58

このように両者の共通語化の度合が一致することはおもしろい。これは、言語形成期の居住地が共通語化の要因として重要であることを意味する。言語形成期の居住地の重要性については、白河地域の調査で明らかになったところであるが、今度の調査では要因としてとりあげなかったことは、すでにたびたび述べたところである。

3.5 共通語化の過程

3.51 どういう場面から変るか

次の四つの場面で、共通語を使うか、方言を使うか、両方がまざるかについて内省させた。

1. 家族の人
2. 近所の顔知りの人
3. 鶴岡の町で顔知りでない人
4. 旅の人

この結果を、白河地域の調査* のときと同じように L. Guttman の尺度解析によって分析してみた。それは、共通語を使うと答えた者に1点、まざると答えた者に2点、方言を使うと答えた者に3点を与え、四つの場面の合計点を求め、合計点の順に被調査者を並べ、被調査者それぞれの各場面における点数の分布の模様を描いてみた。さらにこれを見やすくするために、合計点の段階ごとに被調査者をまとめ、各場面には平均点数をプロットした。こうして得たのが図 39 である。

* 「言語生活の実態」253ページ以下

この図の◎の動きを見ると、旅の人の場面が最も早く左へ寄って来るのに、家の人場面は左へ寄るのが最も遅い。これは、旅の人と話す場面が最もよく共通語化され、家の人と話す場面が最も共通語化されていないことを意味する。全体として方言をよく使う人も、旅の人と話すときには共通語を使う傾向があり、全体として共通語をよく使う人も、家の人と話すときには方言を使う傾向があるというわけである。旅の人の場面に次ぐのが町の人場面であり、ついで近所の人場面であることが、この図によってはっきり分かる。

場面の Scale analysis

年齢 歳	性別	家の人			近所の人			町の人			旅の人		
		1	2	3	1	2	3	1	2	3	1	2	3
26	12			◎			◎			◎			◎
107	11			◎			◎			◎			◎
28	10			◎			◎			◎			◎
40	9			◎			◎			◎			◎
52	8			◎			◎			◎			◎
12	7			◎			◎			◎			◎
21	6			◎			◎			◎			◎
6	5			◎			◎			◎			◎
14	4			◎			◎			◎			◎

図 39

白河地域の調査では、1. 家庭、2. 近所の人、3. 在の人、4. 仕事仲間、5. 買いつけの店、6. 郵便局や役場、7. 知らない人や旅行者など の七つの場面について調べたが、互にはっきり区別できない場面もあったので、今度は四つの場面に整理したのであった。これは成功した。

これによって、どういう場面から共通語化が進むかについては、ほぼ決定的なことが言えるようになったと思う。ただ、その過程の模様については、地域社会それぞれの特徴があると予想され、今後の調査に期待したいところである。

3.52 どういう人から変るか

要因をひとつひとつ切り離して分析した結果は、年齢、学歴、本人の職業、

言語関心、言語形成期以後 25 歳までの居住状況、25 歳以後の居住状況、新聞の利用、遠くへ行ったことがあるか、東京との行き来、社会的態度、などが目立った。これは、共通語化が老人よりも若い者（ただし 19 歳以下を除く）の方で進んでおり、学歴の低い者よりも高い者の方で進んでいることなどを意味する。

さらに、要因はいくつか組み合わさると、いっそう強くなる。すなわち、性×年齢、学歴×年齢、25 歳までの居住状況×映画の利用×単行本を読む・読まない がそれである。これは、老婆よりも青年男子の方で共通語化が進み、学歴のない老人よりも大学出の若い者の方で共通語化が進んでいることなどを意味する。

いま、こうしたひとつひとつの要因で特徴づけられた集団、二つ以上の要因で特徴づけられた集団の分布を、音の点数（平均）とその分散とについて描いてみると、図 40 のようである。共通語化の度合（音の平均点数）がきわめて高い集団ときわめて低い集団とを特徴づける要因がここでは重要である。しかし、それらの集団も、分散が大では、推測の立場からは重要でなくなる。そこで、音の点数がきわめて高く、しかも分散の小さい集団と音の点数がきわめて低く、しかも分散の小さい集団とに注目してみよう。こうして出て来る集団は、

発音教育×学歴×25 歳以後の居住状況

学歴×新聞の利用

言語関心×年齢×25 歳までの居住状況

学歴×年齢

発音教育×年齢×25 歳までの居住状況

などである。これは、発音教育を受けなかった、学歴の低い（しかも、若いときに庄内地方以外に出なかった人よりも、発音教育を受けか 学歴の高い、しかも、若いときに庄内地方以外に出たことのある人の方で共通語化が進んでいることなどを意味するのである。

3.53 どういう音声の特徴から変るか

われわれが調べたのは、次の七つの音声の特徴である。

集団の分布

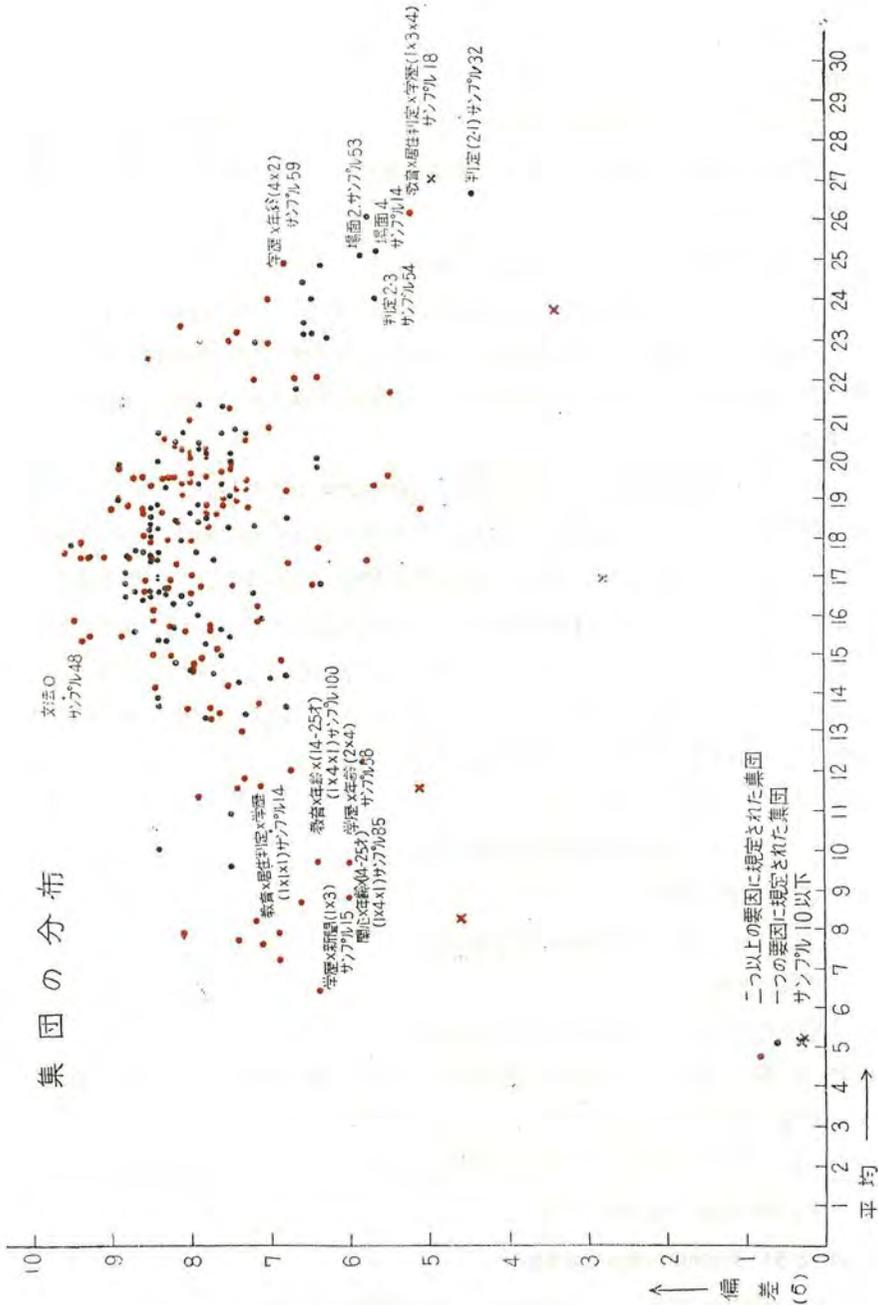


図 40

この模様図から、平均的な意味で了解されることは、まず、総点数の低下を第一にひき起すのは kw である。ついで、 \sim , i , si , であり、palatalized, voiced になると、よほど総点数が低くならなければ、左に寄って来ない。 kw (正確には $\overset{v}{k}$) はそれが最も著しい。すなわち、 $\overset{v}{k}$ が最もよく共通語化しており、 kw が最も共通語化していないわけである。

kw が最も共通語化の度合が低く、続いて、 \sim , i , si , palatalized, voiced, 最も共通語化の度合の高いのが $\overset{v}{k}$ である。この模様は、要因別に分析すると変るものであろうか。たとえば、ある要因では $\overset{v}{k}$ よりも voiced の方が高いというようなことがあるのではないか。そこで、図 42 ないし図 47 のようなプロフィール (profile) を描いてみた。縦軸は、共通語化の度合を、共通語形で反応した語の数を % で表わしたものである。

このように、どの要因で分析しても、ほぼ同じプロフィールが得られた。これは、

$\text{kw} \rightarrow \sim \rightarrow i \rightarrow si \rightarrow \text{palatalized} \rightarrow \text{voiced} \rightarrow \overset{v}{k}$

という共通語化の過程が、全体についても、部分についても認められることを意味する。

なお、庄内グループよりも非庄内グループがいつも高いことが見られる。これは、共通語化の要因として生育地が重要であることを物語るものである。

ここで、最も共通語化の度合の低い kw をさらに分析すると、45 歳以上でこの「なまり」が著しく残っており、学歴の低いほど、この「なまり」が目立つ上に、男が女に比べてやや著しいことが注意される。詳しくは、II, 1.5 参照。

それでは、 kw はどんな場合でも共通語化がおくれているだろうか。次に、調査語ひとつひとつについて、共通語形で反応した人数を比較してみよう。図 48 の柱状図がそれである。これを見ると、 kw を調べるために用意した語は、三つとも、共通語化の度合 (共通語形で反応した人数) が低く、そのなかでも、「ひげ」が特に低い。「ひげ」の共通語化の度合が低いのは、音節「ひ」が、両くちびると硬口蓋の両方で同時に摩擦する音 [kw] と [i] とで構成されているからであろう。

しかし、 kw は、まだ共通語化の度合の差が小さい方である。 $\overset{v}{k}$ もそうであ

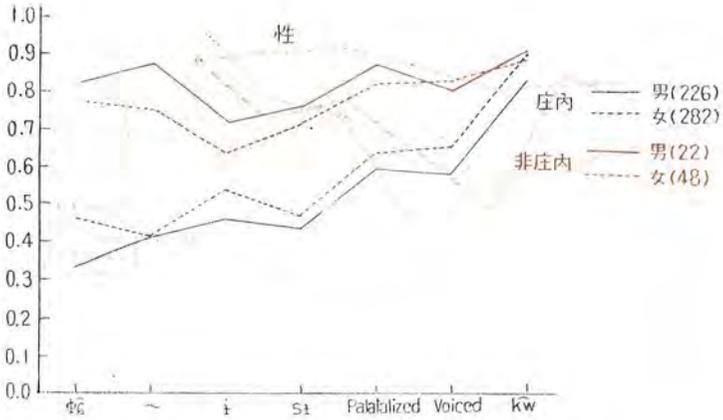


图 42

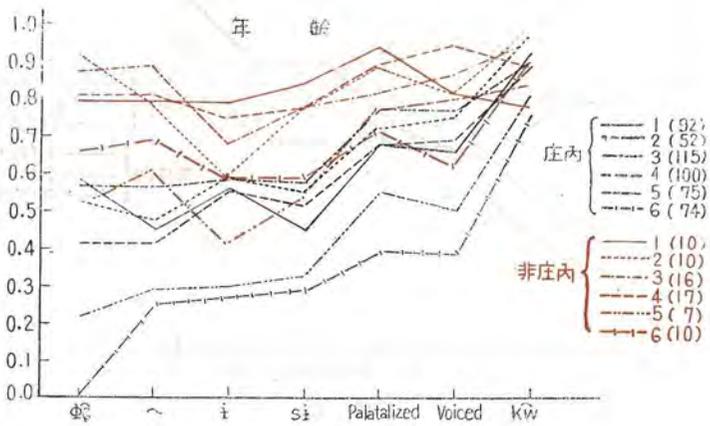


图 43

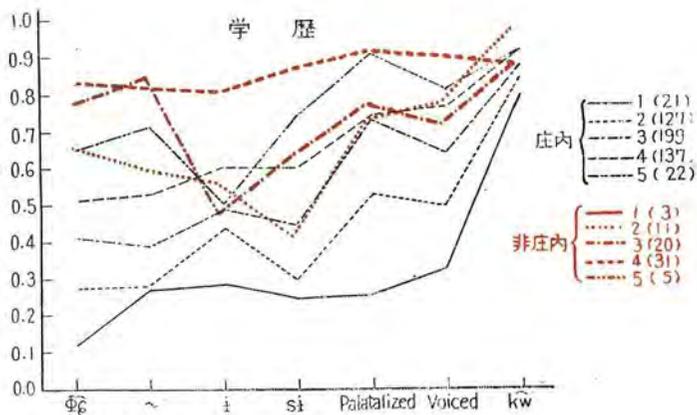


图 44

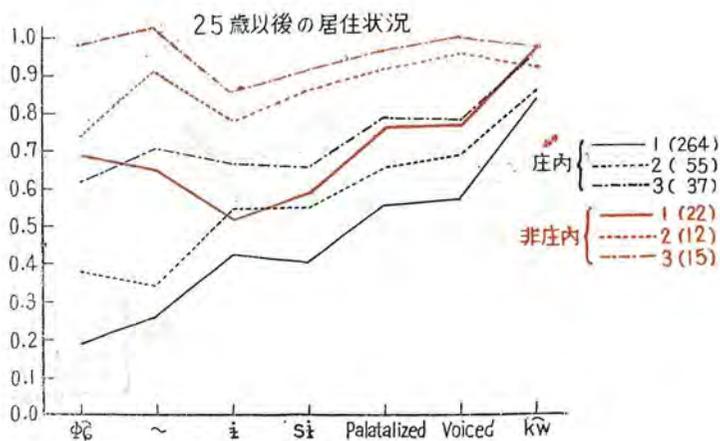


图 45

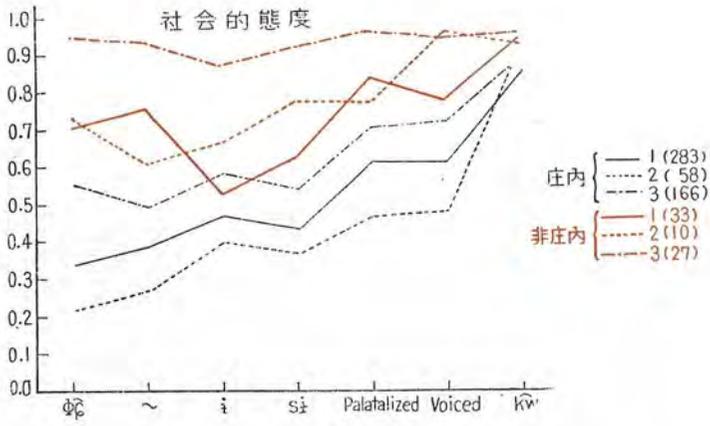


図 46

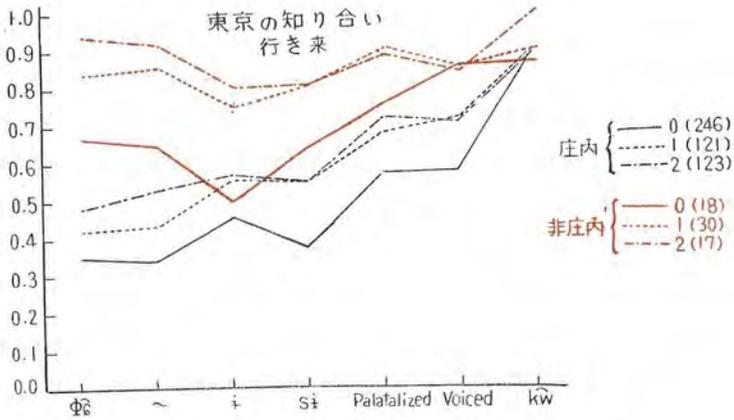


図 47

音の各項について共通語で反応した人数

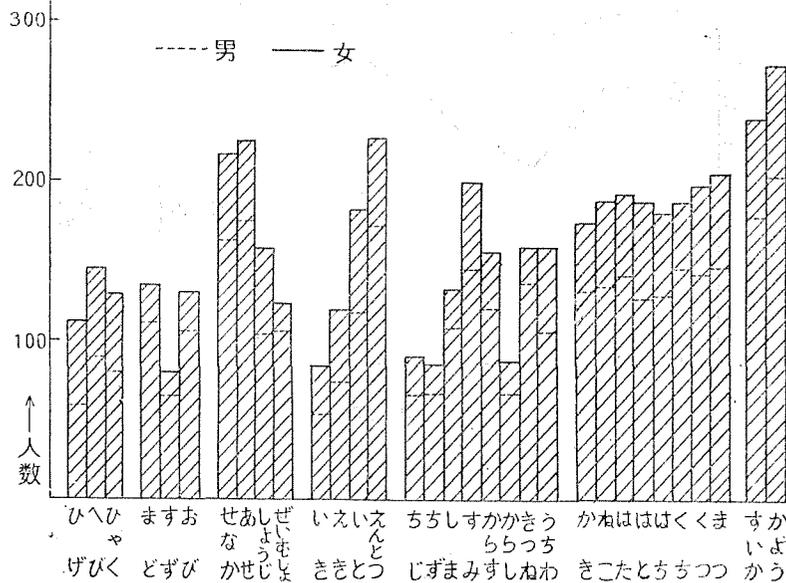


図 48

る。特に voiced になると、ほとんど差が見られない。これは、これらの音声の特徴が場合によって（前後の音の関係によって）変らないことを意味する。

ところが、～, palatalized, i, si は、語によって相当の差がある。これらの音声の特徴は、ある語では、かなり共通語形に直っているが、ある語では、あまり直っていないというわけである。

次に、ひとつひとつの語についてながめてみよう。

まず、「すす」が「まど」や「おび」よりも低いのは、この語が、二つの類音節で構成されているためではないか。類音節連結のために鼻音化が抜けないことも考えられ、また、そのために調査員の聞き取りに困難があったのではないかと考えられる。

「せいむしょ」が「せなな」よりもかなり低いのはなぜだろうか。「せいむしょ」は漢語だから、一見、共通語化の度合が高くてよさそうであるが、その逆であるのは、長音節のためではないかと考えられる。

「ちじ」と「ちす」、「きつね」と「うちわ」が「せなな」と「あせ」と同様に、

共通語化の度合がほぼ一致するのはおもしろい。「からす」と「からし」との間にも差があるが、いま、これについて、次のような相関表を作ってみた。

	からす	計
からし		
じ	113 34	147
si	157 200	357
計	270 234	404

これは、「からす」について共通語形で反応する人は、「からし」についても共通語形 [Si] で反応し、「からす」について方言形 [si] で反応する人は、「からし」についても方言形 [si] で反応するという関係が密接であるかどうかを示すものである。ここで、試みに、 χ^2 検定を行うと、

$$\chi_c = 5.94$$

となり、両者の関係は有意である。

「いき」、「えき」、「いと」、「えんとつ」の相互にも共通語化の度合には差がある。これらの語については、さきにも述べたように聞きとりに調査員のあやまを見込まなければならぬけれども、いま、このことを考慮の外において、相互の関係をやや詳しく分析してみよう。

	いき	計
えき		
e	97 90	187
è, i	39 279	318
計	136 369	505

$$\chi_c = 9.59$$

	いき	計
いと		
i	125 173	298
i, è	11 196	207
計	136 369	505

$$\chi_c = 9.02$$

	いき	計
えんとつ		
e	131 261	395
è, i	3 107	110
計	134 368	505

$$\chi_c = 6.33$$

	えき	計
えんとつ		
e	181 214	395
è, i	5 105	110
計	186 319	505

$$\chi_c = 7.83$$

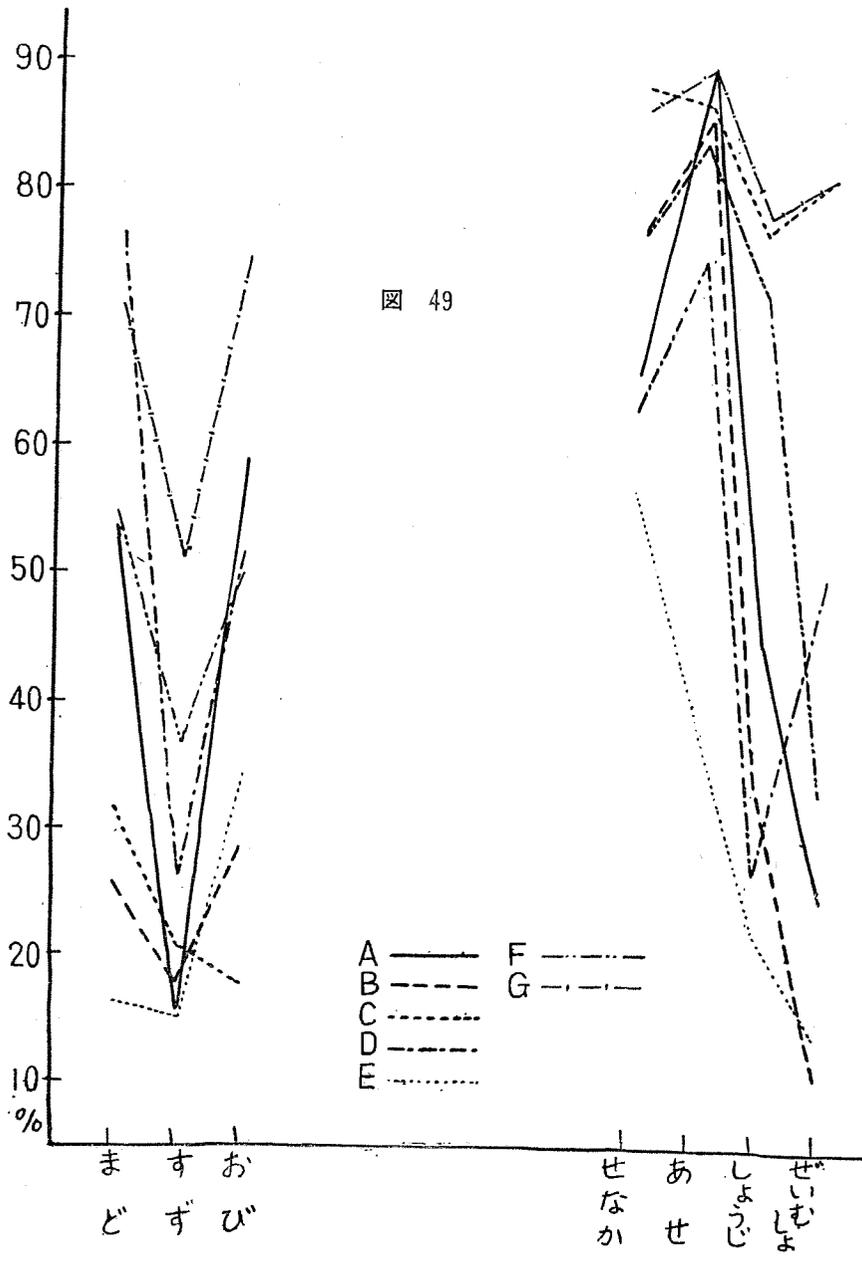
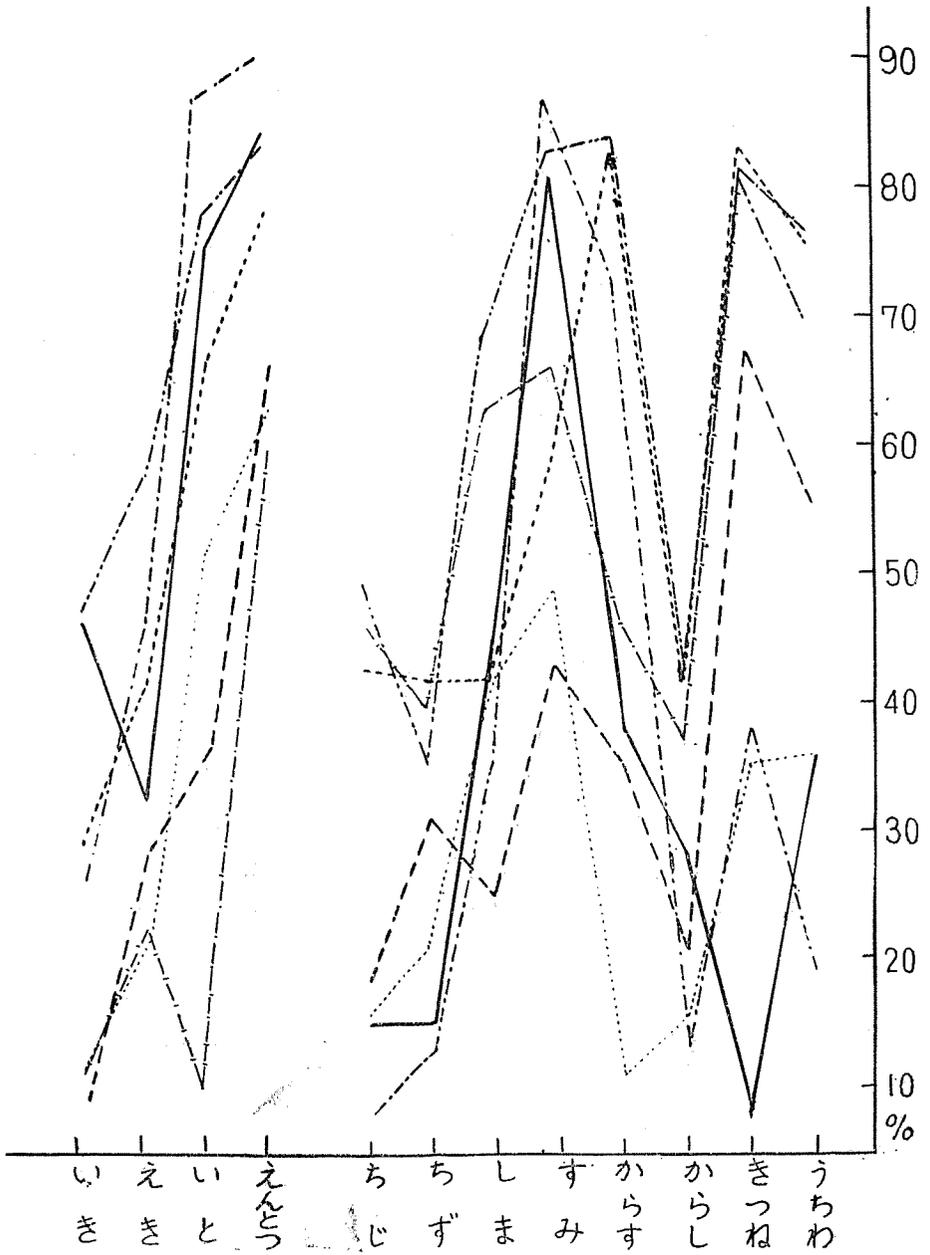


図 49



えんとつ いと	i	i, é	計
	281	114	395
e	17	93	110
é, i	298	207	505
計			

$\chi^2=10.39$

いずれの場合も有意な関係が見られるから、この4語は相互に密接な関係にあると認められる。すなわち、「いき」を [i(é)-] と発音する人は、「いと」も [i(é)-] のように、「えき」も「えんとつ」も [i(é)-] のように発音し、逆に「いき」を [i-] と発音する人は、「いと」を [i-] のように、「えき」も「えんとつ」も [e-] のように発音すると言って差支えなからうというわけである。

いま、白河地域の調査と比較してみよう。

	鶴岡	白河
いき	26.9%	23.1%
えき	37.0	22.2
いと	59.2	44.3
えんとつ	78.2	51.5

(ただし、白河では「えほん」)

(%は共通語化の度合、すなわち、共通語形で反応した人の割合)

「えき」を除けば、両者の順位が一致することは、注意される。

調査語ひとつひとつの共通語化の度合を比較するために、調査員ひとりひとりに分けてグラフを描いてみた。図49を参照。これによっても、全体について上に述べたとほぼ同じことが認められる。

われわれが調べた七つの音声の特徴は、東京語形と方言形との対応関係の相異によって2種に分けることができる。一つは、対応関係が1対1の場合であり、一つは、1対2の場合である。前者に属するのは、 ç , \sim , palatalized, voiced であり、後者に属するのは, i, si, k である。前者は、たとえば、と

東京語形		方言形
[çi]	:	[ç i]
[do]	:	[\sim do]

[se] : [sé]

[ki] : [gí]

いふ対応関係がいつも成立する。これに対して、後者は、たとえば、

	東京語形		方言形
息	[i(ki)]	:	[i(gí)] ~ [é(gí)]
厭	[e(ki)]	:	[i(gí)] ~ [é(gí)]
鳥	[(kara)s.u]	:	[(kara)sié]
辛子	[(kara)ʂi]	:	[(kara)sié]
火曜	[ka(jo:)]	:	[k [̣] a(jo:)]
かよう (このよう)	[ka(jo:)]	:	[ka(jo:)]

のように、時に、一方の異音語が他方では同音語となる。このような対応関係は、共通語と方言とがともに用いられている地域社会では、コミュニケーションの障害となる。鶴岡市民の [karasié] は、「鳥」のことか「辛子」のことか東京人に分かりかねることがありうるし、東京人の [kajo:] が鶴岡市民にとって、「火曜」のことか「かよう（このよう）」のことか理解できないことがありうる。

鶴岡市の国語教育は、後者の対応関係を正しくすることから始めるべきであろう。ただし、{[ka]: [k[̣]a], [ka]: [ka]}の対応関係は、ほかの二つとは関係が逆であるから、問題は別となる。

ところで、こういう対応関係にある「なまり」はコミュニケーションの障害になるだけに、直すことに努力をすれば、その効果はあがりやすいと思われる。現に、k[̣], si, i は共通語化の最も低いものではない。一応のコミュニケーションに差支えないだけに直りにくいのは、前者の場合である。共通語教育の立場からは、これらも東京語のように直すことを考えるべきである。特に、 \sim 、ついで、 \sim を直すことについては、現在、最も直っていない特徴だけに、大いに努力しなければならない。

4 結 び

以上の分析によって、共通語化の要因は、ひとつひとつ切り離して考えれば、

1. 年 齢
2. 学 歴
3. 新聞の利用
4. 居住状況

が目立つけれども、これらは決定的な要因とはならない。さらに、いくつかの要因を組み合わせて考えると、

1. 年齢×学歴
2. 学歴×新聞の利用
3. 年齢×言語関心×25歳までの居住状況
4. 年齢×発音教育×25歳までの居住状況
5. 学歴×発音教育×25歳以後の居住状況

が著しいものとして出て来る。しかし、これとても決定的な要因とはならない。いま、これらをまとめて、

1. 性×年齢
2. 学歴
3. マス・メディアの利用（新聞の利用×ラジオの利用×映画の利用×単行本を読む・読まない）
4. 居住状況（25歳までの居住状況×25歳以後の居住状況）
5. コミュニケーション（遠くへ行ったことがあるか×東京との行き来）

の五つの要因あるいは要因群として、これらを束ねても、なお、完全に決定的とはならない。推測の立場からは、重相関係数 0.58 の程度にしか決定できなかった。白河地域の調査では、重相関係数 0.69 であったが、決定的でない点には変りがない。

われわれの要因をさらに決定的なものにするのには、社会環境的要因のほか心理的要因を考慮すべきである。このことは、白河地域の調査報告ですでに述べておいたが、今度の調査では、ロールシャッパ・テストによるパーソナ

リティと暗示性とをとりあげた。前者が社会環境的要因と密接な関係にあるのに対し、後者、すなわち、暗示性が社会環境的要因とは独立のものであることが分かったのは興味深い。サンプルが少なすぎるので、これが共通語化の要因としてどのような形で利いているかについては、今後の調査にまたなければならぬところが少なくない。しかし、次のようなことだけは分析することができた。すなわち、単独の要因として見るときには利かなくても、他のものとあわせ考えるならば利いているということである。単独の要因として利いていないとは、単独に見るときには共通語化に強い影響を与えるものではないということである。パーソナリティは、この意味では他の要因に比べて強力な要因とはなっていないと言ってよいであろう。

しかし、他の要因が一定であると考えた場合、すなわち、たとえば、学歴、年齢、性、マス・メディアの利用などを一定としたとき、パーソナリティの模様によって共通語化はどのようになるのか、という問題を考えてみると、事情は一変する。

いま、暗示性について述べるならば、被暗示性の強いものは環境に影響されやすい、共通語化されやすい；被暗示性の弱いものは影響されにくい、共通語化されにくいということが言えるであろうか。このために、以上分析して来た各要因別に分類して後、このうちで、より共通語化されているものといえないものに分けてみると（共通語化の度合と要因との間の重回帰直線を引き、この上部にある人人、すなわち、とりあげた要因は同一でも、より共通語化されている人人とこの下部にある人人、すなわち、とりあげた要因は同一でも、より共通語化されている人人とに分類することを意味する）、より共通語化されている人人は被暗示性が強く、より共通語化されていない人人は被暗示性が弱いことが、統計的な意味で有意であることが示された。本人が経験した共通語化的環境の力を受け入れやすいかどうかを見るひとつの指標としての被暗示性の強弱を見るテストが、あずかって力があることが示されたわけである。暗示性が単独では利かないが、他の要因との複合の形で、利く要因となって来ることは興味深いものがある。

共通語化の度合を重相関係数 0.58 の程度にしか決定できなかった、もうひと

つの理由は、調査員のくいちがいが大きかったことである。くいちがいの大きい2人の調査員を除けば、重相関係数 0.79 までにあがり、かなり満足しうるものとなる。調査員のくいちがいについては、調査前に補正しうるものであるだけに、このような結果になったのは残念である。今後の調査では、この点について慎重でなければならない。

さらに、くりかえし断ったが、今度の調査では、明らかに強い要因と分かっている生育地を除いて分析を進めている。もし、白河地域の調査のように、これも要因として分析すれば、相関係数はもっと大きくなったであろう。

ここで、白河地域の調査と比較するならば、強い要因として、ふたたび学歴が出て来たことが注目される。白河地域の調査で父母の出身地が強い要因となっているが、これは本人の生育地と密接な関係があるので、本人の生育地を除いた今度の分析では、目立たないのも当然である。しかし、居住状況が今度も著しい要因であることを注意しておこう。

以上に対して、白河地域の調査では目立たなかった「新聞の利用」が今度の分析で出て来たことは重要である。社会政策の立場からは、学歴以下の諸要因よりも、新聞の利用の方がはるかに意味が深いからである。

さて、共通語化の過程については、白河地域の調査と一致するところが多い。場面の過程については特にそうである。ひとつひとつの音声の特徴については、「ひげ」を [çiipè] となまる発音が方言音として最も根強いものと見られる。このなまりも、他の、やや直りやすいなまりも、共通語教育の立場からは、どうしても直さなければならないものである。それには、昔風の発音教育は適当でない。ラジオ、レコード、録音器が自由に使えるようになった現在では、発音の治療もいっそう容易になり、効果もいっそうあがりうる。çiについて、スライドや映画を利用して、くちびるの形を反省させるようにすれば理想的である。しかし、そういう機械を使う治療とともに、それに劣らず重要なのは、若い年齢層に対して、東京の人などと話をしなければならない場面を作ってやることではなからうか。

III 鶴岡方言の特徴

1 音 声

1.1 はし が き

鶴岡方言の音声を調べるために、鶴岡生え抜きの人を幾人か*選んで、彼らについて観察と質問とによって調べた。これらの人の音声は互に異なることもあるが、まず、同一の方言**に属すると認められる。

以下に記す音声の特徴は、鶴岡方言全般に通ずるもので、二三の人の個人的な特徴ではない。しかし、[] のなかに示した音声は、ある人のある場合における音声であって、鶴岡方言を話すすべての人にあてはまるものとは限らない。観察の対象になった人でも、ほかの場面で同じ発音をしているかどうかは保証できない。たとえば、「ひげ(髯)」の第1音節の子音は[𐌀]で表わすべき二重調音の音声であるが、ときに[𐌀]で表わされるような、第二調音のない音声でも聞かれる。また、この「ひげ」のアクセントは、調査員が観察し、記録した限りでは、第1音節のほうが高い形で聞かれたが、鶴岡方言を話す人のうちには、二つの音節を同じ高さで発音する人があると期待される。鶴岡方言には、第1音節のほうを高く発音することもあり、二つの音節を同じ高さで発音することもある、一組の2音節名詞があるからである。

発音記号はすべて国際音声記号によった。いままでの日本における慣用と著しく異なるものはなるべく注記した。ただ、アクセント記号のうち[-]は、全体が平らな形を示すのに、特に設けたものである。

1.2 鶴岡方言の音声の特徴

鶴岡方言の音声の特徴として特に注意されるのは、次のようなものである。

* 笹原雄次郎氏 茶酒類商、高小卒、50歳すぎ / 石井貞吉氏 明治32年生まれ、19歳から3か年東京にいた / 某氏 男78歳、御家録 / 某氏 女67歳、御家祿 / 小林武男氏 かし屋、高小卒、42歳、民生委員 / 今野喜久吉氏 公務員、高小卒、明治41年生まれ / 日向文吾氏 公務員、中学卒、大正2年生まれ / 門田正則氏 公務員、師範学校卒、明治40年生まれ

**「方言」とは、地域社会で共通語と対立して行われる、ラング (langue) としての言語と考える。それは、体系を有するものとして、操作的に仮説されたものである。詳しくは、「言語生活の実態」6-8ページを見よ。

1. 東京語の /he, hi, hjo, hja, hju/ * の子音音素に当たるところに、
両くちびるの摩擦音 [ɸ]*** が聞かれること
2. 東京語の、母音にはさまれる /b, d, z (, g)/ に当たる子音の前に鼻母音
音が聞かれること
3. 東京語の /'i/ および /c, z, s/ に先立たれる /u/ に当たるところに、
中舌母音の [i]**** が聞かれ、東京語の /'e/ に当たるところに、狭い前
舌母音 [é]*** が聞かれること
4. 東京語の /si/と/su/ に当たるところに、中舌母音を含む [si] が聞か
れ、/ci/ と /cu/ に当たるところに、[tsi-]~-[zi] が聞かれ、/zi/ と
/zu/ に当たるところに、[zi-]~-[-zi] が聞かれること
5. 東京語の /se/, /ze/ の子音音素に当たるところに、それぞれ、口蓋化
した摩擦音 [s̺], [z̺]*** が聞かれること。また、/sjo/ の子音音素に
当たるところに、まるくちの硬口蓋摩擦音 [ç] が聞かれること
6. 東京語の母音音素にはさまれた /k, t, c/ に当たるところに、有声音 [g],
[d], [z] が聞かれること
7. 室町時代の京都語の /kw, gw/ に当たるところに、くちびる音化した
軟口蓋音 [k], [g̃], [-ŋ] が聞かれること
8. 東京語の /ai, ae/ に当たるところに、広い母音 [e:] ~ [ε] が聞かれ
ること
9. 東京語の /ki/ の子音音素に当たるところに、非常に口蓋化した、摩擦
音を伴った [k̺ç] のような音が聞かれることがあること
10. 東京語の /ju, ju/ に当たるところに、[jo], [˙o] (例 [ko]) が聞か

* / / は音素を示す。東京語の音素を表わす記号は、服部四郎「音韻論と正書法」
(研究社)に示されたものに従う。

** 慣用に従えば [ɸ] と表わすこともできる。

*** 慣用に従えば [i] と表わすこともできる。

**** 精密に言うと、この音声の基本母音 (cardinal vowels) の [e] に当り、東京語の
それを、[e] より広い [é] で表わすべきである。

***** 慣用に従えば、[s̺], [z̺] と表わすこともできる。

れることがあること

これらのうち、8. をのぞいては、すべて、東北方言あるいは庄内方言の特徴として知られている*。以下に、いささか詳しい音声学の観察の結果を示そう。

1.3 ひとつひとつの特徴

1.31 両くちびるの摩擦音

東京語の「ひげ」、「蛇」、「拍子木」、「百」、「ヒューズ」に当る語は、それぞれ次のように発音される。

[ɸi̯ŋɛ̃] ひげ [ɸẽɛ̃ŋbi] 蛇

[ɸo:ɽsiŋi] 拍子木 [ɸeaɽɸu] 百

[ɸẽu:ɽzi] ヒューズ

ただし、最後の語は、老人では [ɸi̯ŋjòɽzu] のように聞かれる。また、[ɸo:ɽzi] と発音する人もある。

この [ɸ] の音は、両くちびるの間で摩擦すると同時に、硬口蓋の前部と舌端との間でも摩擦するような音である。ある個人は第二調音のない [ɸ] で発音することがあるが、ふつうではない。また、両くちびるが突き出て、口笛のような摩擦音の聞かれることもある。このときは、舌面がくぼみつつ持ち上げて、口むろ全体が管の形をしている。また、下くちびると上歯とによる摩擦音 [f] を発音する個人もある。そのひとりとは、50歳の男で、19歳から2～3年東京にいた以外は、ずっと鶴岡に在住した人である。

[ɸ] は音声連結のいずれの位置にもあらわれる。

[ɸẽzi] ひじ [aɽsaɽɸẽi] 朝日

[ɸẽr] 板べい [taiɸẽn] 大変

注意されるのは、70歳近い老婆に、[sírosima] 広島 という発音が聞かれ、また、多くの人が、「ひひざる」を [ɸẽsíɽzaɽru] のように発音することである。また、老人には [šo:ɽbaɽn] 評判 という発音も聞かれる。これらは、通時的に、

* 東条操「方言と方言学」212-214 へ

[s̥] < [ç] < [ʧ]

と解釈することができよう。

この特徴は、さきにあげた特徴 1. ないし 7. のうちで、最も根強いなまりと認められる。II. 3. 53 を参照。そのうちでも、[ʧ̥i] が最も直りにくいようである。

しかし、次のような例もある。それは、いま東京に住んでいる、鶴岡出身のある主婦である。彼女は 1920 年（大正 9 年）に鶴岡に生まれ、高等女学校を卒業してから、21 歳のときに上京した。東京に来てから 10 年になる。なお、父は鶴岡、母は東田川郡の出身である。彼女の発音では、[ʧ̥]（ときには [ʧ̥i]）は東京語の /h̥jo, h̥ja, h̥ju/ の子音音素に当たるところにしか聞かれない。

[ʧ̥o:ɿ] ひょう(筥) [ʧ̥aɾɣw] 百

[çiɿɰe] ひげ [xeɿbi] 蛇

なお、東京語の /hu/ には [ʧw], /ho, ha/ には [ho], [ha] が対応する。[ʧw] が [ʧ̥w] と交替することはほとんどない。

[ʧ̥iɿɰd̥e] 筆 [hoɾdaɿrw] ぼたる

[haɾgo] 箱

1.32 鼻音化音

東京語の「窓」、「鈴」、「帯」に当る語は、それぞれ次のように発音される。

[m̥aɾdo] 窓 [siɿ(d)zi] 鈴 [õɿbi] 帯

これらの語では、有声子音の前の母音が鼻音化している。

この特徴は東北方言に広く認められるが、その音声の観察については学者によって一致しない。

小倉進平、金田一京助、小林好日の諸氏* はこれを鼻母音と認めるのに対し、横山辰次氏は「その母音が鼻母音となると共に子音も亦鼻子音となる」** と観察している。さらに、宮良当壮氏は独自の見解を次のように述べている。***

* 小倉進平「仙台方言音韻考」26 頁 / 金田一京助「北奥方言の発音とそのアクセント（ブーズー考）」音声の研究 第 5 輯 35-37 頁 / 小林好日「東北の方言」77 頁以下

** 横山辰次「置賜方言音韻の二三の特徴」音声学協会会報第 40 号

「今日までの私の経験では【八重山の竹富島の方言に無数にあらはれるやうな】鼻的母音と東北方言に於けるこの音とは非常なる差があり、現在のところ、之を母音の鼻音化現象と考へることは出来ない。〔中略〕【この音は】私が二分の一音節の撥音、一に半長撥音と称して居る音【である。】」

これらは異なる方言について観察したものである上に、個人、語、場面などによる変異が考えられていないようである。小林好日氏も「地方により、個人により、又語によつて種々の変化があるもので、実際に鼻音が挟まれることもあり全く鼻母音である場合もある」と述べている（「東北の方言」79ページ）。鶴岡方言について観察してもそのとおりで、個人により、場面によって種種の変異が見られる。

まず、有声子音の前の母音が鼻音化している場合のあることは確実である。そのとき、鼻音化はその母音の持続 (tenue) の後半だけであることが多い。

また、有声子音の出わりに、弱い有声破裂音または有声摩擦音の聞かれることがある。これが横山氏の「鼻子音」に当るかと思われる。[mãdo] 窓

次に、有声子音の閉鎖または狭めの持続中に口蓋帆がだんだんに持ち上って、咽頭壁との間に閉鎖を作るような場合もある。これが宮良当壮氏の「半長撥音」に当るかと思われる。[mãdo] 窓

さらに、鶴岡方言には、有声子音に続く母音の持続の前半まで鼻音化することもある。[madò], [mãdò] 窓

ある「御家祿」の老人の発音には、有声子音の前の母音がやや長めとなり、その後半だけが鼻音化する傾向が見られた。[mãdo] 窓

なお、有声子音 [ɸ] の前の母音はふつう鼻音化しない。

[ãɸo] あご

[é:ɸarã] 家から ただし、[ɸéĩɸãl̃si] 東

東京語の /N/ に続く /d, g/ に当る子音の出わりも、続く母音も、つねに鼻母音化しない。

[hãnde] 飯台 [ɸé:z̃wɸɸo] 標準語

*** 宮良当壮「東北方言諸相」民族学研究 第1巻第1号 177ページ

/b, g/ に当る場合は適切な例について聞くことができなかったが、おそらく上と同じであろう。

鶴岡方言には鼻母音を伴わない有声子音もあり、これは東京語の /k, t, c/ に当る。

[ma^hdo] 的 cf. [ma^hdo] 窓
[ku^hzi] くじ(籤) cf. [ku^hzi] 口

1.33 中舌母音と狭い前舌母音

東京語の /'i/ および /c, z, s/ に先立てられる /u/ に当るところに、中舌母音の [i] が聞かれる。

[i^hgi] 息 [ri^hkçi^hsi] 力士
[tsi^hzi] 地図 [mi^hpidé^h] 右手

東京語の /'e/ に当るところには、狭い前舌母音の [é] が聞かれる。

[é^hgi] 駅 [tsi^hè] つえ
[a^hmé] 雨 [ré^hɸi] 礼儀

両者は音素として別のものである。

しかし、/'i/ と /'e/ とを区別しない個人がある。たとえば、[i^hgi] 息、駅。また、語によって東京語との対応が逆になっていることが、個人について見られる。

[é^hdo] 糸 [i^hri] えり(着物の)

明治の末期から大正の初期にかけて、伊沢修二氏の指導を受けて鶴岡の小学校の発音教育にたずさわった、木村璋^{おきら}氏の談話によれば、/'i/ と /'e/ との混同は、発音教育では全く問題にならなかったとのことである。II, 2.319 参照。これは、/'i/ と /'e/ とが別の音素であったためと考えられる。/'e-/ に当るところに [jé-] の聞かれることがある。[jégagi^h] 画工, [jé^hri] えり(この語は [é^hri], [i^hri] でもあらわれる), [jédo] 江戸

1.34 [si]

東京語の /si/ と /su/ に当るところに、

[sina] シナ, 砂 [sasimi^h] さしみ

のように、中舌母音を含む [si] が聞かれる。しかし、これは音声連結の末尾

以外の場合で、音声連結の末尾では、次のような二重母音に聞かれる。

[na^lsié] なす(野菜) [nasie⁻] なし(果物)

[k^usié⁻] くし(櫛) cf. [k^usimè⁻] くし目

このように、音声連結の末尾では、条件のいかんにかかわらず、つねに二重母音である。

これと平行的な現象が東京語の /ni/ に当る音節にも見られる。

[ni^gu⁻] 肉 [kaⁿnié] かた(蟹)

東京語の /ci/ と /cu/ に当るところに、[tsi⁻]~[-zi] が聞かれる。

[tsi^lé] つえ, 知恵 [ma^lzi] 町, 松

東京語の /zi/ と /zu/ に当るところには、[zi⁻]~[-zi] が聞かれる。

[(d)zi^lzi^ltsa] おじいさん [tsi^lzi] 知事, 地図

[zi] は [dzi] とは音声連結の頭では交替することもあるが、頭以外ではぶつう交替しない。鶴岡生え抜き門田正則氏(Ⅱ, 1.1の脚注参照)の口蓋図をとつてみると、音声連結の頭以外の [-zi] が摩擦音であることが明らかである。

「シナ」と「砂」, 「町」と「松」をそれぞれ発音しわける個人も少ない。

[si^lna] シナ [ma^lzi] 町

[s.a^lna] 砂 [ma^lz.a] 松

このときの [a] は東京語の /su, zu/ の母音音素に当る音声に近い。

個人によっては、「シナ」と「砂」とを発音しわけても、「町」と「松」は区別しないことがある。

1. 35 口蓋化した摩擦音

東京語の /se/, /ze/ の子音音素に当るところに、それぞれ口蓋化した摩擦音 [s̥], [z̥] が聞かれる。

[sé^lmi] せみ(蟬) [a^lsé] 汗

門田氏
[(u̇)z(ɨ)] 濁

cf. 金田一春彦氏(東京生れ)
[(u̇)dz(ɨ)] 濁



* (ɨ)は慣用の(u̇)と同じ。

図 50

[ʒe:ɽmuç̣o] 税務署 [kaɽʒe] 風

この [ʒ̣], [ʒ̣̣] の調音に際して、舌さきが下歯の裏に付きつつ、前舌面が硬口蓋に向かって少し持ち上る。[ʒ̣̣] は [ʒ̣] に比べて前舌面の持ち上りの著しいことが注意される。次の口蓋図によっても、それは明らかである。

1.35

門田氏

((a)ʒ̣̣(e))汗

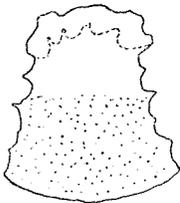


北村甫氏(静岡市出身)

((a)ʒ̣̣(e))汗



(z(e))税



(aʒ̣̣(e))税

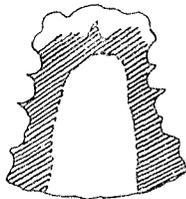


図 51

[ʒ̣̣] の舌の持ち上りがあまり著しくないときには [ç] と交替することがある。[aɽç̣e] 汗

東京語の /sjo/ の /sj/ に当るところには、[ʒ̣̣] の聞かれることもあるが、しばしば [ç] が聞かれる。そのとき、ふつう、くちびるの円めが伴う。

[ç̣o:ɽbe] 商売

[kç̣iç̣o-] 徽章

なお、1.31 に述べたように、[ç̣i] または [ç̣o] と交替して [ʒ̣̣i] または [ʒ̣̣o] の聞かれることがある。このときの [ʒ̣̣] の調音は、さきの [aɽʒ̣̣e] などの [ʒ̣̣] と同じである。

[ʒ̣̣iɽrosima-] 広島

[ç̣o:ɽban-] 評判

東京語の /so, su, si/ の子音音素に当るところには、[s] が聞かれる。/sa/ に当るところには、ふつ

う、[sa] が聞かれるが、[ç̣a] の聞かれる例が一つ記録されている。[ç̣apɽpw] 帽子 この語は、個人によって、[ʒ̣̣apɽpw] とも発音される。/sja, sju/ の子音音素に当るところには、ふつう [ç̣] の代わりに [ʒ̣̣] が聞かれる。

1.36 ある有声音

東京語の母音音素にはさまれた /k/, /t/, /c/ に当るところに、それぞれ有声音 [g], [d], [z] ~ [ʒ̣̣] が聞かれる。

[tsig̃iː] 月 cf. [tsiŋiː] 次
 [maːdo] 的 cf. [mãːdo] 窓
 [kuːzi] 口 cf. [kũːzi] くじ
 [hoːŋo] ほうちょう

この有声音はときどき有声化音 [ḳ], [ṭ], [ṭʃ] と交替する。[ṭsoːˈṭsoː]
 ちょうちん

東京語の /l/ に続く /k/, /t/, /c/ に当るところには、無声音の聞かれることもあり、有声音の聞かれることもある。

[rokːko] 六個 [ag̃ge] 赤い
 [kett̃eː] 帰って [kaddeː] 堅い
 [batts̃iː] やつ (子供をしかるときの、「このやつ」のやつ)

東京語の /N/ に続く /k/, /t/ に当るところには有声音の聞かれないのがふつうである。/c/ の例は記録できなかったが、おそらく同じであろう。

[g̃eːp̃k̃ç̃i] 元気 [g̃unːte] 軍隊

1.37 くちびる音化音

室町時代の京都語の /kw̃, gw̃/ に当るところに、くちびる音化した [k̃^w], [g̃^w], [-ŋ̃] が聞かれる。これは、上の七つの特徴のうち最も力が弱い。

[k̃^waːzi] 火事 [g̃^waːigog̃u] 外国
 [s̃iːŋ̃a] 水瓜 [éːŋ̃a] 映画

1.38 /ai, ae/ に当る [ɛ]

東京語の /ai, ae/ に当るところに、広い母音 [ɛː]~[ɛ] が聞かれる。

[kɛːŋ] 貝 [kowɛː] 苦しい
 [ɛːŋamɛː] あいがめ(藍麴) [nasinɛːː] なす苗
 [omɛːŋaːda] おまえ(目下に向かって)

長母音 [ɛː] と短か母音 [ɛ] は第2音節以下では交替する。これは、[ɛː]~[ɛ] の場合に限らず、一般に、長母音と短か母音は第2音節以下で交替する。

[ammeː]~[ammeː] 塩がきいていない

[mme]~[mme:] (砂糖が) 甘い, おいしい

[šoppe]~[šoppe:] 塩からい

1.39 [k̄ɕ]

東京語の /ki/ の子音音素に当たるところに, 非常に口蓋化した, 摩擦音 [ç] を伴った音が聞かれる。

[k̄ɕiɾda] 北 [k̄ɕi:ɾdo] 生糸 [riɾk̄ɕiɾsi] 力士

1.310 /ju/ に対応する [jo]

東京語の /ju, ju/ に当たるところに, [jo], [o] が聞かれることがある。たとえば,

[joɾgi] 雪 [ço:ɾjo] しょうゆ(醤油) [ko:ɾ] きゅう(灸)

こういう発音は, 若い人たちではあまり聞かれなくなっている。

ちなみに, 「一銭もない」ということを, [džommommo ne] あるいは [džommādemo ne] のように言うが, これらは, 「十女もない」, 「十までもない」に当るものと解釈される。すなわち,

džuu:mommo > d:ɔ:mommo > džommommo

džuu:mādemo > d:ɔ:mādemo > džommādemo

1.4 調査語を選ぶまで

以上の特徴のうちから1.~7.の七つの特徴をとりあげ, その特徴を調べるのに都合のいい語を選んで, 「共通語の調査」の調査語とした。

まず, 特徴1.を調べるために, 「ひげ, 蛇, 百」の三つの語を選んだ。それぞれ /hi, he, hja/ を含む代表語である。/hjo, hju/ を代表する語は適当なものが得られなかつた。適当というのは, だれでも知っていそうで, しかも, 絵に描けることである。

特徴2.を調べるために, 「窓, 鈴, 帯」の三つの語を選んだ。それぞれ /d, z, b/ を含む代表語である。

特徴3.を調べるために, 「息, 尻, 糸, 煙突」の四つの語を選んだ。「息」と「糸」は /'i/ の代表語であり, 「尻」と「煙突」は /'e/ の代表語である。「息」は /'i/ の次に /k/ の続く場合の代表として, 「糸」は /'i/ の次に /t/ の続く場合の代表としてとりあげた。「尻」は「息」と最初のモーラだけ

が異なる語として、また、2モーラ語の代表として取りあげた。これに対して「煙突」は /'e/ に /N/ の続く語の代表として、また、3モーラ以上の語の代表としてとりあげた。これらのうち、「息、糸、駅」は白河地域の調査でも調査語に選ばれた。^{*} なお、/e, z, s/ に先立たれる /u/ の代表語は、特徴4. の代表語で兼用させた。

特徴4. を調べるために、「知事、地図、鳥、墨、烏、辛子、狐、団扇」の八つの語を選んだ。「知事」と「地図」は、共通語で、/zi/ と /zu/ とだけが異なる類音語であり、「鳥」と「墨」、「烏」と「辛子」は、それぞれ、おもに /si/ と /su/ とが異なる類音語である。類音語を選んだのは、対照して調べるのに都合がいいからである。「狐」は第2モーラが /cu/ である3モーラ語の代表として、「団扇」は第2モーラが /ci/ である3モーラ語の代表として取りあげた。

特徴5. を調べるために、「背中、汗、障子、税務署」の四つの語を選んだ。「背中」と「汗」は /se/ の代表語であり、「税務署」は /ze/ の代表語である。「背中」は /se/ が頭に来る場合の代表語として、「汗」は末尾に来る場合の代表語として取りあげた。「障子」は /sjo/ の代表語である。

特徴6. を調べるために、「柿、猫、旗、鳩、蜂、口、靴、松」の八つの語を選んだ。「柿、猫」は /k/ を含む代表語である。「柿」は次に /i/ の来る場合の代表語として、「猫」は次に /o/ の来る場合の代表語として取りあげた。「旗、鳩」は /t/ を含む代表語である。「旗」は /t/ の次に /a/ の来る場合の代表語として、「鳩」は /o/ の来る場合の代表語として取りあげた。「蜂、口、靴、松」は /c/ の代表語である。それぞれ、次のような場合の代表語としてとりあげられた。

蜂 /aci/ 靴 /ucu/

口 /uci/ 松 /acu/

特徴7. を調べるために、「水瓜、火曜日」の二つの語を選んだ。二つとも /kw/

^{*} 白河市では、東京語の /'i/ と /'e/ とに [è] あるいは [e] が当るような音声の特徴が見られた。鶴岡市でも、個人によって、/'i/ と /'e/ とが区別されないことがある。いつも、[è] あるいは [i] である。

の代表語である。「水瓜」は /kw/ が末尾に来る場合の代表語として、「火曜日」は頭に来る場合の代表語としてとりあげた。/gw/ の代表語を選ばなかったのは、特徴 7. の重みから考えて、2 語ぐらいが適当と思われたからである。したがって、/kw/ が頭に来る場合と末尾に来る場合とを調べるにとどめた。

1.5 ひとつひとつの特徴の文化的条件による違い

ここには、「共通語の調査」^{*} で得た結果によって、ひとつひとつの特徴が性、年齢、学歴でどのように違うかということを述べよう。

まず、特徴 1. について、男女の差を見ると、次のようになる。

	平均点	中数	分散	サンプル数
男	0.98	0.94	1.38	226
女	1.36	1.62	1.61	282

平均点と中数は、この特徴を調べるために用意した三つの語について、いくつ共通語音で反応したかを点数で表わしたものである。点数が高いほど、この特徴を著しく残していると思なされる。

上の表によると、男と女との差はきわどいところである。

年齢について見ると、

	平均点	中数	分散	サンプル数
15歳～19歳	1.73	1.91	1.35	92
20歳～24歳	1.53	1.50	1.81	52
25歳～34歳	1.57	1.05	1.47	115
35歳～44歳	1.22	1.05	1.40	100
45歳～54歳	0.66	0.50	1.11	75
55歳～69歳	0.20	0.57	0.37	74

のようであって、44 歳以下と 55 歳以上との間に有意な差が見られる。すなわち、45 歳以上の集団ではこの特徴が著しい。

次に、学歴について見ると、

	平均点	中数	分散	サンプル数
学歴なし	0.33	0.24	0.61	21

* この調査の被調査者および調べ方などについては、II, 2.4 以下を見よ。

小 学 卒	0.81	0.65	1.33	127
高小卒・新制中卒	1.22	1.95	1.49	199
旧制中卒・新制高卒	1.51	1.17	0.53	137
大 学 専 門 卒	1.95	2.20	1.33	22

のようであって、学歴が低くなるにつれて、この特徴が著しくなる傾向性が見られる。

特徴2.については、性、年齢によってはあまり差があらわれない。学歴ではやや差が出る。まず、性については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
男	1.23	0.97	1.52	226
女	1.21	0.98	1.40	282

のように、男と女との間には差がない。

次に、年齢について見ると、

	平均点	中数	分散	サンプル数
15歳～19歳	1.34	1.45	1.38	92
20歳～24歳	1.07	1.50	1.55	52
25歳～34歳	1.57	1.26	1.39	115
35歳～44歳	1.22	0.91	1.48	100
45歳～54歳	0.88	0.88	1.15	75
55歳～69歳	0.75	0.65	1.19	74

のようで、15歳～19歳 および 25歳～34歳 と 55歳～69歳 との間だけに有意な差が見られる。

また、学歴については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
学 歴 な し	0.80	0.67	1.21	21
小 学 卒	0.83	0.96	0.96	127
高小卒・新制中卒	1.18	0.87	1.35	199
旧制中卒・新制高卒	1.57	1.48	1.61	137
大 学 専 門 卒	2.13	2.42	1.51	22

のようであって、学歴が低くなるにつれて、この特徴が著しくなる有意な傾向

性が認められる。

特徴3.については、性による差は見られないが、学歴と年齢の差はやや目立つ。

まず、性については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
男	1.82	1.84	1.75	226
女	2.14	2.33	1.82	282

のように、男女間の差はきわどいところで有意ではない。

年齢については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
15歳～19歳	2.34	2.57	1.53	92
20歳～24歳	2.34	2.25	1.64	52
25歳～34歳	2.30	2.95	0.99	115
35歳～44歳	2.21	2.39	1.53	100
45歳～54歳	1.49	1.93	1.54	75
55歳～69歳	1.09	0.70	1.37	74

のように、44歳以下と45歳以上との間に有意な差が見られる。

学歴については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
学歴なし	1.14	1.00	1.37	21
小学卒	1.74	1.50	1.58	127
高小卒・新制中卒	1.97	1.94	1.83	199
旧制中卒・新制高卒	2.40	2.80	1.67	137
大学専門卒	2.00	2.00	2.18	22

となり、サンプル数の少なすぎる大学専門卒などを除けば、学歴が低くなるにつれて、この音声の特徴が著しくなる有意な傾向性が認められる。

特徴4.については、年齢、学歴による差がきわめて著しい。

まず、性については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
男	3.55	3.66	6.89	226

女 3.74 3.90 6.91 282

のように、両者の間には有意な差は見られない。

年齢については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
15歳～19歳	3.56	3.14	6.37	92
20歳～24歳	4.38	4.50	8.28	52
25歳～34歳	4.57	4.10	6.58	115
35歳～44歳	4.13	3.92	5.90	100
45歳～54歳	2.61	2.46	5.16	75
55歳～69歳	2.29	1.75	5.13	74

のように、44歳以下と45歳以上との差は著しく有意である。

学歴については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
学歴なし	2.00	1.71	3.52	21
小学卒	2.38	2.16	4.14	127
高小卒・新制中卒	3.60	3.62	6.70	199
旧制中卒・新制高卒	4.81	5.06	7.10	137
大学専門卒	5.90	6.71	5.00	22

のように、学歴が低くなるにつれて、この音声の特徴が著しくなる有意な傾向が特に目立つ。

特徴5については、年齢と学歴については、わずかな差が見られる。

まず、性については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
男	2.41	2.32	1.66	226
女	2.54	2.46	0.81	282

のように、両者の間の差は有意ではない。

年齢については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
15歳～19歳	2.73	2.80	1.33	92

20歳～24歳	2.88	3.50	2.13	52
25歳～34歳	2.80	3.17	1.61	115
35歳～44歳	2.70	2.75	1.47	100
45歳～54歳	2.20	2.82	1.65	75
55歳～69歳	1.56	1.10	1.84	74

のように、25歳～34歳 および 20歳～24歳 と 45歳～54歳 および 55歳～69歳との間には有意な差を見ることができる。

学歴については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
学歴なし	1.04	0.75	1.20	21
小学卒	2.12	2.53	1.63	127
高小卒・新制中卒	2.42	2.14	1.82	199
旧制中卒・新制高卒	2.97	3.70	1.46	137
大学専門卒	3.59	3.30	0.25	22

のように、学歴が低くなるにつれて、この特徴が著しくなるという有意な傾向が見られる。

特徴6.については、年齢、学歴それぞれについて差が見られる。

まず、性については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
男	4.71	4.55	8.50	226
女	5.31	5.82	8.46	282

のように、両者の間に有意な差は見られない。

年齢については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
15歳～19歳	5.28	6.33	7.49	92
20歳～24歳	5.96	7.26	8.36	52
25歳～34歳	6.06	7.01	6.70	115
35歳～44歳	5.49	6.71	7.09	100
45歳～54歳	3.96	3.63	8.49	75
55歳～69歳	3.02	2.75	7.17	74

のように、44歳以下と45歳以上との間に有意な差が見られる。

学歴については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
学歴なし	2.66	1.00	8.93	21
小学卒	3.96	3.69	8.35	127
高小卒・新制中卒	5.10	5.89	8.27	199
旧制中卒・新制高卒	6.10	7.31	5.62	137
大学専門卒	6.50	7.16	5.06	22

のように、学歴が低くなるにつれて、この特徴が著しくなるという有意な傾向が目立つ。

特徴7.については、性、年齢、学歴いずれによってもあまり差が出てこない。

まず、性については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
男	1.67	1.64	0.37	226
女	1.80	1.82	0.22	282

のように、差はあるかなきかである。

年齢についても、

	平均点	中数	分散	サンプル数
15歳～19歳	1.84	1.82	0.16	92
20歳～24歳	1.92	1.91	0.08	52
25歳～34歳	1.80	1.80	0.22	115
35歳～44歳	1.77	1.78	0.28	100
45歳～54歳	1.71	1.55	0.08	75
55歳～69歳	1.50	1.35	0.46	74

のように、隣りあう年齢層のいずれの間にも有意な差は見られない。20歳～24歳と55歳～69歳との間にはじめて有意な差が見られる。

学歴については、

	平均点	中数	分散	サンプル数
学歴なし	1.57	1.50	0.44	21
小学卒	1.67	1.64	0.37	127
高小卒・新制中卒	1.74	1.73	0.30	199

旧制中卒・新制高卒	1.81	1.81	1.81	137
大学専門卒	1.81	1.77	0.18	22

のように学歴が低くなるにつれて、この特徴が著しくなるという有意な傾向が見られる。

1.6 簡略かな表記法

文法の記述や語の表記のために、簡単なかな表記法を考案した。ローマ字を基本とする音素記号で表記するのが理想であるが、今回は、いろいろな都合で、かなで表記することにした。かなも、モーラ（音素論的音節）を表わすのにはなんとか間に合うからである。以下に示すように、かたかなを基本にして、これに、ひらがなのものを加えた。

1. [ɸi] フィ [ɸiɸè] フィゲ（ひげ）
 [ɸé] フェ [ɸéɸbi] フェビ（蛇）
 [ɸa] ファ [ɸagwɸo:] ファクシヨ（百姓）
 [ɸu] フュ [ɸuɸzi] フューズ（ヒューズ）
 [ɸo] フォ [ɸo:siɸi] フォースギ（拍子木）
 cf. [ɸu] フ [ɸûdè] フデ（筆）
2. [-do] ド [mādo] マド（窓）
 cf. [dogabè] ドカベ（土べい）
 [-bi] ビ [òbi] オビ（帯）
 cf. [biN] ビン（びん）
 [-ɸo] ゴ [aɸo] アゴ（あご）
 cf. [gòban] ゴバン（碁盤）
 （以下略）
3. [i] イ [iɸi] イキ（息）
 [mi] ミ [miɸidè] ミギテ（右手）
 [é] エ [éɸi] エキ（駅）
 [mé] メ [amè] アメ（雨）
4. [si-, -sie] ス [sina] スナ（砂, シナ）
 [nasie] ナス（なす [野菜], なし [果物]）

- [tsi-, -zi] ツ [tsiè] ツエ (知恵, つえ)
 [mazi] マツ (町, 松)
- [(d)zi-, -~zi] ズ [(d)zĩzĩtsa] ズズチャ (おじいさん)
 [tsĩzi] ツズ (地図)
5. [šè] セ [šèmĩ] セミ (せみ)
 [žè] ゼ [žè:muçò] ゼームショ (税務署)
 [çò] ショ [çò:be] ショーベ (商売)
6. [-do] ト [mado] マト (的)
 cf. [to:siè] トース (いつも)
 [mādo] マド (窓)
 [-gĩ] キ [tsigi] ツキ (月)
 cf. [kçĩ:ša] キシャ (汽車)
 [tsiŋi] ツギ (次)
7. [ka-, -çã] クッ [kazi] クッズ (火事)
 [si:ŋã] スークッ (水瓜)
 [gã-, -ŋã] グッ [gãigogu] グッイコク (外国)
 [è:ŋã] エーグッ (映画)
8. [ɛ] え [ɛ:ŋame] えーガメ (あいがめ)
 [me] め [amme] アンめ (塩がきいていない)
 [we] ゑ [kowe] コゑ (苦しい)
 [je] いえ [haje] はいえ (早い)
 cf. [jégagi] イェカキ (画工)
 [xe] へ [gõzaxe] ゴザへ (<ゴザハレ)
 cf. [ççèbi] フェビ (蛇)
 cf. [ççè] ふえ (灰)
 [be-, -~be] ベ [çò:be] ショーベ (商売)
 cf. [kabè] カベ (壁)
9. [kçĩ] キ [kçĩda] キタ (北)
10. [jo] ヨ [jogi] ヨキ (雪)

2 アクセント

昭和25年10月12日—17日の間、現地において、次のような事項につき、鶴岡市のアクセントを調査した。

- (1) 鶴岡方言のアクセントの体系はどんなものか。
- (2) 鶴岡方言のアクセントと、東京語のアクセントとはどのようにちがうか。
- (3) 鶴岡に住むある個人のアクセントが鶴岡式であるか東京式であるかを判定するためには、どういう語彙について調べるのが最も効果的であるか。

ここに述べるのは、(1)の問題を調査し、(2)の問題を考え、(3)の問題にいちおうの答えを出すまでの経過である。

2.1 鶴岡アクセントの体系

今度調査したところでは、鶴岡方言のアクセント体系は、型の区別の明瞭なアクセント⁽¹⁾に属し、東国式アクセント⁽²⁾に属し、そのうちの外輪式アクセント⁽³⁾、一音節だけを卓立させるアクセント、平板型を有するアクセント⁽⁴⁾、音韻の種類により型の姿が支配を受けるアクセント⁽⁵⁾に属する。これは、広く、北奥諸方言のアクセント⁽⁶⁾ならびに越後北部方言のアクセントに類似するもの

(1) 一型アクセントに対する。この意味で鶴岡方言のアクセントは、同じ山形県の中で、山形方言・米沢方言のアクセントに対して著しく対立するものである。

(2) 服部二郎博士の乙種アクセントに相当する。關東西部・中部一般・越後・北奥・中国・十津川地帯・丹後但馬・九州東北部・四国西南部に分布するもの。二音節語でいうと、第一・二・三類が大体低く始まり、第四・五類が高く始まる。

(3) 東国式アクセントの三種のうちの一つ。越後・北奥・遠江三河・出雲・九州東北部に分布するもの。二音節名詞で言えば、第二類が第三類と異なる型に属し、第一類と同じ型に属するのを特色とする。

(4) 東国式アクセントは大体平板型を有し、ただ青森県方言・筑前方言が平板型を有しない。

(5) 狭い母音の音節の次には、アクセントの“たき”が来ることを避けているアクセント体系の称。北奥・北越後・越中・石川・上総安房・出雲・高松地方・対馬などの諸方言のアクセントに、この傾向が見られる。

(6) 範圍は、青森県・秋田県・岩手県大部・山形県の庄内と村山地方の一部・西置賜郡の一部などに分布する。

で、芳賀^{オースン}紘氏の調査に従えば、大体これと同類のアクセントは、庄内地方⁽¹⁾一般に行われており、秋田県南部地方のもの、および新潟県北部のものとも関係が深いものと見なしてよいようである。

また、少くとも純粹の鶴岡出身の人々の間では、アクセントの個人差は少ないもので、例えば、人によりA型に発音されたりB型に発音されたりするような語は、他の都市に比すると、きわめて数が少いと見なされた⁽²⁾。

2.11 単音節名詞

二種類の型があり、すべての語はそのいずれかに属する。[A]は高く発音されるもの、[B]は低く発音されるものであるが、その対比は極めて顕著で助詞がつかない場合にも厳然と区別される点東京語などところがう。高い語は、大体東京語で上型の語、低い語は大体東京語で下型の語で、広く東国式諸方言に似る。

[A] 上型。例——絵。木。田。手。根。歯。火。目。湯。巢。……

[B] 下型。例——蚊。毛。子。血。名。葉。日。実。矢。

これらの語に助辞がつけば、[A]は $\overline{\text{エガ}}$ 、 $\overline{\text{エノ}}$ ……のようになり、[B]はカガ、ケガのように低平型である。二音節以上の名詞の場合から判断して、《[A]の語+助辞》の形は、 $\overline{\text{エガ}}$ 、 $\overline{\text{キガ}}$ ……のようにならないかと疑ったが、そのような発音にはぶつからなかった。また、《[B]の語+助辞》の形は、丁寧な発音では、カガ、ケガ……のように低平調になるが、無造作な発音ではむしろ、 $\overline{\text{ケガカガ}}$ のような低い下降調になって、ちょっと聞いたのでは、[A]の語とまぎらわしかった⁽³⁾。が、鶴岡人にとっては、○○という音調と、○○という音

(1) 昭和25年—26年にかけて行われた氏の調査による。その調査の概略は、昭和26年度秋季国語学会研究発表会で公表された。

(2) 鶴岡市での主要な被調査者は、士族男子赤沢経吉氏(明治34年生)、商家女子阿蘇富子氏(明治45年生)、鶴岡第三中学校の少年少女6名、ほか数名である。また、参考として、市外松ヶ岡の清野重蔵氏(明治30年生)ほか数名のアクセントも観察したが、これも全く同じ体系のアクセントと言ってよかった。

(3) 鶴岡方言の音声学的考察(1.音声参照)では、○○型である語彙がかなり○↑○型のように写されている。これは鶴岡人の無造作な発音を(音韻論的ではなく)音声学的に忠実に写した結果によるものである。同様な例は、三音節語、四音節語についても見出される。

調とは、はっきり別のもとの受け取られている様子だった。

2.12 二音節名詞

四種の型があり、それぞれ [A]上下型, [B]下上(起甲)型⁽¹⁾, [C]下上(起乙)型, [D]下下型, と呼ぶことができる。各型に属する語彙は次のようで, [A]上下型には, 東京語で上下型の語の半数(大体第二音節の母音が i, u のもの)が属し⁽²⁾, [B]下上(起甲)型には, 東京語で上下型の語の残りの半数(大体第二音節の母音が a, e, o のもの)が属し⁽³⁾, [C]下上(起乙)型には, 東京語で下上(起)型⁽⁴⁾の語の四分の三ばかり(大体二音節名詞の第三類の語)が属し⁽⁵⁾, [D]下下型には, 東京語で下上(平)型の語と, 下上(起)型の語の四分の一ばかり(大体二音節名詞の第二類の語)が属する⁽⁶⁾。

[A] 上下型。例——秋。海。帯。貝。*影。鯉。猿。鶴。*虹。箸。針。春。松。麦。夜。

[B] 下上(起甲)型。例——朝。雨。板。糸。笠。肩。空。*露。猫。船。

[C] 下上(起乙)型。足。池。犬。馬。親。*亀。皮。草。靴。*雲。米。坂。塩。島。炭。月。波。花。豆。耳。山。指。

[D] 下下型。飴。*石。牛。梅。*音。顔。柿。風。*紙。*川。口。*北。竹。鳥。*梨。*夏。庭。箱。*橋。*旗。鼻。*冬。筆。星。*町。水。虫。*胸。*雪。

このうち, [A]は単独では常に下降型, 助辞がつけば, アキダ, ウミダ…のようで

(1) 起伏型のうちの甲類の意である。次の下上(起乙)型は, 起伏型のうちの乙類の意。鶴岡方言には下上型と称すべきものが三種あり, 起伏型と称すべきものが甲乙二類, 平板型と称すべきものが一つある。

(2) 語例のうち*を附した「影」が例外である。

(3) 語例のうち*を附した「露」が例外である。一時代前にツヨと発音されていたのではなかろうか。また「亀」「雲」は下上(起乙)型に属しているが, これは本来第三類名詞であるから問題はない。

(4) 佐久間博士のいわゆる下上型のこと。佐久間博士のいわゆる下中型(平板型)は下上(平)型と呼ぶ。

(5) 語例のうち, 例外として「虹」は上下型に属している。一時代前にはニジという語形は用いられなかったのであろう。

(6) 語例のうち, *印を附したものがこれである。この類の語が平板型になっている点が, この方言が外輪東国式アクセントに属するゆえんである。

あって問題はない。[B]と[C]とは、単独では、ともに上昇型で、全く同じアクセントを有するが、助辞がつけば注意すべき特色を發揮する⁽¹⁾。すなわち、[B]の下上(起甲)型にはアサガ、アメガのように助辞が低くつくが、[C]の下上(起乙)型はアシガイケガのような下下上型になるのを原則とする。これは無造作に発音させると、アシガ、イケガのような調子や、アシガ、イケガのような調子に聞かれることもあるが⁽²⁾、丁寧に発音させれば、アシガ・イケガとなるから、これを本来の姿とすべきであろう。それからまた、この類の語は、時により、アシガ、イケガと発音することも無いとは言えないようであった。この場合には、[C]の語が[B]の語と全く同じアクセントになるわけである。が、調べてみると、アシガという時は、特に、“それがほかのものではなくて足だ”のように名詞の部分の意味をはっきり言う場合と推定された。つまりアシガ、イケガは、強調形のアクセントというべきもので、基本型としてはアシガ、イケガを取るべきだと判定された。これを総合すれば、[C]の下上(起乙)型+助詞の形は、○○○型を基本型とするほか、○○○、○○○、という音声学的な変種をもち、さらに、強調型として○○○という変種をもつということになる。最後に、[D]の下下型は、単独の場合、ていねいに発音すればアメ、イシであるが、無造作な発音ではアメ、イシになる⁽³⁾。助辞がつくと、ていねいな発音では、アメガ、イシガとなるが、無造作な場合にはアメガ、アメガ⁽⁴⁾のようにも発音される。単独の場合、アメ、イシとなるのは、《単音節名詞[B]+助辞》の場合に見られたと同じ音声学的変種であること明らかである。助辞のついた場合のアメガ、アメガも同様に解釈される。すなわち、[D]の型は基本型としては、○○～○○ダ型、音声学的変種として、単独の場

(1) 下上(起甲)型の語に助辞のついた場合、下上(起乙)型の語と区別を保つのは、一時代前に、それが上下型であったことを推定させる。つまり、単独の場合には下上(起乙)型の語と同型になつているが、助辞がついた場合、もとの型の区別が保たれているわけである。この種の現象は、大原孝道氏により、新潟県北蒲原郡乙村の方言に見られることが報告されているが、最近芳賀綾氏により、同種の現象は庄内方言一般、秋田県方言においても一般に見られることが報告された。しかりとすれば、「方言」7の6 P. 10の記述、小林好日著「東北の方言」のなかの記述は、ともに粗雑であったというべきである。

(2)(3)(4) P. 164 註(3)を参照。

合に〇〇があり、助辞のついた場合に〇〇〇、〇〇〇があると見るべきであろう。

2.13 三音節名詞

五種類の型があり、それぞれ [A] 上下下型、[B] 下上下型、[C] 下下上(起甲)型、[D] 下下上(起乙)型、[E] 下下下型と呼ぶことができる。これらに属する語彙は次のようで、東京語の上下下型の半数以上⁽¹⁾と、いわゆる平板型の三分の一ぐらい⁽²⁾が下上下型になり、東京語の下上下型の大部分⁽³⁾が下下上(起甲)型になり、東京語の下上上(起)型の大部分⁽⁴⁾が下下上(起乙)型になり、東京語の下上上(平)型の過半数⁽⁵⁾と下上上(起)型の一部⁽⁶⁾とが、下下下型に属する。つまり、三音節名詞では、鶴岡方言と東京語との間で、同一のアクセントを有する語彙は非常に少いことになる。なお、鶴岡人の間で、人により二種類のアクセントで発音されている語もぼつぼつ見える。

[A] 上下下型。例 兜。涙。柱。枕。田圃。

[B] 下上下型。例 朝日。命。兎。おとな。鳥。葉。雀。背中。狸。卵。鼠。着物。
(人により[E]のようにも)。野原。島。火鉢。紅葉。眼鏡。

[C] 下下上(起甲)型。例 いとこ。うちわ。男。女。心。境。

[D] 下下上(起乙)型。例 頭。鏡。刀。鉢。話。林。東。南。

(1) 東京語で上下下型の語のうち、どういふ語が上下下型に残るかは、大体音韻の状況によるもので、第二音節が狭い母音、第三音節が広い母音という極めて特殊の条件にあうものが上下下型に残り、他は大体下上下型になっているものと見られる。ほかに、東京語で平板型の語のうち、やはり第二音節が狭い母音、第三音節が広い母音のものが鶴岡で上下下型になっている。これは東京語で平板型の語のうち、「兎」類の語である。

(2) 東京語で平板型の語のうち、「兎」類の語と、「兜」類の語とである。この類が平板型になっていないことは、外輪東国式アクセント方言に多く見られる特色である。

(3) 東京語の下上下型のうち、下上下型に残ったのは大体第三音節の母音が狭いもので第三音節の広いものは下下上(起甲)型になっている。なお「涙」「柱」「枕」が上下下型になっているのは注意すべきだ。

(4) 「男」「女」が下下上(起甲)型であるのは例外である。

(5) いわゆる「形」類の語がここに当てはまる。

(6) いわゆる「小豆」類の語がその例である。「小豆」類の語が平板型であるのは、外輪東国式アクセント方言の特色である。

[E] 下下下型。例 小豆。嵐。形。体。着物。(人により[B] のようにも)。車。子供。魚。桜。力。机。手紙。柳。

このうち、[C] [D] は単独の場合、ていねいに発音すればともにイトコ、アタマで区別されないが、無造作な発音では [D] はアタマのようにも実現することがあり、また [C] [D] とともに、イトコ、アタマのように実現することもある。[E] は無造作な発音ではアズキ、アズキのようにも実現することもある、これは、《二音節名詞 [C] + 助辞》の場合に見られた現象と並行的なものも見られた。

さて、これらの語に助辞をつけると、[A] [B] は形が変らず助辞が低くつき、カプトガ、ナミダガ……、アサヒガ、イノチガ……である。これには問題はない。[C] も形が変らず助辞が低くつき、イトコガ、ウチワガとなるが、次の [D] その間にはっきり相違が現れる点注意すべきである。すなわち、[D] は、低平型に変化し、助辞が高くついてアタマガ、カガミガ……となる。つまり、三音節名詞の [C] は二音節名詞の [B] に相当し、三音節名詞の [D] は二音節名詞の [C] に相当するものである。なお、《[D] + 助辞》の形は、無造作な発音では、アタマガ、アタマガのように、あるいはアタマガ、アタマガのようにも実現することがあった。この方言では、一般に○○○○という型は、○○○○、○○○○、○○○○、○○○○を音声学的変種としてもつというべきであろう。[E] は助辞がつけば、そのままの形に助辞が低くつき、アズキガ、アランガとなる。が、これも無造作な発音においては、アズキガ、アズキガのようにも実現した。

2.14 名詞に附く種々の助辞のアクセント

2.11 — 2.13 には、各型の名詞に助辞「が」のつく場合のアクセントにふれたが、他の多くの助辞は、必ずしも「が」と同じつき方をするわけではない。今、各型の名詞に助辞「だ」「が」「に」「さ」がつく場合のアクセントを掲げれば次のようである。

	語例	+だ	+が	+さ	+た
1 [A] 上 型	「手」	テダ	テガ	テサ	テニ

1 [B] 下型	「蚊」	カダ	カガ	カサ	カニ
2 [A] 上下型	「秋」	アキダ	アキガ	アキサ	アキニ
2 [B] 下上(起甲)型	「朝」	アサダ	アサガ	アササ	アサニ
2 [C] 下上(起乙)型	「足」	アシダ (アシダ)	アシガ (アシガ)	アシサ	アシニ
2 [D] 下下型	「飴」	アメダ	アメガ	アメサ	アメニ
3 [A] 上下下型	「免」	カプトダ	カプトガ	カプトサ	カプトニ
3 [B] 下上下型	「命」	イノチダ	イノチガ	イノチサ	イノチニ
3 [C] 下下上(起甲)型	「心」	ココロダ	ココロガ	ココロサ	ココロニ
3 [D] 下下上(起乙)型	「刀」	カタナダ (カタナダ)	カタナガ (カタナガ)	カタナサ	カタナニ
3 [E] 下下下型	「桜」	サクラダ	サクラガ	サクラサ	サクラニ

2 [C], の条の(アシダ), (アシガ), 3 [D] の条の(カタナダ), (カタナガ)は、いずれも強調した場合の言い方である。「さ」がつく時にも強調した時にはアシサ, カタナサと言いたいものであるが確かめ得なかった。1 [B], 2 [D], 3 [E] で「だ」がついた場合に、カダ, アメダのように最後が上るのは、イントネーションとの組合わせかと疑われたが、確かめ得なかった。また「に」はすべてもとの名詞の型を変えず、それ自身は低くつくが、これは「が」とともに日常あまり用いない助詞だそうであるから、特殊な形かもしれない。また《下下下型のアクセントは、音声学の変種として、〇〇〇調、〇〇〇調をもつ》という類のことは、この助辞のついた形にもすべて当てはまり、例えば、「飴さ」はアメサのほかにもアメサ、アメサのようにも実現し、ていねいな発音においてアメサとなるのである。

2.15 動詞・形容詞のアクセント

鶴岡方言の動詞・形容詞のアクセントは、一般の北奥諸方言のそれに似て、特に特色はない。ここに各語の終止形の型を数え、各型に属する語彙を掲げれば下のようである。ここに注意すべきは、[B] [D] の下上型、下下上型(その連体形は下下型, 下下下型)である。これは下上型、下下上型と言っても、次にアクセントの“たき”を有せず、つまり、東京語のいわゆる平板型と性質の似たものである。そして、鶴岡方言の名詞に存在した下上型(甲)(乙)、下下上型(甲)(乙)のいずれともちがうもので、強いて同型のものを求めれば、前項に独

れた《2.11の[B]+「だ」の形(例,「蚊だ」),《2.12の(D)+「だ」の形(例,「飴だ)」と同型とすべきものである。つまり,鶴岡方言では名詞に見られた下上型,下下上型は,(甲)(乙)ともに起伏型の下上型,起伏型の下下上型であるのに対して,動詞・形容詞の下上型,下下上型は平板型の下上型,平板型の下下上型ともいうべきものである。つまり,品詞の別をとわず,単に《鶴岡方言の二音節語の型の体系》という場合には,起伏型三種(上下型,下上(起甲)型,下上(起乙)型)平板型二種(下下型,下上型)とすべきであろう。

[A] 上下型。書く。勝つ。切る。食う。立つ。取る。飲む。吹く。降る。蒔く。待つ。持つ。読む。蹴る。見る。来る。良い。無い。

[B] 下上(平)型。行く。置く。押す。買う。貸す。聞く。咲く。泣く。鳴る。振る。巻く。言う。居る。着る。

[C] 下上下型。余る。歩く。動く。思う。泳ぐ。隠す。曇る。作る。光る。開く。休む。破る。起きる。落ちる。掛ける。逃げる。晴れる。熱い。白い。高い。近い。強い。長い。早い。

[D] 下下上(平)型。上る。遊ぶ。当る。変る。坐る。眠る。捨る。笑う。明ける。上げる。借りる。捨てる。負ける。赤い。甘い。薄い。堅い。軽い。遠い。広い。

これら各型の発音は,音声学的変種を有すること,名詞の場合と同様である。例えば,下下上型の語は,アガルと発音されるほかに,無造作な発音では,アガル,アガルのようにも実現する。

2.16 動詞・形容詞の變化形のアクセント

鶴岡方言において前項にあげた各型の動詞・形容詞の終止形以外の形のアクセントはどうであるか。今,各型別に,主な活用形およびそれに助詞・助動詞がついた形のアクセントを示せば次のようで,大體多くの北奥諸方言と一致する。

[A] 上下型の動詞 例——「書く」。カカナイ,カキマス,カイト,カイタ,カク(モノ),カクナ,カケ,カロー。

[B] 下上型の動詞 例——「泣く」。ナカナイ,ナキマス,ナイテ,ナイタ,ナク(モノ),ナクナ,ナゲ,ナロー。

[C] 下上下型の動詞 例——「掛ける」。カケナイ,カケテ,カケタ,カケロ,下上下型の形容詞 例,「白い」。シロク,シロカッタ,シロイ(モノ)。

[D] 下下上型の動詞 例—「明ける」₁、アケナイ、アケテ、アケタ、アケロ、

下下上型の形容詞 例、アカク、アカカッタ、アカイ(モノ)。

これら各形のアクセントは、いずれも名詞のアクセントの条に述べたような音声学的変種を有することというまでもない。

2.2 鶴岡アクセントと東京アクセントとの主な差異点

鶴岡方言のアクセントは2.1に述べたような内容を有するものであるが、これを東京語のアクセントに比較した場合、その差異点はどこにあるというべきだろうか。2.11—2.16で考察したことから帰納すれば、その主要な差異点は、次のように要約できる。

(1) 東京語で上下型の語は、鶴岡方言では約半数が下上(起平)型である。

例 2.12の[B]にあげた二音節名詞の「朝」「雨」……等。2.15の[A]にあげた、終止形上下型二音節動詞の命令形「書け」。

この法則は、東京語の上下型の語のうち、第二音節が広い母音の音節である場合に適用される。これは過去の時代において、鶴岡方言のそういう音韻構造の上に、〇〇型>〇〇型という型の変化が起ったことを示すものと考えられる。

例外として、上型単音節名詞+「だ」「が」「さ」の形は上下型に発音される。これは助詞を高く特立する語例がないために、古い上下型でとどまっているものであろう。

(2) 東京語で下上(起)型の語のうち、一部が鶴岡方言では下下型である。

2.12 [D] にあげた二音節名詞の第二類の語がその例である。

第二類二音節名詞が、外輪東国式方言で平仮型であり、中輪・内輪東国式方言で起伏型である原因は、現在のところ定説がない。恐らく古い時代に第三のアクセントをもっていたものが、中輪・内輪方言では第三類名詞と合流し、外輪方言では第一類名詞と合流するに至ったものであろう。

(3) 東京語で下上(平)型の語の大部分が鶴岡方言では下下型である。

例 2.11 [B] にあげた下型単音節名詞+助詞「が」「に」「さ」の形。2.12 [D] にあげた二音節名詞「飴」「牛」……の類の単独の形。2.16 [B] にあげた終止形下上型の動詞の連体形。

これらは、東京語で下上(平)型の語のうち、次へ続く語、または次への切れ続きの不定の語である。この法則は(6)(7)(8)と関連をもつものである。鶴岡方

言でも一時代前には東京語と同じアクセントであったものが、最初の「下」の音節にあとの音節が引かれて下上型>下下型の変化を起し、現在のようになったものと考えられる。東京で下上(平)型の語のうちでも、“そこで切れる語”では鶴岡でも下下型になっていない。下上(平)型のままである。一箇の型が、その職能のちがいによって型の分化を起した典型的な例である。

(4) 東京語で上下下型の語は、鶴岡方言では原則として下上下型である。

例。頗る多く、2.12[B]の二音節名詞「朝」「雨」の類+助辞「だ」「が」「さ」「に」の形、2.13[B]にあげた三音節名詞「命」「からす」の類の単独の形、2.16[C]にあげた下上上型一段活用動詞(例、「掛ける」)+助辞「た」「て」の形、2.16[C]にあげた下上下型形容詞(例、「白い」)の連用形など。これらは東京語で上下下型の語の大部分、すなわち、第二音節に狭い母音をもち、第三音節に広い母音をもつ以外のすべての語にあてはまるもので、一時代前に、鶴岡方言には上下下型>下上下型という規則的な型の変化が起ったものと推定される。この法則は、(1)の法則と関連をもつものと考えられる。

《二音節名詞+助辞》の形のうちに「秋に」「海に」など「に」のついた形は、下上下型になってもいいはずであるが上下下型である。これは、「秋」「海」などの単独の場合や、他の助辞「が」「さ」「だ」がつく場合のアクセントへの類推が働いて型の変化を起さずにいるものであろう。また、東京語で上下下型、鶴岡方言で下上下型の語のうちには、東京語で下上下型から上下下型へ型の合流を起こしたものがあり、例えば「命」「姿」などはその例であると思われる。「涙」「枕」も、他の諸方言のアクセントから判断すると、鶴岡方言では一時代前には、ナミダ・マクラだったろうと思われるが、今ナミダ・マクラであるところをみると、鶴岡方言で上下下型>下上下型という変化が起ったというよりは、むしろ上下下型と下上下型との型の混同が行われ、大部分が下上下型に変化した、そして上下下型に発音しやすい少数の語は上下下型に変化したと見るべきかもしれない。

(5) 東京語で下上下型の語は、鶴岡方言ではその半数が下下上(起甲)型になっている。

例。2.12[C]にあげた二音節名詞「足」「池」の類+「だ」「が」「さ」の形、2.13[C]にあげた三音節名詞「いとこ」「心」の単独の形、2.16[B]にあげた下上型二音節動詞(例、「泣く」)+助辞「な」の形、2.16[C]にあげた下上下型一段活用三音節動詞の命令形(例、「掛ける」)など。これらは東京語で下上下

型の語のうち、第三音節の母音が広い語に規則的に見られる変化である。恐らく、一時代前に、鶴岡方言では下上上型>下下上型という型の変化が起り、それが第三音節に広い母音を有する語をおそったものであろう。この法則は、鶴岡方言で、“たき”の位置が東京語より後にすべっているという点で、(1)(4)と同種類のものとするべきものである。

(6) 東京語で下上上(起)型の語は、鶴岡方言では大部分下下上(起乙)型になっている。

例えば、2.13 [D] にあげた「頭」「男」などの名詞の単独の場合がこれである。これは東京語で下上上型の名詞のうち「頭」類の語の上に見られる法則で、鶴岡方言では一時代前には東京語のように下上上型に発音していたものが、高い音節をなるべく低く発音しようという傾向のために、下上上型>下下上型という変化を起し、現在のような相違を呈するに至ったものと推定される。この法則は、上にあげた(3)の法則、次に述べる(8)(9)の法則と同じ傾向のものと考えられる。

(7) 東京語で、下上下型の語、下上上(起)型の語の一部は、鶴岡方言で下下下型となっている。

例。2.12 [D] 2.14 にあげた二音節名詞「石」「音」の類+助辞の形、2.13 [E] にあげた三音節名詞「小豆」「力」の類の単独の形など。これは、(2)に掲げた法則と関係のあるもので、外輪東国式方言と中輪東国式方言とが別れ出る以前には、第三のアクセントを有していた語類であろう。

(8) 東京語で下上上(平)型の語は、鶴岡方言では大部分下下下型になっている。

例。2.12 [D]、2.14 [D] にあげた名詞「飴」「牛」の類+助辞「が」「さ」「に」の形、2.13 [E] にあげた三音節名詞「形」「体」の類の単独の形、2.15 [B] 下上型二音節四段活用動詞(例、「泣く」)の連用形+「て」の形、下下上型三音節一段活用動詞(例、「上げる」)の連体形、および連用形+「て」の形、下下上型三音節形容詞(例、「赤い」)の連用形および連体形など。これは、東京語で下上上(平)型の語(ただし(9)(10)にあげる語を除く)のうち、次へ続く語、または切れ続きの定まらない語について規則的に言えることで、恐らく鶴岡方言では

一時代前に下上上(平)型(>下下上型)>下下下型という変化が起ったものと考えられる。変化の起った動機は、鶴岡方言において、少しでも高い音節を少くしたいという要求の現れであろう。

(9) 東京語で下上上(平)型の語の一部分が、鶴岡方言では下下上(平)型になっている。

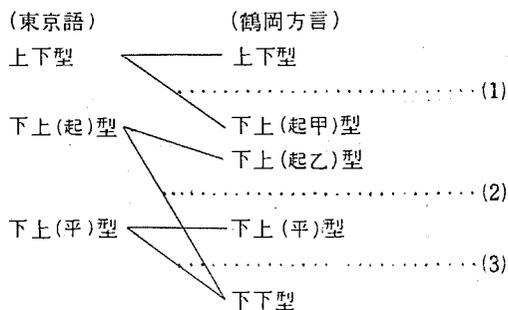
例。2.12 [D], 2.14 [D] にあげた二音節名詞のうち「飴」「牛」の類+「だ」の形, 2.16 [B] にあげた下上型四段活用動詞(例, 「泣く」)+助辞「た」の形, 2.15 [D] にあげた三音節動詞「上る」「当る」「明ける」「上げる」の類, 三音節形容詞「赤い」「堅い」の類の終止形, 2.16 [D] にあげた下下上型一段活用の動詞(例, 「上げる」)の命令形, およびその連用形+「た」の形, など。この例である。これは、鶴岡方言で、一時代前に下上上(平)型の上に、(8)に述べた、下上上(平)型>下下下型という変化が起った時に、そこで切れる語においては、下上上(平)型>下下上(平)型という規則的な変化が起ったものと推定される。その動機は、(3), (8)などにおけると同じく、鶴岡方言における、高い音節を少しでも少くしようという意図の現れであろう。

(10) 東京語で下上上(平)型の語の一部分が、鶴岡方言では下下上型または上下下型に発音されている。

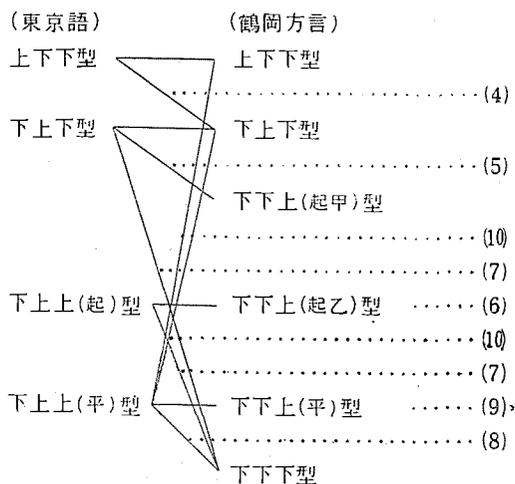
例えば、2.13 [B] および [A] にあげた「兎」「葉」「田圃」「柱」などがこの例である。これらは、三音節名詞のうちで「兎」類に属するものの大部分および「兜」類に属するもの的一部分であるが、なぜこの類が東京語と鶴岡方言とで異なる型になっているかは明らかでない。恐らく両アクセントが分裂する以前に第三の型で発音されていたものが、東京語では「形」類の語に合流して下上上(平)型になり、鶴岡方言では「命」類の語に合流して下下上型または上下下型になったものかと思う。なお、これらの語のうち上下下型になっているものは、第一音節に広い母音、第二音節に狭い母音、第三音節に広い母音を有するもので、それ以外の語はすべて下下上型になっている。

以上、(1)―(10)において、考察し終えた東京語と鶴岡方言との差異を、表で示せば次のようになる。

[二音節語]



〔三音節語〕



2.3 アクセント調査のためには
どんな語を選んだらよいか

鶴岡方言と東京語とのアクセントの相違は、2.2 に述べたように要約されるが、さて次の問題は、《ある個人——鶴岡在住のある個人のアクセントが鶴岡式であるか東京式であるかを決定するためには、どういう語をとってアクセントを調べたらよいか》ということである。もちろんこのためには、その個人について、調査する語が多ければ多いほどよいわけではある。が、到底そういうことは許されない。《なるべく少数の語彙について調査し、それによって他の多くの語彙のアクセントを類推する》そういう方法をとらなければならない。

それにはどういう語彙をえらんだらよいか。

今、ここで動かすことのできない事実は次のとおりである。

(イ) 今度の調査を受ける人は、ふだん、アクセントということなど全然考えたこともない人たちであり、また、言語に関する調査など、一度も受けたことのない人たちが大部分である。

(ロ) 同一個人についての調査は 40 分以内ですまされることが望ましい。

しかも、調査する内容はアクセントだけではなくて、一般音韻・語法・語彙の各部面に亘る。

それゆえ、

(ハ) アクセントを調査するための時間は非常に限られる。具体的には 2・3 分である。

(ニ) 以下から次のことが導かれる。

(一) アクセント調査のために用意される語彙は 5 語以内が適当である。

(ホ) その語を発音させるためには、その語を絵に書いてその名を言わせる方法をとるのが適当である。このためには次のことがきまってくる。

(ヘ) 調査語彙は名詞で、しかも絵に書けるもの、紛れないものがよい。

そしてまた、別に次のことがらも既定の事実である。

(ト) アクセント調査に当たる人は、一人ではない。そのうちには、アクセント調査にはあまり熟練しない人もまじる。

大体以上のような条件で、アクセント調査の語彙を選ぶわけであるが、そのためには、選ばれるべき語彙は次のような性格のものでなければならぬ。

[A] その語のアクセントを調べれば、他の多くの語のアクセントは調べなくてもすむもの、つまり、その語のアクセントから、他の多くの語のアクセントが類推できるようなものが望ましい。

[B] その語の、鶴岡式のアクセントと、東京式のアクセントとのちがいが、耳に非常にはっきり聞き分けられるものが望ましい。何度も発音しなおさせた結果はじめてちがいが分かるものや、ちがいを聞き分けるために、特別の操作を必要とするものは不適當である。

[C] その語を一般の鶴岡人に発音させる場合、その語を単独に自然な調子

で発音することが、ごく簡単にできるものが望ましい。

然らば、具体的には、何という語を選んで調査したならばよかろうか。今、[A] [B] [C] の条件に照らしあわせながら、2.2 に考察した鶴岡方言と東京語の差異点を再検討してみよう。

まず、[A] の条件について考える。即ち、一つの語のアクセントを調べただけで、他の多くの語のアクセントを類推したい。それにはどんな語を選ぶべきか。

我々は、2.2 において、例えば、《東京語で上下下型の語が、鶴岡方言では下上下型になっている》というような事実を見た。今、このことの意味を深く考えてみると、これは、けっして、例えば《「野原」という語が東京では上下下型であるが、鶴岡方言では下上下型である》《「朝が」という語が東京語では上下下型であるが、鶴岡方言では下上下型である》……というような条項を単に寄せ集めたものではない。東京で上下下型の語ならば、その意義用法に関係なく鶴岡方言では下上下型になっているのである。これは《個々の語》の問題ではなくて《アクセント体系そのもの》の問題である。即ち、《東京語にある、上下下型という型そのもの、それが鶴岡方言では下上下型になっている》という意味だと理解すべきことになる。

そこで、理論的にはこうなるはずである。《2.2 で、例えば(4)の条に載っている165語のうち1語をとって鶴岡人に発音させた場合、もしその個人が下上下型に発音するならば、その個人はそこにあがっている他の語をも下上下型発音するであろう。もし、その個人が1語を上下下型に発音するならば、その個人は、他の語をも上下下型に発音するであろう》つまり、《例えば、(4)の条に載っている語は、どの語でも、そのアクセントは他のアクセントを代表し得る》と考えられる。そして、それは、(4)に限らず、(1)―(10)のすべてに亘って同様なことが言えるはずである。

理譯的にはこうなるが、実際にはどうであろうか。この点を明らかにするために、筆者は鶴岡市第三中学校へ行って、その予想をたしかめてみた。中学校には、純鶴岡っ子のほかに、全国各地から転校して来た少年少女がいる。そういう子どもたちのアクセントは、第一章でのべた純鶴岡人のアクセントとは大分

ちがったものもある。そういう子供たちについて、果して《例えば「野原」をノハラという子どもは、「朝が」をアサガと言い、「野原」をノハラという子供は、「朝が」をアサガというだろうか》ということ調査してみたのである。

その結果、この推定は、完全には正しいとは言えないことがわかった。すなわち、前節の(1)―(10)にあげた各項の語彙において、一つの項目にあげた語彙全部が各人を通じて同じにはなっていなかった。即ち、(4)の語彙においてある個人が「朝が」をアサガと言ったからと言って「野原」をもノハラと言い、「白く」をもシロクと言うとは断定できなかった。

しかし、それならば「朝が」ならば「朝が」という一つの語のアクセントは、全然他の語のアクセントへの類推を許さないかというのにそうでもなかった。例えば(1)―(10)の語彙において、同じ種類の品詞に属する語彙の間では、一つの語のアクセントから他の語のアクセントがかなりの程度まで類推してよいことが認められた。

また、(2)の語彙、(6)の語彙、(8)の語彙などでは、属する品詞の種類がちがっている語彙でも、同一個人においては同一のアクセントで発音される傾向が強かった。そして、それ以外の(1)(2)(4)(5)(7)(9)の語彙においても、所属品詞のいかんを問わず、同一個人では同一アクセントで発音されようという傾向は看取されたのである。

そこでこの調査の結果を総合するとこうなる。

〈2.2 の(1)―(10)各項の各語彙は、同一個人にあっては同一アクセントで発音される傾向がある。そして、この傾向は、所属品詞を同じくする語彙において特に著しい〉

そこで、この章での懸案、ある個人のアクセントが、鶴岡式であるか、東京式であるかを簡単に推定するためには、(1)―(10)の各項から一語ずつとって発音させてみればほぼよいことになる。

ところで、(1)―(10)の各項から一語ずつ調査語彙を選ぶとすれば、全部で10個の語を選ぶことになる。が、上に述べたような時間の制限から、調査語彙は5個しか採れないことになっている。しからは、その5個は、この(1)―(10)各項

のうちのいずれから採るべきだろうか。今、広く一般的に考えれば、他の条件が同一であるかぎり、なるべく[○]多数の語を代表する語を採ることが望ましいこと言うまでもない。然らば、(1)―(10)のうち、なるべく多数の語彙を代表するものとしては、どれがいいかという、最も所属語彙の多い(4)(8)あたりが最も望ましいものとなる。そして(3)(5)(9)などがこれに次ぎ、(1)(6)がその次ぐらい、(7)の(i)(ii)、(10)の(i)(ii)は、あまり好ましくないということになる。即ち、この見地から言うと、《(3)(4)(5)(8)(9)あたりから一語ずつとるのがよさそうだ》ということになる。

が、ここにちよっと問題がある。2.2 に考えたところでは、(3)の条項と、(8)の条項とは深い関係にあるものであった。たしかに、(3)の条項の語を東京式に発音する個人は、(8)の条項の語をも東京式に発音する傾向が見られる。(3)の条項の語を鶴岡式に発音する個人は、(8)の条項をも鶴岡式に発音する傾向がある。つまり(3)をとれば、(8)はそれによって代表されると見られる。そうすると、(3)をとれば(8)をとることはそれほど必要がなく、(8)をとれば(3)はやや不要ということになる。同様な関係で結ばれているものには、(1)と(4)、(2)と(7)の(i)(ii)があり、やや浅い関係で結ばれているものとしては(1)と(5)、(3)と(6)、(3)と(9)などがある。こういう意味では、(10)の(i)(ii)は所属語彙は少いが、他の(1)―(9)のいずれに対しても独立しているという意味で、ここからは一語ぜひとりたいということにもなる。また(2)と(7)の(i)(ii)とは互に関係もっているという意味では、このうちの一方はぜひとりたいということにもなる。こう考えてくると、(1)―(10)の項の語を代表としてとるかは俄かにはきめがたい状況にあるが、長くなるゆえ、このへんで p.176 の [A] の標準についての考察を終え、[B] の標準について考えてみよう。ただし、[A] の標準から考えた、調査語彙としての各項の適当順位は、大体、(4)(8)が最も適当、(2)(5)(9)(10)の(i)がその次ぐらい、ついで(3)、それから(1)というようなことになる。

さて、[B] の標準というのは、《(1)―(10)のうちどの項の語彙の発音において、鶴岡式のアクセントと東京式のアクセントのちがいが耳にはっきり聞かれるかということであった。今、この見地に立って(1)―(10)の各項の発音を検討してみると、まず、(1)の条項は、鶴岡式アクセントと東京式アクセントとがたい

へんははっきりちがっている。東京では第一音節から第二音節に移るところで声
が下降するに対し、鶴岡では声上昇する。つまり声の昇降関係が反対になっ
ているのだから、聴覚的印象のちがいがたいへんははっきりしているわけである。
同様な理由で、(4)と(10)の(ii)も、東京式・鶴岡式のちがいがはっきりしている。
(5)および(10)の(i)は、(1)や(4)ほどではないが、やはりちがいが相当はっきりし
ている。

次に、(2)における鶴岡式・東京式のちがいは、(1)ほどはっきりしていない。
東京では、第一音節から第二音節に移るところで、声上昇するのに対し、鶴
岡では平らに進み、(1)とはちがって、正反対になってはいないからである。た
だしこれはていねいな発音の場合であって、無造作な発音では、鶴岡では下降
的に発音される。つまり、この場合は東京とはやはり正反対の傾向をもって発
音されるのである。この意味で、もし、《無造作な発音を観察する》という限
定を設けるならば、(2)の語彙の場合も、鶴岡式の発音と東京式の発音とは、か
なりははっきりちがって聞こえるのである。(2)と同じ程度の明瞭さをもっている
ものとして、(7)の(ii)をあげることができる。

次に(3)の語彙における相違は、(2)の語彙の相違よりも、いっそうはっきりし
ない。これらの語彙は、東京では本来上昇調の語であって、ていねいに発音す
れば、第二音節は第一音節よりも明瞭に高く発音される。ところがしばしば、
無造作な発音では全平調に、しかも低い全平調に近く発音される。そして他方
鶴岡では、これらの語彙は低い全平型であって、ていねいな発音では低い全平
調で発音されるのである。すなわち、この(3)の語彙は、東京でも鶴岡でも、《と
もに低い全平調に発音されることがある》ということができる。これは、熟練
しない耳には聞き取りにくいと言わなければならない、調査語彙としては不向き
である。このような見地に立つと、このように聞き分けにくいものは、(3)のほ
か(6)(8)(9)などがあり、いずれも調査語彙としては難点がある。特に(7)の(i)の
語彙は、無造作な発音の場合、東京式も鶴岡式もほとんど同じアクセントにな
り、調査語彙としては最も好ましくない。

以上 p. 177—180 に考察したことを総合すれば、調査語彙の選定の基準とし
て[A]の立場からは、(4)(8)が第一位、(2)(5)(9)(10)(i)が第二位、(3)(1)などがその

次……という順位が出、[B]の立場からは、(1)(4)(10)の(ii)が第一位、(5)と(10)の(i)が第二位、(2)と(7)の(ii)が第三位……というような順位が出た。ここで、この[A][B]二つの立場を総合して次の5項から調査語彙を選出しようと思う。すなわち、

- (4) (東京で上下下型, 鶴岡では下上下型の語類)
- (5) (東京で下上下型, 鶴岡で下下上(起甲)型の語類)
- (2) (東京で下上(起)型, 鶴岡で下下型の語類)
- (10)の(i) (東京で下上上(平)型, 鶴岡で下上下型の語類)
- (1) (東京で上下型, 鶴岡で下上(起甲)型の語類)

さて、以上の考察により、調査語彙は、(1)(2)(4)(5)(10)の(i)の各項のうちから1語づつ選ぶのが適当ということになった。その1語としてはどのような語を選ぶべきだろうか。P.176の(ト)(C)に述べた観点と総合して選定した語彙は次のようである。

- [1] 「ねこ」(1)の語彙の代表)。ねこの絵を見せ、「家の中に飼うところいう小さな動物を何と言いますか」とたずねる。
- [2] 「旗」(2)の語彙の代表)いくつかの「旗」を書いた絵を見せて、「こういうものを何と言いますか」とたずねる。
- [3] 「からす」(4)の語彙の代表)からすの絵を見せ、「黒い色の鳥ですが何と言いますか」とたずねる。
- [4] 「うちわ」(5)の語彙の代表)うちわの絵を見せて「夏暑い時に使うものですがこれを何と言いますか」とたずねる。
- [5] 「せなか」(10)の(i)の語彙の代表)調査者が自分のせなかをなで「体のうちのここのところを何と言いますか」とたずねる。

また、調査に当たり、次のことに注意することにした。

「ねこ」について。比較的調査しやすい。無造作に言った発音がネコかネコかはっきりしなかったら、ゆっくり言ってもらえば、どちらかはっきりする。「猫です」「猫と言います」のように助辭をつけて言っても「ねこ」の部分のアクセントは変らない。もしネコのように平らに聞かえたら、もう一度聞きなおし、ことにていねいな発音を求める。

「はた」について。やや調査しにくい。それだけ言わせると、ハタのように言うの

が普通であるが、低平にハタということもある。これは同じアクセントの Variety である。もし「です」をつけるとハタデスであるからいいが、「はたって言います」という時には、元来ハタ型に言う個人も、ハタ型に言う個人も、ハタッテイーマスと言うから、その時は、改めて「はた」の単独の形を言わせなければならない。

「からす」について。比較的調査しやすい。カラス か カラス かはていねいに発音させれば、はっきりする。「からすです」「からすと言います」の形でも、紛れることはない。

「うちわ」について。やや調査しにくい。ていねいな発音ではウチワと言う形で実現するが、無造作な発音ではウチワとなることもある。ウチワもウチワも、同じアクセントの変種と見るべきである。また、チがワよりも、母音が狭く、音節として弱いので、チとワとが同じぐらいの高さに発音した場合に、ワの方が高いように誤り聞かれることもある。ていねいに発音すれば、はっきりするから、迷ったら改めてていねいな発音を求めればよい。

「せなか」について。比較的調査しやすい。カがナより下っているかいないかが問題点であるが、これがはっきりしない場合には、ていねいに発音させてみればよい。

最後に、以上のような語によって調査した結果をつけ加えておけば、鶴岡に住む人たちのアクセントの内容は次のようであった。

第一表は東京語と同じ型で反応すれば1点、そうでなければ0点を与えて、合計点を求め、その分布状態を示したものである。この表では、被調査者を庄内グループと非庄内グループ(1)とに分けて示した。

	庄内グループ	非庄内グループ	
5点	2 (0.4%)	13 (37.2)	15
4	2 (0.4)	4 (11.4)	6
3	11 (2.0)	9 (25.7)	20
2	15 (2.8)	4 (11.4)	19
1	46 (8.5)	4 (11.4)	50
0	467 (86.0)	1 (2.9)	468
計	543 (100)	35 (100)	578

すなわち、86%という大多数の人が東京アクセントと違う型(そのほとんどが鶴岡アクセントの型)である。これは、アクセントというものが、よく言わ

(1) II 3.2 参照。鶴岡市を含む庄内地方で言語形成期の大部分を過ぎた者を「庄内グループ」と呼び、それ以外の者を「非庄内グループ」と呼ぶ。

れるようにきわめて直りにくいものであることがわかると思う。体系としてはどうかはわからないが、個々の語については東京アクセントで反応している人もいることは注意される。また、庄内グループと非庄内グループときれいな逆の分布をしていることも常識どおりである。ここに、点の段階をまとめたもので示そう。

	庄内 グループ	非庄内 グループ
5点, 4点	4	17
3点, 2点	26	13
1点	46	4
0点	467	1

3 文 法

本調査の調査票に盛る文法的特徴を選定するに当って、準備調査として鶴岡市民について文法の調査を行った。その後、補正調査においても文法の調査を行ったので、通じて約 14 名の鶴岡市民について調査することができた。それらの結果をもとにして、鶴岡方言の文法体系の一部、ならびに調査票に盛られた文法的特徴はどのようにして選ばれたかということについて述べる。^{*}

3.1 代 名 詞

人についての代名詞を表示すれば次のようになる。

	自 称	対 称	他 称			不 定 称
			近 称	中 称	遠 称	
単 数	ワタダス ワタス	アナタ アソタ ソナタ	コノカタ コノフイト	ソノカタ ソノフイト	アノカタ アノフイト	ドノカタ ドノフイト ドナタ
	オレ オラ ワス	オマイ オめ(-) ワネ ワ	コレ コノヤツ コイツ け(-)ツ ケツ	ソレ ソノヤツ ソイツ せ(-)ツ [se(-)zɪ]	アレ アノヤツ アイツ え(-)ツ	ダレ (ダイ) ドイツ でーツ
複 数	～ガタ ～タチ ～ドモ ～ラ	～ガタ ～タチ ～ラ (～ベラ)		～ガタ ～タチ ～ラ		

^{*} 直江貞雄氏 無職、明治22年生れ／田中篠氏 農業、明治15年生れ 御家祿／渡部金次郎氏 タバコ販売業、師範卒、明治26年生れ／古野蒿義氏 農業、明治27年生れ 御家祿／弁慶屋呉服店主氏 中学卒、明治27年生れ／村田幸雄氏 公務員、中学卒、昭和3年生れ／朝岡氏 公務員、中学卒、大正9年生れ、22歳から3か年北海道で暮す／今野喜久吉氏 自由業、明治41年生れ／石井貞吉氏 文房具商、明治32年生れ、19歳から3か年東京で暮す／門田正則氏 公務員、師範卒、明治40年生れ
などの諸氏をはじめ男約 10 名、女約 4 名であった。

また、本調査の結果および、庄内各地点に設けた現地調査員に調査を依頼した「庄内地方言語調査」の結果も資料となっている。(この調査を依頼するには、研究所で調査票を作製し、それに基づいて調査してもらった)

参考とした文献は、東条操氏著「方言と方言学」所載のもの、およびその後現れた文献についてできるだけ目を通した。

上の表における記号の使いかたは次の通りである。

- ～ は接続する語を予想する形を表わす
- (～) は接続する語を予想することもあり、予想しないこともある形を表わす
- は長音を表わす
- (-) は長音となっていることもあり、なっていないこともあることを表わす

自称の代名詞のうち、「ワタクス」「ワタス」は改まったときに、「ワス」は老人のことばのなかに現われ、普通には「オレ」「オラ」を用いる。

ワタクスワ イキマスね(一)。〔私は行きません。〕

オレ イカね(一)。〔おれは行かない。〕

オラナグ。〔おれのだ。〕

ワスワ ヤンダ。〔わしはいやだ。〕

対称の代名詞のうち「アナタ」は改まったときに現われる。「アンタ」「ソナタ」もいくらかの敬意が感じられるが「ソナタ」は老人や農家の人のことばに多い。「オマイ」「オめ(一)」は普通の親しい人の間で聞かれ、同輩またはそれ以下の人に対しては多くこの言いかたであるが、特に「オめ(一)」が多い。「ワネ」「ワ」はともにぞんざいな言いかたのときに現われるが、このうち「ワネ」については、ある老人によれば「士族が言い、それも「けんかしたときなどに言う」とのことであるが、御家祿、農業の老婆は「農家の人が言う」と言っていた。また、師範卒業の中年の商店主によれば、「怒ったときに言う」とのことである。「ワ」については、中年の御家祿、農業の男子は「子供を叱るようなときに用いる」と言っていた。いずれにせよ「ワネ」「ワ」は「あまりいいことばではない」ということでは多くの人が一致している。

アナタ ドサ イカハットコグ。〔あなたはどこに行こうとしていらつしやるんですか。〕

ソナタ ナニ ステル。〔あなたは何をしていますか。〕

オめ(一)モ イイバ イインデ ねカ。〔君も言えいいではないか。〕

ワネ コレ スタンデ ねカ。〔お前がこれをしたんではないか。(お前がこれをしたのだらう。)]

ワー ムコーカラ イケ。〔お前は向うから行け。〕

「コノカタ」「コノフィト」などは改まったとき、敬意を表わす場合に用いら

れる。以下「ケツ」まで次第にぞんざいな言いかたになる。「ソノカタ」以下、皆同じである。

コノカタ コンド コラエタ センセ(一)デ ガンス。【このかたが今度来られた先生でございます。】

コイツサ ヤレ。【こいつにやれ。】

け(一)ツ マタ ワリコト シタ。【こいつまた悪いことをした。】

複数を表わすときは自称以下「～ガタ」「～タチ」「～ラ」などの形が聞かれる。そのほか自称のときには「～ドモ」という形も聞かれるが、対称の「ワネ」の複数形は「ワネベラ」の形だけである。

これらのうち、非常に改まつた言いかたのときは「～タチ」「～ドモ」が現われ、ぞんざいな言いかたのときには「～ラ」が現われる。

普通には広い範囲にわたって「～ガタ」の形で現われる。つまりこの「～ガタ」は「アナタガタ」「コノカタガタ」のように同輩以上の人に対して用いられることはもちろんであるが

オメガタ キノ ナニ ステタ。【きみらはきのう何をしていた。】

のように同輩に対しても用いられ、さらに自称の代名詞の場合にも

ワタスガタワ ツカイマスね(一)。【わたしたちは使いません。】

オレガタワ ソげ(一)ダコト スラね(一)。【ぼくたちはそんなこと知らない。】

のように用いられている。

この「ワタクスガタ」についての本調査(調査票—83)の結果は次のようになっている。

性	わたくしたち サンプル数	～タチ	～ガタ	その他
		～ドモ		
		人数(%)	人数(%)	人数(%)
男	226	115 (51)	106 (47)	5 (2)
女	282	133 (47)	145 (51)	4 (1)
計	508	248 (49)	251 (49)	9 (2)

「その他」は～ダ(3), ミソナ(1), ～ラ(1), ワレワレ(1), オレモ(2), 無答(1)である。

上の表で明らかなように「～ガタ」の形で反応したものが男女ともに約半数あった。これは年齢、職業、学歴により多少の差が認められる。たとえば給料生活者は「～ガタ」で反応したものが40%であったが、農業に従事している人は71%であった。

上の表の「その他」の中には「～ダ」という形も含まれている。この形は鶴岡市ではあまり聞かれなかったが、庄内地方にはかなり多く用いられている。「庄内地方の言語調査」の結果は、たとえば男子老年(60歳前後)においては「～ガタ」と「～ダ」との比は3:17になっている。これは自称の複数の場合であるが、対称、他称の複数の場合も含めてみると、

～ダ 92 ～タチ 37 ～ガタ 27 ～ラ 19 ～ドモ 4
 ～ショ 3 ～ベラ 1 ～デランテ 1

となっている。

ともかく「～ガタ」という言いかたは鶴岡方言の一特徴である。そこで、代名詞に関する特徴形としてはほかにも考えられたが、共通語化の調査という観点から「～ガタ」という言いかたを選んで本調査の調査票83に盛ることにしたのである。

なお事物、場所、方角などに関する代名詞の表を示せば次のようになる。

	近 称	中 称	遠 称	不 定 称
事 物	コレ コイツ け(一)ツ (ケツツ)	ソレ ソイツ せ(一)ツ [ss(:)zi]	アレ アイツ え(一)ツ	ドレ ドイツ で(一)ツ
場 所	ココ (コ)	ソコ (ソ) ホコ (ホ)	アソコ アッコ アコ	ドコ (ド)
方 角	コッチ	ソッチ	アッチ	ドッチ

1. コ, ソ, ホ, ド, などは方向などを表わす助詞～サが付くときの形である。
2. コッチ, ソッチ, アッチ, ドッチなどに～サが付くと, コッチサ, ソッチサ……ともなるが, コッチャ, ソッチャ……などのような言いかたが多い。

3.2 動詞・形容詞の活用

3.21 動詞の活用

活用の種類として五種類を認めることができる。その一は「イク」(行く)によって代表される活用形式で、「アル」「スヌ」(死ぬ)などもこの類にはいる。その二は「ミル」(見る)によって代表される活用形式であり、その三は「ウケル」(受ける)によって代表される活用形式である。その四は「クル」(来る)の活用形式である。その五は「スル」によって代表される活用形式である。このうち、その三の活用形式はその二の活用形式ときわめて類似しているので、一括してその二の活用形式において説明する。

3.211 「イク」(行く)によって代表される動詞の活用形式

動詞「イク」(行く)の活用形としては次のような六つの形が現われる。

イカ～ イッ～ イキ(～) イク(～) イケ(～) イコ(一)(～)

「イカ～」には「～ね(一)」「(否定)」、「～レル」(受身・可能・尊敬、ただし改まった場合を除いて普通には～エルの形が多い)、「～セル」(使役)、「～ハル」(尊敬)などが付く。

オレワ イカね(一)ドモ オめ(一)ワ イクカ。【おれは行かないけれども君は行くか。】

コドモカラ アスビサ イカレテ(イカエテ)コマッタ。【子どもに遊びに行かれて困った。】

イカハロバ キ ツケテ イカへ。【お行きになるなら気をつけてお行きなさい。】

ズブンデ カカね(一)タツテ フィトサ カカセレバ イ(一)ンデねカ。【自分で書かなくて他人に書かせればいいじゃないか。】

「イッ～」には「～タ」や「～テ」が付く。

マツサ イッテ カッテ コイ。【街に行って買って来い。】

「イク」(行く)と同じような活用形式を持つ他の動詞においては

オめ(一)ガ カイタンダロ(一)。【君が書いたんだらう。】

ソゲダヨトワ キ(一)タコト ね(一)ノー。【そんなことは聞いたことはないね。】

イヌトコ コロスタ。〔犬を殺した。〕

スンデ スマック。〔死んでしまった。〕

ミズ ノンデル ノー。〔水を飲んでるね。〕

のようになって、共通語の場合と大差はないようである。ただし、語彙的には次のような例もある。

オレモ イクサケ チョット マイテ クレ。〔おれも行くからちよっと待ってくれ。〕

ニオイ カンダ。〔においを嗅いだ。〕

この「カンダ」についての「庄内地方の言語調査」の被調査者 63 人の結果は次のようになっている。

カイダ	カエダ	26	ケエダ	ケイダ	6	カンダ	16
ケンダ	4	カダ	2	ケダ	9		

「イキ(～)」には「～マス」(丁寧), 「～て(一)」(希望), が付く。

この形はまた文を中止する形でもある。

ドコサモ イキマスね(一)。〔どこにも行きません。〕

オレモ イキて(一)。〔おれも行きたい。〕

ガッコサモイキ コーバサモ イク。〔学校にも行き、工場にも行く。〕

「イク(～)」は言いきりの形である。この形には文末助詞の「～ス」(敬語, 親愛)「～チャ」(強め)「～ナ」(禁止), 「～カ」(疑問), などや, 間投助詞の「～ノー」(ね, なあ)などが付く。「～ケ」(回想)もこの形に付く。また, 体言を修飾したり, 助詞の「～ドモ」(けれども), 「～サケ・～ハケ・～スケ」(から)が付く形でもある。

ワタスモ イクス。〔私も行きますよ。〕

ワタスモ イクチャ。〔私も行くよ。〕

オめ(一) イクトキ オレトコ サソツテ クレ。〔君が行くとき, おれをさそってくれ。〕

イクコトワ イクドモ スゴトニワ ナンめ(一)。〔行くことは行くけれども仕事にはなるまい。〕

「イケ(～)」は助詞「～バ」が付いて, 仮定条件を表わすときの形である。ま

た言いきりになって命令を表わす形でもある。

キョー イカね(一) タッチ アスタ イケバ イ(一) シデ ね(一) カ。

〔今日行かなくて、あした行けばいいじゃないか。〕

ハいェク イケ。〔早く行け。〕

仮定条件を表わすときには、このほかに「～コンダバ」(〔gondaba〕) という形がある。^{*}

オめ(一) ガ イクコンダバ オレモ イッショ = イケ。〔もし君が行くなら、おれもいっしょに行く。〕

この「～コンダバ」が「(もし)……なら」のような仮定条件にだけ用いられるのに対して「イケバ」などは未来への仮定にも過去に関しても用いられる。つまり、

アメガ フッコンダバ (フルコンダバ) イカね(一)。〔もし雨が降るならば行かない。〕

のような言いかたに対して、「フレバ」は

アメ フレバ イカね(一)。〔もし雨が降れば行かない。〕

とともに

キンノ アメ フレバ イカッタ ノー。〔きのう雨が降ればよかったなあ。〕
(今日でなくて)

のようにも用いられるのである。^{**}

「イコ(一)」は言いきりで意志・推量を表わす形である。

ハいェク イコ(一)。〔早く行こう。〕

しかしこの形には「～バ」や「～ドモ」が付いていることもある。

ホンヤ = イコ(一) バ ツイデ = カッチ キテ クレ。〔本屋に行く

* ～コンダバのほかにまれに～コンダラ(バ), [gondara (ba)] のような形も現われる。「東北の方言」などにはゴンドラ, ゴッターラのように表記されているが, [okiggondaba] (起きるなら), [aggondaba] (あるなら) のような形もあり, 独立して文節を作ることにも疑問があるのでここでは～コンダバのように表記した。

** 「もし酒用に行くならこれを持って行ってくれ」のときには「イコ(一)バ」または「イクコンダバ」を用い、「イケバ」は用いない。また「君も行けばいいじゃないか」のときには「イケバ」を用いて「イコ(一)バ」「イクコンダバ」は用いない。

ならついでに買って来てくれ。]

ホンヤニ イコ(一)ドモ ズーズマデニワ カエッテ クンでロ(一)。

〔(私は)本屋に行くけれども十時までには帰って来るだろう。〕

この「イコ(一)バ」は「イケバ」や「イクコンダバ」にくらべると、意志的なものが認められる。「アメ フロ(一)バ」のような言いかたはない。

また「イコ(一)ドモ」についてはたとえば三か年を東京で暮したことのある中年の文房具商は「イコ(一)バ」は用いるが「イコ(一)ドモ」は用いない」という。

3.212 「ミル」(見る)によって代表される動詞の活用形式

「ミル」(見る)は活用によって、次の四つの形が現われる。

ミ～ ミル(～), (ミン～, ミッ～)

ミレ～ ミロ(一)(～)

「ミ～」には「～ね(一)」(否定), 「～ラレル(～ラエル)」(受身・可能・尊敬)「～ラセル」(使役), 「～サハル」(尊敬)が付く。また, 「～タ」「～テ」や「～マス」「～て(一)」なども付く。この形は文を中止するときの形でもある。

ソげ(一)ダモノ ミね(一)モンダ。〔そんなものは見ないがいいよ。〕

ミて(一)ト オモエバ イツデモ ミラエンナダドモ。〔見たいと思えばいつでも見られるのだが。〕

ンダバ ツイデニ コレ ミテ クレ。〔それならついでにこれを見てくれ。〕

ウケサハルナ。〔お受けなさいますな。〕

ハいゑクダバ オキラエね(一)。〔早くなら起きられない。〕

「ミル(～)」は言いきりの形である。この形には文末助詞の「～ス」「～チャ」「～ナ」「～カ」などが付く。この形はまた体言を修飾したり、助詞の「～ドモ」「～サケ・～ハケ・～スケ」が付いている形でもある。

オレモ ミル(チャ)。〔おれも見る(よ)。〕

ソげ(一)ダモノ ミルサケ ワリーング。〔そんなものを見るから悪いんだ。〕

ミルコトワ ミルドモ アキヤスクテ ダメダ。〔見ることは見るけれども

飽きやすくつだめだ。]

ソげ(一)ダモノ ミルナ。 [そんなものを見るな。]

ハいえク オキルドモ スゴトワ スね(一)。 [早く起きるけれども仕事はしない。]

ただし、体言の「トキ」「コト」などに連ったり、助詞の「～サケ」「～ナ」「～ドモ」などが付いているときは

ミッコト [見ること]、ミッサケ [見るなら]、ミンナ [見るな]、ミンドモ [見るけれども] の形が多い。*

「ミレ(～)」は助詞の「～バ」が付いて仮定条件を表わしているときの形である。また言いきりで命令を表わしている。

ミレバ スグ ワカンノデ ね(一)カ ノー。 [見ればすぐわかるのでないかなあ。]

ミて(一)バ ハいえク ミレ。 [見たいなら早く見ろ。]

アサネボ サね(一)デ オキレ。 [朝ねぼうしないで起きろ。]

仮定の条件を表わすときにはこのほかに

ミッコンダバ イマ イカね(一)バ ダメダ。 [見るならばいま行かなければだめだ。]

のような言いかたがある。

また命令を表わす場合には「ミレ」のほかに「ミロ」の形が用いられることもある。「オキレ」「オキロ」などについての本調査の結果は次のようである。

性	起きろ	サンプル数	オキロ	オキレ	その他
			人数(%)	人数(%)	人数(%)
男		226	50(22)	176(78)	—
女		282	45(16)	230(82)	7(2)
計		508	95(19)	406(80)	7(1)

その他は オキラへ(4)、オキサへ(1)、オキンカイ(1)、オキナサイ(1)である。

* まれにミッドモ [見るけれども] が聞かれたし、オキルドモ [起きるけれども] のような例も聞かれた。

これは「クル」(来る)、「スル」の場合も同様で、クットキ、クッサケ、クンナ、クンドモ、スットキ、スッサケ、スンナ、スンドモの形が多く、またクッドモ、スッドモの形も聞かれた。

これによると「オキレ」の形が圧倒的である。

次に職業別による違いは次の表によって示される。

職業	起きろ サンプル数	オキロ	オキレ	その他
		人数(%)	人数(%)	人数(%)
給料生活者	78	29 (38)	49 (62)	—
商店主・工場 経営者	64	9 (14)	55 (86)	—
工員・運転手	93	20 (24)	73 (76)	—
日 雇	14	1 (7)	12 (85)	1 (7)
農 業	14	—	14(100)	—
主 婦	124	24 (19)	95 (77)	5 (4)
学 生	56	4 (7)	52 (93)	—
無 職	61	8 (13)	52 (86)	1 (2)

職業不明 4 はこの表から省いた。

これによると給料生活者の 62 %が「オキレ」であるのに対して、農業に従事する人は 100 %「オキレ」である。主婦に「その他」(オキラへ3, オキサへ1, オキンカイ1)が多いのは注意すべきであろう。

また「庄内地方の言語調査」の結果は

オキレ 55 人 オキロ 14 人 オキヨ 1 人

であった。要するに鶴岡市を含めて庄内地方において、命令を表わす形には「ミレ」「オキレ」の形が普通である。「ミロ」「オキロ」は共通語的である。

「ミロ(一)(～)」は言いきりで、意志推量を表わす。またこの形には「～バ」や「～ドモ」が付く。

コノツギ カナラズ ミロ(一)ト オモツテル。〔この次、かならず見よう
とと思っている。〕

ミロバ ミレ。〔見るなら見ろ。〕

3.213 「クル」(来る)の活用形式

「クル」(来る)は活用によって次の六つの形が現われる。

コ～ キ～ クル(～), (クン～, クッ～) コエ～, (クレ～, ケ～) コイ
コ(一)(～)

「コ～」の用例は次のとおり。

コね(一)ト オモ(一)ドモ モスコス マイテッカ ノー。 [来な
いと思うけれどももう少し待っているかな。]

コラエンナダバ コエバ イカッタ ノー。 [来られるのなら来ればよかつ
たねー。]

コラセッコトワ コラセンドモ アトワ スラね(一)ゾ。 [来させること
は来させるがあとは知らないぞ。]

「キ〜」の用例は次のとおり。

オキヤクハン キタサケ オソクナツタ。 [お客さんが来たから遅くなった。]

キて(一)ト オモ(一)ドモ ナカナカ コラレね(一)。 [来たいと思う
けれどもなかなか来られない。]

スチョ(一)ハン ウツサ キナハッタ。 [市長さんが私の家に来なさいまし
た。]

このうち「キナハル」については、ある中年の商店主は「キナハル」と言っ
たが、ある老人は「コナハル」と言った。また、中学卒で3か年間に北海道で
暮した青年の公務員によれば「両形とも老人や在の人から聞いたことはあるが
自分では使わない」ということである。

「クル(〜)」の用例は次のとおり。

ンダバ アスタ マタ クル。 [それならあしたまた来る。]

クルナワ クルドモ オクレンナダ ね(一)カ ノー。 [来るのは来る
けれども遅れるのではないかなあ。]

「コエ〜」の用例は次のとおり。

ハいェク コエバ イイドモ。 [早く来ればいいが。]

仮定条件を表わすには「ケバ」という形も聞かれるが*「コエバ」の形の方
が多い。

チャッチャト ケバ イイドモ ノー。 [さうさと来ればいいけれどもなあ。]

このほかに「クレバ」も聞かれたがこれは共通語的である。

仮定条件の場合にはこのほかに「クッコングバ」の形がある。

* 「コエバ」に対して「ケバ」は「ぞんざいな言いかたである」と明治年41生れの
自由業氏は言った。

「コイ」の用例は次のとおり。

へ(一)ットキ ト スメテ コイ。〔入るとき戸をしめて来い。〕

言いきりで命令を表わす形にはこのほかに「コ(一)」がある。

コッチャ コ(一)。〔こちらに来い。〕

「コ(一)(～)」には次のような用例もある。

ハいェク コ(一)ト オモツタドモ。〔早く来ようと思ったけれども。〕

チャッチャト コバ イイドモ ノー。〔さっさと来るならいいけれどもなあ。〕

この「コ(一)」に対して「コロ(一)」という形も聞かれたが一般的ではない。

3.214 動詞「スル」の活用形式

「スル」は活用によって次のような六つの形が現われる。

サ～ ス(～) スル(～), (スン～, スッ～) セ～ セ(ヨ) ソ(一)(～)

「サ～」の用例は次のとおり。

オラエノ コドモ ベンキョ(一) サナクテ コマツタモンダ。〔私の家の子供は勉強しなくて困ったものだ。〕

スゴトワ サセね(一)。〔仕事はさせない。〕

ソげ(一)ダコト サハルナ。〔そんなことなさいますな。〕

「ス(～)」の用例は次のとおり。

ツイデニ コレ ステ クレ。〔ついでにこれをしてくれ。〕

ソげ(一)ダコト スマスね(一)。〔そんなことしません。〕

ベンキョ(一)スね(一)。〔勉強しない。〕

この否定の言いかた「スね(一)」に対して「サね(一)」があることはすでに述べたが、無職のある老人は「サね(一)」を用いると言い、公務員の青年は「スね(一)」を多く用いると言っていた。

本調査の結果は次の表によって示される。

これによると男女ともに「スね(一)」が 60 % 以上を示している。

また年齢別による違いをみれば、年齢 15 歳から 19 歳までのものの「サね(一)」は 24 % であり、55 歳から 69 歳までのものは 55 % を示している。

性	しない	サンプル数	スナイ	サね(一)	その他
			スね(一)	人数(%)	人数(%)
男		226	141(62)	83(37)	2(1)
女		282	181(64)	99(35)	2(1)
計		508	322(63)	182(36)	4(1)

「その他」は～セン(2), 無答(2)である。

年齢	しない	サンプル数	スナイ	サね(一)	その他
			スね(一)	人数(%)	人数(%)
15歳～19歳		92	70(76)	22(24)	—
20歳～24歳		52	32(61)	20(39)	—
25歳～34歳		115	74(64)	40(35)	1(1)
35歳～44歳		100	67(67)	33(33)	—
45歳～54歳		75	48(64)	26(35)	1(1)
55歳～69歳		74	31(42)	41(55)	2(3)

学歴別による違いは次の表によって示される。

学歴	しない	サンプル数	スナイ	サね(一)	その他
			スね(一)	人数(%)	人数(%)
なし		21	11(52)	10(48)	—
小学卒		127	68(54)	57(45)	2(2)
高小卒 新制中卒		199	125(63)	73(37)	1(1)
旧制中卒 新制高卒以上		159	116(73)	42(26)	1(1)

学歴不明 2 はこの表から省いた

これによれば学歴の高いものほど「サね(一)」の形が少なくなる。

職業別による違いは次の表によって示される。

これによれば農業に従事している人や日雇い労務者は「サね(一)」が多くて、ともに 64 % を示し、給料生活者や学生は「サね(一)」の形が少なく、それぞれ 24 %, 32 % である。

職業	しない	サンプル数	スナイ	サね(一)	その他
			スね(一)	人数(%)	人数(%)
給料生活者		78	59(76)	18(23)	1(1)
商店主・工場経営者		64	39(61)	25(39)	—
工員・運転手		93	60(64)	32(35)	1(1)
日雇		14	5(36)	9(64)	—
農業		14	5(36)	9(64)	—
主婦		124	70(56)	53(43)	1(1)
学生		56	38(68)	18(32)	—
無職		61	42(69)	18(30)	1(2)

職業不明 4 はこの表から省いた。

次に「庄内地方の言語調査」の結果は、たとえば40歳前後の男子は次のようになっている。

サね(一) 5人 スね(一) 15人

「スね(一)」は共通語と同じような形であるが、この形は鶴岡市を含めて庄内地方に多く用いられていることがわかる。

「スル(～)」の用例は次のとおり。

ンダバ オレ スル。 [そんならおれがする。]

ベンキョ(一) スルモンダサケ ナンデモ ヨク オボエテル ノー。

[勉強するものだから何でもよく知っているね。]

「セ～」の用例は次のとおり。

ベンキョ(一) セバ セーセキ ヨク ナーデ ね(一) カ。 [勉強

すれば成績はよくなるんじゃないか。]

このほかに「スレバ」という言いかたもあるが、これは共通語的である。

仮定の条件を表わすには「スルコンダバ」「スッコングバ」という言いかたもある。

「セ(ヨ)」の用例は次のとおり。

ベンキョ(一) セ。 [勉強しろ。]

アスンデバッカリ イね(一)デ スゴト セヨ。 [遊んでばかりいないで仕

事をしろ。]

この「セヨ」は実際には「ショ」のように聞かれることがある。(セ, ショなどの音価については 150~151 ペ参照)

言いきりで命令を表わすにはこのほかに「スレ」「スロ」のような言いかたもあるが、一般的ではない。

「庄内地方の言語調査」の結果はたとえば男子 40 歳前後においては

セ(ヨ) 17 スロ 2 スル 1

となっている。

「ソ(一)(～)」の用例は次のとおり。

スゴト ソ(一)ト オモッタ トコサ オキヤクハン キテ ノー。

〔仕事をしようと思ったところにお客さんが来てね。〕

ソレ ソ(一)バ ツイデニ コレ ステ クレ。〔それをするならばついでにこれをしてくれ。〕

以上をまとめて活用の表を作れば

接続する語 活用語	1	2	3	4	5	6	7
	ね(一) ～レル ～ラレル ～セル ～ラセル ～ハル ～サハル	～タ ～テ	～ナハル ～マス ～テ(一) 中止	言いきり ～ス ～ナ ～チャ ～カ ～ノー ～ドモ ～サケ 体言 (トキ, フィト)	～バ	言いきり (命令)	言いきり (意推量) ～バ ～ドモ
イク (行く)	イカ～	イッ～	イキ(～)	イク(～)	イケ～	イケ	イコ (一)(～)
ミル (見る)	ミ～	ミ～	ミ(～)	ミル(～) (ミン～) (ミッ～)	ミレ～	ミレ (ミロ)	ミロ (一)(～)
クル (来る)	コ～	キ～	キ(～)	クル(～) (クソ～) (クッ～)	コエ～ ケ～ (クレ～)	コイ (コ一)	コ (一)(～)
スル	サ～ (ス～)	ス～	ス(～)	スル(～) (スソ～) (スッ～)	セ～ (スレ～)	セ(ヨ) (スレ) (スロ)	ソ (一)(～)

第一・第七活用形を未然形、第二・第三活用形を連用形、第四活用形のうち言いきり(女を終止する)の形を終止形、体言に連る形を連体形、第五活用形を仮定形、第六活用形を命令形と言つていいであろう。

否定推量を表わす「～め(一)」は第七活用形、第一活用形および第四活用形に付く。第七活用形に付くときは長音でない形たとえば「イコ～」に付くのが普通である。第四活用形に付くときは普通には「イク～」 「ミン～」 「クソ～」 「ス～」 に付く。接続の違いによる表現効果の相違や使用状態の相違などについてははくわしくは調査できなかった。

なお「ユ(一)」(言う)は次のように活用する。

イワね(一)	言わない
イーて(一)	言いたい
イッテ	言って
ユ(一)	言う
ユ(一)フィト	言う人
イーバ	言えば
イゑ	言え
イオ(イを)	言おう
「め(一)」が付くときは	
イワめ(一)	
ユ(一)め(一)	
イオめ(一)	[iome(:)]
イをめ(一)	[iʷome(:)]
イヨめ(一)	[iʷome(:)]

などの形が現われる。「イオめ(一)」「イをめ(一)」「イヨめ(一)」についてはたとえば中学卒の青年の公務員は「イオめ(一)」と言い、壮年の自由業氏は「イヨめ(一)」と言い、中年の文房具商は「イヨめ(一)」「イをめ(一)」の両形を用いている。

以上のように鶴岡市の方言の動詞の活用には特徴的なものも多く見出される。われわれは共通語化の調査に適するかどうかを検討した上、次の項目を調査票に盛ることにした。

- I 命令を表わす言いかた「オキレ」(起きろ)
- II 否定を表わす言いかた「サね(一)」(しない)
また助詞との接続の上から
- III 理由を表わす言いかた「イクサク」(行くから)
- IV 逆接の言いかた「イクドモ」(行くけれども)

それぞれ調査票の 81, 82, 88, 89, に当る。III, IVについては後述する。

3.22 形容詞の活用について

「ハいえ」(早い)という形容詞は活用によって四つの形が現われる。

ハいえク～ ハいえカッ～ ハいえ(一)(～) ハいえカロ(一)

もっとも「ハいえク～」「ハいえカッ～」「ハいえカロ(一)」などの形とともに、「ハヤク～」「ハヤカッ～」「ハヤカロ(一)」などの形も現われる。昭和3年生れの、中学卒の公務員は「ハいえク～」「ハヤク～」の形をどちらも用いるが、どちらかと言えば「ハいえク～」などが多いという。明治年41生れの自由業氏

は「ハいえク〜」などが多いと言ひ、明治32年生れの、文房具商のことばには「ハいえク〜」などの形だけが現われた。

「ハいえク〜」は用言を修飾するときの形である。文を中止するときもこの形である。また助詞の「〜テ」もこの形に付く。

ハいえク コイ。〔早く来い。〕

オレ オキンノワ アンマリ ハいえク ね(一) ノー。〔おれが起きるのはあまり早くないなあ。〕

アサ ハいえクテ ネンノ オセ(一) ノー。〔朝は早くて寝るのは遅いなあ。〕

「ハいえカッ〜」には「〜タ」が付く。

でーブ ハいえカッタ ノー。〔そうとう早かったなあ。〕

「ハいえ(一)(〜)」は言いきりの形である。この形には助詞の「〜ノー」や、回想を表わす「〜ケ」が付く。この形は体言を修飾する形でもあるし、また助詞の「〜バ」「〜ドモ」「〜サケ」なども付く。

ンダ。アノフィット オキンノ ハいえ(一)。〔そうだ。あの人は起きるのが早い(なあ)。〕

ハいえ(一) フィトダ ノー。〔早い人だなあ。〕

ハいえ ノー。〔早いなあ。〕

でーブ ハいえ(一)ケ ノー。〔そうとう早かったっけなあ。〕

ハいえ(一)コトワ ハいえドモ スゴト サね(一) ノー。〔(起きるのが)早いことは早いが仕事はしないねー。〕

ハいえバ ハいえホド イー。〔早ければ早いほどいい。〕

アスタ アサ ハいえサケ モー ネレ。〔あしたの朝は早いんだからもう寝なさい。〕

「ハいえカロ(一)」は推量を表わすときの形である。

オセ(一)カロ(一)ト ハいえカロ(一)ト オナジコトデ ね(一)カ。〔遅かろうと早かろうと同じことでないか。〕

「ハいえ(一)」には朝のあいさつのことばとしては「オハヨ(一)ガンス」の言いかたがあるが、あいさつのことば以外では「ハいえ(一)ガンス」「オセ

(一)「ガンス」のような形で用いられる。

以上をまとめて、動詞にならって活用表を作れば次のようになる。

接続する語	1	2	3	4	5	6	
活用語	～ね(一) ～レル～ラレル ～セル～ラセル ～ハル～サハル	～タ ～テ	用言に連る 中止	言いきり ～ノ～ケ ～ドモ ～サケ 体言(トキ フィット)	～バ	言いきり (命令)	言いきり (推量)
ハいえ (一) 早い	○	ハいえカッ～ ハいえク～	ハいえク～	ハいえ (一)(～)	ハいえ (一)～	○	ハいえカ ロ(一)
クルス (一) 苦しい	○	クルスカッ～ クルスク～	クルスク～	クルス (一)(～)	クルス (一)～	○	クルスカ ロ(一)

形容詞の活用のうちにも特徴的なものは多く見出される。そのうちわれわれは

ハいえ(一)ケ。〔早かったけ。〕

のような言いかたを選んで調査票に盛ることにした。調査票 85 がそれである。

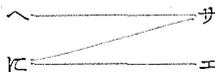
「～ケ」については後述する。

3.3 助詞・助動詞・その他

3.31 ～サ という言いかたについて

方向を示す助詞「へ」が東北地方では「～サ」で表わされることは有名であるが、三矢重松博士はこの「～サ」という言いかたについて「へをサといふは東北一般の通則」であり、「方角^{かたどぎ}方様を指す語である」(荘内語及語釈)と言っている。

斎藤秀一氏は庄内地方の山添村の方言について「方言のサは標準語の『へ』に当たることと『に』に当たることとあるし、標準語の『に』は方言のサに当たることとエに当たることとある。』* と述べて次の図を掲げている。



鶴岡方言においてもやはり方角や場所などを表わすときに「～サ」となる。

* 助詞のサとエ——山形県東田川郡山添村の方言, 国語研究 8 の 9, 21 頁

フィガスサ イク。〔東へ行く。〕

トーキューサー イカスタ。〔東京へ行かれました。〕

ドコサモ イカね(一)。〔どこへも行かない。〕

ココサ アル。〔ここにある。〕

マツサ スム。〔街にすむ。〕

クルマサ ノル。〔車にのる。〕

また、たとえば「アスビ」(遊び)、「ミ」(見)などの動詞の連用形(名詞法)にも付いて、

コドモカラ アスビサ イカレテ コマツ。〔子供に遊びに行かれて困った。〕

エーガ ミサ イク。〔映画を見に行く。〕

のようにも用いられる。

このうち「ミサ」(見に)についての本調査の結果は次のようになっている。

見に 性	サンプル数	ミ ニ 人数(%)	ミ サ 人数(%)	その他 人数(%)
男	226	127 (57)	95 (42)	3 (1)
女	282	149 (53)	133 (47)	—
計	508	277 (55)	228 (45)	3 (1)

「その他」は無答(3)である。男女それぞれ42%、47%が「ミサ」となっている。

年齢別による違いは次の通りである。

見に 年齢	サンプル数	ミ ニ 人数(%)	ミ サ 人数(%)	その他 人数(%)
15歳～19歳	92	48 (52)	44 (48)	—
20歳～24歳	52	28 (54)	24 (46)	1 (2)
25歳～34歳	115	69 (60)	45 (39)	1 (1)
35歳～44歳	100	58 (58)	41 (41)	—
45歳～54歳	75	36 (48)	39 (52)	—
55歳～69歳	74	38 (51)	35 (47)	1 (1)

これによると「ミサ」の形は25歳～34歳にあっては39%，45歳～54歳にあっては52%を示しているが，他は40%台にある。

学歴別による違いはあまり認められなかったが，ただ「ミサ」の形は学歴なしの場合が33%であるのに対して，高小または新制中学卒が50%を示しているのは注目される。

次に職業別による違いは次の通りである。

見 職業	サンプル数	ミ	ニ	ミ	サ	その他
		人数(%)		人数(%)		人数(%)
給料生活者	78	56	(72)	21	(27)	1(1)
商店主・工場経営者	64	35	(55)	28	(44)	1(2)
工員・運轉手	93	45	(48)	48	(52)	—
日 雇	14	6	(43)	8	(57)	—
農 業	14	6	(43)	8	(57)	—
主 婦	124	58	(47)	66	(53)	—
学 生	56	30	(54)	26	(46)	—
無 職	61	38	(62)	23	(36)	—

職業不明ははこの表から省いた。

これによれば給料生活者と日雇，農業従事者，主婦などとの間にはかなりの差がある。

要するに「ミサ」という言いかたは，鶴岡市ではかなり用いられている特徴形の一つである。

この「～サ」という言いかたについての「庄内地方の言語調査」の結果は次のようである。たとえば40歳前後の男子について，調査が出来た20市町村における結果は

調 査 文 例	～サの現われた地点の数	%
東京へ行く	} 20	100
町へ行く		
左に曲る		
馬に乗る		
3に7をたす		
親に心配させる		
そこに坐れ		
空に星が出ている		

山に登る	}	19	95
母親に似る			
あの人に頼もう			
町に二三日いる			
これに水をかけて下さい			
ここに呼んで来い			
どこに行くのか			
車に乗る	}	18	90
自動車に乗る			
紙に字を書く	}	17	85
カジヤに弟子にやる			
タンクに乗る			
俺にもくれ	}	16	80
あそこに行こう			
山に栗の木がある			
映画にばかり行く	}	15	75
家の中にばかりいる			
お前にやろう			
だれに頼もうか	}	14	70
字が小さいのに電気も暗くて読めない			
山にもお別れだ			
もうけたのに (さらにもうける)	}	13	65
あの人にさし上げて下さい			
山に別れをした			
酒田に二里ある	}	12	60
見に行く			
手伝いしに来る			
子供にもわかる	}	11	55
一郎に金を借りさせた			
遊びに行く	}	9	45
大工にばかりなりたがる			
どちらへ行こうか	}	8	40
奉公に出す			
こちらへ来いよ	}	7	35
親に別れた			
どれにしましゅう	}	6	30
左になる			
寒いのにゆかたをきている	}	5	25
まてと言うのにまってくれない			
それには困った	}	4	20

一郎に金を借りられた
 大工にする
 太郎には困ったものだ
 箱になる
 何になる
 秋にはならない
 大工になる
 水になる
 弟子にやる
 子供に泣かれる
 夜中に火事が出た
 いっしょに行きましょう
 静かになる
 盆にはまた来る
 山にしよう
 雨になる
 森になる
 田になる

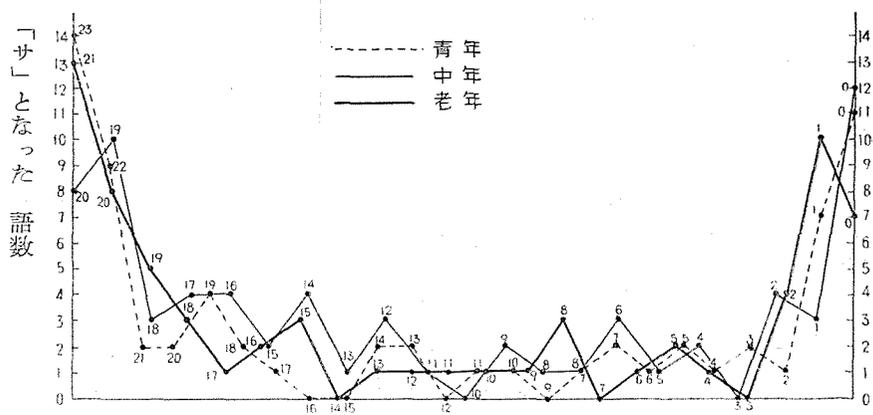
2 10

1 5

0 0

20歳前後, 60歳前後の男子についての調査の結果も項目の順位(～サとなる地点の多少による順位)に多少の異同はあるが, ほぼ同様である。それは次の図で明らかである。(20歳前後について調査ができたのは23市町村, 60歳前後は21市町村である)

図 52



地点の数

つまり分布の型は年齢を通じてほぼ同様である。またその項目の順位もほぼ同じであり、地域による違いも有意差と見られるほどではない。

なお、「～エ」となったものを次に示す。

調査文例	～エとなつた地点の数	%
山になる	6	30
山にしよう	5	25
水になる	4	20
夜中に火事が出た		
いっしょに行きましよう		
静かになる		
雨になる		
森になる		
田になる		
縮になる	3	15
大工にする		
子供に泣かれる		
何になる		
左に曲る		
大工になる	2	10
弟子にやる		
一郎に金を借りされた		
親に別れた		
どれにしましよう	1	5
酒田に二里		
奉公に出す		
一郎に金を借りさせた		
寒いのにゆかたをきている		
大工にばかりなりたがる		
あの人にさしあげる		
ここに呼んで来い		
あそこに行こう		
どこに行くのか		

このほか助詞を用いない言いかたも現われているが、これはここではふれない。

要するに鶴岡市などにおいては共通語の「～＝」「～エ」に対応する言いかたとしては、共通語と同じように「～＝」「～エ」の言いかたをするほかに「～サ」および助詞を用いない言いかたがある。そして「～サ」となるか「～エ」となるかは文の構造やその意味によることが大きい。たとえば「～になる」のような場合は「～サ」となることが少ない。

3.32 ～ダカス ～デラ という言いかたについて

鶴岡方言では並列を表わすときに「～ダカス」(まれに「～デラ」)のような言いかたをする。

スズメダカス カラスダカス イッペー トンデル ノー。(スズメデラ カラスデラ イッペー トンデル ノー。) [雀やら鳥やらたくさん飛んでるなあ]

この言いかたについて、ある中年の男子はもっぱら「～ダカス」を用いると言い、御家祿のある老人(松が岡に居住)は若い人も老人も「～ダカス」「～デラ」の両形を用いると言っている。

「スズメヤラ カラスヤラ」という言いかたについての本調査の結果を見ると次の表で明らかのように、共通語形よりも方言形の言いかたが有力である。

性	…やら サンプル数	～ヤラ, ～ヤ ～ダノ 人数(%)	～ダカス ～デラ 人数(%)	その他 人数(%)
男	226	90 (40)	117 (52)	19 (8)
女	282	110 (39)	160 (57)	12 (4)
計	508	200 (39)	277 (55)	31 (6)

「その他」には、無答(11)、～モ(9)、～ヤダカラ(1)、～ナノ(1)、～ナリ(1)、が含まれている。

しかし、「～ダカス」「～デラ」の内訳は、

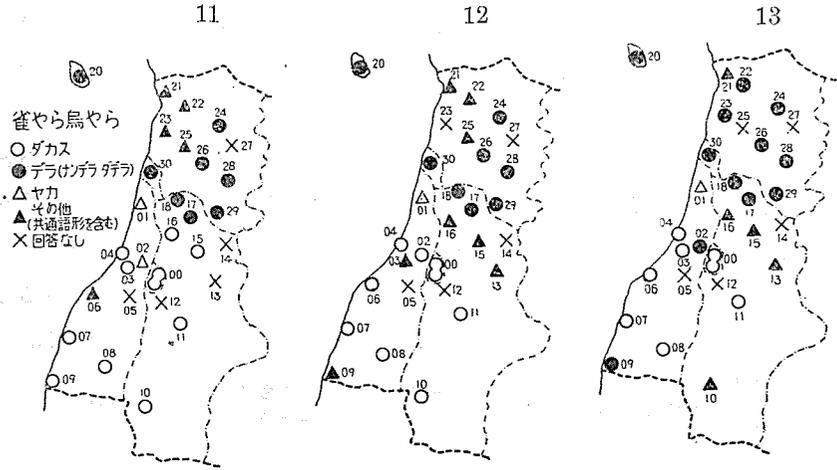
性	～ダカスか ～デラか サンプル数	～ダカス 人数(%)	～デラ 人数(%)	～ダカス ～デラ 人数(%)
男	117	110 (94)	1 (1)	6 (5)
女	160	152 (95)	1 (1)	7 (4)
計	277	262 (95)	2 (1)	13 (5)

であって、「～ダカス」の言いかたが圧倒的である。「～デラ」で反応したのは男女1名ずつであり、男子は小学校卒の商店主、女子は高小卒の主婦で、ともに45歳以上である。

しかし「庄内地方の言語調査」における、この「雀やら鳥やら……」の

調査の結果は次の図に示されるように、鶴岡市の場合とは違いが見られる。

図 53



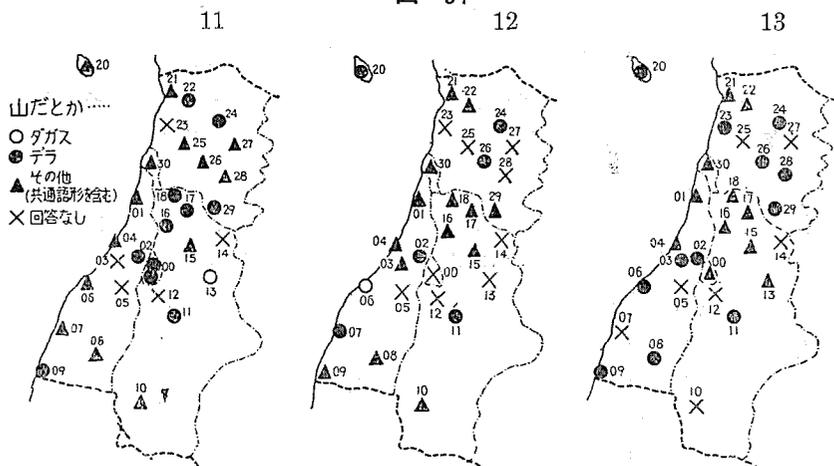
11は男子青年(20歳前後), 12は男子中年(40歳前後), 13は男子老年(60歳前後)である。以下の図みな同じ。

「踊るやら歌うやらたいへんなさわぎだ」についての調査の結果もほぼ同様であった。ただこの場合は、「～デラ, ～ダカス」のかわりに「～タリ」の形の現われているのが四地点ある。

また「山だとか川だとか言っている」についての調査の結果は次の図に示す通りである。

「牛だの馬だの豚だのがいる」「牛と馬と猫が住んでいた」についての調査の結果は、以上の「雀やら鳥やら・・・」と「山だとか川だとか・・・」とにおける「～デラ」「～ダカス」の分布状態の中間的様相を示している。

これによれば「～ダカス」という言いかたは鶴岡市, 東田川郡, 西田川郡に盛んであり, 「～デラ」という言いかたは酒田市, 飽海郡に盛んであるが, しかし, 「山だとか川だとか・・・」のような場合には鶴岡市, 東田川郡, 西田川郡においても「～デラ」の言いかたが多く現われるということが出来る。



3.33 ～サケ ～ハケ ～スケ という言いかたについて

鶴岡方言では「・・するから・・」のように理由を表わす場合には「～サケ」または「～ハケ」「～スケ」を用いる。

この「～サケ」などは用言や助動詞などの終止形に付いて、

イクサケ [行くから], ミルサケ [見るから], クルサケ [来るから], スルサケ [するから], ハいゑサケ [早いから], カカセルサケ [書かせるから], キキテ(一)サケ [聞きたいから], スズカダサケ [静かだから]

のようになっているが、「ミル」(見る), 「クル」(来る), 「スル」(する), 「カカセル」(書かせる), 「ハスル」(走る)などに付くときは、

クッサケ, スッサケ, カカセッサケ, ハスッサケ

のようになっていることが多い。

さてこの「～サケ」「～ハケ」「～スケ」の三つの形は、鶴岡市ではともに用いられている。

オレモ イクサケ マイテ クレ。[おれも行くから待つてくれ。]

の代りに「オレモ イクハケ・・・」と言っても、「オレモ イクスケ・・・」と言っても表現効果の上で大きな差異はない。*

* 「東北の方言」で、「サカエ, サカエデは山形県の庄内及び村山地方にあり, 最も普通な形はサゲであるが, 次のやうな種々なものがある。 [次頁へ続く。]

「イクサケ」などについての本調査の結果は次のようになっている。

条 件		行くから サンプル数	～カラ	～サケ ～ハケ ～スケ	その他
			人数(%)	人数(%)	人数(%)
性	男	226	104(46)	121(54)	1(1)
	女	282	84(30)	197(70)	1(0)
年 齢	15歳～19歳	92	24(26)	68(74)	—
	20歳～24歳	52	14(27)	38(73)	—
	25歳～34歳	115	52(45)	63(55)	—
	35歳～44歳	100	47(47)	51(51)	2(2)
	45歳～54歳	75	23(31)	52(69)	—
	55歳～69歳	74	28(38)	46(62)	—
職 業	給料生活者	78	40(51)	38(49)	—
	商店主・工場経営者	64	27(42)	37(58)	—
	工員・運転手	93	42(45)	50(54)	1(1)
	日 雇	14	2(14)	12(86)	—
	農 業	14	2(14)	12(86)	—
	主 婦	124	40(32)	83(67)	1(1)
	学 生	56	16(29)	40(71)	—
無 職	61	18(30)	43(70)	—	
学 歴	な し	21	7(33)	14(67)	—
	小 学 卒	127	49(39)	77(61)	1(1)
	高小卒 新制中卒	199	65(33)	133(67)	1(1)
	旧制中卒 以上 新制高卒	159	66(42)	93(59)	—
計		508	188(37)	318(63)	2(0)

「その他」のなかには「無答」(2)が含まれている。なお職業不明4, 学歴不明2はこの

サガエ サカエデ サゲー サゲデ スケ ゲテ ゲャ ゲ」158ページと記し、東条操氏の「方言と方言学」では、「理由を表す助詞の『から』に相当するものには(中略) 荘内には『サケ』『スケ』など関西の『サカイ』に相当するものがあり……」(218ページ)と記してあり、どちらにも「～ハケ」の形は挙げていない。(「東北の方言」では、秋田県由利郡に「～ハケ」が用いられていることを挙げています。)

表から省いた。

「～サケ・～ハケ・～スケ」などの方言形で反応したものは全体で62%を占め、これらの方言形がかなり盛んに用いられていることがわかるが、これらの方言形は男性よりも女性に多く、年齢においては15歳～24歳および45歳～69歳のものに多く、職業においては農業従事者および主婦に多く給料生活者に少ない。

ではこの「～サケ」「～ハケ」「～スケ」の三つの間の関係はどうかというと、

行くから 性	サンプル数	～サケ	～ハケ	～スケ	～サケ ～ハケ ～スケ
		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)
男	118	75(64)	30(25)	11(9)	2(2)
女	194	114(59)	54(27)	18(9)	8(4)
計	312	189(61)	84(27)	29(9)	10(3)

上の図の示す通り、男女ともに同じように「～サケ」の形が最も多く、ついで「～ハケ」「～スケ」の順になる。なおこのほかに「～サカイ」とも「～サケ」とも言うると反応したものが1名あり、「～サケ」とも「～ハケ」とも言うると反応したものが5名あった。

次に年齢別による違いは次の表に示す通りである。

行くから 年 齢	サンプル数	～サケ	～ハケ	～スケ	～サケ ～ハケ ～スケ
コード		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)
1 15歳～19歳	66	46(70)	12(18)	4(6)	4(6)
2 20歳～24歳	38	15(40)	16(42)	6(15)	1(3)
3 25歳～34歳	63	40(64)	17(27)	5(8)	1(2)
4 35歳～44歳	51	32(63)	13(25)	5(10)	1(2)
5 45歳～54歳	53	35(66)	14(26)	4(8)	—
6 55歳～69歳	41	21(51)	12(29)	5(12)	3(7)

これを図示すれば

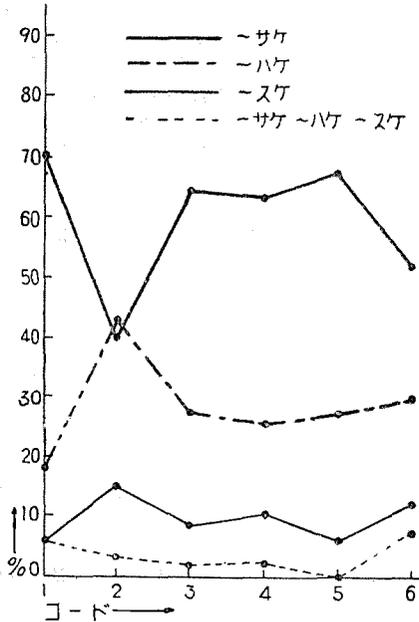


図 55

次に職業別による違いは次の通りである。

職業	行くから 事項	サンプル数	~サケ	~ハケ	~スケ	~サケ ~ハケ ~スケ
			人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)
1	給料生活者	36	17(47)	15(41)	4(11)	—
2	商店主・ 工場経営者	36	23(64)	9(25)	4(11)	—
3	工員・運転手	50	34(68)	13(26)	1(2)	2(4)
4	日 雇	12	10(84)	2(16)	—	—
5	農 業	12	8(67)	1(8)	3(25)	—
6	主 婦	83	52(63)	23(28)	3(4)	5(6)
7	学 生	38	24(63)	10(26)	2(5)	2(5)
8	無 職	42	19(45)	11(26)	11(26)	1(2)

職業不明 3 はこの表から省いてある。

これを図示すれば

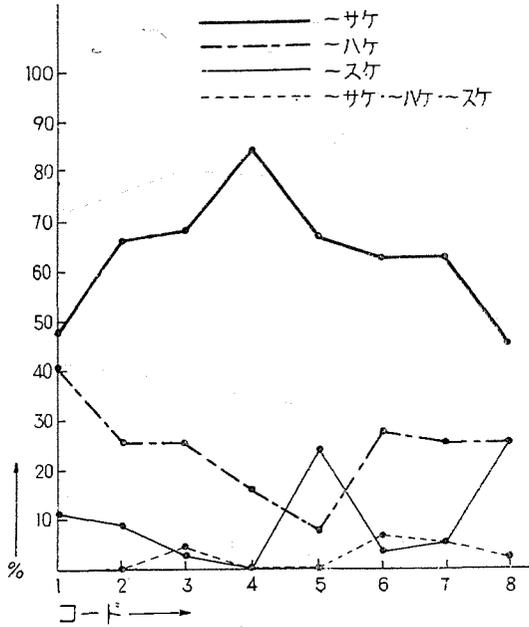


図 56

次に学歴別による違いは次の表の示す通りである。

学 歴	行くから 事 項	サンプル数	~サケ	~ハケ	~スケ	~サケ ~ハケ ~スケ
			人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)
コード	事 項		人数(%)	人数(%)	人数(%)	人数(%)
1	なし	13	11(85)	2(15)	—	—
2	小学卒	77	47(61)	18(23)	9(12)	2(3)
3	高小卒 新制中卒	132	82(62)	36(27)	12(9)	2(2)
4	旧制中卒 新制高卒以上	90	49(54)	27(30)	8(9)	6(7)

これを図示すれば

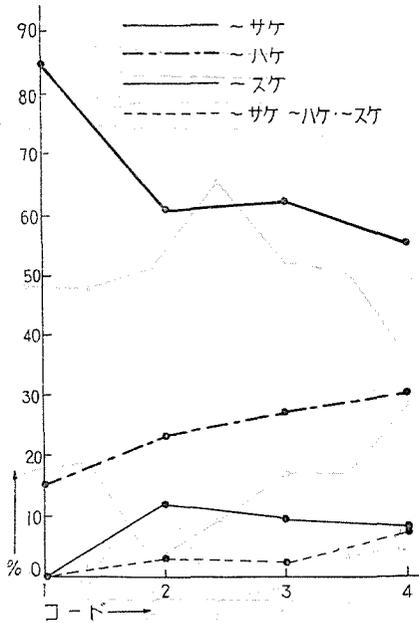


図 57

以上によれば「~サケ」はおしなべて多く、次に「~ハケ」「~スケ」の順になっている。年齢別に見ると、20歳~24歳の場合には「~サケ」の現われる割合が他の年齢の場合に比べて低くなり、「~ハケ」の割合が高くなって結局「~サケ」「~ハケ」の現われる割合がほぼ同じになっている。また「~スケ」もこの年齢においてやや高くなっている。また55~59歳において「~サケ」の割合が低くなり「~ハケ」「~スケ」の割合が相対的に高くなっている。

職業においては日雇いなどの労務者が特に「~サケ」の現われる割合が高い。給料生活者や無職のものは「~サケ」の割合が低く、反対に「~ハケ」「~スケ」は相対的に高い。農業従事者にあつては「~スケ」が「~ハケ」より高くなっている。

学歴においては、学歴の高くなるに従い、「~ハケ」が高くなっていることが注目される。

「庄内地方の言語調査」においては次の項目について調査した。

私も行くからちょっと待って下さい
朝早く起きるから丈夫なのだ
仕事をするからお金もうかる
お客さまが来るから部屋をかたづけよう
うれしいからいつも笑っている
ここは静かだから一休みして行こうよ
あの人も行くだろうから待ってあげよう
東京に行ったからここにいません

その結果は

～サケ	125	～ハケ	13	～スケ	3
～カラ	25	～ノデ	1		

となっている。

「～ハケ」で反応したのは、鶴岡市および東田川郡の余目町、飽海郡の日向村の3地点の場合であった。

また「～スケ」で反応したのは西田川郡の大山町の場合である。

要するに庄内地方全体について見ても「～サケ」はきわめて多く、次に「～ハケ」「～スケ」の順になる。

表現上の効果や文の構造などと「～サケ」「～ハケ」「～スケ」などとの関係も、積極的に認められない。

3.34 ～ドモ という言いかたについて

鶴岡方言では、「行くけれども」のような表現の場合に、「イクドモ」のように「～ドモ」を用いる。「～ドモ」は用言や助動詞の終止形に付いて、

イクドモ ミルドモ クルドモ スルドモ ハい_えドモ
ガッコ(一)ダドモ

のようになっているが、しかし「ミル」(見る)「クル」(来る)「スル」(する)などに付くときは

ミンドモ クンドモ スンドモ

と言われることが多く、まれには

ミッドモ クッドモ スッドモ

のように言われ、ごくまれには

オキルンドモ

のようにも言われる。

この「～ドモ」の分布は、「東北の方言」によれば「山形県の庄内地方、秋田、青森、岩手全体」にわたっている。

「イクドモ」についての本調査結果は

性	行くけれども	サンプル数	～ケレドモ	～ドモ	その他
			人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
男		226	59 (26)	156 (69)	11 (5)
女		282	60 (21)	211 (75)	11 (4)
計		508	119 (23)	367 (72)	22 (4)

「その他」は ～ケンドモ (6), 無答 (5), ～サケ (5), ～ケド (2), ～ハケ (1), ～ノモ (1), ～カラ (1), イクドモ (1) である。

全体として「～ドモ」の形は72%の高率で年齢別による違いは次の表によって示す通りである。

年齢	行くけれども	サンプル数	～ケレドモ	～ドモ	その他
			人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
15歳～19歳		92	16 (17)	74 (80)	2 (2)
20歳～24歳		52	14 (27)	38 (73)	—
25歳～34歳		115	30 (26)	75 (65)	10 (9)
35歳～44歳		100	28 (28)	67 (67)	5 (5)
45歳～54歳		75	15 (20)	56 (75)	4 (5)
55歳～69歳		74	16 (22)	57 (77)	1 (1)

青年および老人に「～ドモ」の現われる度合いが高い。

次に職業別による違いは次の表に示す通りである。

職 業	行くけれども	サンプル数	～ケレドモ	～ドモ	その他
			人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
給料生活者		78	31 (40)	43 (55)	4 (5)
商店主・工場経営者		64	11 (17)	51 (80)	2 (3)
工員・運転手		93	21 (23)	67 (72)	5 (5)
日 雇		14	3 (21)	11 (79)	—
農 業		14	1 (7)	11 (79)	2 (14)
主 婦		124	31 (25)	85 (69)	8 (6)
学 生		56	10 (18)	46 (82)	—
無 職		61	9 (15)	51 (84)	1 (2)

職業不明4はこの表から省いた。

給料生活者において「～ドモ」の現われる度合の低いことが注目される。次に学歴別の違いは次の表に示す通りである。

学 歴	行くけれども	サンプル数	～ケレドモ	～ドモ	その他
			人数 (%)	人数 (%)	人数 (%)
な し		21	6 (29)	15 (71)	—
小 学 卒		127	25 (20)	97 (76)	5 (4)
高 小 卒		199	41 (21)	147 (74)	11 (6)
新 制 中 卒		159	46 (29)	107 (67)	6 (4)
旧 制 中 卒 以上					
新 制 高 卒					

他に学歴不明2がある。

学歴の高いものに「～ドモ」の現われる度合の低くなっていることが注目される。

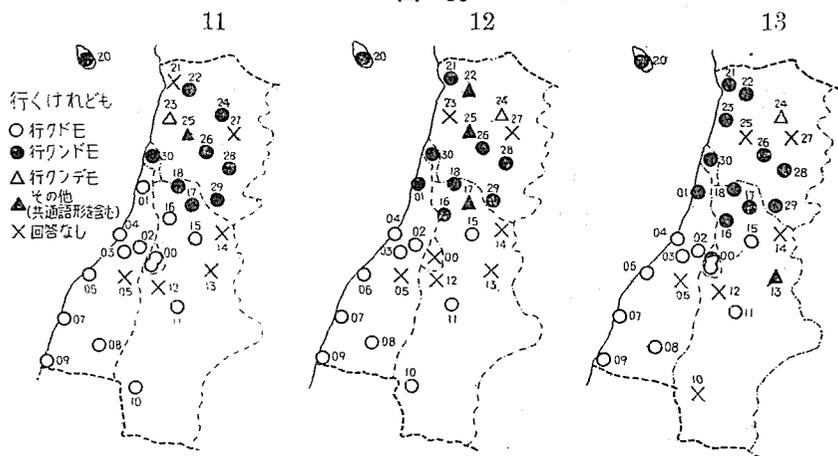
216 ページの表でも示した通り、「その他」に「イクンドモ」の形が1例だけ現われているが、「イクドモ」と言うか「イクンドモ」と言うかについての「庄内地方の言語調査」の結果は次の図のようである。

これによればかなりはっきりとその分布が現われている。

「ミルドモ」「クルドモ」「スルドモ」などよりも「ミンドモ」「クンドモ」

「スンドモ」の形が多いことは鶴岡市においても、庄内地方の他の市町村においても同様である。

図 58



3.35 ~ケ という言いかたについて

回想を表わす場合に、東京では「ぼくも行ったっけ」のように「~たっけ」を用いることがある。鶴岡方言でも同様に「~ケ」を用いるが、これはかなり自由に多くの語に付く。*

アノ フィトワ ジョーズニ カクケ。【あの人は上手に書いたっけ。】

ンダ。アレ ミック。【そうだ。あれを見たっけ。】

ムカスワ アスビサ クッケ。【昔は遊びに来たっけ。】

アノトキワ スゴト スッケ。【あの時は仕事をしたっけ。】

アノフィットワ ツいゑケ。【あの人は強かったっけ。】

アソコワ キレ(一)ダケ。【あそこはきれいだったっけ。】

アレ ミて(一)ッケ。【あれを見たかったっけ。】

ンマク デキね(一)ッケ。【うまくできなかったっけ。】

* 三矢重松氏、庄内語及語釈；斎藤義七郎氏、山形県村山方言の助動詞「ケ」（土の香 13. 3），山形県村山方言助動詞考（方言研究第4輯）；斎藤秀一氏、庄内方言に於ける複語尾（方言 6. 12）。

この「～ケ」は上の例でも明らかなように用言や助動詞などの終止形に付く。もっとも「アル」(有る 在る), 「ミル」(見る), 「クル」(来る), 「スル」などに付くときは

アッケ ミッケ クッケ スッケ

のようになっていることが多い。

斎藤秀一氏の「荘内方言に於ける複語尾」(方言 6, 12)によると, たとえば「食う」という動詞に「～ケ」が付くときに

食ウケ	食ひき
食ッタケ	食ひをりき
クダケ	食ひたりき
コーケ	食ふのだったらうね
クッタロケ	食ってゐたらうね
クタロケ	食ひ終へた所だったらうね

の六つの場合があるという。

われわれが鶴岡市で調査した結果によれば次の四つの場合が見られた。

- | | | |
|---|-----------|-------------|
| 1 | クーケ | 食ったっけ |
| 2 | ク(ッ)タ(ッ)ケ | 食ったっけ |
| 3 | ク(ッ)タロケ | 食ったろうか(なあ) |
| 4 | クッタケンでロ | 多分食ったろう(なあ) |

1と2との違いについては壮年の, 中学卒の公務員は

- 1 は時も場所も不詳で漠然としている。
- 2 は時や場所がわかる。

と説明している。

アノフィット リンゴ クーケ ノー。[あの人はりんごを食ったっけなあ。]

は別に時や場所がはっきりせず, 漠然と「あの人」について言ったのであり,

アノフィット リンゴ ク(ッ)タ(ッ)ケ ノー

は遠足などのように時や場所がはっきりしているのだという。

また, 中年の文房具商は,

- 1 は他人について言う。

2 は自分をも言う。
と述べている。すなわち、

クーケ ノー (クッケノー)

は他人について言うので、自分についてはあまり言わない。しかし、

ク(ッ)タ(ッ)ケ ノー

は自分について言うことができるという。

このことはなお今後の調査にまたねばならない。ただ「～ケ」よりも「～タ(ッ)ケ」の方が過去の回想として確定的であるようである。

しかしこの「～ケ」についての「庄内地方の言語調査」の結果によれば斎藤氏の述べている「六つの場合」の区別が同様にあるという報告もある。

この「～ケ」は、形の変化はないが、次のような辞が付くことがある。

ンマク カクケ ノー。〔上手に書いたっけなあ。〕

アノフィット ンマク カクケカ。〔あの人は字を上手に書いたっけか。〕

アノフィットワ モトワ ンマク カクケドモ ノー。〔あの人は昔は上手に書いたっけがなあ。〕

モトカラ ンマク カクケサケ イマモ ンマインでロ ノー。〔昔から上手に書いたようだったから今も上手だろうなあ。〕

クッタケンでロ ノー。〔多分食ったろうなあ。〕

強かった 性	サンプル数	ツヨカッタ	ツいゑケ	その他
		人数(%)	人数(%)	人数(%)
男	226	138 (61)	84 (37)	4 (2)
女	282	132 (47)	137 (49)	13 (5)
計	508	270 (53)	221 (44)	17 (3)

「その他」は無答(8), 「ツいゑダケ」(2), 「ツいゑガンスケ」(1), 「ツヨイモンダ」(1), 「ツヨイダモノー」(1), 「ツヨイモンダケ」(1), 「ツヨイノー」(1), 「ツカラアッケ」(1), 「ヒドカッタ」(1)である。

ツげ(一) キレ(一)ダツケバ オレモ イケバ イガツタケ ノー。

〔そんなにきれいだったのならおれも行けばよかったなあ。〕*

「ツイエケ」についての本調査の結果は上の表の示す通りである。調査文例は「あの人はすいぶんすもうが強かったなあ」である。

全体として43%が「ツイエケ」で反応している。

年齢別による違いは次の表に示す通りである。

強かった 年齢	サンプル数	ツヨカッタ	ツイエケ	その他
		人数(%)	人数(%)	人数(%)
15歳～19歳	92	32 (35)	60 (65)	—
20歳～24歳	52	22 (42)	30 (58)	—
25歳～34歳	115	72 (63)	41 (36)	2 (2)
35歳～44歳	100	59 (59)	37 (37)	4 (4)
45歳～54歳	75	45 (60)	24 (32)	6 (8)
55歳～69歳	74	40 (54)	29 (39)	5 (7)

これによれば若い人に「ツイエケ」が多く現われていることが知られる。

職業別による違いは次の表に示す通りである。

かった 職業	サンプル数	ツヨカッタ	ツイエケ	その他
		人数(%)	人数(%)	人数(%)
給料生活者	78	56 (72)	21 (27)	1 (1)
商店主・工 場経営者	64	42 (66)	18 (28)	4 (6)
工員・運転手	93	46 (49)	47 (51)	—
日 雇	14	6 (43)	8 (57)	—
農 業	14	6 (43)	8 (57)	—
主 婦	124	61 (49)	56 (45)	7 (6)
学 生	56	26 (46)	30 (54)	—
無 職	61	26 (43)	32 (53)	3 (5)

職業不明4はこの表から省いた。

* なお「早く来ようと思ったが用事があって来られなかった」と言いわけをする場合に「ツイエケ ヲト オモッタドモ ヨージ アツテ コラエネツケ」と言っているのを耳にした。30歳前後の青年である。「ひとりごとのような時には、コラエナカッタ」であり「相手に伝えるときには、コラエネツケ」であるとこの青年は説明してくれたが、くわしくはつきとめ得なかった。

これによれば日雇、農業従事者などに「ツいゑケ」が多く、給料生活者、商店主・工場経営者に共通語形が多く現われていることが注目される。

学歴別による違いは次の表に示す通りである。

強かった 学歴	サンプル数	ツヨカッタ	ツいゑケ	その他
		人数(%)	人数(%)	人数(%)
なし	21	14 (67)	5 (24)	2 (10)
小学卒	127	62 (49)	57 (45)	8 (6)
高小卒 新制中卒	199	104 (52)	92 (46)	3 (2)
旧制中卒 新制高卒以上	159	89 (56)	67 (42)	3 (2)

学歴不明2はこの表から省いた。

すなわち、学歴なしの場合に、共通語形が多く現われているが、これは人数が少ないのでこれをもって直ちに断言はしにくい。むしろ旧制中学卒以上のものに、「ツいゑケ」がいくらか少なくなっていることに注意すべきであろう。

3.36 ~ダバ という言いかたについて

鶴岡方言では共通語の「静かなら」「学校なら」のような言いかたのときには「スズカダバ」「ガッコ(一)ダバ」のように「~ダバ」を用いる。

スズカダバ イイドモ ノク。〔静かならいいんだがなあ。〕

キレ(一)ダバ ミサ イクドモ ノー。〔きれいなら見に行くんだがなあ。〕

アソコ ケシキダバ キット キレ(一)でロ。〔あそこの景色ならきっときれいだらう。〕

この場合に「~ダラ(バ)」を用いることもあるが、「~ダラ(バ)」の形はまれである。本調査の結果は次のようになっている。

すなわち「静かならいいんだが」について調べた結果は、

静かなら 条件		サンプル数	~ナラ	~タバ ~ダラ(バ)	その他
			人数(%)	人数(%)	人数(%)
性	男	226	63 (28)	156 (69)	7 (3)
	女	282	58 (21)	205 (73)	19 (7)

年 齢	15歳～19歳	92	18 (20)	72 (78)	2 (2)
	20歳～24歳	52	10 (19)	42 (81)	—
	25歳～34歳	115	33 (29)	76 (66)	6 (5)
	35歳～44歳	100	32 (32)	60 (60)	8 (8)
	45歳～54歳	75	11 (15)	58 (79)	6 (8)
	55歳～69歳	74	17 (23)	53 (72)	4 (5)
職 業	給料生活者	78	27 (35)	49 (63)	2 (3)
	商店主・工場経営者	64	13 (20)	50 (80)	1 (2)
	工員・運転手	93	21 (23)	66 (71)	6 (7)
	日 雇	14	3 (21)	9 (64)	2 (14)
	農 業	14	3 (21)	10 (71)	1 (7)
	主 婦	124	29 (23)	83 (67)	12 (10)
	学 生	56	14 (25)	42 (75)	—
無 職	61	10 (16)	49 (80)	2 (3)	
学 歴	な し	21	6 (29)	13 (62)	2 (10)
	小学校卒	127	29 (23)	87 (69)	11 (9)
	高小卒 新制中卒	199	40 (20)	152 (76)	7 (4)
	旧制中卒 新制高卒以上	159	45 (28)	108 (68)	6 (4)
	計	508	121 (24)	361 (71)	26 (5)

「その他」には「～ダトキ」(5), 「～ダト」(6), 「無答」(4), 「ダハケ」(3), 「～ナバ」(1), 「～ダトキヤ」(1), 「～デ」(1), 「～ニナレバ」(1), などを含んでいる。
職業不明4, 学歴不明2はこの表から省いた。

のようになっていて、方言形の方が有力である。「その他」に「～ナバ」(1例)があるが、この形は鶴岡市においてはまれに聞くことができる。

次に「～ダバ」「～ダラ(バ)」の内訳を見ると、

性	サンプル数	静かなら		
		～ダバ	～ダラ(バ)	～ダバ ～ダラ(バ)
		人数(%)	人数(%)	人数(%)
男	156	142 (91)	9 (6)	5 (3)
女	205	187 (91)	21 (6)	16 (3)
計	361	329 (91)	21 (6)	11 (3)

となっている。

年齢別の違いは次の表に示す通りである。

静かなら 年齢	サンプル数	～タバ	～ダラ(バ)	～ダバ ～ダラ(バ)
		人数(%)	人数(%)	人数(%)
15歳～19歳	72	60 (83)	6 (8)	6 (8)
20歳～24歳	42	41 (98)	—	1 (2)
25歳～34歳	76	70 (92)	6 (8)	—
35歳～44歳	60	57 (95)	3 (5)	—
45歳～54歳	58	54 (93)	3 (5)	1 (2)
55歳～69歳	53	47 (89)	3 (6)	3 (6)

20歳～24歳のもが「～ダラ(バ)」の形がないことが注目される。

職業別の違いは次の表に示す通りである。

静かなら 職業	サンプル数	～タバ	～ダラ(バ)	～ダバ ～ダラ(バ)
		人数(%)	人数(%)	人数(%)
給料生活者	49	47 (96)	2 (4)	—
商店主・工場経営者	50	43 (86)	6 (12)	1 (2)
工員・運転手	66	58 (88)	6 (9)	2 (3)
日 雇	9	9 (100)	—	—
農 業	10	10 (100)	—	—
主 婦	83	76 (92)	4 (5)	3 (4)
学 生	42	36 (86)	2 (5)	4 (10)
無 職	49	47 (96)	1 (2)	1 (2)

職業不明3はこの表から省いた。

日雇、農業従事者に「～ダラ(バ)」の形がないことが注目される。

学歴別による違いは次の表に示す通りである。

学歴なしのものに「～ダラ(バ)」の形が相対的に多いが、これは人数が少ないので何とも言えない。

要するに「～ダバ」の言いかたが圧倒的に現われている。

「庄内地方の言語調査」の結果も「静かなら」「そんなら」「書物なら」についてみると、

～ダバ 52

～ダラ(バ) 4

となっている。

静かなら 学歴	サンプル数	～ダバ	～ダラ(バ)	～ダバ ～ダラ(バ)
		人数(%)	人数(%)	人数(%)
なし	13	10 (77)	3 (23)	—
小学卒	87	81 (93)	4 (5)	2 (2)
高小卒 新制中卒	152	137 (90)	10 (7)	5 (3)
旧制中卒 新制高卒以上	108	100 (93)	4 (4)	4 (4)

学歴不明1はこの表から省いた。

さて、この「～ダバ」は断定の「～ダ」に条件を表わす「～バ」が付いているものとみることが出来る。この「～ダ」はこのほかに助詞の「～ノ」「～カ」「～サケ」「～ドモ」などが付く。また言いきりに用いられることはもちろん体言に連るときにも用いられる。

ンダ。キレ(一)ダノ。 [そうだ。きれいだね。]

アッコワ ソげ(一) キレ(一)ダカ。 [あそこはそんなにきれいか。]

アノフィットワ キレ(一)ダサケ ミンナカラ スカレン ノー。 [あの人は美しいからみんなから好かれるなあ。]

ケシキワ キレ(一)ダドモ トオイサケ ヤメロデ ノー。 [けしきは美しいけれども遠いからやめようかね。]

ズーブ キレ(一)ダ フィトダ ノー。 [ずいぶん美しい人だなあ。]

この「～ダ」が活用すると次のような形が現われる。

タイげー キレ(一)でロ(一) ノー。 [多分きれいだろうなあ。]

(もっともこの場合には「～ダロ(一)」の形も現われる)

コノ ハナ キレ(一)デ ニオイモ イー ノー。 [この花は美しくてにおいしいなあ。]

コノ ハナ トテモ キレ(一)ダッタサケ モッチェ キダ。 [この花はとても美しかったから持って来た。]

アノフィットワ ダンダン キレ(一)ニ ナッチェ クン ノー。 [あの人はだ

んだんきれいになって来るなあ。]

この活用表をつくれば、

る接 語統 す	1	2	3	4	5	6	7
活用語	～レル ～ラレル ～セル ～ラセル ～ハル ～サハル	～タ～	中止 用言を修飾する。	言いきり ～ノー ～カ ～サケ ～ドモ 体言(トキ フィット)	～バ	言いきり (命令)	言いきり (推量) ～ドモ ～バ
～ダ	○	～ダッ～	～デ ～ニ	～ダ(～) (～ダ ラ～) (～ナ～)	～ダ～ (～ダ ラ～) (～ナ～)	○	～でロ (一)(～) ～ダロ (一)(～)

なお、「～ダバ」に対して「～ダコンダバ」のような言いかたがあるが、「～コンダバ」についてはすでに190ページに述べたからここではふれない。

また「～ダ」は「キレ(一)ダ」「ガッコ(一)ダ」などのほかに次のように動詞や助動詞、助詞に付く言いかたもある。

オレモ イクダ。 [おれも行くよ。]

ミルダ (ミンダ)。 [見るよ。]

フンでロ(一)。 [降るだろう。]

ミンナ*ダ。 [見るのだ。]

オヨメハン モラッタダ ノー。 [お嬢さん貰ったですね。]

ワナデンダ。 [お前のものだ。]

3.37 その他さまざまな言いかたについて

以上のほか「～レル・～ラレル (～エル・～ラエル)」、「～セル・～ラセル」、「～ハル・～サハル (～ラハル)」、「～スタ・～サスタ」、「ナハル」のような受身・可能・尊敬・使役などを表わす表現や、文末助詞の「～チャ」、「～ス」、「～ノー」などの用法や、また格助詞を伴わない言いかたなども注目される。(これらについての記述は紙面の都合上省略した。)

このように鶴岡方言には数多くの文法的特徴形が見られるが、われわれは、共通語化を調査する便宜上

* この「～ナ」は「オレナダ、おめ(一)ナダ」のように共通語の助詞「の」と対応する。

- I ~サという言いかた
- II ~ダカスなどという言いかた
- III ~ダバという言いかた
- IV 動詞の活用を含めて、~サクなどという言いかた
- V 動詞の活用を含めて、~ドモなどという言いかた
- VI 形容詞の活用を含めて、~ケという言いかた

を調査項目として選び、それぞれ調査票 84, 86, 87, 88, 89, に盛った。なお調査票 7 と関連して、返事のことばを調査票 90 に盛った。

4 語彙

語彙については、まず、(1)日常基本語彙のうち、方言形のものにはどんな語が、どれだけあるか、ということ調べた。この調査の結果から、「共通語の調査」のための調査語を選んだ。ついで、(2)方言形の日常基本語彙が鶴岡市を含む庄内地方でどのような地理的分布を示すかということ、および、(3)江戸時代の庄内語が現在どれだけ残っているか、ということについても調べた。

4.1 日常基本語彙の方言形

4.11 日常基本語彙の選定

日常生活における最も基本的な語について調べて、そこから、「共通語の調査」のための調査語を選び出すことを考えた。したがって、必ずしも「方言量」の多い土語を含むとは限らない。「蝸牛」や「目高」はなくても、「父」や「飯」は必ず含むような語彙である。「父」や「飯」を土語で話すために起るコミュニケーションの障害は、「蝸牛」や「目高」を土語で話すために起るそれよりも、しばしば起りうるばかりでなく、いっそう深刻であると考えられる。現代の言語生活の問題としては、このような日常基本語彙の障害について調べることのほうが意味があると思われる。したがって、われわれは、日常基本語彙のうち土語で使われるものには、どのようなものがどれだけあるか、ということ調べることにした。

そこで、まず、何を日常基本語彙とするかが問題になる。われわれの調査にすぐ使えるようなものがないので、新たに日常基本語彙を選ぶことを考えなければならぬ。われわれは、次の資料を参考にして、日常基本語彙を作った。

1. 福島県白河市における、特定の2人の1日じゅうに使った語*
2. 垣内松三「基本語彙学 上巻」

以下に、選び出すまでの手続きについて述べよう。

* 「言語生活の実態」280ページ以下

白河市で調べた特定の2人は農民と商家の主婦とであるが、彼らが1日のうち10回以上使った語に、まず、注目した。10回以上使われる語は、1日じゅうに使われる語(異なり語)の10%以下(農民で8.3%, 商家の主婦で7.5%)にすぎないが、延べの使用度数から言うと、全体の60%近く(農民で50%, 商家の主婦で58%)を占める。それは、農民で193語、商家の主婦で162語ある。これらが、まず、われわれの「日常基本語彙」を選ぶ基礎になった。この語彙のうちには、2人に共通するものがある。また、固有名詞、数詞、感動詞、特殊な職業語(たとえば、「たい肥」、「画仙紙」)などがある。これらは除くことにした。

垣内松三「基本語彙学 上巻」は、小学校国語教科書(昭和8年4月)巻1から巻4までの「語彙集覧」(157ページ以下)を含んでいる。この「集覧」を利用して、度数5以上の語を選ぶことにした。度数5以上の語を選んだのは、次の表で明らかのように、平均度数が5.1だからである。

巻数	語の総数	重出を除く実数	1語平均	度数5以上の語の数
I	1441	340	4.2	25
II	3300	606	5.5	89
III	4200	796	5.3	128
IV	5400	1059	5.1	152
計	14341	2801	5.1	394

なお、この場合も、固有名詞、数詞、感動詞などは除いた。

このようにして、「日常基本語彙」406語を選び出した。

4.12 調査の方法

日常基本語彙について調べるのに、二つの方法をとった。記入法と面接法とである。

記入法とは、調査票を配って、被調査者自身に記入させる方法である。被調査者は、鶴岡市生え抜き(言語形成期はもちろん、以後もほとんど鶴岡市ばかりに住んでいる人)で、学歴の低い者(高小卒およびそれ以下)から、20歳~30歳台、40歳~50歳台、60歳以上の三つの年齢層それぞれ20人ずつ、う

ち10人は「御家祿」、うち10人は「町人」とし、さらに、それぞれ10人のうちで、5人を男、5人を女となるように選んだ。これらの人は市役所の紹介によって選ぶことができ、予定通り60人に配布した。回収しえたのは次の40人(2/3)である。

年 齢	御 家 祿		町 人		計
	男	女	男	女	
20歳～30歳	5	5	5	3	18
40歳～50歳	1	1	4	4	10
60歳以上	4	4	1	3	12
計	10	10	10	10	40

調査票には、まず、次のような教示を与えた。

「この調査は、わたくしたちが使うことばのうちで、ふだんもっともよく使っていると思われることば約400語について、あなたがどんなことばをお使いになっているかを調べるものです。

したがって、あなた御自身がふだん使っていらっしゃることばを、そのまま書いていただきたいのです。むりに鶴岡地方の変った方言を書いていただく必要はありません。あげてある共通語と同じことばでもかまいません。」

そして、書き方の実例が次のように示されている。

共通語	あなたの使っていることば	用例	備考
1 東風 <small>ヒガシカゼ</small>	ヒガシカゼ		
2 傾く <small>カタム</small>	カダガル	柱ガカダガッテイル	
3 左きき <small>ヒダリ</small>	ヒダリヨギ		ときどき使う
4 不器用者 <small>アキヨウモ</small>	ズクナシ	アノ人ハトテモズクナシダ	
5 みにくい	メグセエ	メグセエマネスルノハヤメロ	
6 いたずら	ワチャ	子供ガワチャシテイル	

なお、文化的条件などについても記入を求めた。すなわち、

性、生まれ年、いまの住所、生まれてからいままでに住んでいた所、両親の出身地、あなたのいまのお仕事、もとのお仕事、家のお仕事、学校はどこまでいらっしゃいましたか?、記入の年月日

次に、面接法とは、調査員2名が分担して、7人の被調査者に面接し、406語をひとつひとつ質問する方法である。7人の被調査者は、御家祿と町人とから適当に選び出した。

御家祿 43歳男, 30歳台女

町人 30歳男, 34歳男, 50歳男, 46歳女, 52歳女

4.13 調査の結果

調査の結果は、記入法によるものも、面接法によるものも、ひとまとめに、4.14の「日常基本語彙表」に示した。

記入法では、一定の教示は与えてあったが、被調査者によって記入のしかたがくいちがい、面接法では、被調査者の文化的条件への顧慮が組織的でなかったために、どういう人がどういう語を、また、どれだけの語を方言形で答えているかということについては、妥当な記述がむずかしい。しかし、ごくおおざっぱには、次のようなことが言える。

1. 記入法では、10%ないし15%が土語で答えられた。面接法では、20%近くが土語で答えられた。面接法によった方が記入法によるよりも、土語が多く出ている。

2. 最も多く土語を答えた者は、60歳以上の町人の女である(記入法)。

3. 全般的に、年齢の高い者ほど、男よりも女の方が、御家祿よりも町人の方が、土語を多く答える傾向がある。

次に、各語について見ると、文化的条件によって目立った違いが認められることはあまりない。御家祿と町人とではことばが違ふ、ということをも多くの鶴岡市民から聞いた。しかし、今度の調査では、次の2語以外に、積極的な対立を示す語は見出されない。

		御家祿	町人
067*	おかあさん	オカハン(チャ)	カカハン(チャ)
082*	おとうさん	オトハン(チャ)	トトハン(チャ)

しかし、御家祿に比較的よく用いられ、町人にはあまり用いられないと考えられる土語と御家祿にはあまり用いられなくて、町人に比較的よく用いられる

* 067, 082 は、4.14 の「日常基本語彙表」における、語の通し番号である。

と考えられる土語とがある。その代表的なものをあげよう。

御家祿によく用いられる語

- 002 あがる (家へ) ハル
- 003 あがる (食物を) アガハル
- 006 あげる アゲモウス
- 039 いってる (言) イワエル, イッテサハル
- 230 だめだ ヤチャガネ, ラチャガネ
- 370 もうす モウサハル, イッテサハル, イワレル
- 379 もらう モレモス

町人によく用いられる語

- 101 かお ツラ
- 134 くび クビタ
- 156 このあいだ センド, コノジョ
- 195 すわる ネマル
- 256 ときどき トキマエ, エマコマエ
- 364 むら ゼンゴ
- 391 よぶ (呼) ヨバル
- 406 われる (割) ボコレル

これを見ると、御家祿によく用いられると考えられる語には、いわゆる「敬語形」の土語が多い。また、町人によく用いられると考えられる語には、ヨバル、ネマル、ボコレルのように、従来、庄内地方、東北地方の土語として有名なものが見られることは興味深い。

4.14 日常基本語彙表

これは、日常基本語彙とその方言形との一覧表である。

最初の3けたの数字は、語の通し番号で全部で406語ある。見出しの語は、現代かなづかいによるひらがな書きで示し、「五十音順」に並べてある。意味のまぎらわしいものは、かっこのなかに漢字を示しておいた。

かたかな書きの語形は、断りがながきり、記入法によって、40人の鶴岡生

え抜きの市民について調べた結果である。被調査者の報告通りの表記をかかげた。もちろん、重要でない派生形や、音声上の交替形などは除いた。その語形を報告した被調査者がごく少数の場合と特定の文化的条件が共通の場合とは、かっこのなかに注をつけた。一例をあげて説明すれば、次のようである。

175 さわぐ, ホコル (女中町1)

これは、女の人であって、中年(40歳~50歳)で、町人である人が1人だけ、「さわぐ」の方言形として「ホコル」と答えたことを示す。「男」は男;「若」は20歳~30歳,「老」は60歳以上;「士」は御家祿;数字は被調査者の数を示す。

面接法によって調べた結果で、記入法による結果と異なるものは、;の次に(画)と注記して、その語形を示した。これは、鶴岡方言の「簡略かな表記法」(Ⅲ, 1.6)に従って表記を統一した。

方言形の出ていない語は、言うまでもなく、共通語形でしか答えなかったものである。

- 001 さいだ(間)
- 002 あがる(家へ)ハル(女老士1);(画)
ハラへ, ハレ, アガラへ
- 003 あがる(食物を) アガハル(士)
- 004 あかんぼう アガ, アガチャ
- 005 あげる(開)
- 006 あげる クェル, アゲモウス(女士2)
- 007 あさ(朝) アサマ
- 008 あした
- 009 あそこ
- 010 あそぶ アシブ(女老町1)
- 011 あたたかい アッタコイ, アッタケ
- 012 あちら(あっち) アッチャ
- 013 あつい(暑) アツツ, アツチェ, アチャイ; (画) アツチェ
- 014 あつまる; (画) タカル たかつて
いる意
- 015 あなた { 目上 アンダ, オメハン
 { 友達 オメ, ウメ, ワ, オ
 { メア, ヤア(男),
 { アンダ, オメハン
 { (女)
 { 目下 オメ, ウメ, ワ, アンダ
- 016 あの
- 017 あまり
- 018 あめ(雨)
- 019 あらう

- 020 ありがとう オオキン, オーギ, オ
ーギンヨ
- 021 ある
- 022 あるく
- 023 あんな アゲダ, アゲナ, アゲダナ
- 024 いい(よい)
- 025 いいえ ソデネ, ヤヤ, ヤンダ
- 026 いいつけ
- 027 いえ(家)
- 028 いく(行)
- 029 いくつ ナンボ
- 030 いくら ナンボ
- 031 いじめる ジグル, ヅグル
- 032 いしゃ(医者) オイシャハン
- 033 いそぐ
- 034 いたい
- 035 いただく モレモス
- 036 いちばん
- 037 いつ
- 038 いっしょ
- 039 いったる(言) イワエル, イッテサ
ハル(女士2)
- 040 いつも; (画) トース
- 041 いぬ(犬) イノ(女老町1)
- 042 いま イヤ(女中士1)
- 043 いらっしゃい ゴザへ, ゴザハイ,
ゴザハエ, ゴザシャイ, ハラへ
- 044 いる(どこそこにいる)

045 いる(要する) ヨダ, ヨンダ
 046 入れる
 047 いろ(色)
 048 うえ(上)
 049 うえる(植)
 050 うごく ヨゴグ, エゴグ(男老士1)
 051 うし(牛)
 052 うしろ
 053 うそ; (面) テンボ(女中士)
 054 うつ(打)
 055 うつくしい
 056 うまれる モツ(男中町1)
 057 うら
 058 うる(売)
 059 うれしい, オモシエ, オモシイ
 060 うれる(売)
 061 えらい(えらい人) スサマジ(男士1), サマジ(女老町1)
 062 おいしい
 063 おえる デギル, スギル, デガス
 064 おおい エツベ, タント, オツゲ
 065 おおきい オッキ
 066 おおぜい エツベ
 067 おかあさん オガハン(チャ)(士), カガハン(チャ)(町)
 068 おかしい オモシエ
 069 おきる
 070 おく(置)
 071 おくる(送)
 072 おくれる
 073 おこす
 074 おこる(怒) ゴゲル, ゴシヤグ
 075 おいしい イダマシ, カナシイ
 076 おじいさん ジジハン(チャ), ジンジハン(チャ)
 077 おそい
 078 おちゃ(茶)
 079 おちる
 080 おっしゃる イワハル(士), イツテラハル(女老町)
 081 おつり ケエリ, ケーリセン
 082 おとうさん オトハン(チャ)(士), トドハン(チャ)(町)
 083 おとこ
 084 おとす
 085 おどる
 086 おどろく オボゲル, ハトモウ, キモケル
 087 おなじ
 088 おばあさん ババハン(チャ), パンバハン(チャ)
 089 おはよう タダイマ(男老士1)
 090 おもい(重)オボデ, オンモイ
 091 おもう
 092 おもしろい オモシエ
 093 おや(親)
 094 おわり
 095 おわる スギル
 096 おんな オナゴ, オンゴ

097 かう(買)
 098 かえす
 099 かえる(帰)
 100 かえる(動物) ビッキ
 101 かお(顔) ツラ(町6)
 102 かく(書)
 103 かける(掛)
 104 かぜ(風); (面)カジ(男中士)
 105 かぞえる
 106 かたい
 107 がっこう
 108 かならず ナツテモ
 109 かべ
 110 かまわない カモネ
 111 かみ(紙)
 112 かみ(神) カミハン
 113 かりる(借)
 114 かれる(枯)
 115 かわい, メンゴイ, メゴイ
 116 かんがえる
 117 き(木)
 118 きえる
 119 きく(聞)
 120 きくのう キンノ
 121 きまり
 122 きまる
 123 きもひ; (面) キルモノ(男中町)
 124 きゆうに イキナリ
 125 きょう
 126 きょうだい
 127 きょうねん
 128 きょうる(着)
 129 きれい
 130 くさ(草)
 131 ください クナンショ, クネヘー, クネヘン, クレチャ, クダハエ
 132 くだもの ナリモノ
 133 ぐち
 134 ぐび クビタ, クビト(町5)
 135 くも(雲)
 136 くもる
 137 くやしい ハガイ
 138 くらす
 139 くる(来)
 140 くれる ケール
 141 くれる クイル(女老士1)
 142 けっして ナツテモ, ナシテ
 143 こう(こうしろ) コゲ
 144 こおり(氷)
 145 ここ
 146 こころみる
 147 ございます ガンス, ゴアス, ゴナス
 148 こたえる
 149 こちら(こっち) コツチャ
 150 こと
 151 ことし
 152 ことば

153 こども
 154 ことわる
 155 この
 156 このあいだ センド, コノジョ(町2)
 157 このごろ センド, コノジョ(町2); (面)コノジョ(町)
 158 ごはん オママ, メス
 159 これ コンナ
 160 ころぶ
 161 こんど
 162 こんな コゲダ, コゲナ, コゲダナ
 163 こんや バンゲ, キョウノバンゲ
 164 さあ ソダノ一
 165 きき(先)
 166 さく(咲)
 167 さくや(ゆうべ) キノウノバンゲ; (面) ヨンベ
 168 さけ(酒)
 169 さつき; (面) センド(女中町)
 170 さびしい オカネ
 171 さむい サンムイ
 172 さようなら ソダバ, ソメモ, タダイメ
 173 ざる フゴ(女2)
 174 さわく ホコル(女中町1); (面)ホコル
 175 ○○さん { 目上 ハン, チャ
友達 ハン, チャ
目下 ハン, チャ
 176 さつまいも サジマイモ(女若町1)
 177 じ(字)
 178 しかし ソダトモ, ソダタテ, スカス(女老町1)
 179 しごと
 180 した(下)
 181 しっかり ガッチリ, ギッチリ(女2)
 182 しばらく
 183 しま(島)
 184 しまう
 185 じゃあ ソダバ, シェバ
 186 じゃうず
 187 しる(知) オボエル, ワガル
 188 しれる オボエラレル, ワガラエル
 189 ずいぶん ズンデネ(女老士2); (面)コエテ(女中町)
 190 すぐ ソンマ(男若士1)
 191 すこし チント, チントバリ
 192 すっかり
 193 すてる ウダル
 194 すむ(済) オワル
 195 すわる ネマル(男3); (面)ネマル
 196 せけん
 197 せなか シナガ; (面)フィナガ(男中町)
 198 せんせい

199 そう ソゲ
 200 そうして
 201 そこ
 202 そこで ソダハケ
 203 そだてる
 204 そちら(そっち) ソッチャ
 205 そと
 206 その
 207 そのうちに; (面)ソソマ
 208 そば ワギ
 209 そら(空)
 210 それ ソンナ
 211 それから
 212 そんな ソゲダ, ソゲナ, ソゲダナ
 213 た(田) タンボ, タモト(男老町1)
 214 だいこん
 215 だいじょうぶ
 216 たいへんだ
 217 たかい タツゲ
 218 だから ソダハケ, ソダサケ, ソダシケ, ソダサケ(女中町1), ソダシハエ(女老士1)
 219 たくさん エツベ, タント
 220 だす(出)
 221 たすける
 222 たすねる
 223 ただいま
 224 たつ(立)
 225 だって ソダテ, ホダテ(男若町1), シタテモ(女老町1)
 226 たね(種)
 227 たべる
 228 たまる
 229 だまる ダマレル, ダマテル(女老町2)
 230 だめだ ヤチャガネ, ラヂャガネ(士5)
 231 だれ ダテ, ダエ, ドナダ
 232 だんだん ダンダエ, ダンデ(女老士1)
 233 ちいさい チツチエ, チツヤ
 234 ちかい(近) チツケ
 235 ちがう ソデネ, ベツダ
 236 ちゅうど
 237 ちゅっと チョットキ(女4); (面)チョットキ
 238 つかう
 239 つき(月) オツキハン
 240 つくる(作) コシヤウ
 241 つける(附)
 242 つち(土)
 243 つまらない オモシエダネ
 244 つめたい ハッコイ, ヒヤッコイ, ヤバツ 冷い、と叫ぶ時(女中町)
 245 つよい ツーイ
 246 て(手)
 247 でかける
 248 できる

249 である デハル
 250 てんき
 251 どう ドゲ
 252 どうして ナシテ、ドゲシテ、セー
 ガラ(男中士1)
 253 どうぞ
 254 どうも
 255 とおい トオグイ
 256 とおり(通)
 257 とおる
 258 とき
 259 ときどき; (面)トキマエ(女中町),
 エマコマエ(男中町)
 260 とけい
 261 どこ
 262 ところ
 263 としより
 264 とち トツ(男中町2)
 265 とちゅう ミジナカ, トチュナカ;
 (面)トジョナカ
 266 どちら(どっち) ドッチャ
 267 とても
 268 となり
 269 どの
 270 とぶ
 271 ともだち ナガバ(老); (面)ナカバ
 272 とりかえる トリゲル
 273 とる
 274 どれ ドシナ
 275 どんな ドゲダ, ドゲナ, ドゲダナ
 (女士)
 276 ない
 277 なか(中)
 278 ながい、ナンゲ, ナゲノ
 279 なく(鳴)
 280 なく(泣)
 281 なくなる
 282 なぜ ナシテ
 283 なに
 284 ならぶ
 285 なる
 286 なるほど ホントエ
 287 にいさん アンチャ, アニハン (男
 老士1)
 288 にげる
 289 にここに
 290 ぬすむ ノスム(女老町1)
 291 ね ノウ, ソダロ
 292 ねえさん アネチャ, アネハン (老
 士2)
 293 ねこ
 294 ねずみ
 295 ねむい ネブテ
 296 ねる(寝)
 297 ねんれい(年齢)
 298 のち アド, エンメ

299 のむ
 300 のる
 301 は(葉) ファ(女老町1)
 302 はい ソダ
 303 はいる; (面) ヘル
 304 はこぶ
 305 はじめる
 306 はしる
 307 はずかしい カエー; (面)ショー
 スー
 308 はたけ(畑)
 309 はたらく カセグ; (面) カシグ
 310 はな(花) ヘエナ(男中町1)
 311 はなし(話)
 312 はなす(話)
 313 はやい
 314 はら(腹)
 315 ばん(晩) バンゲ
 316 はんぶん
 317 ひ(太陽) オヒハン
 318 ひくい、ヒツギ
 319 ひだり(左)
 320 ひと(人)
 321 ひとつ
 322 ひとり(一人)
 323 ひま(暇)
 324 びょうき ヤメ
 325 ひる(昼) ヒルマ
 326 ひろい(広) ヒーレ、ヒツレ、ヒレ
 イ
 327 ふえる
 328 ふしぎ
 329 ふたり
 330 ふたつ
 331 ふとい フッテ
 332 ふね
 333 ふる(降)
 334 へん(あの辺)
 335 へんじ
 336 べんとう
 337 ほお(ほった)
 338 ほしい ヨダ
 339 ほそい、ホッセ
 340 ほら ホレ
 341 ほる
 342 ほんとう
 343 まいにち
 344 まえ
 345 まく(種をまく)
 346 また
 347 まだ
 348 まるい マルコイ
 349 まわり
 350 まわる
 351 みえる メル

352 みぎ
 353 みず(水)
 354 みせ シレ
 355 みち
 356 みみ
 357 みる
 358 みんな

 359 むかし
 360 むぎ
 361 むぎまき
 362 むこう ムゲエ
 363 むすめ ネットヤ, オナンコ(男1)
 364 むら(村) ゼンゴ(中町2); (面)
 ザイゴ- , ゼンゴ(中町)

 365 め(目) マナグ
 366 めずらしい
 367 めったに
 368 めでたい

 369 もう アド(女5); (面)アト
 370 もうす モウサハル, イツテサハル,
 イワレル(土)
 371 もしもし アノノ, オーオー, ノウ
 ノウ
 372 もつ タガク
 373 もってくる タガエデクル
 374 もっと
 375 もっとも
 376 もと(以前); (面)シヨッテ(男老
 町), ゼンド, シヨッテン(男中町)
 377 もの(者)
 378 もの(物)
 379 もらう モレモス(女士3)

380 やける
 381 やさしい, ジョウサネ
 382 やすむ
 383 やっぱり
 384 やま
 385 やる クェル; (面)ケール

 386 ゆう
 387 ゆき(雪)
 388 ゆび ヨビ(女老町1); (面)ヨビ
 (女中町, 男中町)

 389 ようす
 390 よなか
 391 よぶ ヨバル(ほとんど)
 392 よろこぶ オモシエガル
 393 よわい ヤクタネコ?(男中町1)

 394 りっぱ
 395 りょうほう

 396 るす; (面)ヨスリ, カラスル

 397 わかい ワグゲ
 398 わかる
 399 わざと ワザイ
 400 わずれる

 401 わたくし { 目上 ワダシ, オレ
 友達 ワダシ, オレ
 目下 ワダシ, オレ
 402 わたくしたち オレガタ
 403 わたす
 404 わらう
 405 わるい ワリノ
 406 われる ポコレル(町2)

4.15 「共通語の調査」のための調査語と調査の結果

以上のようにして、記入法と面接法とで調べた406語の日常語彙から、「共通語の調査」のために調査語10語を選んだ。選ぶに当って、次の三つの条件を考えた。なお、調査語10という数は、「共通語の調査」の規模および文法のための調査語との割り振りから決めたものである。

選定の第1の条件は、記入法と面接法とで異なる形が出て来たものである。この条件に合致して、実際に採用されたものに、「すいぶん」というのがある。これは、記入法では「ズンデネ」という形が、面接法では「コーテ」((ko:dè))という形が出て来た。

第2の条件は、方言形(土語)が二つ以上あるものである。この条件に合致して、実際に採用されたものに、「驚く」というのがある。これは、少なくとも記入法において、「オボゲル, ハトモウ, キモケル」という三つの形が出て

来た。

第3の条件は、文化的条件によって異なる方言形のあらわれることが、かなりはっきり分かっているものである。「騒ぐ」がそのひとつである。この方言形「ホコル」は、ただ40歳～50歳の町人の女1名に出て来ただけである。

こうして、実際に選び出された10語は次のようである。記入法および面接法で出て来た方言形をあげておこう。

1. いつも トース
2. いらっしゃい ゴサへ、ゴザシャイ、ハラへ
3. 驚く オボゲル、ハトモウ、キモケル
4. 騒ぐ ホコル
5. ずいぶん コーテ、ズンデネ
6. すわる ネマル
7. だめだ ヤジャガね、ラジャガね
8. はずかしい ショースー、カゑ
9. もう アト
10. るす ヨスリ、カラス

以上の10語を、鶴岡市民508人のサンプルについて調べた。ここで鶴岡市民508人というのは、鶴岡市を含む庄内地方で育った者に限る。結果を、各語について表に示せば、次のようになる。

まず「いつも」について述べると、「トース」およびその他で11%の方言形しか出て来ない。しかし、45歳以上では、15%～17%に達する。それはともかく、全体として共通語形（「イツモ」）が優勢であると言える。

	イツモ	トース	その他	不明	計
男	205(91) ^{9%}	19(8)	2(1)	0(0)	226(100) ^{9%}
女	243(86)	34(12)	4(2)	1(0)	282(100)
15歳～19歳	86(93)	6(7)			92(100)
20歳～24歳	46(88)	4(8)	2(4)		52(100)
25歳～34歳	108(94)	6(5)	1(1)		115(100)
35歳～44歳	84(84)	14(14)	2(2)		100(100)
45歳～54歳	62(83)	12(16)	1(1)		75(100)

55歳～69歳	62(84)	11(15)		1(1)	74(100)
学歴なし	18(86)	2(10)		1(4)	21(100)
小学卒	110(87)	17(13)			127(100)
高小卒 新制中卒	173(87)	22(11)	4(2)		199(100)
旧制中卒以上 新制高卒	145(91)	12(8)	2(1)		159(100)

「いらっしゃい」については、ゴザへ、ハイッテクネヘン（これはあらかじめ知られていなかった語形である！*）およびその他で29%の方言形が出る。15歳～19歳では11%の方言形しか出て来ないが、55歳～69歳では56%の方言形が出ている。全体として方言形がかなり用いられていると言えよう。

	イラっしゃイ	ゴザへ	ハイッテク ネヘン	その他	不明	計
	%					%
男	173(77)	35(15)	6(3)	7(3)	5(2)	226(100)
女	172(61)	89(32)	9(3)	5(2)	7(2)	282(100)
15歳～19歳	80(87)	6(7)		4(4)	2(2)	92(100)
20歳～24歳	44(85)	2(4)	6(12)			52(100)
25歳～34歳	79(69)	30(26)	2(2)		4(4)	115(100)
35歳～44歳	67(67)	25(25)	3(3)	3(3)	2(2)	100(100)
45歳～54歳	43(57)	24(32)	2(3)	3(4)	3(4)	75(100)
55歳～69歳	33(45)	36(49)	2(3)	2(3)	1(1)	74(100)
学歴なし	11(52)	9(43)		1(5)		21(100)
小学卒	70(55)	42(33)	6(5)	5(4)	4(3)	127(100)
高小卒 新制中卒	141(71)	45(23)	3(2)	3(2)	7(4)	199(100)
旧制中卒以上 新制高卒	123(77)	27(18)	5(3)	3(2)	1(1)	159(100)

* 記入法と面接法とで出て来なかった方言形は、「いらっしゃい ハイッテクネヘン」だけであるが、反対に、記入法と面接法とで出て来た方言形で、「共通語の調査」ではほとんど出て来なかったものに、「いらっしゃい——ゴザシャイ、ハラへ」、「驚く——キモケル」、「だめだ——ラジャガね」、「るす（留守番）——カラス」がある。これは、おそらく、「共通語の調査」の調査票では、期待されるおもな反応形しかあげなかったために、その他の形が出て来たとき、さらに問い返したためではないかと考えられる。

「驚く」については、全体として、36%の方言形が出る。15歳～19歳では13%であるが、45歳以上になると、41%～49%になる。学歴なしでは62%にも達する。全体として、方言形が優勢だと言えよう。

	オドロク %	オボゲル	ハトモウ	その他	計 %
男	147(65)	74(33)	3(1)	2(1)	226(100)
女	183(65)	92(33)	6(2)	1(0)	282(100)
15歳～19歳	80(87)	8(9)	2(2)	2(2)	92(100)
20歳～24歳	44(85)	8(15)			52(100)
25歳～34歳	81(70)	31(27)	3(3)		115(100)
35歳～44歳	58(59)	39(39)	2(2)	1(1)	100(100)
45歳～54歳	38(51)	36(48)	1(1)		75(100)
55歳～69歳	43(58)	30(40)	1(1)		74(100)
学歴なし	8(38)	12(57)	1(5)		21(100)
小学卒	65(51)	57(45)	2(1)	3(3)	127(100)
高小卒 新制中卒	133(67)	60(30)	6(3)		199(100)
旧制中卒以上 新制高卒	124(78)	35(22)			159(100)

「騒ぐ」はほとんど方言形があらわれない。全体で3%、55歳～69歳で5%にしか過ぎない。

	サワグ %	ホコル	その他	不明	計 %
男	218(96)	4(2)	1(0)	3(1)	226(100)
女	270(95)	8(3)	2(1)	2(1)	282(100)
15歳～19歳	88(96)	2(2)		2(2)	92(100)
20歳～24歳	52(100)				52(100)
25歳～34歳	112(97)	1(1)	2(2)		115(100)
35歳～44歳	97(97)	2(2)		1(1)	100(100)
45歳～54歳	70(93)	3(4)	1(1)	1(1)	75(100)
55歳～69歳	69(93)	4(5)		1(1)	74(100)
学歴なし	19(90)	1(5)		1(5)	21(100)
小学卒	121(95)	4(3)	2(2)		127(100)

高小卒 新制中卒	189(95)	5(3)	1(1)	4(2)	199(100)
旧制中卒 新制高卒以上	157(99)	2(1)			159(100)

「ずいぶん」は「騒ぐ」と同じ程度の方言形しか出て来ない。全体で6%、55歳～69歳で9%にしか過ぎない。

	ズイブン %	コーテ	ズンデネ	その他	不明	計 %
男	210(93)	2(1)	2(1)	12(5)		226(100)
女	265(94)	3(1)		13(5)	1(0)	282(100)
15歳～19歳	86(93)			6(7)		92(100)
20歳～24歳	48(92)			4(8)		52(100)
25歳～34歳	109(96)			5(4)	1(1)	115(100)
35歳～44歳	94(94)	1(1)		5(5)		100(100)
45歳～54歳	71(95)	1(1)	2(3)	1(1)		75(100)
55歳～69歳	67(91)	3(4)		4(5)		74(100)
学歴なし	19(90)			2(10)		21(100)
小学卒	114(89)	3(2)	1(1)	8(6)	1(1)	127(100)
高小卒 新制中卒	191(96)		1(1)	8(4)		199(100)
旧制中卒 新制高卒以上	150(94)	2(1)		7(5)		159(100)

「すわる」は「いつも」と同じ程度の方言形しか出て来ない。全体で11%、45歳以上で17%～22%である。

	スワル %	ネマル	その他 (方言形)	その他 (共通語形)	不明	計 %
男	201(89)	18(8)	3(1)	2(1)	2(1)	226(100)
女	246(87)	35(13)	1(0)			282(100)
15歳～19歳	86(93)	6(7)				92(100)
20歳～24歳	50(96)		2(4)			52(100)
25歳～34歳	106(92)	8(7)		1(1)		115(100)
35歳～44歳	87(87)	12(12)			1(1)	100(100)
45歳～54歳	57(76)	16(21)	1(1)		1(1)	75(100)

55歳～69歳	61(82)	11(15)	1(1)	1(1)	74(100)
学歴なし	17(81)	3(14)		1(5)	21(100)
小学卒	103(81)	22(17)	2(2)		127(100)
高小卒 新制中卒	180(90)	16(8)		1(1) 2(1)	199(100)
旧制中卒 新制高卒以上	145(91)	12(8)	2(1)		159(100)

「だめだ」は「いつも」、「すわる」と同じ程度で、やはり、あまり方言形は出て来ない。全体で9%である。

	ダメダ %	ヤジャガね	その他	不明	計 %
男	204(90)	20(9)	1(0)	1(0)	226(100)
女	252(90)	27(10)	1(0)	2(1)	282(100)
15歳～19歳	86(93)	6(7)			92(100)
20歳～24歳	50(96)	2(4)			52(100)
25歳～34歳	107(94)	6(5)	1(1)	1(1)	115(100)
35歳～44歳	83(83)	15(15)	1(1)	1(1)	100(100)
45歳～54歳	65(87)	9(12)		1(1)	75(100)
55歳～69歳	65(88)	9(12)			74(100)
学歴なし	20(95)	1(5)			21(100)
小学卒	113(90)	12(9)	1(1)	1(1)	127(100)
高小卒 新制中卒	171(86)	25(13)	1(1)	1(2)	199(100)
旧制中卒 新制高卒以上	145(91)	14(9)			159(100)

「はずかしい」も「だめだ」と同じ程度である。全体で13%である。

	ハズカシー %	ショーサー	カゑ	その他	計 %
男	197(87)	24(11)	4(2)	1(0)	226(100)
女	246(87)	28(10)	5(2)	3(1)	282(100)
15歳～19歳	80(87)	10(11)		2(2)	92(100)
20歳～24歳	48(92)	4(8)			52(100)
25歳～34歳	96(82)	15(13)	3(3)	1(1)	115(100)

35歳～44歳	92(92)	6(6)	2(2)		100(100)
45歳～54歳	65(87)	7(9)	2(3)	1(1)	75(100)
55歳～69歳	62(84)	10(14)	2(3)		74(100)
学歴なし	15(71)	3(14)	2(10)	1(5)	21(100)
小学卒	111(87)	11(9)	4(3)	1(1)	127(100)
高小卒 新制中卒	178(89)	18(9)	1(1)	2(1)	199(100)
旧制中卒以上 新制高卒	137(86)	20(13)	2(1)		159(100)

「もう」は「驚く」と同じ程度、すなわち、全体で31%の方言形があらわれる。この語は、15歳～19歳と20歳～24歳とを除くと、いつも、かなり同じ程度(24%～33%)の方言形のあらわれるのが注意される。

	モ	ア	その他	不明	計
	%				%
男	159(70)	65(29)	2(1)		226(100)
女	191(68)	87(31)	3(1)	1(0)	282(100)
15歳～19歳	50(54)	40(43)	2(2)		92(100)
20歳～24歳	46(88)	4(8)	2(4)		52(100)
25歳～34歳	87(76)	28(24)			115(100)
35歳～44歳	71(70)	27(27)	1(1)	1(1)	100(100)
45歳～54歳	55(73)	20(27)			75(100)
55歳～69歳	51(69)	23(31)			74(100)
学歴なし	14(67)	7(33)			21(100)
小学卒	93(72)	33(26)		1(1)	127(100)
高小卒 新制中卒	132(66)	63(32)	4(2)		199(100)
旧制中卒以上 新制高卒	110(69)	48(30)	1(1)		159(100)

最後に、「るす(留守番)」は、全体として21%、旧制中学卒業以上で6%、学歴なしで48%を示す。やや方言形がいちじるしい。

	ルスバン(ルスイ)	ヨスリ	その他	計
	%			%
男	192(85)	32(14)	2(1)	226(100)

女	211(75)	70(25)	1(0)	282(100)
15歳～19歳	78(85)	14(15)		92(100)
20歳～24歳	50(96)	2(4)		52(100)
25歳～34歳	91(79)	22(19)	2(2)	115(100)
35歳～44歳	77(77)	22(22)	1(1)	100(100)
45歳～54歳	57(76)	18(24)		75(100)
55歳～69歳	50(68)	24(32)		74(100)
学歴なし	11(52)	10(48)		21(100)
小学卒	85(67)	41(32)	1(1)	127(100)
高小卒 新制中卒	156(78)	42(21)	1(1)	199(100)
旧制中卒 新制高卒以上	150(94)	8(5)	1(1)	159(100)

以上、「いらっしゃい」、「驚く」、「もう」がもっとも方言形でよくあらわれ、「騒ぐ」、「すいぶん」はもっとも方言形のあらわれない語であることがわかる。

このことは、文化的条件を基準にして、各語の分布を描いてみれば、いっそうはっきりする。図 59 がそれである。これによれば、各語は各要因についてほぼ同じ分布を示し、語と語との関係も各要因についてほぼ同じ傾向にあることが認められる。

なお、図 59 で赤線で示したものは、各語について、共通語形で答えたときに 1 点、方言形で答えたときに 0 点を与えて集計した、10 語の総点数である。0 点は 10 語とも方言形で答えたことを、10 点は 10 語とも共通語形で答えたことが表わす。図にあるのは、それぞれの集団の示す平均総点数である。

4.2 特徴的な語の庄内地方における分布

4.2.1 あらまし

われわれの「日常基本語彙」406語から、221語を選んで、これらが庄内地方で、地理的にどのように分布しているかを調べた。

この 221 語は次のようなものを含んでいる。

1. 記入法と面接法とで調べた結果、方言形と共通語形との両者があらわれ

各語と話し全体との要因別分布

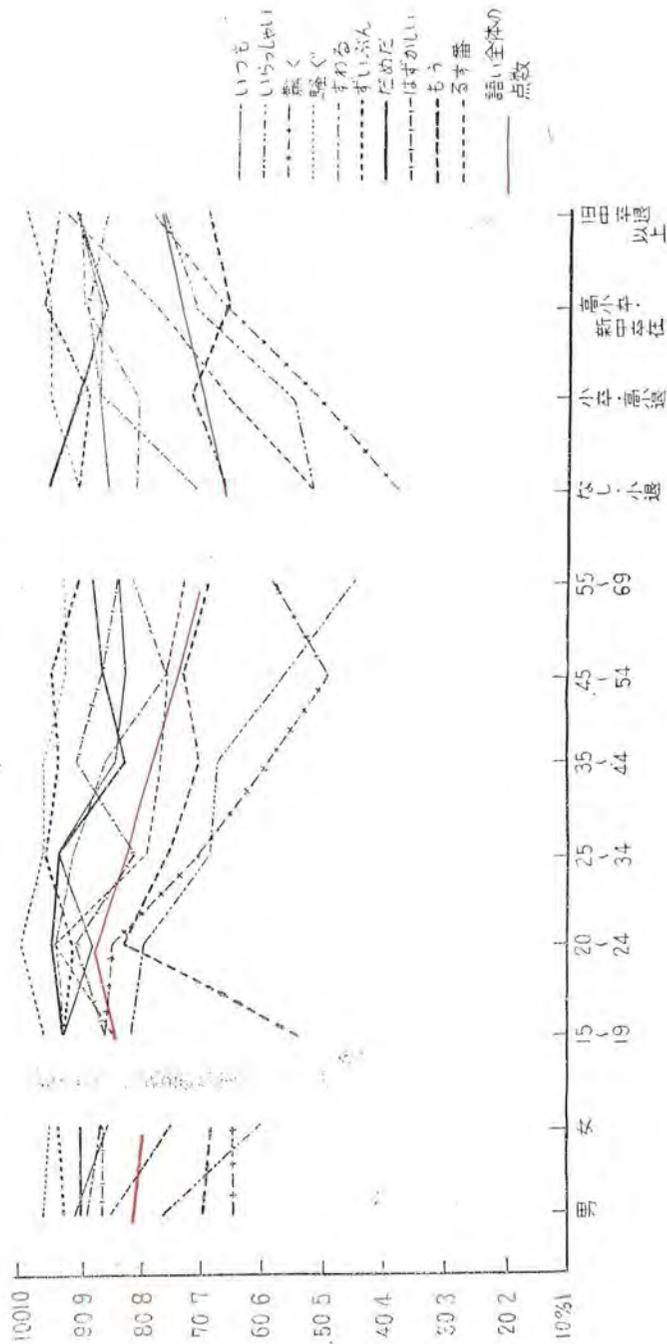


图 59

ることがわかっているもの

2. 「共通語の調査」の調査語（10語）

3. 従来、庄内地方で分布の点で注目されているもの

この調査の実際については、I. 調査の概要 を参照されたい。

調査の結果を見ると、まず、221語の大部分（85%～90%）を共通語形で答えており、方言形で答えているものも、各地点とも同じ形である。ごくわずか、庄内地方に特定の地理的分布を示す語がある。

「共通語の調査」のための調査語について、その分布をながめてみると、「はずかしい」を除いては、特別な地理的分布を示さない。これについては、のちに詳しく述べる。

その他の9語については、性・年齢的分布を調べてみたが、「いらっしゃい」が不注意によって221語からもれていたもので、以下には、8語だけの集計表を示すことになる。

共通語形	方言形	20歳 台男	40歳前 後男	60歳前 後男	20歳 台女	40歳前 後女	60歳前 後女
い つ も	ト ー ス	1	1	1	1	1	1
驚 く	オボゲル	20	18	22	15	16	16
〃	ハトモウ	2	2	0	0	0	1
騒 ぐ	ホ コ ル	0	1	0	1	2	1
す わ る	ネ マ ル	15	18	21	10	20	17
ずいぶん	コ ー テ	0	1	0	1	0	0
〃	ズンデネ	2	4	1	1	2	1
だ め だ	ヤジャガね	0	1	2	0	1	2
も う	ア ト	9	3	5	6	7	5
留 守 番	ヨ ス リ	16	13	15	11	15	13
〃	エ ス ス	1	1	0	0	0	1

性・年齢による傾向的な分布は見られない。「オボゲル、ネマル、ヨスリ」が他の方言形に比べて度数が高いことが注意される。これは「共通語の調査」でもそうで、「オボゲル」は全被調査者の33%にあらわれる。同様に、「ネマル」は10%、「ヨスリ」は20%である。「ネマル」は、後に（4.3）述べるよ

うに、庄内地方27地点中、25地点に残っていることが明らかである。

なお、「留守番」に「エヌス」とあるのは、「留守だよ」の意味にとり違えて、「イね（おりません）ス（よ）」と答えたのではないかと思われる**。

東北地方として有名なものに、「持つ」、「出る」、「かわいい」に当る土語がある。これについて述べよう。

東北地方における「持つ」の方言形は、従来、南奥羽で「タガク」、北奥羽で「タナク」であると言われ、山形県は「タガク」系とされている***。庄内地方もやはり「タガク」が優勢であるが、次の5地点9人に「タナク」が見られる。しかし、この5地点はだいたい庄内地方の北部である。

田沢村（28）40歳前後女/本循村（25）60歳前後男および同じく女/
本循村（25）40歳前後女/吹浦村（21）20歳台女/飛鳥（20）40歳前後女/
飛鳥（20）60歳前後男および女/藤島町（15）20歳台女

「浜荻」語彙の調査（4.3 参照）でも、27地点のうち25地点まで「タガク」を保存していることがわかった。

東北地方における「出る」の方言形は、従来、東北地方全域にわたって、「デキル」と「デハル」との二つの形が行われていると言われ、庄内地方では「デハル」だけであるとされている****。

「かわいい」の方言形には、「メンゴイ」で代表されるグループと「メゴイ」で代表されるそれとがある。後者は、地点として、06, 07, 10, 11, 21, 22, 23の庄内地方のあちこち、7地点に行われ、被調査者として、17人に見られる。前者は、地点として、上記以外の20地点に行われ、被調査者として、126人に見られる。「浜荻」には、「メゴイ」として出ており、このままの形を残していると報告した地点は、27地点のうち13地点で、「メンゴイ」で代表されるグループの地点と、数がほぼ等しい。このように、二つの調査の結果が違うのは、おそらく、調査の方法が違うからであろう。すなわち、日常基本語彙の調査では、「『かわいい』のことをふつう何と言うか」と尋ねており、「浜荻」語彙の調査

* 門田正則氏（Ⅲ, 1.1 参照）からの昭和27年4月24日づけの通信による教示。

** 小林好日「東北の方言」203頁

*** 小林好日「東北の方言」200頁

では、「『メゴイ』を使っているかどうか、印をつけよ」のように教示しているからである。

以上の11語のうち、「持つ」に当る土語の分布にはやや注意すべき特色が見られたが、他の10語については、なんら傾向的な分布の模様を見ることはできない。

しかし、次の6語については、興味深い分布の模様を見ることできた。6語とは、

1. はずかしい 2. おとうさん 3. おかあさん
4. こども 5. 来年 6. 去年

である。以下、ひとつひとつについて述べよう。

4.22 二、三の語の分布

4.221 「はずかしい」に当る土語の分布

図 60 を参照。この語は、さきに述べたように、「共通語の調査」の調査語のひとつである。調査の結果では、鶴岡市内におけるこの語の土語分布は、次のようである。％は被調査者の数の割合を示す。

ショースー	10%
カゑ	2%
その他	1%

「ショースー」が目立っている。庄内地方全体としても優勢で、東田川郡以外の各地に分布する。「カゑ」も東田川郡と飽海郡との狭い郡境地帯に分布する。

また「ショースー」は、年齢の高まるにつれて、男女ともに、分布する地点がふえてくることを分布図で読むことができる。被調査者の数からも同様な傾向性が認められる。

	男	女	計
20 歳 台	11人	10	21
40 歳 前 後	14	16	30
60 歳 前 後	17	18	35

「カゑ」は、むしろ反対に、年齢の高まるにつれて、男女ともに、分布する地点が減る傾向を分布図で読むことができる。被調査者の数も同じ傾向を示しているのは興味深い。

	男	女	計
20 歳 台	4 人	4	8
40 歳 前 後	5	2	7
60 歳 前 後	2	2	4

4.222 「おとうさん」に当る土語の分布

図 61 を参照。この語の方言形には、「タダ」「トド」「テデ」、「アヤ」があり、ほとんどの地点、ほとんどの年齢層、また、男女ともに、「タダ」「トド」「テデ」の方言形があらわれるが、ただ、01, 20 の二地点にだけ「アヤ」が行われていることが注目される。なお、「浜荻」では、「ト、」を江戸詞「と、を(父)」に、「ダ、」を同じく「父親」に配しているが、このような細かいニュアンスの差は、今度の調査では明らかにならない。「浜荻」の調査では、「ダダ」をそのまま残している地点が15、「トト」あるいは「トド」を残している地点が8ある。

4.223 「おかあさん」に当る土語の分布

図 62 を参照。もっとも興味深い分布を示す語である。「アバ」で代表されるグループと「カマ」で代表されるグループとが、かなりはっきりした分布地域を分かち、すなわち、西田川郡の海岸地帯とその南部に、男女、年齢の別なく「アバ」が分布し、他の地域には、飛鳥と東田川郡大泉村とを例外として、「カマ」が分布する。

なお、上の二つの形以外に「オカ」という形が、わずか3地点4人に見られる。すなわち、

- 鶴岡市 (00) 20歳台女, 40歳前後女
- 温海町 (07) 60歳前後男
- 手向村 (13) 20歳台男

この語は、「オカハン」または「オカチャ」という形で、鶴岡市では御家祿

だけに使われているらしい(4.13を参照)。

東北方言には、1. アバ、アッパ系、2. ジャチャ系、3. ガガ系、4. オガ系 の四つの「系統」があると言われる*が、庄内地方には、「ジャチャ」系以外はすべて見出された。

「浜荻」には、「カ、」があるが、「カカ」または「ガガ」として残っている地点は15ある。

4.224 「こども」に当る土語の分布

図63を参照。この語は、かなりはっきりした分布を示す。方言形としては、「コトビラ」で代表されるグループと「ボンボ」で代表されるそれとがある。前者は、主として飽海郡に、後者は、西田川郡の海岸地帯と飛鳥とである。「ボンボ」の分布は「おとうさん アヤ」のそれと一致しうである。

4.225 「来年」に当る土語の分布

図64を参照。方言形としては、「レンネン」で代表されるグループと「れーネン」で代表されるそれとがあり、前者は飽海郡と東田川郡、西田川郡、飽海郡3郡の境界地帯とに分布し、後者は東西両田川郡の南部にかたよって分布している。

4.226 「去年」に当る土語の分布

図65を参照。方言形としては、「キョンネン」で代表されるグループがあり、これは、飽海郡と東西両田川郡の北部に集中して分布する。なお、方言形として、「キョンネン」のグループにはいる「チョンネン」と「チョネン」とがあることに注意したい。ただし、「チョネン」はわずか6地点7人にしか見られない。

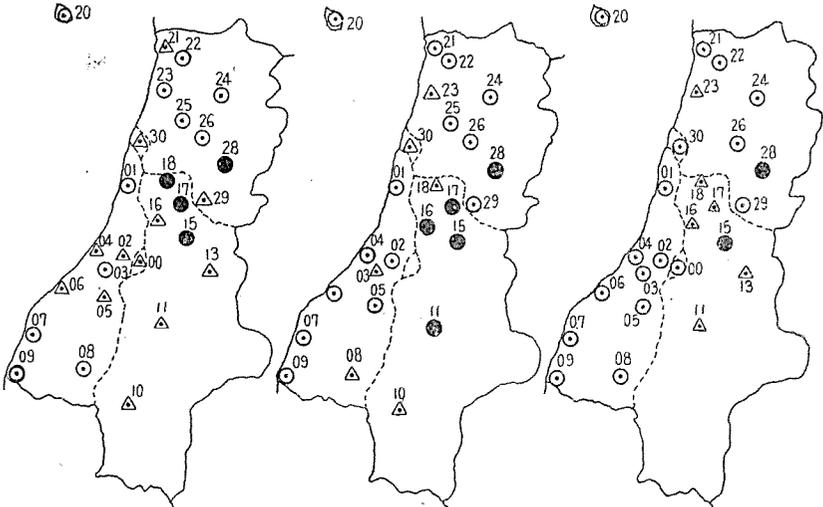
4.227 分布の型

以上の六つの語は、それぞれ庄内地方における方言形(土語)の地理的分布の型を代表するものである。これをまとめてひとつの地図に示すならば、図66のようになる。

* 小林好日「東北の方言」180べ

はずかしい

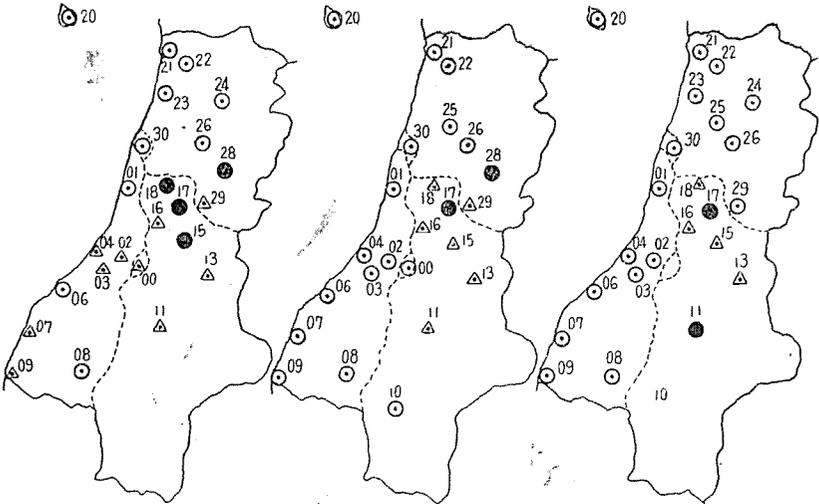
- カズ
- ショースー
- △ ハズカシー



20歳台男

40歳前後男

60歳前後男



20歳台女

40歳前後女

60歳前後女

図 60

おとうさん

- アヤ
- タグ、トド、テデ、オトー
- △ オトーサン

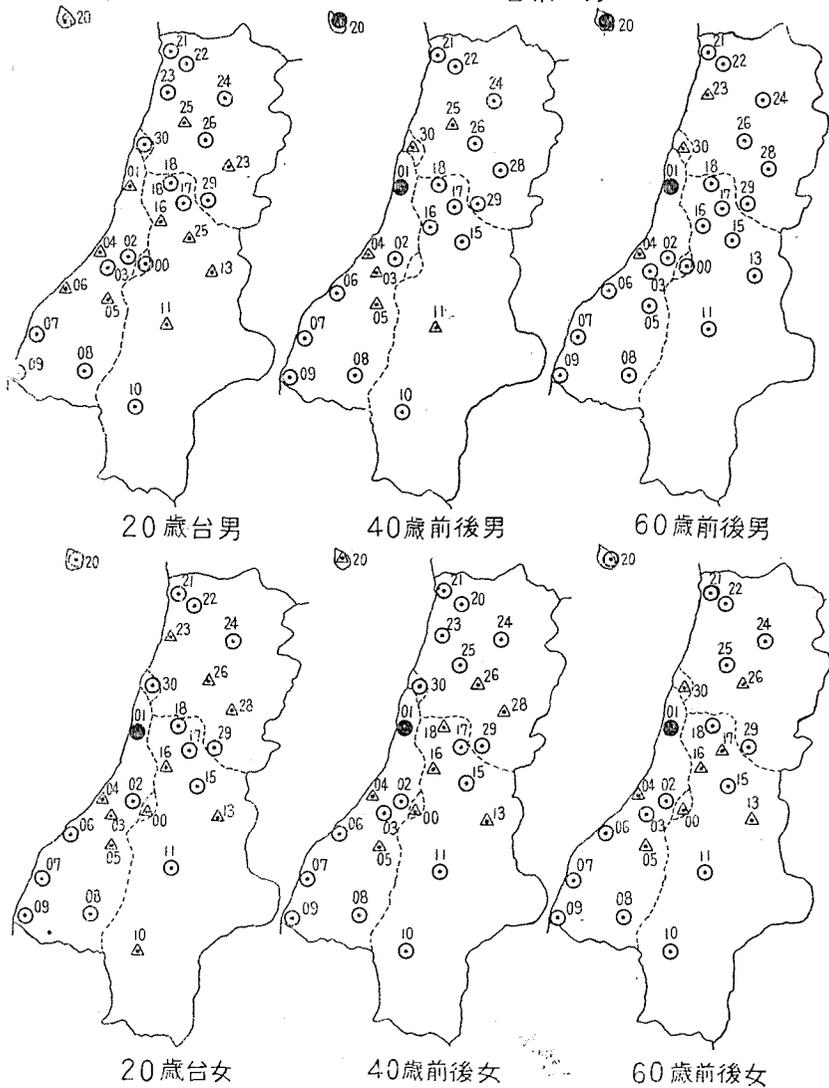


図 61

おかあさん

- アバ
- カガ
- ◎ オガ
- △ オカ-サン

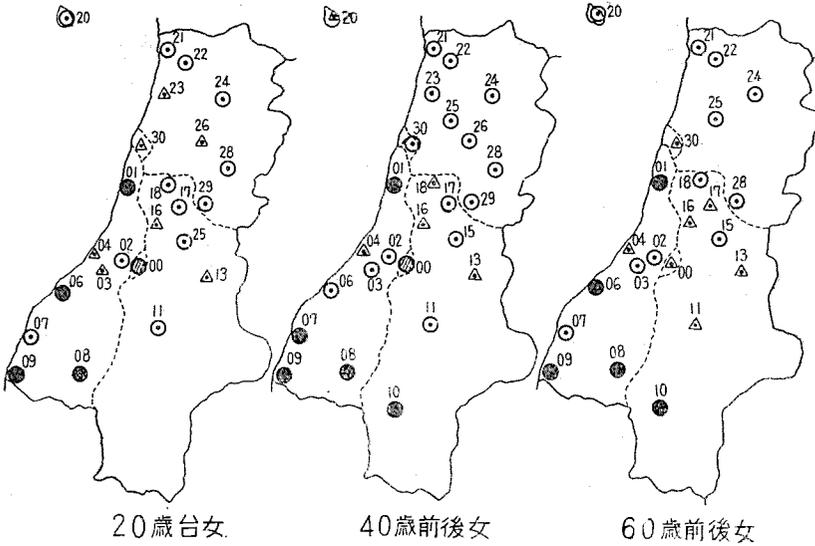
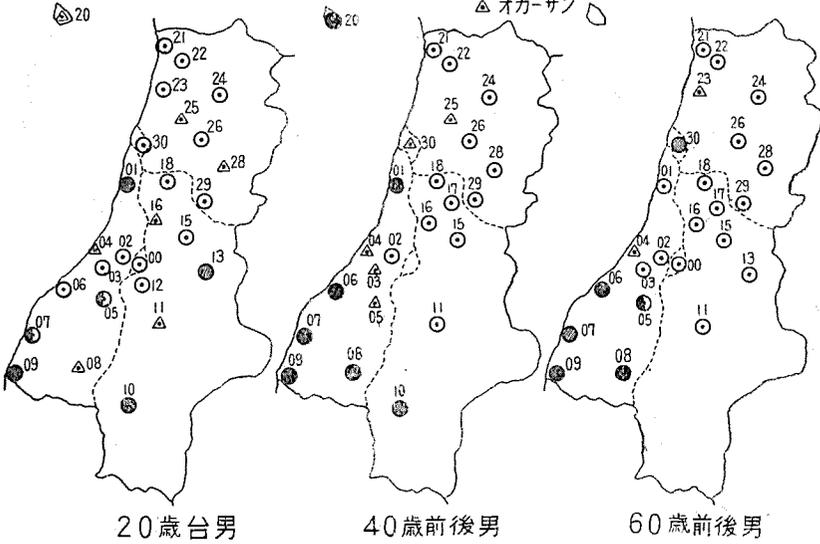


図 62

こども

- コトビラ系(コロボタ、コビラを含む)
- ボンボ
- △ コドモ

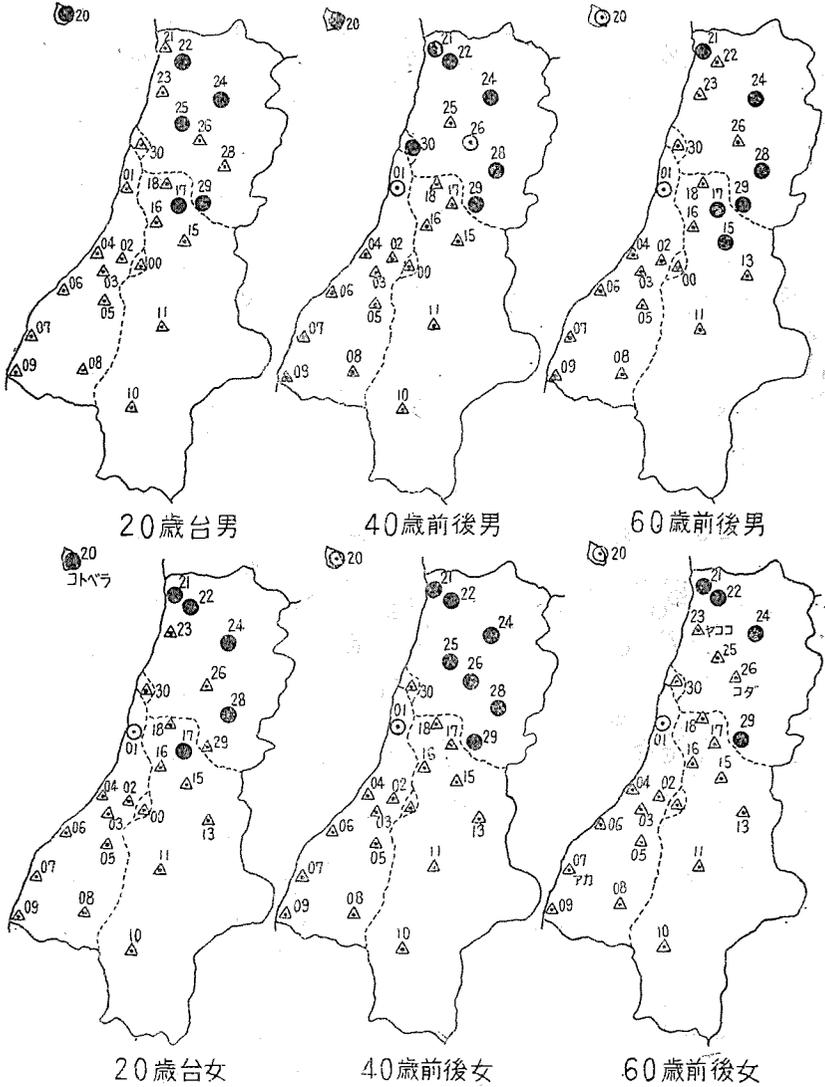
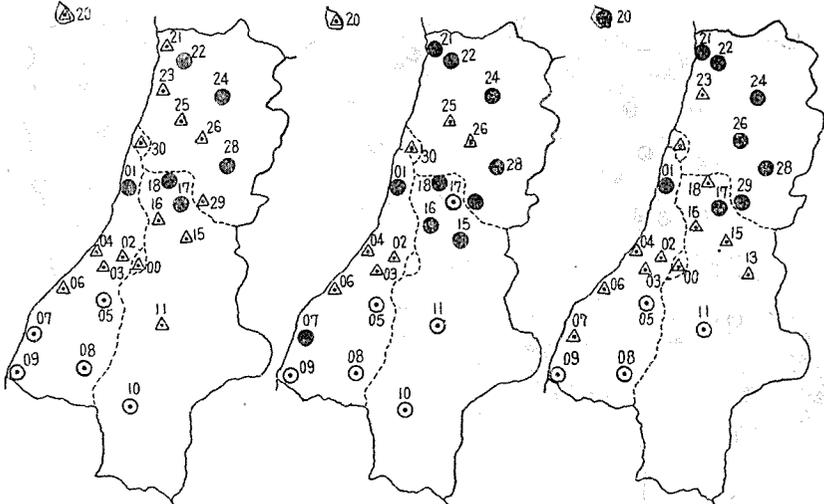


図 63

来 年

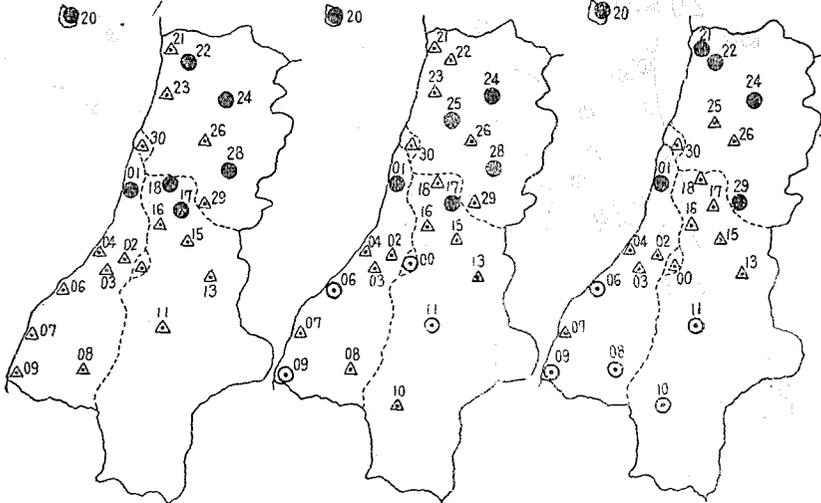
- ヤンネン
- レンネン
- レイネン
- △ ライネン



20歳台男

40歳前後男

60歳前後男



20歳台女

40歳前後女

60歳前後女

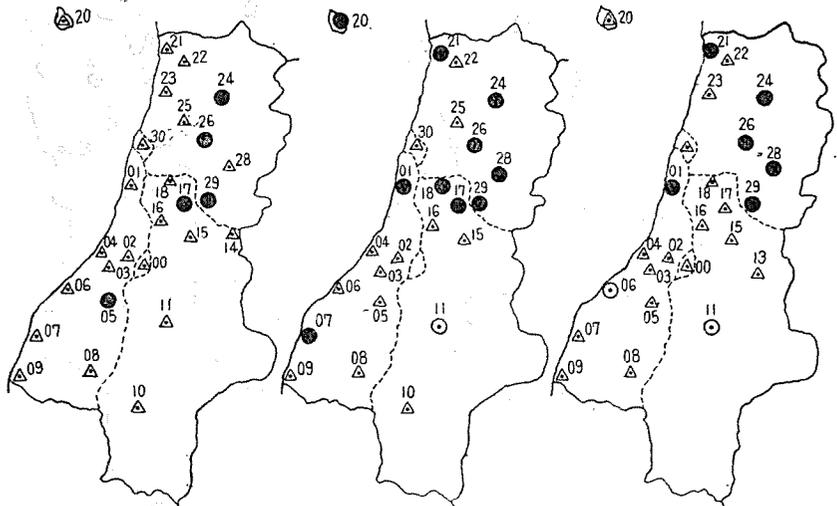
図 64

去 年

● キョンネン、チョンネン

○ チョネン

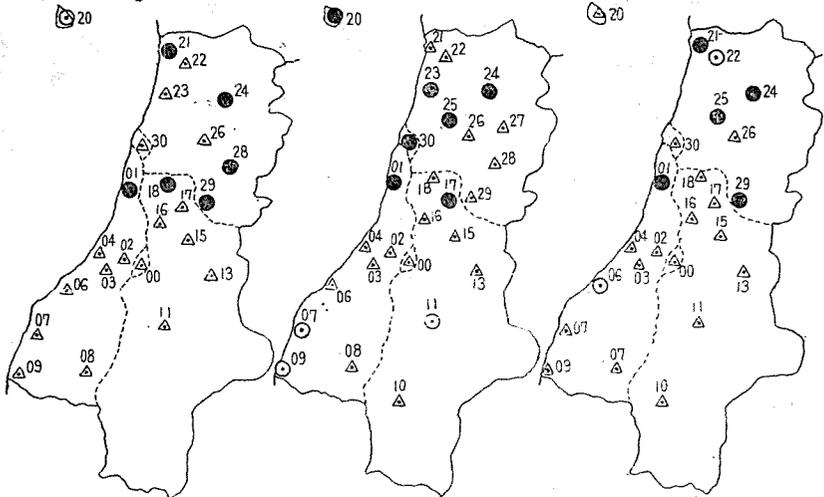
△ キョネン



20歳台男

40歳前後男

60歳前後男

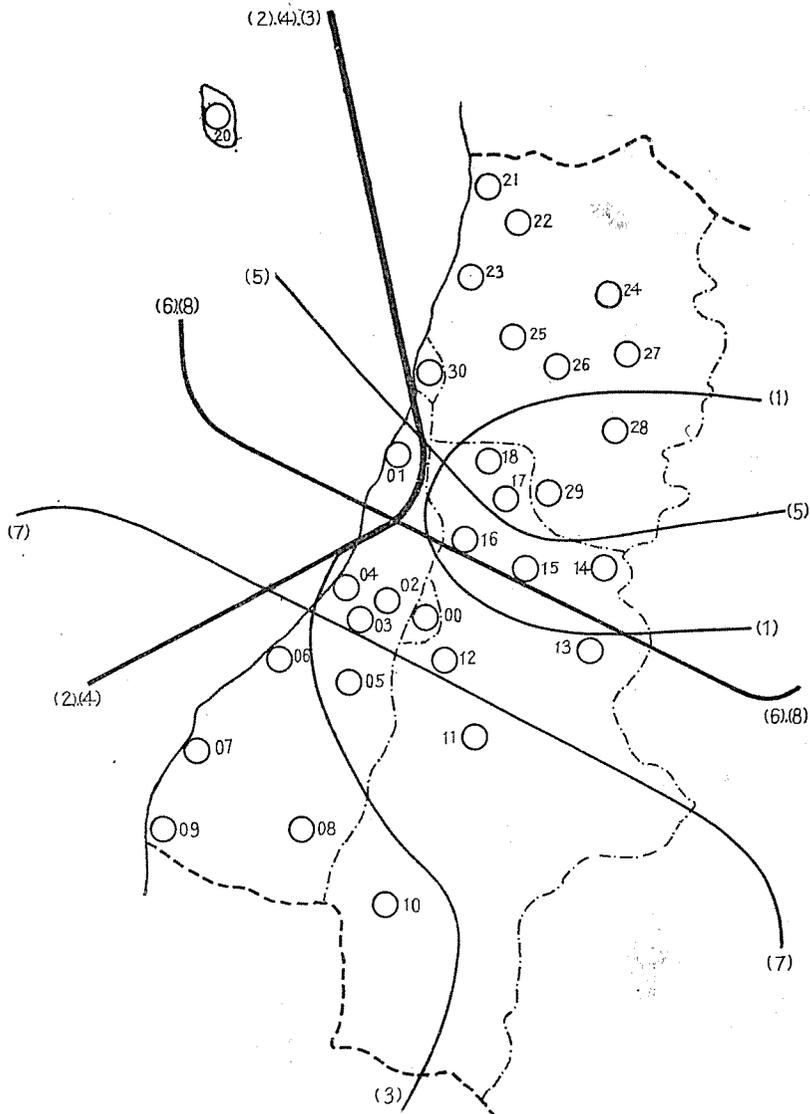


20歳台女

40歳前後女

60歳前後女

図 65



分布の型

- | | |
|--------------------|--------------------|
| (1)…「カゑ」(はずかしい)等語線 | (5)…「コトビラ」(子ども)等語線 |
| (2)…「アヤ」(おとうさん)シ | (6)…「レンネン」(来年)シ |
| (3)…「アバ」(おがあさん)シ | (7)…「ルネン」(来年)シ |
| (4)…「ボンボ」(子ども)シ | (8)…「キョネン」(去年)シ |

図 66

4.3 江戸時代の庄内語彙との比較

4.31 結果のあらまし

江戸時代の庄内語彙資料としては「浜荻」がもっとも重要である。「浜荻」は庄内藩士堀季雄^{とよかつ}が1767年(明和4年)に著したものである*。これはある婦人が江戸に上るにあたって、江戸ことばを教えるために、「馬の餞に」江戸のことばと庄内のことばとの違いを書いたものである。

著者も言っているように、「婦人の用意にもせしさうしなれば、全篇婦人の詞づかひを要と」していることは、この書の取り扱いにあたって常に忘れてはならないことである。語の数は庄内語約400、これに江戸語だけあげたものを加えると約500となる。語彙の並べ方は全く任意で、江戸語を上、それに対応する庄内語を下にあげて表示したものを基調とし、その間に必要に応じて説明や意見を入れてある。

「浜荻」の庄内語が現在の庄内地方にどのように残っているか。

まず、調査地点は I. 調査の概要 のところにあげた30地点である。調べ方は、被調査者に今も使っていれば○、使っていなければ×をつけさせた。

いま、○に1点、×に0点を与えて、各語の残存度を点数で示した。ただし、「浜荻」と全く同じではないが、似た形で行われている場合には0.5を与えた。

このようにして、地点ごとにまとめてみると、語の総数427に対して、平均して

20歳台の男	191.3
60歳台の男	226.2

となる。両者の間には相当な差がある。すなわち、老人のほうが青年よりも「浜荻」の語彙をいっそう多く残している、という常識的な結論が導き出される。

この残存度が地域ごとに、ある傾向を見せているかどうか。これを地図の上でながめることにしよう。まず、20歳台の男について、181.5以下、182~191、191.5~200、200.5以上の四つの段階に分けて示し、60歳台の男については、

* われわれの調査では「浜荻」のテキストとして、三矢重松著「庄内語及語釈」(1930年)に収められている(77ページ~134ページ)ものをとった。

215.5 以下, 216~226, 226.5~236, 236.5 以上 の四つの段階に分けて示すと、次の図のようになる。地域的な傾向は認められない。

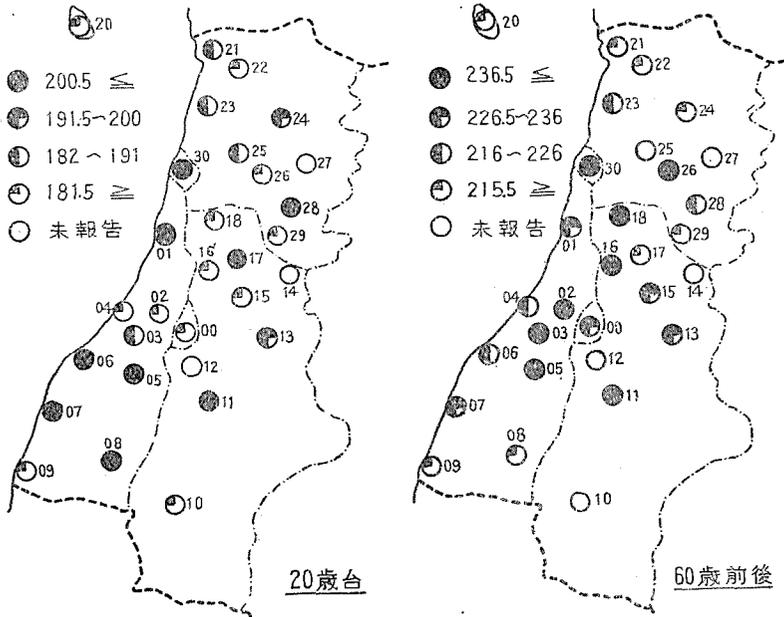


図 67

次に、各語について見ると、どうであろうか。20歳台の男については、27地点中、平均12.7地点に残っていると言える。1語1語について言えば、全地点に残っているものから、全地点どこにも残っていない語に至るまで、ほとんど一様に散らばっている。総数427語のうち、33語(7.7%)がすべての地点で失われ、18語(4.2%)が全地点に残っている。

4.32 「浜荻」の語彙一覧表

次にあげるものは、「浜荻」の庄内語と江戸語との対照表に、現代庄内方言における残存度をつけた一覧表である。

見出しには、庄内語を、「浜荻」にある形のまま（字面のまま）* 出し、これを五十音順に並べた。***漢字で書いてある語も旧かなづかいによって並べておいた。

見出しから一字分あけて右に示したのは、対照された江戸語（あるいは江戸語による訳）である。これも「浜荻」にある形のまま出しておいた。必要に応じて注をつけたが、〔 〕の中の注は「浜荻」の記載のままを写したものであり、（ ）の中のそれは、われわれのつけた注意書きである。

江戸語の右に示したアラビア数字は、庄内地方27地点のうち、現在、その語を残していない地点の数である。したがって、0とあれば、すべての地点で今も使われていることを示し、27とあれば、今はまったく使われていないことを示す。各地点、20歳台の男1人について調べたものである。アラビア数字のないのは、調査できなかった語である。

原文は縦書きであるため、横書きにするにあたって次の処置をとった。(1)くり返し符号は〜のように横に倒して使った。(2)ルビやしるしは原文で右に振ってあるものを上に、左に振ってあるものを下につけた。

あか 牛れ子〔赤とよべ江戸にては犬や猫などのやうに思ふなり〕 14
 あかる あかり 25
 あく はい 0
 あくと かゝと 2
 あけらほん あんかん 19
 あさいと 芋 2
 あざしらげ はこべ 13
 あざふ よし野紙 25
 あした 明日 0
 あすこ、また むかふ あそこ 17
 あそこさ あそこへ 2
 あづきもち しるこ餅〔女詞おせんざい〕
 1
 あつたか あたゝか 7

あつたまる（今アタマルも多い）あたゝ
 まる 2
 あつちやい（今アツチェ、アチェも多い）
 あつひ 6
 あぶらこ、また しんじやう あいなめ
 （魚の名） 1
 あま 年のゆかぬ下女 25
 あれる 日よりの悪しきを云 0
 あをきば あをき 18
 あをのけだま あをになる（仰向けにな
 る） 25
 あんどろ 行燈 19
 あんびんもち あんびん 25
 いきみ しり〔女詞おいど〕 25

* この結果け[㊦]、か[㊧]、づ[㊨]などの特種な表記をもそのままのせておいた。これらの音について著者は「浜荻」の中で次のように述べている。「庄内語の鼻にかかるといふは、カキクケタチツテトのかなを濁る故也。其中にまねく[㊩]まねぐ[㊪]、夕方を夕がた、織田をおだの類はしかと濁るの訛にて、大慶をたいけ[㊫]い、焼香をしょうか[㊬]う、義経をよしづ[㊭]ねの類は中段の濁り也。前のしかと濁るよりも此中段のにごり別して開にくし。（後略）」

** 次のようなものはこの語彙表にはとらなかつた。たとえば、「物いひの廻らぬ事を江戸にて舌たらずと云。小袖の事を江戸にておかいこといふ」などというときの「物いひの廻らぬ事」、「小袖」のように江戸語とのみ対応させてあるものがこれである。

いさかひ けんくは〔上方ではいさかひ
ともいふ〕 17
いしな 石 14
いしなご 小石 18
石なとり 手玉の事也 25
いじめ ゆさ(ゆりかご) 13
いじる なぶる事
いぬこ ちんころ〔上方にてはぬのころ
と云〕 6
犬子のねまる しこりのある
いびる せびる、いじめる 25
いほ 鮭 9
いもがしら とうのいも 26
いもご、いもご(酒田) さとも 7
いんこ ば(大便) 20

うがごへ うぶ声 25
うきふ すゝりだんご 27
うすば〔酒田〕 小刀 21
うそこく うそつく〔こくとは罵辞〕 7
うたる する 0
馬づら、またかうぐり 皮はぎ(魚の名)
づら 5

うんどん 温飮 16

おかない おそろしい 0
おかな 〱 おず 〱 6
おかみさま かみさま〔人の女房〕 17
お寛大〔女の詞〕 おかたじけ
おこし米 大ころぼし 16
おすゑし すべてはしたの事也 26

おだ 織田 7
お立〔酒田〕 亭鉢(なゝ鉢を見よ)
おちこ ぶせう者 25
御手かけ つまみ、くひつみ〔女の詞に
はうらいと云〕(取手) 24
お寺さま 僧 18
おとてな 一昨日〔おとつひといふは賤
しく聞ふ〕 10
おぼ 遊女 17
おはぐろいれ てうず 19
おびける おびへる 25
帯する 帯しめる 3
帯つき、また帯つけ あるぎ 27
おへさま おかみさまより次なる称呼 27
おほえて居る(今オパデルもある) 知て
居る〔合声で居る〕 0
おぼけた おびへる 2
大ちりおき 蔵半紙、半紙 27
御目にかける 御目にかゝる 11
おもしろがる(オモシエガル、オモシヨ
ガルも今ある) 嬉しがる 0
お慮外〔女の詞〕 おはばかり
おんへろ ふぬけ、ぬけ作、のろま 27

カイカイラウ にはとこ 27
かうしたごんだ かうした事じや 10
かうしたたつ かうしたたち(このよう

な性質) 12
かうだてば あゝだてば かうじやよあ
ゝじやよ 1
かうのけ(今多くコノゲ) まみ〔眉〕
〔女の詞にまへびきともいふ〕 4
か、かゝあ(母) 12
かゝほちい(今多くカガボシ) かゞは
ゆひ(まぶしい) 1
かけはたり かけ乞 24
かし かしは 2
かたがる かたふく(傾く) 0
かたすみ 鏡炭 3
かちま 〱 きり 〱 18
かづぎ まこも(草の名) 4
かつさばく(今多くカチャバク) ひつ
かく 5
かつそべない(今カチャペネが多い) 見
だてない 11
かつねる かつぐ 12
かつふし かつほふし 4
かひき(今ケギも多い) かひげ〔搔篲〕
(ひしゃくに似て残いの) 16
かぶける かびのさす 0
かぶりもの ぼうし 14
上下ぎ はかまぎ 23
かやのみ かや 〱 2
からがく からげる 1
からとり すいぎ 1
軽こい、軽い 7

気がよい、気象のさへたる事 13
木小屋 まき部屋
ぎす ばつた 13
ぎばさ じんばさう〔年始の祝ひに用る
時はほんだはらと云〕(海草の名) 20
きもをつぶす きもをけす 23
きやす けす(消) 24
きるもの きもの 20

きんか つんぼ 10、雪路の光るをいふ
きんな 昨日 3

ぐ 釣 17
ぐ引炭 かくだい炭 25
ぐ道具 釣道具 23
くたゝめる いひふくめる 27
くだり 南風 4
ぐちやら 〱 ぐしや 〱 13
ぐならしやなら ぐな 〱 8
くりわた はうれいわた 24
黒ぶどう さなづら 14
ぐわんをん 観音 25

下賤の三寸明け 下賤の一寸戸〔跡声を
さしかけてゆくをいふ〕 27
けち 〱 しる きわ 〱 しる 9
けちめくふ しからるゝ 26
けつまがる つまつく 1
けとぎ けいたう 9
けなりい うらやましい 1

けむたい けむい 4
 けんだい 松飾のくまびき 23
 小いはし ひしこ 10
 こが 桶 3
 こぐ 草木をほる 4
 こゝさ こゝへ 0
 こゝり 煮こゝり 16
 ごさいやく、また ごせをやく(今ゴシャゲル、ゴシャグ) 腹を立 10
 こしこ小豆 こしこ 27
 こすく(今ゴシャグが多い) しかる 19
 ごせをやく、ごさいやく参照
 ごぜんぐるみ あんくるみ〔あんころは下ぎの詞也〕 24
 こそばたい〔今ゴチャオバテが多い〕 くすぐたひ 5
 ごた どころ 16
 小旦那 若旦那 27
 ごちやごちやする〔酒田〕 くすぐたひ21
 こちる 日よりの悪しきを云 17
 こつへ こしやく 22
 ごて 夫 27
 こぬか ぬか 0
 小ぼう 男の子 26
 こぼた のぼり 24
 こまちやくれる いきすぎる 10
 こわめ せつない〔上方ではしんどいと云〕 3
 子をなす 子を生む 14
 さいはじける さし出る 27
 ざうじ まきべや 27
 酒酔 酒の酔、なま酔 1
 さきの 晩 一昨晩 4
 なくづ ぶすま(糠) 27
 なくづ袋 からこ袋(からこは穀粉で麸) 27
 さし身なます 生盛鱒 12
 なべちよ 口きき 2
 なべる しやべる 9
 なむしい さむしい 20
 しあまはてた あぐみはてた 17
 しが 氷 1
 しがゞさがる つらゝ 4
 しこ しゝ(小便) 24
 したたま したゝか 5
 下梯敷 切落し〔上方下梯敷〕〔追込〕 23
 七郎兵へ 七郎びやうへ 13
 しねる つめる 11
 しの小だい(今シノコデもある) かいづ(魚の名) 6
 四方 よはう
 十郎兵衛 十郎びやうへ 14
 しみどけ 霜解 18
 しみる こほる 2
 しめる とらへる 4

しもかぜ 北風 10
 しもにし 西北の風 14
 しやうかう 焼香 8
 じやうぎ わん 25
 しやれのけ〔江戸にてどけと云はいやし〕 15
 じゆくししがき じゆくし 2
 しよねゝしゐ いじゝしゐ 15
 しらげ しらが 26
 四郎兵衛 四郎びやうへ 13
 じろう兵衛 じろ兵衛 14
 しんじやう、あぶらこ参照
 すいふろ(今スフロが多い) すへ風呂 2
 すかい(今スッケが多い) 酸い 3
 杉原 のり入〔上方では杉原といふ〕 26
 すけたう鱈(今スケソダラ、スケダラも多い) ぼうだら〔遠海にて取たるしやうたいなき鱈の事〕 3
 菅の台炭 熊野炭 27
 すじ とくり 10
 すそ〔酒田〕 雪帽子 24
 すつぽつゝみ ほうかふり 26
 すま すみ 5
 すれる 飯などのすへる 18
 せど 屋敷 25
 其爾こゝさよこしてくれちや その爾くれな 7
 たいけつゐ 大慶 16
 大根がらみ かららみ(大根おろし)
 だいほう 岩城紙似たるものなれども異也、中はうに對したる大ほうにや 5
 大白 白砂糖 24
 大夫(タヨ、タヨサマもあり) 社人 13
 だうこ をし入 18
 たがく もつ 2
 高さじき 棧敷〔上方上棧敷〕〔芝居〕 22
 だし 東風 0
 たしこ たすき 9
 出しばな 茶のばな 19
 だゝ 父親 12
 たつくさ たくさん 15
 たばねのし ゆひのし 25
 たばねる ゆへへる 1
 たばねわた ゆひわた
 たふ たぶ(髻、結髪の後へ張り出す部分のこと) 23
 たふかうかい たぶさし(髻差、髻の中に入れて張り出すに使う道具) 27
 たまげた きもをけす 4
 たれ うどん蕎麥切の汁 0
 たろう右衛門 たろ右衛門 17
 たんと 多い 10
 たんな こしをび 5

旦那様〔酒田〕 医者 20
 たんはき はいふき 22
 だんま 手玉の事也 21

ヂ、 ぢゝひ (おじいさん) 10
 乳うば うば 23
 ちつこい ちいさい 25
 ちぶら〜 くよ〜 21
 チャカヒカ、 チャツカヒカ チャツト19
 茶壺 茶入〔挽たる茶を入れる器。(江
 戸で) 茶壺とは葉茶壺の事也〕 14
 ちやべな〔酒田〕 だてをする
 ちよかいになる 水などの潑たる 14
 ちよこひこ ちやつと、 ちやくと 23
 ちよす 調弄する 1
 ちよなめく だてをする 16

つき返し しんこ 25
 つくし クイ 15
 つぶ たにし 0
 つもり 鳳巾のいとめ 18
 つら かほ 2

朝鮮 朝鮮人参 26
 てうな まきわり 24
 てきない くたびれた 27
 出た 出来た〔上方にてはでけたと云〕25
 テ、 中間 (ちゅうげん) 27
 手のこつは 手の甲 21
 出はる 出る 3
 寺 出家 17
 てんこ、 また どうこ もうほ(魚の名)13

とうすみ、 とうしみ〔酒田〕 とうしん21
 床の間 床
 としや 大とし、 大海日 3
 ドス かたひ〔癩病〕 16
 どつてして とつはくさ 25
 ト、 とゝを(父) 19
 とゞりがなひ ほうらつな 23

飛やれ トビヤレ
 どぶ汁 粕入の汁 27
 とんてき のうてんき、 飛上り (生意氣、
 有頂天、無分別、のんき) 27
 どんぼ とんぼう 4

長上下 長ばかま 26
 なかほう そひがみ、 しやうしがみ、 ち
 りがみ 26
 なきみそ よふなく(よく泣く) 1
 なし崩 年賦 14
 なしたつて どふして 5
 なして なぜ 4
 なす すます〔借錢などを返す事也〕 3
 なたさゝげ いんげんさゝげ 20
 なづき びたあ 8
 なづきがいたひ、 また なづきがやめる

頭痛する 15
 なゝ 女房 22
 なゝ鉢 亭鉢〔客に飯を強んとて亭主の
 鉢に立を云〕 26
 なほだば なんぼだ参照
 なめくじら なめくじ 4
 なんばん とうがらし 0
 なんぼ いくら 0
 なんぼだ、 なほだば 物の直段を問ふ時0

にこかぎ にこ〜 26
 にし にしん 1

ぬか あらぬか
 ぬるま湯 ぬる湯 3

ねつい (今ネツが多い) しわひ 4
 ネットツ きれはの悪しき
 ねつこぼる いけむ (息むの転、いきぼ
 る) 2
 ねゝ むすめの子 26
 ねまり角力 居角力 3
 ねまりだこ かしこまりだこ 6
 ねまる すはる 2
 ねむたい ねむい 1

のけぞつた きもをけす 23
 のけ〜 づう〜、 しやあ〜 9
 のこずり のこぎり 20
 のたばる うつぶす 0
 のたられぬ ぬかりみ 26
 のめくる のらつく (のらくらする) 8

ぼうし 雪帽子
 馬鹿 氣違 3
 はげご びく 9
 はこべ あましらげ 11
 はしめ はじめ 14
 馬上 馬上挑灯 19
 はしる かける 0
 はたご 襦具 15
 はだこ ちはん 2
 はたる せつく〔俣〕 3
 はちめ あかう(魚の名) 10
 はつこひ つめたひ、 ひやつこい 0
 八尺木 薪 26
 はなくす はなくた(鼻腐、鼻をそこな
 い、声の濁ること、またその人) 16

花立 花生〔茶の湯者は花入と云〕 0
 バ、 ばゝあ (おばあさん) 9
 腹がくちひ (今は多くハラクジ) 腹が
 はる 0
 腹がすく 腹がへる〔女はひもじめと云
 べし〕 19
 はをりき かいどり 27
 ばんかぬ (今バンケが多い) ふきのた
 う 3
 はんざり 大たらゐ 2
 はんざし 小刀 27

ヒイナ、また ひな 人形 19
 火かき、ちのう 24
 引じる 引づる 4
 ひざかぶら ひざかしら 0
 ひさく(今ヒヤクが多い) ひしやく 5
 ひしこ 塩辛にしたいはし
 ひしやく〔酒田〕遊女 27
 火じるし まとひ 27
 ひたし ひたし物 3
 ビツキ かへる 1
 びつこ ちんば 0
 ひつゝ なごく、ひつたくる 27
 一坪 純子金入の類の呉服を買ふに一寸
 四方を云 25
 びと ぼと 12
 火とり 火入〔香の道具には火取といへ
 と、たばこ盆へ付るのは火入也〕4
 ひな、ヒイナ 人形 19
 ヒナクサイ(シナクセも今はある) キナ
 クサイ 1
 ひのうどん ほしうどん 23
 ひよつと ふと 0
 ひらきたんな〔酒田〕しごき 25
 ヒラメ 小鱈 8
 ひるま ひる 0
 廣間 小き座敷 16
 ふかす ふすま(麩) 10
 ふき 吹雪 5
 ふきから すいがら 26
 ふくづる〔酒田〕引づる 27
 ぶつこれる(今ボコレルが多い) こは
 れる 2
 ふて しい づう、しやあ 16
 懐うば もり 27
 ふるた ひきがへる 26
 ふん付た げかんの病を移る事(〜にか
 かること) 27
 べそつくる なきつら作る 17
 べつたう(今ベットも多い) てう(蝶) 6
 へボ げかん(下疳、皮膚殊に陰部に潰
 瘍を作る性病) 16
 べんと ゆるりと 22
 ホイト 非人 12
 棒鱒 丸乾の鱈 2
 ほうたち ほたる 25
 ホカス 綿をほかす 0
 ほこる くるふ 7
 ほしいはし ごまめ 2
 ほじくる ほる 7
 ぼた雪 ぬれ雪 2
 ホチヤ〔酒田〕ほうてう 25
 ほんにする 糞にする 10
 ほんのくぼ、また ほんのくど 糸りもと
 14

まがれる ひらめ 1
 まげる こぼす 2
 まじへざかな 交着 26
 ませがう まんがら(争ってことをする
 さま、また基だ急なさま) 23
 またら ませ 17
 まちれ まで(待) 21
 まとひ 高てうちん 20
 まなく 目 2
 まねく まねく 6
 まゝなき どもり 11
 まめしぼり 一粒鹿子(菓子の名) 19
 まんき ねたむ事
 見ぐさい(今メグセが多い) 見ぐるし
 い 3
 みそず(今ミソドが多い) ざうする
 (雑炊) 10
 みづは みつば、みつはぜり 8
 むかふ あすこ参照
 めごい いとしみ、かはいみ 2
 めごさま いとさま(お嬢さま) 27
 めつこ めつかち 0
 めつこ 飯 飯の片煮 1
 めとろく むしやう 27
 めろり ふぬけ、ぬけ作、のろま 10
 もくろく 西の内(紙の一種、地厚く質
 の強いもの、目録などを書く) 18
 もじかない(今モジャネが多い) 埒も
 なひ 11
 もじろ さより(魚の名) 18
 もつけな(今モッケダが多い) きのと
 くな 7
 もつ ぐよ 17
 やうがい 髪かき〔筈〕 26
 やせはつたぎ やせぎす 22
 やつこい やはらか 0
 やつはし やつはり(やっぱり) 14
 やばちひ じめじめする〔加茂今泉辺の
 浜通にては、むさくきたなき事を云〕
 4
 やみ〔酒田〕釣 26
 やみ竿〔酒田〕釣竿 26
 やめる いたむ 0
 野郎 二才(若者をいやしめののしる語)
 6
 やれ つけなごんだちや をしや
 うし 12
 やわたいも つくいも(つくねいも) 21
 夕がた 夕方(ゆうかた) 2
 ゆふぜん さし入り〔ゆふぜん染〕 10
 よしづね 義経 12
 よつばり ね小便 23
 よつら ゆす 16

よばる よぶ 0
夜のたま 夜の内より 24
よんま よる 4

らく ゑた 7

料理みそ 白味噌 26
れんくは ほうせんくは 19

わかぜ 中間(ちゅうげん) 2
わすら わるさ 25
わつから すきと〔上方にはねいからと
云こと葉有〕(すっかり) 24
わつは めんつう(面種、ひとりまえず
つ飯を盛って配る曲物) 6
わにる ほにかむ 27
わね 人をさしていふ詞 4
わらふ なぶる〔調弄の義〕 11
わるくいふ そしる 9

ゑざらまざら のるゝ 18
ゑのみの木 ゑのき 7

をかは まる 13
をきる をこる〔火が〕 0
をくめんする 場うてする(その場への
ぞんで気おくれすること)
をだける 猫のさかる 6
小田原 じきらう(食籠) 26
ヲヂ、ヲバ 二番目の子 4
をなさるゝ うなさるゝ 25
ヲバ、ヲヂ 二番目の子 4
をへる はへる(生) 13
をぼけ をごけ〔学桶〕(つないで長く
した麻をいれる桶) 22
をやこ 親類 3

IV 個人の一日の言語生活

1 「24時間調査」とその被調査者

われわれが「言語生活の24時間調査」または「24時間調査」と呼ぶ調査の目的、意義ならびに観察記録の方法等については「言語生活の実態—白河市および附近の農村における」の第2部（280ページ以下）に述べてあるところを参照されたい。この調査においても同様の目的のために、ほぼ同様の方法により、ほぼ同様の課題について分析を行った。

白河地域における「24時間調査」とやや相違する点を列挙すれば、次の通りである。

- (1) 準備調査を行わず直ちに本調査を実施した。
- (2) 被調査者を観察する際に、一日を午前・午後・夜の三部分に分ち、各部分をおのおの二人ずつの調査員が同時に観察する方法によった。これは白河地域の調査の後半に行われたものと同じ方法である。
- (3) 言語および言語行動を記録するために、調査員の手書きに頼らなければならなかったのは白河地域の調査の場合と同様であるが、部分的に録音器を併用し、また被調査者の一人には、手書き、ソクタイプ（機械速記）、録音器を併せ用いた。

被調査者を選ぶには「共通語の調査」との関連を考えたが、実際に選ばれたのは、

- 高級地方公務員（Pと呼ぶことがある）
- 手工業者（Q " ）
- 商店主（R " ）

各1名計3名で、そのおのおのの文化的条件を表示すれば次の通りである。

		P	Q	R
1	性	男	男	男
2	居住地	住宅を主とする地域	住宅・商店・農家・小工場のまざった地域	商店を主とする繁華街の地域
3	居住経歴	0—8大阪8—21鶴岡 21—27東京27—鶴岡	ずっと鶴岡	ずっと鶴岡、ただし21歳のとき3か月兵隊
4	生年	明治38年	明治39年	明治25年
5	職業	高級地方公務員	曲物師	荒物屋
6	発音教育	受けたことなし	受けたことなし	受けたことなし

7	言語関心	演劇運動をやったのでことばに気をつけている	気をつけていない	気をつけていない
8	学歴	旧制大学中退	小学校卒業	高等小学卒業
9	父の出身地	鶴岡市	鶴岡市	鶴岡市
10	母の出身地	山形県飽海郡松嶺町(庄内)	西田川郡大山町	鶴岡市
11	配偶者の出身地	山形県東田川郡新堀村(庄内)	西田川郡東郷村	鶴岡市
12	きょうだい	長子でも長男でもない	長男	長子でも長男でもない
13	委員	していない	していない	していない
14	階層	士族	士族でない	士族でない
15	社会的態度	現状に不満	現状に満足	現状に満足
16	新聞	毎日読む, 4部	毎日読む, 1部	毎日読む, 4部
17	単行本	計10冊	0冊	0冊
18	ラジオニュース	ほとんど毎日聞く	ほとんど毎日聞く	聞いたり聞かなかったり
19	旅行	東京2泊, 仙台1泊, 新潟1泊, 千葉1泊, 秋田日帰り, 酒田日帰り(いずれも公務)	なし	酒田12日(商用)
20	東京との関係	行き来と文通	行き来と文通	文通のみ

なお、これらの人人の一日の言語生活を観察し記録した年月日は、

高級地方公務員	1950, 11, 20
手工業者	1951, 10, 11
商店主	1950, 11, 21

である。

この調査の結果の一部はⅡ共通語化の要因と過程(3.112ページ以下)に述べてある。したがって、この項では、同時に附随的に調査された、談話生活を主とする個人の言語生活の実態を知ろうとする調査のうち次の課題についての結果だけを述べることにする。

- (1) 一日にどれくらい話すか
- (2) どんなことばをよく使うか
- (3) どのくらい読み書き, ラジオを聞くか
- (4) 女の長さ, 文節の長さはどれほどか
- (5) 手書きと録音とにはどんな違いがあるか

2 一日にどれくらい話すか

2.1 話題の数、文の数、文節の数

一日じゅうの話題の数は、

高級地方公務員	437
手工業者	318
商店主	391

であって、だいたい 300~400 と見られる。高級地方公務員と商店主に話題の数のやや多いのは、前者がつきつぎに訪問者の現われたこと、後者が店に来る客との応対の多いことによるものと思われる。語題の数え方は白河地域の調査におけると同様、中心話題だけについて計算した*。なお、この数は白河地域の調査で得た話題数 700 前後に比べるとかなりの開きが見られる。

次に、一日に使う文の延べ数は、

高級地方公務員	1,983
手工業者	1,573
商店主	1,347

であり、だいたい 1,300~2,000 と認められる。これも白河地域の調査の場合のだいたい 2,600~3,000 という数と比べるとそのいずれもがはるかに下回っている。この傾向は総話題数においても、次に述べる文節の延べ数においても見られるところであり、それが二つの地域社会の差異に起因するものであるか、単なる個人差に帰すべきものであるか、あるいはその両者に起因するものであるかは、この小数の例からは明かでない。

一日の文節の延べ数（したがって一日の自立語の延べ数でもある）は、

高級地方公務員	5,528
手工業者	4,752
商店主	2,891

* 「言語生活の実態」(284~)

であって、だいたい3,000~5,500と見られる。これも白河地域の調査における8,500~10,000と比べると、ほぼ2:1の開きが見られる。

2.2 言語量の時刻別分布

図68, 69 および図70は、1時間を単位として、一日の言語量の時刻による多い少ないを図示した。白河地域の調査では、2種類の24時間調査がともに、食事時に言語量の多いという結果を示しているが*、この調査では、手工業者がおやつを含む食事時に多く話すことを示し、高級地方公務員が夕食時に言語量をやや高めているほかは、高級地方公務員、商店主とも、言語量の多い少ないは職業的なものに関係を持つらしいことは注目される。

2.3 一日に使う異なり語数

一日の異なり語（自立語）の数を見ると、

高級地方公務員	1,497
手工業者	1,282
商店主	919

であって、商店主において少なく、高級地方公務員、手工業者において1,300~1,500を示している。白河地域の調査では農民、商家の主婦とも2,000語以上を使っているのと比べて、ここにも大きな開きが見られる**。なお、異なり語（自立語）の数を文節（自立語）の延べ数と比べると、3人ともひとつの自立語が平均3~4回ずつ使われていることになる。（高級地方公務員 3.6、手工業者 3.7、商店主 3.1）

* 「言語生活の実態」(285~)

** 「言語生活の実態」(285~)

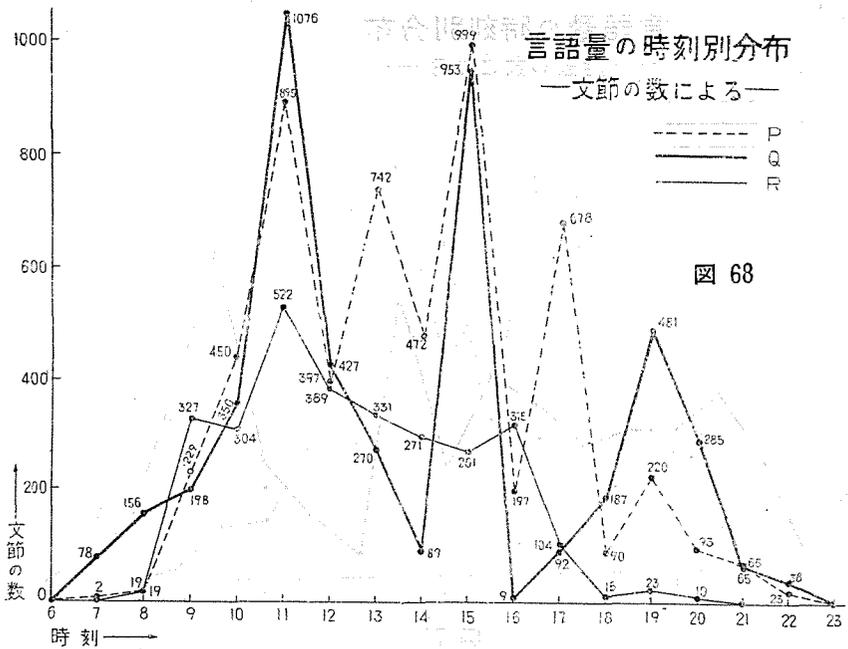


図 68

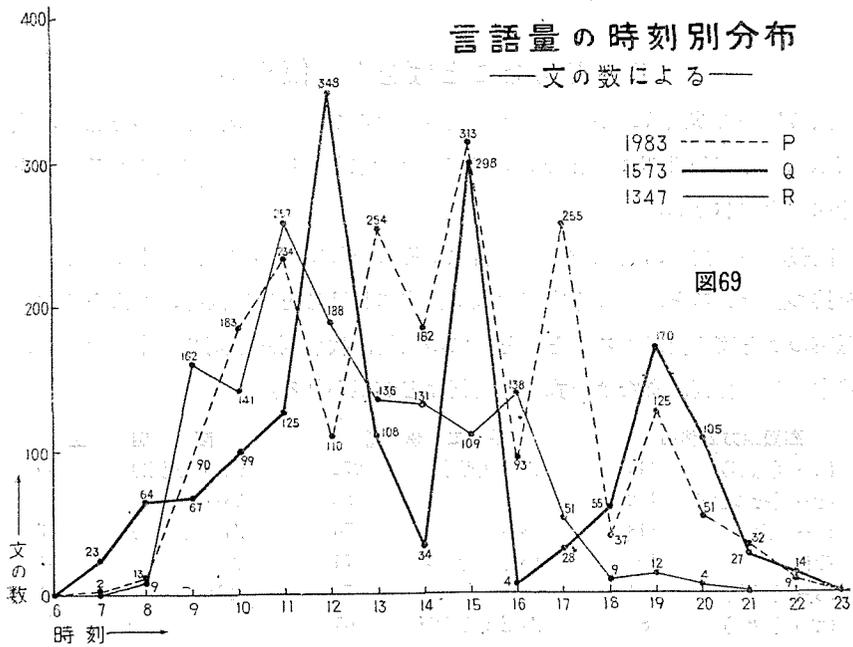


図69

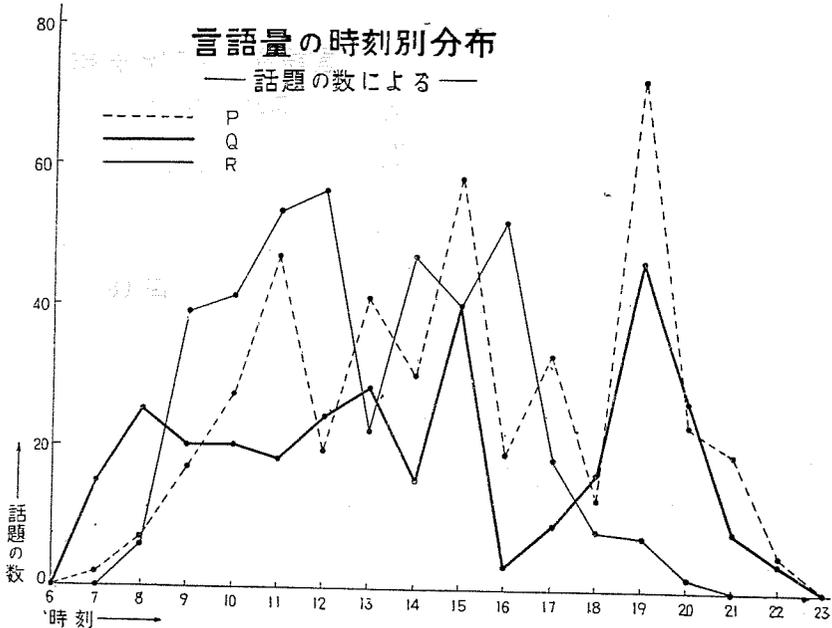


図 70

3 どんなことばをよく使うか

図 71 および図 72 の示す語（自立語）ならびに文節の使用度の分布は、白河地域の調査およびこれまでの文字言語を対象とする諸調査に見られる分布と比べて大差がない。

高級地方公務員、手工業者、商店主のそれぞれについて50回以上の使用度数を持つ語を見ると、これも白河地域の調査におけるとほぼ同様、3人ともに、返事のことばや指示することばとしての副詞、代名詞感動詞や基本的な動詞、基本的な形容詞、または形式的な名詞などが現われる。

高級地方公務員		手工業者		商店主	
はー（返事）	443	ん（返事）	272	はい（返事）	80
そー（そのように）	182	これ	86	いー	58
えー（返事）	148	いー	76	ん（返事）	57
それ	108	いく（行く）	74	ある	54
あー（返事）	84	そー	73	これ	54
はい（〃）	83	んだ（そうだ）	65		

は (返事)	78	する	56
ん (＼)	71	もん (もの)	55
する	70	あー [感動詞]	51
ゆー (言う)	63		
これ	57		
ください	55		
ほー (方)	55		
～なる	54		
いー	52		

使用度数10回以上の話と総自立話数との比率は、

	10回以上使 われた語の数	総自立語数	%
高級地方公務員	2944	5528	53.2% 強
手工業者	2226	4752	46.8% 強
商店主	1180	2891	40.8% 強

であり、10回以上の使用度数を持つ語の総使用度数は、語の一日の総使用度数の約40～53%を占めている。また使用度数10回以上の異なり語数は総異なり語数の約6～7%を占めている。(高級地方公務員5.6%、手工業者6.5%、商店主5.5%)。

使用度数10回以上の語および文節の一覧表を個人別に示せば次の通りである。

10回以上使われた語の度数順一覧表

—— 高級地方公務員 ——

語	度数	語	度数
はー (返事)	443	ある	47
そー (そのように)	182	やる	42
えー (返事)	148	なるほど	40
それ	108	～いる	37
あー (返事)	84	その	34
はい (＼)	83	なに	33
は (＼)	78	ない	32
ん (＼)	71	どーぞ	30
する	70	どーも	29
ゆー (言う)	61	たいへん	28
これ	57	あ (返事)	27
ください	55	ははー (＼)	27
ほー (方)	55	おー (赤んぼろをあやす)	26
～なる	54	こと (事)	26
いー	52	どー (どのように)	26

使用度数の多い(10回以上)語の分布

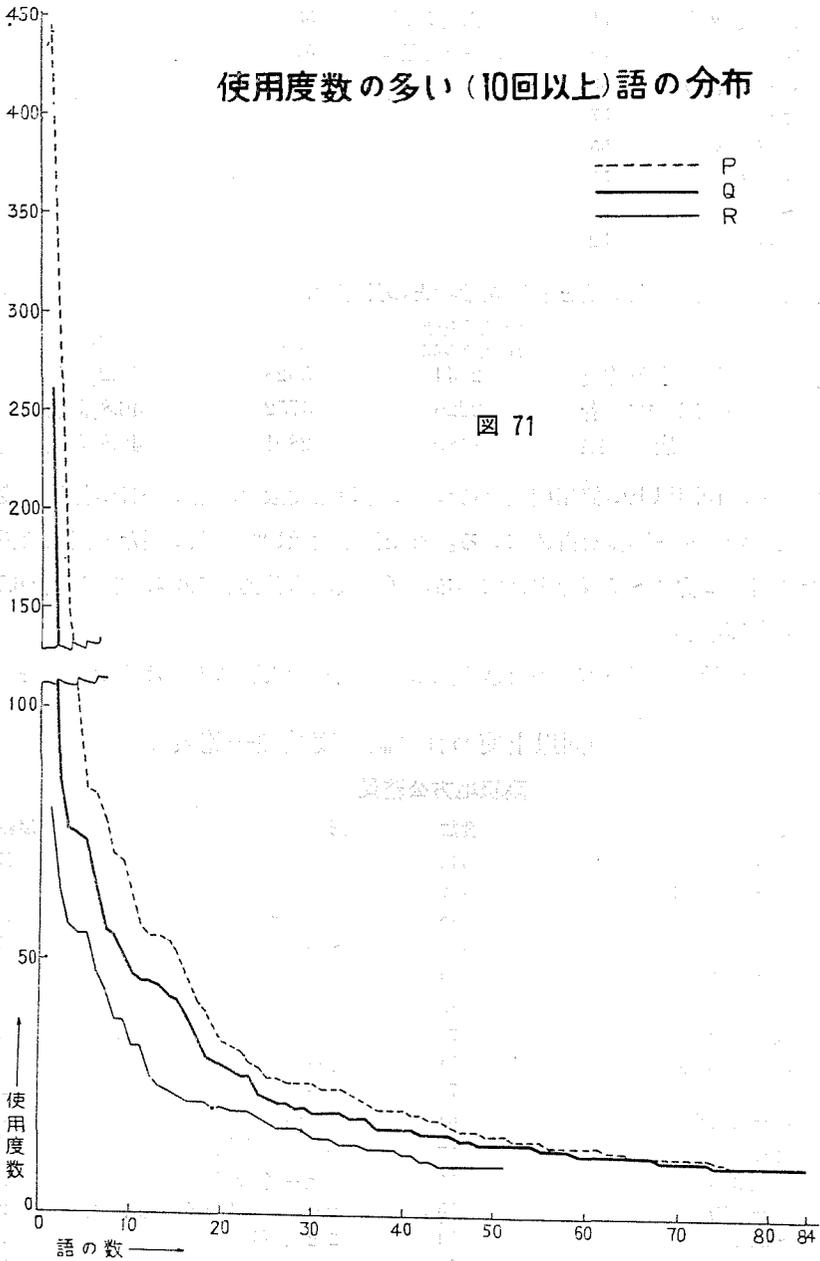


図 71

使用度数の多い(10回以上)文節の分布

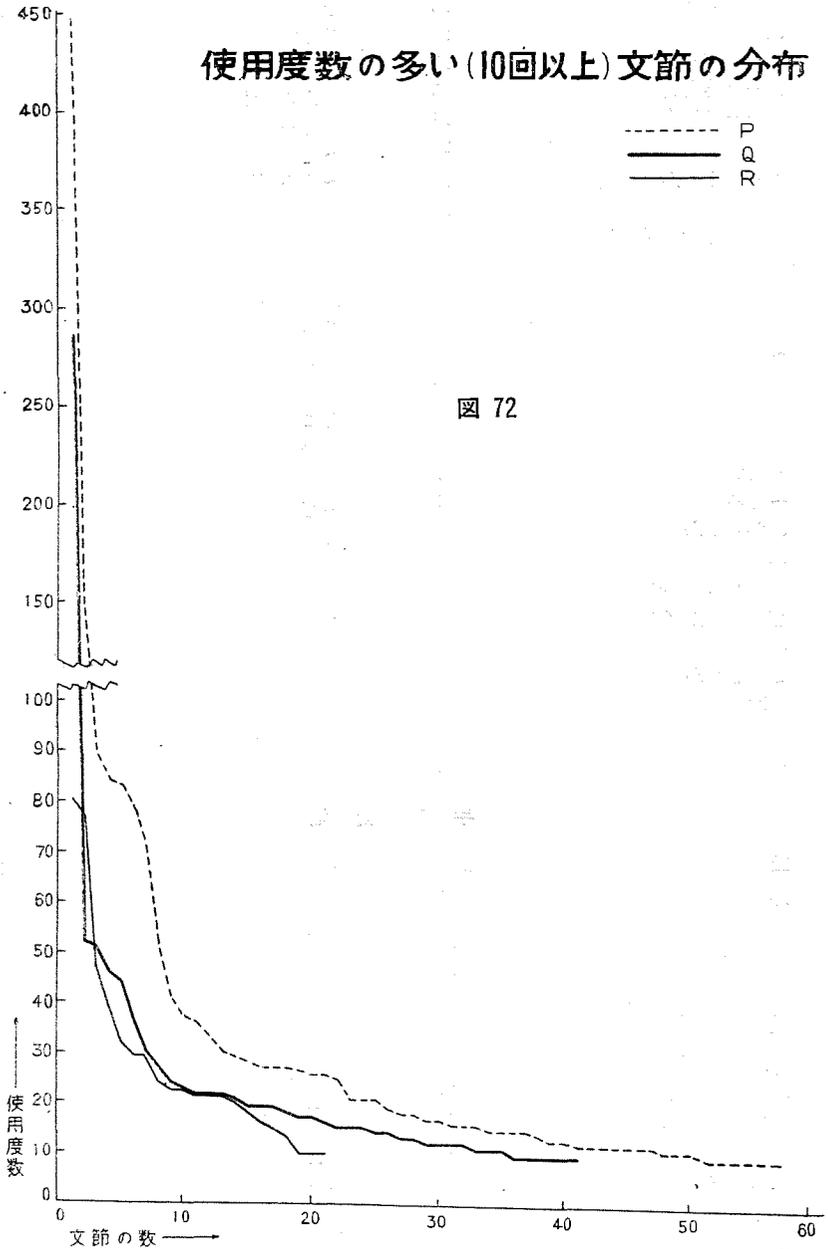


図 72

語	度数	語	度数
わたくす (私)	26	とき	14
あれ	25	ひとつ (副詞)	14
くる (来る)	25	ほー (感動詞)	14
ほー (感動詞)	25	わんらくする	14
はー (返事)	24	きょー (今日)	13
ここ	23	～みる	13
こーみんかん (公民館)	22	～もらう	13
いま	21	いく (行く)	12
もす (電話の呼びかけ)	21	いや (否定)	12
もの	21	え (返事)	12
よい	21	けっこー	12
おもう	20	じゃ	12
～ない	20	ちよっと	12
この	19	でる	12
わかる	19	どこ	12
できる	18	はいる	12
うまい	17	いれる	11
～くる	17	～ござる	10
あかちゃん	16	こりゃ	10
あの	16	すかす	10
いちおー (一応)	16	だす (出す)	10
ごとーくん (人名)	15	だれ	10
そりゃ	15	のーだい (農科大学)	10
としょかん (図書館)	15	ふん (返事)	10
わけ	15	やまがせんせー (人名)	10
あなた	14	わたす (代名詞)	10
～くれる	14		

— 手 工 業 者 —

語	度数	語	度数
ん (返事)	337	ある	42
これ	86	ほー (方)	39
いー	76	はー (返事)	35
いく (行く)	74	くる (来る)	31
そー (そのように)	73	きょー (今日)	30
する	56	ここ	29
もん (もの)	55	かう (買う)	28
あー (感動詞)	51	えー (返事)	27
それ (代名詞)	47	もの	27
なに	46	さー	24
はい (返事)	46	いま	23
～くる	45	まだ	22
～なる	43	もー	22

語	度数	語	度数
うーん	21	それ〔感動詞〕	13
こっち	21	ひと	13
い(いい)	20	あと(後)	12
ほー〔感動詞〕	20	こー(このように)	12
やる	20	ことす	12
ゆー(言う)	20	そこ〔代名詞〕	12
この	19	と(にわとりをあやすことば)	12
その	19	とこ(ところ)	12
やっぱり	19	ない	12
～いる	17	ふん(返事)	12
うまい	17	まめ(豆)	12
ちょっと	17	あれ	11
どーも	17	おはよー	11
よー(様)	17	くさい	11
つかう(使う)	16	～くれる	11
ネ(無い)	16	こと	11
へん(刃)	16	はやい	11
もつ(持つ)	16	うメー(うまい)	10
やすい(安い)	15	おっきい(大きい)	10
～ゆー	15	～ござる	10
おれ〔代名詞〕	14	すこす	10
きのこ	14	だす(出す)	10
でる	14	できる	10
どこ	14	どー(どのように)	10
とる	14	な〔感動詞〕	10
のー〔感動詞〕	14	なんぼ	10
みる(見る)	14	～みる	10
あがる	13	よい(良い)	10
すぐ	13		

— 商 店 主 —

語	度数	語	度数
ん(返事)	101	なんぼ	25
はい(返事)	80	ありがとー	24
いー	58	やる	23
ある	54	あ(返事)	22
これ	54	～ネー	22
あー(返事)	47	ほー(方)	22
それ	38	えー(返事)	21
はー(返事)	38	ない(無い)	21
くる(来る)	33	そー(そのように)	20
ネー(無い)	33	どーも(あいさつ)	20
あれ	27	～やる	20

語	度数	語	度数
もってく	19	にじゅーえん (20円)	13
なに	18	やすい (安い)	13
～くる	17	じゅーごえん (15円)	12
～くれる	17	ひゃくごじゅーえん (150円)	12
～なる	17	だす (出す)	11
する	16	むすろ (蕙)	11
あの	15	おーきー	10
きょー (今日)	15	～がす (ごぞいます)	10
もつ (持つ)	15	すば (それならば)	10
おはよー	14	そこ [代名詞]	10
かう (買う)	14	その	10
まける (値段をまける)	14	たわす (束子)	10
あと (その他)	13	まだ	10
だめ	13	みる (見る)	10

10回以上使われた文節の度数順一覧表

— 高級地方公務員 —

文節	度数	文節	度数
はー (返事)	443	～います	21
えー (返事)	148	そーですな	21
そー (そのように)	89	もす (電話の呼びかけ)	21
あー (返事)	84	なにか	19
はい (返事)	83	この	18
は (返事)	78	やって	18
ん (返事)	71	それわ	17
そーですか	51	わたくすの	17
～ください	41	あかちゃん	16
ゆー (言う)	37	あの	16
それから	36	いつおー (一応)	16
その	33	どー (どのように)	15
どーぞ	30	そりゃ	15
どーも	29	それ	15
なるほど	28	ほーが (方)	15
あ [感動詞]	27	ほーー [感動詞]	14
これ	27	ごとーくん (人名)	13
ははー (返事)	27	ひとつ [副詞]	13
おー [感動詞]	26	あれ	12
すて (する)	25	いや (否定)	12
ほー [感動詞]	25	うまく	12
はーー (返事)	24	え (返事)	12

文節	度数	文節	度数
けっこーです	12	これわ	10
じゃ	12	すかす	10
なるほどね	12	すると	10
いいですね	11	とき	10
たいへん	11	～なって	10
ちよっと	11	ふん(返事)	10
いま	10	わかりますた	10

— 手 工 業 者 —

文節	度数	文節	度数
ん	272	うまい	15
んだ	52	ここ	15
あー〔感動詞〕	51	～ネーか	15
はい(返事)	46	かって(買って)	14
これ	44	のー〔感動詞〕	14
はー	35	いま	13
そー	30	そーか	13
えー(返事)	27	こー	12
さー	24	と(にわとりをあやすことば)	12
もー	22	ふん	12
うーん	21	もって(持って)	12
それ	21	おはよー	11
まだ	21	～ネー	11
ほー〔感動詞〕	20	ゆー(言う)	11
この	19	きょー(今日)	10
その	19	これわ	10
やっぱり	19	すて(する)	10
きょーわ(今日)	18	な〔感動詞〕	10
ちよっと	17	ものわ	10
どーも	17	やって	10
ほーが(方)	16		

— 商 店 主 —

文節	度数	文節	度数
はい(返事)	80	あ〔感動詞〕	22
うん(〃)	57	いー	22
あー(〃)	47	あの	21
ほー(〃)	38	いま	21
これ	32	えー(返事)	21
それ	29	どーも	20
んだ(そうだ)	29	ありがと	18
ある	24	あれ	16

文節	度数	文節	度数
ネー (無い)	15	その	10
おはよー	13	んだば (それならば)	10
すば (それならば)	10		

4 どのくらい読み、書き、ラジオを聞くか

読み、書き、話し、聞く行動を言語行動と呼ぶとすれば、ある個人は一日のうちどのくらいの言語行動をするであろうか。高級地方公務員、商店主について分析した結果は次の通りである*。なお、聞く、読む行動は外面的観察によって可能なものだけに止めた。

	高級地方公務員	商店主
(1) 起きている時間	15時間 (6.35~21.35)	12時間28分 (7.00~19.28)
(2) 言語行動の時間	11時間54分	8時間9分
i 会 話	7時間19分	6時間10分
ii ラジオを聞く	49分	27分
iii 読 む	1時間34分50秒	1時間14分50秒
iv 書 く	47分50秒	17分50秒
v 読み(書き)つつ書く(読む)	1時間24分	
(3) (1)に対する(2)の割合	79%	65%
(4) (2)に対する i の割合	61.5%	75.4%
ii の割合	6.8%	5.6%
iii の割合	13.3%	15.3%
iv の割合	6.7%	3.7%
v の割合	11.7%	

上の表によれば、一日の行動のうち65%または80%が言語行動であり、言語行動の60%または75%が会話に費やされている。読み書きに費す時間は白河地域の調査ではせいぜい10分を越えない程度であったが、ここでは1.5時間または3.5時間となっている。なお、手工業者の読み書きに費した時間はおよそ20分である。

* 手工業者についての結果はストップウォッチその他の不調のためこの部分の分析はできなかった。

各人についての、会話を除く部分のやや詳しい分析を示せば次の通りである。

商 店 主

時 刻	時間(分)	読・書・ ラジオ	場 所	内 容	備 考
7-11~7-32	22	ラジオ	茶の間	ラジオ	ニュース、「読書のしおり」、 「朝の歌」
7-33~7-39	7	読 む	〃	地 図	山形県の地図
7-54	1	〃	店	新 聞	「山形新聞」
8-01.5~8-02}	6	〃	〃	〃	〃
8-03.5~8-08}					
8-25~8-26	2	書 く	〃	商品に書きつける	筆で書く
8-46	$\frac{1}{2}$ (以内)	読 む	〃	通 帳	
9-03	1 (以内)	〃	〃	領収書	郵便で送って来たもの
9-15	1	〃	〃	荷 札	龜の子だわしに付けるもの
9-18	1 (以内)	〃	〃	名 刺	
9-23.5	$\frac{1}{2}$ (以内)	書 く	〃	商品に書きつける	筆で書く
10-22.5	1 (以内)	〃	〃	通 帳	〃
10-24	1 (以内)	〃	〃	〃	〃
10-27	1	〃	〃	〃	〃
10-39.5	$\frac{1}{2}$ (以内)	〃	〃	領収書	
10-41	1 (以内)	〃	〃	〃	
10-42	1 (以内)	〃	〃	〃	
10-45~10-45.5	$\frac{1}{2}$	〃	〃	通 帳	
11-11	1 (以内)	読 む	〃	送り状	
11-14	1	〃	〃	〃	
11-53	1	〃	〃	〃	
12-00~12-04	5	ラジオ	〃	ラジオ	ニュース
13-11~13-12	2	読 む	〃	新 聞	「読売新聞」 3面
13-13	1		〃	〃	〃 4面
13-14	1		〃	〃	〃 1面
13-15	1		〃	〃	「日本経済新聞」 4面, 2面
13-16	1		〃	〃	〃 4面, 1面
13-17~13-26	10		〃	〃	〃 3面
13-36	1 (以内)		書 く	〃	荷 札
13-53	1	〃	〃	領収書	
13-59	1 (以内)	〃	〃	〃	

14-15~14-20	6	読む	店	古手紙	
14-22	1	書く	"	通帳	筆で書く
14-29	1 (以内)	読む	"	帳簿	
14-31~14-33	3	"	"	"	
14-34	1 (以内)	書く	"	"	万年筆で書く
14-45~14-48	4	"	"	メモ	
14-51	$\frac{1}{2}$	読む	"	広告	
15-20	$\frac{1}{6}$ (以内)	書く	"	伝票	筆で書く
15-22	$\frac{1}{6}$ (以内)	"	"	メモ	
16-47~16-48	2	読む	茶の間	新聞	「庄内日報」
16-49	1	"	"	"	「読売新聞」 4面
17-00	1	"	"	"	「山形新聞」 広告欄
17-05~17-10	6	"	"	"	" 三面
17-15~17-16	2	"	"	"	" 広告欄
17-17~17-18	2	"	"	"	" 社説(見出しざっと)
17-19~17-22	4	"	"	"	" 社説
17-25~17-26	2	"	"	"	" 小説
17-30~17-31	2	"	"	"	「読売新聞」 1面
17-32~17-37	6	"	"	"	" 2面, 3面

読み書きラジオを聞く時間の内訳

(1) ラジオを聞く

ニュース	9分
読書のしおり	15分
朝の歌	3分
計	27分

(2) 読む

新聞 (山形, 読売, 日本経済, 庄内日報)	51分
通帳, 帳簿	4分30秒
領収書, 送り状	4分
荷札, 名刺, 古手紙, 広告	8分20秒
地図	7分
計	74分50秒

(3) 書く

通帳, 帳簿	5分30秒	
領収書	4分40秒	
メモ	4分10秒	
商品, 荷札に書きつける	3分30秒	総計
計	17分50秒	119分40秒

高級地方公務員

時刻	時間(分)	読書・ラジオ	場所	内容	備考
6-49~6-53	5	ラジオ	茶の間	ラジオ	「私たちのことば」
6-56~6-59	4	〃	〃	〃	〃
7-00~7-14	15	〃	〃	〃	ニュース
7-00~7-07	8	書く	〃	メモ	手帳に
7-30~7-44	15	ラジオ	〃	ラジオ	「朝の歌」
7-45~7-54	10	〃	〃	〃	「朝の訪問」
8-03~8-14	12	読む	事務室	新聞	「庄内日報」
8-16	1	〃	〃	〃	〃
8-28~8-29	2	〃	〃	〃	〃
8-30~8-44	15	書く	〃	事務書簡	
8-45~8-49	5	読む	〃	〃	
8-50~9-00	11	{	〃	書類	
		書く	〃	事務書簡	
9-25	1	{	〃	書類	
(以内)		読む	〃	書類	
		書く	〃	事務書簡	
9-26~9-28	3	{	〃	書類	
		読む	〃	書類	
		書く	〃	事務書簡	
9-29	1	{	〃	書類	
		読む	〃	書類	
		書く	〃	事務書簡	
9-37~10-13	38	{	〃	書類	
		読む	〃	書類	
		書く	〃	事務書簡	
11-09~11-20	12	{	〃	書類	
		読む	〃	書類	
		書く	〃	事務書簡	
11-22~11-23	2	{	〃	書類	
		読む	〃	書類	
		書く	〃	事務書簡	
11-40~11-55	16	{	〃	書類	
		読む	〃	書類	
		書く	〃	事務書簡	
11-56~11-57	2	読む	〃	〃	自分の書いたもの
11-58~12-02	5	書く	〃	〃	〃
12-48	1	{	〃	書類	
(以内)		読む	〃	書類	
12-54	1	〃	〃	事務書簡	
(以内)		〃	〃	事務書簡	
12-55	1	〃	〃	書類	
13-04~13-07	4	〃	〃	〃	
13-22~13-23	2	〃	〃	雑誌	「世界情報」
13-24~13-25	2	〃	〃	書類	
13-26	½	書く	〃	書類の書き入れ	
13-26.5	½	読む	〃	書類	
13-38	1	{	〃	書類の書き入れ	
(以内)		書く	〃	書類の書き入れ	
13-39	1	読む	〃	書類	
13-40~13-41	2	書く	〃	〃	
13-42~13-44	3	読む	〃	〃	

13-45~13-46	2	書く	事務室	書類の書き入れ	
13-49	1	"	"	書類の書き入れ, 手紙の表書き	
13-50	1	読む	"	人形劇の台本	
14-41	1	"	"	人形劇の台本	
15-13	1	"	"	録音テープのつき紙に書いてある英語	
15-25	1	"	"	書類	
15-58	1	"	"	帳簿	予算関係のもの
15-58	1	書く	"	メモ	予算について
(以内)	(以内)				
16-00~16-01	2	"	"	"	"
16-03	1	読む	"	書類	
16-06~16-11	6	書く	"	原稿	
16-14	1	読む	"	書類	
(以内)	(以内)				
16-16	1	書く	"	書類の書き入れ	
16-24~16-27	4	読む	"	原稿	
16-29	1	"	"	"	
(以内)	(以内)				
16-31~16-32	2	"	"	児童劇の脚本	
16-34~16-36	3	書く	"	原稿	
16-40~16-41	2	読む	"	"	
17-19~17-20	2	"	座敷	新聞	「朝日新聞」2面「自由学校」など
17-21~17-22	2	"	"	"	" 1面
17-23~17-27	5	"	"	"	" 2面
17-33~17-34	2	"	"	"	" "
17-35~17-36	2	"	"	"	" 1面
17-37	1	"	"	"	" 2面
(以内)	(以内)				
17-45	1	"	"	"	" "
17-47~17-55	9	"	"	"	" 1面
17-56~17-57	2	"	"	"	" 2面
18-02	1	"	"	"	" "
20-14	1	"	"	"	" 1面 (前日の分)
20-15~20-21	7	"	"	"	" 4面
20-22~20-27	6	"	"	"	" 3面

読み書きラジオを聞く時間の内訳

(1) ラジオを聞く

「私たちのことば」	9分
ニュース	15分
「朝の歌」	15分
「朝の訪問」	10分
計	49分

(2) 読む

新聞	「庄内日報」 15 「朝日」 41	56分
雑誌	「世界情報」	2分
書類	(事務書簡を含む)	108分30秒
脚本		4分
原稿		7分

計 178分30秒

(3) 書 く

書類 (事務書簡を含む)	111分30秒		
原稿	9分		
メモ	11分		
計	131分30秒	総計	359分 (延べ)*

手 工 業 者

時刻	時間(分)	読・書・ ラジオ	場所	内 容	備 考
6-17~6-20	4	読 む		新 聞	毎日新聞 3面
6-24	1 (以内)	"		"	
6-38~6-42	5	"		"	毎日新聞 3面
6-55~6-59	5	"		"	毎日新聞 (山形版) 4面
8-23~8-27	5	書 く		請求書	

読み書きラジオを聞く時間の内訳

(1) ラジオを聞く	0分
(2) 読 む	
新 聞	15分
(3) 書 く	
請 求 書	5分
計	20分

5 文の長さ、文節の長さはどれほどか

高級地方公務員、手工業者、商店主のそれぞれについて文の平均の長さを求めると次の通りである。

	総 文 数	総文節数	文の平均の長さ
高級地方公務員	1,983	5,528	2.78 文節
手 工 業 者	1,573	4,752	3.02 文節

* 読み書きを同時に行った場合、読む時間と書く時間との両方にその時間が配当されている。

商店主 1,347 2,891 2.14 文節

だいたい一文平均2～3文節で、白河地域の調査に現われた3～4文節よりもさらに短い。

一文節の平均音節数は、3人とも大差はなく、4音節程度と見られる。

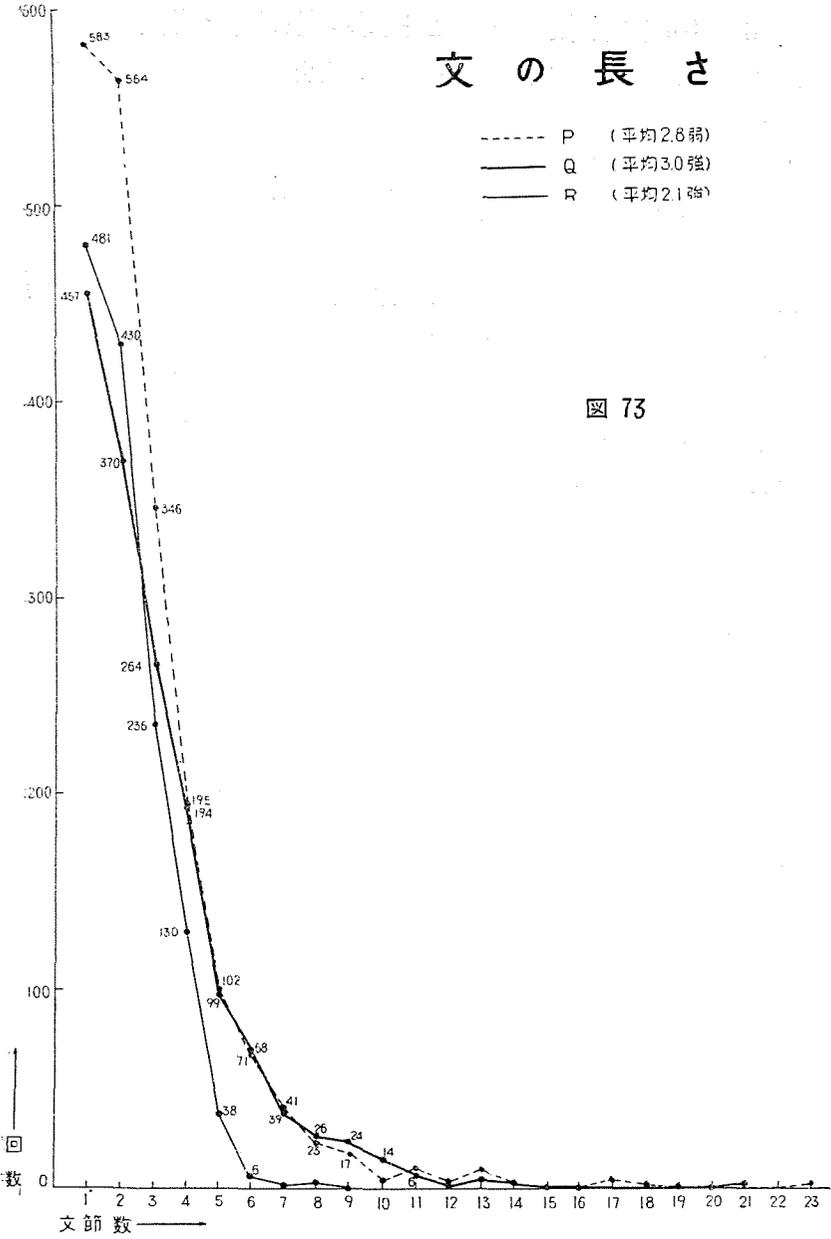
	一文節の平均音節数	総文節数	総音節数
高級地方公務員	4.0 強	5,528	22,288
手工業者	3.9 強	4,752	18,540
商店主	4.1 強	2,891	11,853

この総音節数は次のようにして算出した。まず24時間調査の記録全体を10ページごとにサンプルとして抽出し、それらのページからすべての文節を抜き出して、各文節を構成する音節の数を数えた。つぎにサンプルに当つたページの文節数の合計と音節数の合計とを出し、1文節の平均音節数を出した。さらに平均音節数に総文節数を掛け、総音節数とした。長音、促音は音節として数えた。

文の長さ

- P (平均2.8弱)
- Q (平均3.0強)
- R (平均2.1強)

図 73



6 10回以上使われたことばの度数順一覧表

- (1) 以下の表は、高級地方公務員、手工業者、商店主のそれぞれについて、使用度数 10 回以上の自立語を使用度数順にあげ、なお語と文節との関係をも示したものである。
- (2) 整理のしかたや語の認定は、白河地域の調査（言語生活の実態 307 ペ以下）に準じた。
- (3) 表中の見出しのことばは度数順に、文節は語幹の五十音順に並べた。
- (4) 数字はその左方の語または文節の度数を示す。
- (5) 語または文節の表記は「簡略かな表記」（161 ペ以下）によったが、その際、便宜のため、「簡略かな表記」のかたかな表記をひらがなで、ひらがな表記をかたかなで、それぞれ表記した。

高級地方公務員

は(返事) 443	-ますと 3	-に 7	-んですか 2
そ(そのように) 182	-よ-- 1	-にわ 1	-んですが 1
そ- 89	する 3	-の 6	-んですがね 3
- 1	-と 10	-らす-です 1	ある 47
-か 1	-のが 1	-わ 9	あ--た 1
-かも 1	-よりも 1	なる 54	-たでしよ- 1
-だ 2	すれば 2	な--たです 1	-たと 1
-で 1	せよ 3	-たね 1	-たな-- 1
-でしよ-ね 1	ゆ(言う) 61	-たので 1	-たね 1
-です 4	い--た 3	-たものですから 1	-たので 1
-ですか 51	-ただけど 1	-たら 1	-たのと 1
-ですかね 1	-たらす-んで 1	-て 10	-たら 2
-です 21	すがね 1	-てます 1	-て 4
-です 21	-たんです 2	-てますね 1	あり-ます 1
-です 1	-たんですが 1	-ても 1	-ますか 2
-でも 1	-たんですがね 1	なら-ないですか 1	-ます 3
-なんです 2	-て 5	-ないと 1	-ますが 1
-ね 3	ゆ- 37	-ないんで 1	-ますたね 1
-わ 1	-のお 2	-ないんですが 1	-ますて 1
え(返事) 148	-ので 1	-ないんです 1	-ますから 1
それ 108	-のですか 2	-んので 1	-ますと 1
それ 15	-のに 1	なり-そ-です 2	-ますね 1
-お 3	-のも 1	-ましよ- 1	-ますので 1
-が 3	-のわ 2	-ます 4	-ますんか 1
-から 36	-のわ 2	-ますか 3	-ますんかね 1
-からね 2	-んです 1	-ますた 3	-ますんけれども 1
-じゃ 1	これ 57	-ますたがね 1	-ますんと 1
-じゃ- 1	これ 27	-ますたね 3	-ますんね 1
-すか 5	-あ 1	-ますたよ 1	ありゃ 1
-で 5	-お 1	-ますて 2	ある 1
-です 1	-が 7	-ますと 2	-からと 1
-でも 1	-から 1	-ますので 2	-だけ 3
-でわ 4	-だけでね 1	-ますよ 1	-でしよ-か 1
-でわね 3	-で 1	-ますんか 1	-ね 1
-に 1	-です 1	なる 1	-のだから 1
-ね 2	-ですが 1	-か 1	-のですね 1
-も 4	-です 1	-でしよ-ね 1	-んです 1
-わ 17	-と 1	-と 1	-んですか 1
あ(返事) 84	-にわ 1	-んですがね 1	-んですがね 1
はい(//) 83	-ね 1	なれば 1	あれば 4
は(//) 78	-も 2	い(いい) 52	やる 42
ん(//) 71	-わ 10	い- 8	や--たら 1
す(//) 70	~くださる 55	-かい 1	-たらす-んです 1
す-たいんでしよ- 1	く下さい 41	-かも 1	-たんですか 1
-たの 2	-な 1	-じゃ 1	-て 18
-たら 1	-ね 2	-じゃないの 1	やら-ない 2
-たんですが 1	-ますた 1	-でしよ- 3	-ないと 1
-て 25	-ませんか 1	-でしよ- 3	-れる 1
-てです 1	くだされば 7	-でしよ-ね 1	やり-たいと 1
-てます 1	ほ(方) 55	-です 2	-ます 1
-ても 2	ほ- 4	-ですか 3	-ますたね 3
-と 1	-え 1	-ですと 1	-ますと 3
-ないよ-に 1	-お 1	-です 11	-ますね 1
-ないよ-にね 1	-が 15	-です 1	やる 5
-ましよ- 3	-だ 1	-と 1	-と 4
-ましよ-ねえ 1	-で 5	-な 1	-んでしよ- 1
-ます 2	-で 1	-の 1	なるほど 40
-ますた 2	-ですか 1	-らす-んです 1	なるほど 28
-ますて 1	-でも 1	-んじゃ 2	-ね 12
	-でわ 2	-んです 1	~いる 37

い-たな 1
 -たんです 1
 -たんですが 1
 -たんですがね 1
 -ます 21
 -ますか 1
 -ますが 1
 -ますから 1
 -ますた 1
 -ますて 3
 いる 2
 -の 1
 -んだそ-ですね 1
 -んです 1
その 34
 その 33
 その- 1
なに 33
 なに 2
 -か 19
 -か-で 1
 なん-で 1
 -ですか 1
 -でも 1
 -とか 1
 -の 2
ない 5
 ない 32
 -けれど 4
 -でしょ 1
 -でしょ-ね 2
 -ですけれど 1
 -ですね 4
 -と 3
 -ね 1
 -のです 2
 -のですが 1
 -ものですから 1
 -んでしょ 2
 -んですか 1
 -んですって 1
 なかっ-たのですが 1
 -たんです 1
 なくてわ 3
 なけれ-ば 1
 -ばね 1
ど-ぞ 30
ど-も 29
たいへん 28
 たいへん 11
 -で 1
 -でしょ 1
 -でしょ- 2
 -でしょ-ね 1
 -です 1
 -ですたね 1
 -ですね 4
 -ですわ 1
 -な 2
あ (返事) 27
はは- (〃) 27

お- (赤んぼうま) 26
あやす)
こと(事) 26
 こと 2
 -お 4
 -が 1
 -で 3
 -ですが 1
 -ですがね 1
 -ですからね 1
 -ですね 1
 -と 1
 -に 6
 -も 1
 -わ 4
ど- (どのように) 26
 ど- 15
 -か 1
 -かと 1
 -だい 1
 -です 5
 -ですか 2
 -ですた 1
わたくす(私) 26
 わたくす 4
 -の 17
 -も 1
 -わ 4
あれ 25
 あれ 12
 -が 1
 -じゃ- 1
 -すか 1
 -で 1
 -ですね 1
 -も 1
 -わ 7
くる(来る) 25
 き-たの 1
 -たら 1
 -たんです 1
 -て 5
 -ますた 3
 -ますてね 3
 -ます 3
 -ません 1
 くる-よ- 1
 -よ-に 1
 -らす-んです 1
 こ-られた 1
 -られますた 2
 -られますからね 1
は- [感動詞] 25
は- (返事) 24
ここ 23
 ここ 3
 -え 2
 -お 4
 -が 2
 -な 1
 -じゃ- 1
 -で 4
 -に 2

-の 2
 -わ 3
こ-みんかん(公民館) 22
 こ-みんかん 4
 -か 1
 -だけで 1
 -で 3
 -でも 1
 -と 3
 -に 2
 -にわ 4
 -の 1
 -わ 2
いま 21
いま 10
 -の 7
 -ね 1
 -まで 1
 -までの 2
もす(電話の呼びかけ) 21
もの 21
 もの 2
 -お 3
 -が 5
 -だから 1
 -で 1
 -です 1
 -でも 1
 -と 1
 -とか 1
 -ばかりでしょ-ね 1
 -わ 3
 もんですね 1
よい 21
 よい 3
 -です 1
 -ですか 1
 -と 1
 よかつ-た 1
 -たです 1
 -たですな 3
 よく 9
 -わ 1
おもう(思う) 20
 おもい-ます 1
 -ますが 1
 -ますから 7
 -ますからね 2
 -ますた 2
 -ますて 1
 -ますね 1
 おもう-んですがね 1
 おもっ-たんです 1
 -て 3
~ない 20
 ない 1
 -か 3
 -かと 1
 -から 1
 -ですか 2

-ですかね 4
 -のですか 1
 -と 1
 -んです 1
 -んですか 1
 なか-ったのですか 1
 なき 1
 なく-ちゃ 1
 なければ 1
この 19
 この 18
 -ぐらいの 1
わかる 19
 わか-ったのですか 2
 わから-ない 1
 -ん 2
 わかり-ますた 10
 -ますたか 1
 -ません 1
 わかるんじゃ- 2
できる 18
 でき-そ-ですか 1
 -てますて 1
 -ない 2
 -ないす 2
 -ないですね 1
 -ないですよ 1
 -ないので 1
 -ないんですよ 1
 -ます 1
 -ますか 1
 -ますね 1
 -ません 1
 -ませんか 1
 できる 1
 -だけ 1
 -よ-に 1
うまい 17
 うまい 1
 -です 1
 -ですね 1
 -な 1
 -んですか 1
 うまく 12
~くる 17
 き-たのかと 1
 -て 5
 -な 1
 -ますたからね 1
 -ますたね 2
 くる 1
 こい 4
 -や 1
 こ- 1
あかちゃん 16
あの 16
いつお- (一応) 16
ごと-くん(人名) 15
 ごと-くん 13
 -と 1
 -に 1
そりゃ 15

としょかん(図書館) 15
 としょかん 2
 -お 1
 -が 2
 -から 1
 -と 2
 -に 4
 -の 1
 -わ 2
わけ(訳) 15
 わけ 2
 -です 1
 -ですか 2
 -ですね 7
 -に 2
 -ね 1
あなた 14
 あなた 6
 -の 3
 -も 4
 -わ 1
~くれる 14
 くれ 2
 -と 5
 -ませんか 5
 くれる -と 1
 -よー 1
とき(時) 14
 とき 10
 -から 1
 -に 2
 -の 1
ひとつ 14
 ひとつ 13
 -の 1
ほーー[感動詞] 14
れんらくする 14
 れんらくすたら 1
 -て 9

-てたんですが 1
 -てですね 1
 -といて 1
 -ます 1
きよー(今日) 13
 きよー 4
 -だけ 1
 -だけでも 2
 -も 1
 -わ 5
~みる 13
 み -たいと 1
 -たか 1
 -たのですよ 1
 -て 4
 -ますた 1
 みれ 1
 -や 1
 みる 3
~もらう 13
 もらい -たいと 1
 -ましょー 1
 -ますた 1
 もらう 3
 -と 4
 もらって 3
いく(行く) 12
 いか -ないので 1
 -ないんですかね 1
 -れて 1
 いき -ますた 1
 -ませんでした 1
 -ませんねー 1
 -ませんねー 1
 -と 1
 いけば 1
 いっ -た 1
 -て 1

いや(否定) 12
え[感動詞] 12
けっこー 12
 けっこーです 12
じゅー 12
ちゅーと 12
 ちゅーと 11
 -ね 1
てる 12
 て -た 2
 -たのですけど 1
 -たり 1
 -て 4
 -てますたね 1
 -ますたか 1
 -られないので 1
 てる 1
どこ[代名詞] 12
 どこ 1
 -え 1
 -か 1
 -が 1
 -から 2
 -で 1
 -の 4
 どっか 1
はいる 12
 はいっ -た 1
 -たり 1
 -て 5
 はいらないと 1
 はいりましょーかね 1
 はいる 1
 -でしょーね 1
 -んですね 1
いれる 11
 いれ -て 4
 -てね 2
 -ても 1

-な 1
 -ましょーね 1
 -ます 1
 いれれば 1
~ござる 10
 ござい -ます 4
 -ますたか 2
 -ますた 2
こりゃ 10
 こりゃ 8
 こりゃ 2
すかず(然し) 10
だす(出す) 10
 だす -たんです 1
 -て 6
 -なさい 1
 -なさいよ 1
 だせば 1
だれ 10
 だれ 5
 -か 2
 -ですかね 1
 -でも 1
 -も 1
のーだい(農大) 10
 のーだい 1
 -だけ 1
 -の 8
ふん(返事) 10
やまがせんせー 10
(人名) 10
 やまがせんせー 6
 -に 3
 -の 1
わたす[代名詞] 10
 わたす 6
 -に 1
 -の 1
 -も 2

手 工 業 者

<p>ん(返事) 337 ん 272 -だ 52 -だか 2 -だかー 1 -だかの 2 -ださげ 1 -だの 1 -だのー 3 -だろー 1 -で 2 これ 86 これ 44 -お 1 -が 5 -がい 1 -から 3 -さ 2 -さー 1 -だけすか 1 -だば 2 -で 8 -ですが 1 -な 2 -なば 1 -なら 1 -の 1 -より 1 -わ 10 こんだけで 1 いー 76 いー 25 -か 6 -が 3 -かい 1 -かと 1 -かねー 1 -がのー 1 -かも 1 -くれたに 1 -けどのー 1 -さな 1 -さのー 1 -すな 1 -だ 1 -て 1 -で 1 -ですが 1 -ですが 1 -ですけどのー 1 -ですの 3 -でわ 1 -と 1 -とも 3 -な 1 -なんだ 1 -なんだのー 1 -の 2 -のー 2</p>	<p>-のだろー 1 -のです 1 -のですが 1 -ものー 1 -んだ 1 -んだの 1 -んで 2 -んですのー 1 -んどものー 1 いく(行く) 74 いかーネだってな 1 -ネだば 1 -ネって 1 -れら 1 いきたいかな 1 いく 6 -か 1 -がのー 1 -だな 1 -と 2 -な 1 -の 1 -のか 1 -のだよ 1 -んだ 2 -んだって 1 -んだってのー 1 いけ 3 -ば 1 -よ 1 -よい 1 いっーた 6 -たか 1 -たかのー 3 -たけどの 1 -たぞ 1 -たさげか 1 -たって 2 -たな 1 -たの 4 -たのかい 1 -たのわ 2 -たば 1 -たばのー 2 -たもんだの 1 -たろー 1 -たんだ 1 -たんだって 1 -て 9 -てから 3 -てのー 1 -てものー 1 そー(そのように) 73 そー 30 -か 17 -かー 1 -かい 2 -けー 2 -さ 2</p>	<p>-だ 3 -だのー 2 -で 3 -ですか 1 -ですのー 2 -ね 2 -の 3 -のー 2 -わ 1 する 56 すた 3 -た 2 -たて 1 -たらばか 1 -たんで 1 -て 10 -てから 1 -てももの 1 -とー 1 -ないで 1 -ないものー 1 -ないんだから 1 -ネー 1 -ネーのー 1 -ネーもんだから 1 -ましょー 1 -ます 1 -ますたが 1 -ろがな 1 すっーと 1 -とのー 1 する 3 -だかの 1 -だろー 1 -っけのー 1 -って 1 -と 1 -なんて 1 -のー 1 -のだね 1 -もの 1 -んぞや 1 -んだ 1 -んだろー 1 すれば 4 すんだ 1 せーネけんど 1 -んで 1 もん(もの) 55 もんか 1 -かー 1 -かも 1 -さ 1 -だ 11 -だー 6 -だがの 1 -だから 1 -ださけ 2</p>	<p>-ださけの 1 -だげ 1 -だぞー 2 -だっけのー 1 -だな 1 -だの 4 -だのー 8 -だはけ 1 -だものー 1 -だよ 2 -だろー 1 -だろのー 1 -で 2 -です 1 -ですからのー 1 -ですってのー 1 -のー 1 あー[感動詞] 51 それ 47 それ 8 -お 1 -が 2 -がのー 1 -から 4 -こそ 1 -だけ 1 -だと 2 -だばー 1 -で 8 -でのー 1 -でも 1 -も 2 -わ 9 -わー 1 -わのー 1 そんーじゃー 1 -で 1 なに 46 なに 7 -か 4 -が 1 なんーか 4 -が 1 -ぞ 2 -だ 7 -だー 1 -だーか 3 -だかな 2 -だのー 1 -だろー 1 -ちゃ 1 -ちゅーも 1 -ですのー 1 -でも 5 -とも 1 -に 2 -にもだ 1 はい(返事) 46</p>
---	---	---	--

～くる 45
 きーた 6
 -たかのー 1
 -たからのー 1
 -たけのー 1
 -たけん 1
 -たすの 1
 -たもんだ 1
 -たろー 1
 -たんで 1
 -たんよー 1
 -て 8
 -ての 1
 -てのー 1
 -ますた 1
 -ますたがのー 1
 くる 3
 -よ 1
 -んだが 1
 くれれば 1
 くんーだけ 1
 -だよ 1
 -だかのー 1
 こい 6
 -って 1
 -と 1
 こば 1
 ～なる 43
 なっーた 2
 -たー 1
 -たか 4
 -たですの 1
 -たのー 3
 -たら 1
 -たんだ 2
 -たんだもん 2
 -ちゃったのー 1
 -て 4
 -てるんで 1
 ならーない 1
 -ネ 2
 -んから 1
 -んどものー 1
 なりますて 2
 なる 2
 -けに 1
 -だ 1
 -だか 1
 -での 1
 -だろーの 1
 -はけ 1
 -もののー 1
 -もんのー 1
 -んだ 1
 -んだかの 1
 -んだもの 1
 なれーば 1
 -ばの 1
 ある 42
 あっーたか 1
 -たかのー 1
 -たけのー 1

-たら 1
 -て 1
 あらーのー 1
 -せんけに 2
 ありーますねーのー 1
 -ませんの 1
 ある 9
 -か 1
 -が 1
 -さけ 1
 -さけのー 3
 -だ 1
 -だけな 1
 -だつての 1
 -の 1
 -のー 1
 -のか 1
 -のだが 1
 -ものですからの 1
 -もんですよ 1
 -んだのー 1
 あれば 2
 あんーだ 2
 -だろ 1
 -で 1
 -メーか 1
 ほー(方) 39
 ほー 4
 -が 16
 -から 1
 -からでも 1
 -からも 1
 -だ 1
 -で 2
 -です 3
 -も 3
 -にな 1
 -わ 7
 はー(返事) 35
 くる(来る) 31
 きーた 3
 -たぞ 1
 -たな 1
 -たよ 1
 -たね 1
 -たのわ 1
 -たろー 1
 -たんだぜー 1
 -て 4
 -ます 1
 -ますの 1
 くるーのです 1
 -んだがのー 1
 くれれば 1
 こい 2
 こーネー 3
 -ネじゃ 1
 -ーばい 3
 -ちゃ 1
 -やって 1
 -よ 1
 きょー(今日) 30

きょー 10
 -と 2
 -わ 18
 ここ 29
 ここ 15
 -え 1
 -お 1
 -で 1
 -さ 4
 -にも 1
 -まで 5
 -わ 1
 かう(買う) 28
 かいたい 1
 かう 1
 -かのー 1
 -と 1
 かえネ 2
 かおーだば 1
 かって 14
 -てけ 1
 -ただもの 1
 -たつて 1
 -たつてねー 1
 かわーなきゃのー 1
 -なければの 1
 -れるよ 1
 えー(返事) 27
 もの 27
 ものお 2
 -か 1
 -が 4
 -だ 1
 -だがな 1
 -だけの 1
 -だす 1
 -です 1
 -ですからのー 1
 -な 1
 -なら 1
 -の 1
 -のー 1
 -わ 10
 ざー(感動詞) 24
 いま 23
 いま 13
 -だつて 1
 -だば 1
 -ならば 1
 -までも 2
 -までも 1
 -わ 3
 -わー 1
 まだ 22
 まだ 21
 -か 1
 もー 22
 うーんち 21
 こっち 21
 こっち 4
 -え 9
 -が 1

-から 1
 -け 1
 -のわ 2
 -のわ 1
 -も 1
 -わ 1
 い(いい) 20
 い 1
 -かったば 1
 -かろーが 1
 -だ 1
 -ですの 1
 -んだ 5
 -んだか 1
 -んだけの 1
 -んだぜ 1
 -んだつてたのー 1
 -んだのー 1
 -んだのにのー 1
 -んで 2
 -んです 1
 -んどものー 1
 ほー(感動詞) 20
 やる 20
 やっーただかな 1
 -たつて 1
 -たもんですからな 1
 -たもんですけ 1
 -ちゃのー 1
 -て 10
 やらーにゃのー 1
 -んにゃ 1
 やれば 1
 やろーのー 1
 やんだぞ 1
 ゆー(言う) 20
 いいますけのー 1
 いっーたけなー 1
 -たさけか 1
 -た 1
 いわーいら 1
 -せたら 1
 ゆーーてねー 1
 -と 1
 -の 2
 -のー 1
 -のだからのー 1
 -のわ 1
 -もんだ 2
 -んだつてー 1
 -んだろー 1
 ゆっーたぜ 1
 -たで 1
 ゆわられたのですが 1
 のー 1
 この 19
 その 19
 やっばり 19
 ーいる 17
 いーたどもの 1
 -ないもののー 1
 -ネでさ 1

け	1	すこす	9	ます	2	～みる	10
の	1	わ	1	できる	3	み	1
ほど	1	だす(出す)	10	～だろ	1	～たが	1
おっき	10	だき	1	～ならば	1	～ないかい	1
おっき	1	～ないで	1	～よ	1	みる	3
お	1	～ネ	1	ど	7	～んだ	1
ぜ	3	～ネものな	1	ど	10	みれば	2
の	3	だす	1	ど	1	みる	1
の	1	～た	1	～だか	1	よい(良い)	10
の	1	～たか	1	～です	2	よ	3
んだ	1	～たら	1	な[感動詞]	10	よ	1
お	1	～なさい	1	なんぼ	10	よ	1
お	2	～のか	1	なんぼ	4	よく	5
～び	10	～のだが	1	～か	3	～て	1
び	1	できる	10	～でも	1		
～ます	8	でき	1	～の	1		
び	1	～ネ	1	～も	1		
すこす(少し)	10		1				

商 店 主

ん(返事)	101	-なば	1	あれ	14	-で	2
ん	57	-なんの	1	-か	1	-の	1
-じゃ	1	-だ	1	-だ	1	-わ	1
-だ	29	-も	1	-だものな	1	-(不明)	1
-だか	1	-より	1	-だや	1	えー(返事)	21
-だの	2	-わ	7	-で	2	ない	21
-だば	10	あー(返事)	47	-と	1	ない-	1
-な	1	それ	38	-よか	1	ない-	6
はい(返事)	80	それ	29	-より	3	-か	2
いー	58	-だから	1	-は	2	-かな	4
い	4	-なら	1	なんぼ	25	-かの	1
いー	22	-の	1	なんぼ	8	-すのー	1
-か	6	-まで	1	-か	3	-の	2
-が	5	-も	1	-かなー	1	-のか	1
-ぞ	1	-よか	1	-くらい	2	-んか	1
-だ	1	-より	1	-くらいです	1	な	2
-だろ	1	-わ	2	-だ	3	そー(そのように)	20
-だろが	1	はー(返事)	38	-だけ	1	そー	3
-で	1	くる(来る)	33	-だっけか	1	-すか	1
-ですか	1	きた	3	-で	1	-です	6
-ですの	1	-たけど	1	-でも	2	-ですか	2
-な	3	-たっけか	2	-ほど	1	-わ	1
-なー	1	-たの	1	-ほどだけ	1	そーか	1
-なの	2	-たら	3	ありがとー	24	-かね	1
-に	1	-たんで	1	ありがと	18	-さ	4
-の	4	-て	2	ありがとー	6	-だ	1
-のけ	1	-てから	1	やる	23	どーも(あいさつ)	20
-もの	1	-ます	1	やっ	1	~やる	20
-や	1	-ますさけ	1	-か	1	やっか	1
ある	54	くる	3	-た	1	-たがのー	1
あたら	1	-が	1	-たら	3	-て	2
あります	1	くれ	1	-たんですがの	1	やる	11
-ますからの	9	くだ	1	-て	5	-がな	1
-ますたか	1	こない	1	-て	1	-けど	1
ある	24	-ネー	1	-てんで	1	-んだのー	1
-か	2	-ネーだ	1	やります	2	やれば	2
-け	1	-ネーもの	1	やる	4	もってく(持って	19
-だか	1	-ネか	1	-か	1	行く)	
-たけ	1	-ネが	1	やれば	2	もってか-なくちゃ	1
-てば	1	-ネの	1	あ(返事)	22	-ネか	1
-ども	1	-ネのー	1	~ネー(~ない)	22	もってく	2
-ね	1	-ネば	1	ネ	4	-か	3
-のわ	1	ネー(ない)	33	-か	6	-のか	1
-よ	2	ネ	3	-が	1	もってけ	2
-んだ	2	-が	1	-だろ	1	-ば	1
-んだな	1	-っけか	1	-ば	1	もってっ-た	2
あれば	1	-ば	1	-の	1	-たら	1
あん-だかっ	1	-もの	1	-や	1	-て	4
-だろ	1	ネー	15	ネー	2	-てで	1
-メーもの	1	-か	1	-か	2	なに	18
これ	54	-が	2	-かな	2	なに	3
これ	32	-ぜ	1	-です	1	-か	6
-か	2	-って	1	-んだ	1	-かと	2
-かい	1	-と	1	ほー(方)	22	なん-だ	3
-だば	1	-のー	1	ほー	7	-だか	2
-だもの	1	-もの	2	-が	7	-でな	1
-だわ	1	-もん	1	-さ	1	-にも	1
-で	3	-もんか	1	-だ	1	~くる	17
-な	1	あれ	27	-だば	1	き-た	4

-たか	1	する	1	-だ	1	-て	5
-ただ	1	-んだ	1	-だの	1	だす	1
-たんだろ	1	-んですか	1	-だよ	2	-もん	1
-て	6	すれば	1	-だん	1	むすろ(莖)	11
くると	1	あ	15	-なん	13	むする	7
こい	1	きょ一(今日)	15	にじゅうえん	13	-の	2
こい	1	きょ一	9	(20円)	6	-わ	2
-っ	1	-の	1	にじゅうえん	1	お一き一	10
くれる	17	-わ	5	-すつかの	1	お一き一	2
くれ	7	もつ(持つ)	15	-だの	2	-の	1
-っ	1	もた	1	-で	1	-の	1
-っ	2	て	8	-です	1	おおき	3
-な	1	もって	4	-に	1	おおきな	1
-ないか	1	-け	1	-の	13	-の	2
-ないかな	1	-ないか	1	やすい(安い)	4	〜がす(〜ごさい	10
-よ	2	おはよ一(あいさ	14	やすい	1	ます)	4
くれれば	1	つ)	1	-かも	1	がすた	2
くんないか	1	おはや	13	-のも	1	がす	1
〜なる	17	おはよ一	14	-わ	1	-か	1
なっ	2	かう(買う)	1	やすく	4	-ね	1
-た	1	かう	1	やすの	1	-の	2
-た	1	-の	1	じゅうごえん	12	すば(それならば)	10
-て	1	-よ	1	(15円)	4	そこ[代名詞]	10
-てますね	1	かっ	8	じゅうごえん	1	そこ一お	1
なら	1	-て	1	-く	1	-さ	4
-ネ	1	から	1	-く	1	-の	4
なり	1	かわ	1	-だ	1	-の	1
-ま	1	-ネ	1	-で	1	その	10
なる	3	まける(値段をま	14	-です	3	たわす(束子)	10
-と	2	ける)	8	-の	1	たわす	8
-とね	1	ま一けて	2	ひやくごじゅ一え	12	-だ	1
なんば	2	-ないで	1	ん(150円)	7	-わ	1
する	16	-られ	1	ひやくごじゅうえん	1	まだ(未だ)	10
す	1	まける	2	-だか	2	まだ	9
-たのか	1	まける	13	-で	1	ま一だ	1
-た	1	まける	11	-です	1	みる(見る)	10
-たら	5	あと	1	-わ	11	み	1
-て	1	-で	1	だす(出す)	1	-たら	1
-てか	1	-わ	1	ださないもの	1	-て	4
-てけ	1	だめ	13	だし一たさけ	1	-てか	1
-ても	1	だめか	2	-た	1	みる	3
-ネ	1	-だ	5	-たん	1		
-ます	1	-だっけか	1	さけ	1		

7 手書きと録音とはどんな違いがあるか

言語および言語行動を観察し、記録する調査においては、その記録は、もれなく、しかも正確・完全であることを理想とする。しかしながら、われわれが実際に行ったものは、白河地域の調査におけると同様、あらかじめ正確さに限界の予想される手書きに主として頼らなければならなかった。しかし、高級地方公務員の言語の一部を記録する際には、手書きと録音器（ワイヤーレコーダー）とを併用し、また手工業者の調査に当っては、手書き、ソクタイプ（機械速記）、録音器（テープレコーダー）を併せ用いることができた。そのうち、ソクタイプの使用は、タイピストが鶴岡地域の言語に習熟する暇がなかったため、有効な記録方法とはなり得なかったが、録音器による記録と手書きによる記録との間にはその異同にある傾向が見られ、また同時に手書きによる記録の妥当性を吟味する資料ともなると考えられるので、その間の異同について簡単に記しておこう。

資料としては、高級地方公務員の 12-20~15-12 までの 2 時間 52 分間（実会話時間 57 分）の手書きならびに録音による記録を選んだ。

7.1 録音と手書きとの間にはどのくらい異同があるか

時刻	時間	総文節数	まちがった文節の数
12-20~12-25	6分	178	34
12-47~12-53	7	139	12
13-00~13-21	22	132	9
13-27~13-30	4	44	6
13-47~13-48	2	37	3
13-50~13-57	8	196	15
14-11~14-15	5	121	17
15-10~15-12	3	74	11
	57分	921	109

すなわち、文節を単位とした場合、手書きによる記録には 11.8% 程度のあやまりが見出される。

7.2 どういうときに異同が生じたか

I) 同じ文中あるいは前後の文中において、同じ語が2回あるいはそれ以上くり返されたとき、くり返された語の一つあるいは二つ以上がぬけたもの。

(1) はあ	20
(2) ええ	6
(3) はあは	2
(4) 貸出し文庫ね	1
(5) そうですね	1
(6) そうですか	1
(7) は	1
(8) へや	1

計 33

(II) 同じ文中あるいは前後の文中において、音あるいは意味の似た語が2回あるいはそれ以上くり返されたとき、くり返された語の一つあるいは二つ以上がぬけたもの。(かつこの中がくり返された語)

(1) ええ	(はあ, はあは, は, はっああ など)	3
(2) はあ	(ええ, そう, はっああ など)	2
(3) はい	(は)	2
(4) そう	(そうお)	1
(5) 補助金	(助成金)	1

計 9

III) 文節のはじめ、おわりあるいは中ほどの語がぬけたもの。(矢じるしの向いた方が録音)

A 文節のはじめ

(1) 今度の ← (不明)の	1
(2) 実行予算を ← 予算を	1
(3) 部門のね ← (不明)の	1
(4) 無理ですね ← (不明)ですね	1
(5) (不明)つけてね ← つけてね	1

B 文節のおわり

(6) いまね ← いま	1
(7) かわいそうなので ← かわいそう	1
(8) すぐに ← すぐ	1

- (9) それは ← それ 1
 (10) 広さならば ← 広さなら 1

C 文節の中ほど

- (11) いいわけですね ← いいですね 1
 (12) 言ったらいいんですがね ← 言ったんですがね 1
 (13) 現金予算に ← 現金に 1
 (14) 公民館予算というのを ← 公民館予算を 1
 (15) 承知しとりますか ← 承知しますか 1
 (16) 別個に ← 別に 1
 (17) 方針なのでしょう ← 方針でしょう 1
 (18) (はいった) ものを ← (はいった) のを 1

計 18

(Ⅳ) 文のはじめ、おわりあるいは中ほどの文節（あるいは連続した文節）がぬけたもの。

A 文のはじめ

- (1) あの 2
 (2) ええ 2
 (3) こりゃ 1
 (4) すると 1
 (5) つくるには 1
 (6) でも 1
 (7) ま(まあ) 1
 (8) まあ 1

B 文のおわり

- (9) こじん(個人か?) 1
 (10) 従業員費 1
 (11) もう少し 1

C 文の中ほど

- (12) あの 1
 (13) あれは 1
 (14) いまの 1
 (15) きょうだけでも 1
 (16) 交通費 1
 (17) そういった(ものが) 1

(18) そして	1
(19) その	1
(20) それが	1
(21) とくに	1
(22) 待ってください	1
(23) やっぱり	1
(24) 不朗 (録音も)	2
計	27

(V) 文節のはじめあるいはおわりによけいな語をつけたもの。(前後の文の中に似た文節があるのでまちがえたもの)

(1) 土曜日 ← 土曜日ね	1
(2) 少し ← もう少し	1
計	2

(VI) 一つの文が全部ぬけたもの

(1) いいえ	1
(2) ええ, ええ	1
(3) そのう	1
(4) はあ	1
(5) はあ, はあ, は	1
計	5

(VII) 音あるいは意味の似た語に聞きちがえたもの

A. 音が似たもの

(1) こっち ← これも	1
(2) これ ← それ	1
(3) そう ← こう	1
計	3

B. 意味が似たもの

(4) (書いて) いただきますから ← (書いて) もらいますから	1
(5) ユネスコ子供学校の ← ユネスコ子供会の	1
計	5

7.3 文節内での異同

(I) 一文節全部ぬけたもの

(1) 名 詞	8
---------	---

今の	1	
貸出し文庫ね	1	
きょうだけでも	1	
交通費	1	
こじん(個人か?)	1	
従業員費	1	
へや	1	
補助金	1	
(2) 代名詞		8
あの	3	
あれは	1	
こりゃ	1	
その	1	
そのう	1	
それが	1	
(3) 動詞, 形容詞		5
言った	1	
〜ください	1	
少し	1	
作るには	1	
待って	1	
(4) 副詞		7
そう	2	
そうです	1	
そうですか	1	
とくに	1	
もう	1	
やっぱり	1	
(5) 接続詞		3
そして	1	
すると	1	
でも	1	
(6) 感動詞(応答など)		46
いいえ	1	
ええ	13	
は	2	

はあ	25
はあは	1
はい	2
ま	1
まあ	1

(Ⅱ) 文節の一部がぬけたもの。(矢じるしの向いた方が録音) 17

(公民館予算と) いうのを ← (公民館予算) を
 言ったらしいんですがね ← 言ったんですがね

いまね ← いま

かわいそうなので ← かわいそう

現金予算に ← 現金に

こんどの ← (不明) の

実行予算を ← 予算を

すぐに ← すぐ

それは ← それ

広さならば ← 広さなら

別個に ← 別に

部門のね ← (不明) ね

方針なのでしょう ← 方針でしょう

無理ですね ← (不明) ですね

(はいった) ものを ← (はいった) のを

(いい) わけですね ← (いい) ですね

(不明) つけてね ← つけてね

(Ⅲ) 文節あるいは文節の一部の聞きちがいがい。 10

え ← ええ

公民館予算と ← 公民館予算を

～いただきますから ← ～もらいますから

こっち ← これも

これ ← それ

承知しとりますか ← 承知してありますか

そう ← こう

土曜日 ← 土曜日ね

はあは ← はあ

ユネスコ子供学校の ← ユネスコ子供会の

(Ⅳ) よけいな文節が入ったもの。 1

(少し) ← もう (少し)

(Ⅴ) 録音でも記録でも不明な文節。 2

索 引

1. この索引は、本文を理解するために必要と思われる項目を五十音順に並べたものである。
2. 目次と重複するものは省略した。したがって、ある事項を求める際には、目次と索引とを併用せられたい。
3. 数字はページ数を示し、イタリックは特に重要なものを示す。

<p>アクセント 35</p> <p>～記号 144</p> <p>～体系 177</p> <p>～の“たき” 169</p> <p>～の類推 178</p> <p>暗示性 (suggestibility) 141</p> <p>～テスト 6, 52</p> <p>家の構え 32</p> <p>「イク」(行く)によって代表される動詞 の活用形式 188</p> <p>意志 190, 193</p> <p>著しい差 87</p> <p>一日じゅうの言語行動 61</p> <p>1日に調査できる人数 43</p> <p>一文節全部ぬけたもの 302</p> <p>いつも 238</p> <p>意味が似たもの 302</p> <p>いらっしゃい 239</p> <p>受身 226</p> <p>映画の利用 99</p> <p>χ^2 検定 (Yates) 50, 67, 135</p> <p>江戸時代の庄内語 228</p> <p>選び出すまでの手続 228</p> <p>「おかあさん」に当る土語の分布 249</p>	<p>「おとうさん」に当る土語の分布 249</p> <p>音あるいは意味の似た語 300</p> <p>音が似たもの 302</p> <p>音の点数 58</p> <p>驚く 240</p> <p>音声学的観察 146</p> <p>音声の特徴 35</p> <p>音素記号 161</p> <p>階層 17, 94</p> <p>回想 2, 218</p> <p>外来語 62, 63</p> <p>外輪式アクセント 163</p> <p>書き方の実例 230</p> <p>各語の分布 244</p> <p>学校における共通語指導状態の調査 6</p> <p>学歴 89, 90, 142, 155</p> <p>～別 203</p> <p>重ね抜き法 (double sampling) 44, 47 51, 57</p> <p>型の区別 163</p> <p>課題 268</p> <p>活用の種類 188</p> <p>仮定条件 189, 190, 192, 194, 197</p> <p>可能 226</p> <p>代りサンプル 53, 56</p> <p>間投助詞 189</p>
---	---

聞きちがい	304	下上型の動詞	171
記入法	229, 231	下上(起乙)型	165
基本型	166	下上(起甲)型	165, 171
基本的な形容詞	272	下上(平)型	170
基本的な動詞	272	下上型の動詞	170
教示	230	下上下型	167, 170, 172, 174, 177
居住状況	142	～の動詞	170
居住地域	18	言語関心	92
きょうだい	32, 96	言語形成期	19, 79
～の関係	32	言語形成期以後 25 歳までの	
強調形のアクセント	166	居住状況	96
共通語を話す度合の主観的判定	34	言語行動	280
共通語教育	139, 142	言語生活の実状	2
共通語化	119, 126, 127	「言語生活」の24時間調査	5
～の過程	142	言語量の時刻別分布 文の数による	271
～の度合	45, 49, 63	言語量の時刻別分布 文節の数による	271
～の度合を決定する要因	44	言語量の時刻別分布 話題の数による	272
～の度合の推定値	47	現住所	18, 94
～の要因	140		
～の要因と過程	14	語	148
「去年」に当る土語の分布	250	語彙	36
記録の妥当性	299	～の点数	59, 108
		～の特徴	35
		口蓋図	150, 151
		口蓋化した摩擦音	145
		交替形	233
		交通量	25
		御家祿	4, 18, 148, 185
		～によく用いられる語	207, 230, 231
		～によく用いられる語	232
		国際音声記号	144
		国勢調査	44
		国鉄の着駅別乗車券売上枚数	24
		個人	148
		五十音順	232
		誇張	59
		「こども」に当る土語の分布	250
形式的な名詞	272		
経歴的要因	93, 102		
下型	164		
下下型	165, 171		
下下下型	167, 173		
下下上(起乙)型	167, 173		
下下上(起甲)型	167, 172		
下下上(平)型	170, 174		

コミュニケーション	104	使用度数の多い(10回以上)語の分布	274
～の要因	101	使用度数の多い(10回以上)文節の分布	275
騒ぐ	240	庄内	79
残存度	258	～グループ	79, 182
サンプリング	52	昭和25年度国立国語研究所	
～計画	43	庄内地方調査員	11, 12
士	233	職業	17, 92
使役	226	～的なもの	270
指示することば	272	～別	56, 193, 203
自称の代名詞	185	食事時	270
自然的要因	89, 102	白河地域の調査	2, 80, 86, 126, 154
指標としての音声の特徴	58	新語	35, 86, 119
視話法の歌	33	人口表	50
実測値	113	新聞	32
市と村との依存関係	121	～とラジオの利用	25
事物	187	～の利用	98, 142
社会的態度	101, 104	推測値	113
社会的・地域的環境の要因	102	ずいぶん	241
若	233	推量	190, 193, 200
尺度解析(Cornell techniqueによる scale analysis)	68, 123, 125, 129	ズーズー弁	14
重相関	118	ずわる	241
～関係	109, 111	性	87, 155
～係数	113, 118	生育・居住環境の要因	98, 104
主観的判定	58	生育地	142
10回以上使われた語の度数順一覧表	273	～とその後の居住状況	19
10回以上使われた文節の 度数順一覧表	278	狭い・前舌母音	145
出生地	95	全国の地域	19
準備調査	267	選定の条件	237
上型	164	増加・減少函数	59, 68, 84
上下型	165, 170	相関関係	86, 121
～の動詞	170	相関表	135
上下下型	174, 167	層別	44, 51
小都市	2	～サンプリング	45
		ソクタイプ(機械速記)	267, 299

測定の尺度	35
尊敬	226
第1次近似	115
第1次サンプル	44, 47, 57
対称の代名詞	185
タイピスト	299
代表語	35, 153, 154, 155
妥当性 (validity)	35, 36, 61
他の特徴との関係	58
だめだ	242
単行本	32, 99
単純相関関係	118
単純相関係数	110
談話生活	268
父の出身地	95
中舌母音	145
調査員	5, 36, 43
～のくいちがい	30, 78, 142
～の個人差	79
調査語	36, 153, 154, 237
調査語彙	176, 178, 181
～の選定の基準	180
調査項目	227
調査対象 (universe)	43
調査地点	11
～を選ぶ基準	3
調査日数	43
調査票	199, 201, 230
～に盛るべき内容	16
調査不能者	54
調査不能率	56
調査文例	203, 206, 215
調整	71
町人	230, 231
～によく用いられる語	232

地理的分布	228, 244, 246
追求 (follow up)	43
通時的	146
強い要因	106, 111
鶴岡アクセント	182
鶴岡市の国語教育	139
鶴岡なまり	8
定性的な要因の数量化	115
丁寧な発音	164, 166, 168
手書き	267, 299
適応性 (adequacy)	17
適度 (optimum)	118
～な数量化	117
転出者	20, 24
転入者	20
同一の方言	144
等間隔抽出法	52, 57
東京語形と方言形との対応関係	138
東京との関係	25
東京との行き来	101
東国式アクセント	163
東国式諸方言	164
動詞「スル」の活用形式	195
同調	57
投物線の分布	84
遠くへ行ったことがあるか	19, 100
特殊社会 (association)	18
土語	228, 231, 232
なまり	15, 33, 139, 142, 147
～の程度	90
25歳以後の居住状況	97
24時間調査	64, 267

日常基本語彙	36, 228, 229	分析表	124
年齢	17, 87, 155	文節の一部がぬけたもの	304
年齢層	17	文節のおわり	300
場所	187	文節の中ほど	301
はずかしい	242	文節のはじめ	300
～に当る土語の分布	248	文のおわり	301
派生形	233	文の長さ	287
パーソナリティ	140	文の中ほど	301
～の調査	6	文のはじめ	301
発音記号	144	文の平均の長さ	285
発音教育	33, 34, 90, 142	分布の型	84, 206, 250
～と言語関心	32	文法	36
発音矯正の教育	32	～の点数	58, 108
母の出身地	96	～の特徴	35, 36
浜茨	4, 6, 258	文末助詞	189, 191, 226
場面	148	平板型	163
～による共通語と方言との 使い分け	34	並列	207
～の過程	142	返事のことば	272
鼻音化	148	方角	187
非庄内	80	方言形	238
～グループ	80, 182	方言量	228
被調査者(サンプル)	12, 19, 43, 68	方向を示す助詞	201
否定	195	母集団(population)	43
鼻母音	145, 147	補正	71
比例割当て	45	本調査	267
広い母音	145	マス・コミュニケーションの調査	6
複数形	186	まるくちの硬口蓋摩擦音	145
物資配給台帳	20, 44, 57	「ミル」(見る)によって代表される 動詞の活用形式	191
不明な文節	304	無造作な発音	164, 166, 168, 170
文が全部ぬけたもの	302	命令	190, 192, 195
文化的条件	16, 44, 230, 267		
文化変容(acculturation)	6		

目立つ要因	102	よけいな文節	304
面接法	229, 231	読み書きラジオを聞く時間の内訳	282, 284, 285
もう	243	弱い要因	111
モデル地域	2	「来年」に当る土語の分布	250
模様 (pattern)	68	ラジオ	32
～図	130	～の利用	100
モーラ (音素論的音節)	161	ランダム・スタート	57
役員	93	理由	209
～かどうか	32	両くちびるの摩擦音	145
有意差	50	類音語	154
有意な傾向性	87	るす	243
有意な差	86	老	233
行き来	20	録音器 (テープレコーダー)	267, 299
universe	44	録音器 (ワイヤーレコーダー)	299
要因	117	ロールシャッハ (Rorschach) テスト	6, 52, 140
～の強さ	111	～のためのサンプル	115
～分析	45		
～別分析	123		
よけいな語	302		

LANGUAGE SURVEY IN TURUOKA CITY, YAMAGATA PREF.

CONTENTS

Foreword

Part I Outline of Survey

Part II Dialect and Common Japanese in a Speech-community

1 Introductory

2 Survey Plan

3 Results

3.1 Factors Determining Degree of Speaking Common Japanese

3.2 Process of Shift from Dialect to Common Japanese

4 Conclusion

Part III Linguistic Features of Turuoka Dialect

1 Phonetical Features

2 Accent System

3 Morphological Features

4 Lexical Research

4.1 Dialectal Features of Basic Japanese

4.2 Linguistic Geography on Surrounding District of Turuoka City

4.3 Comparison with Dialect Glossary 200 Years Ago

Part IV Language Behavior of an Individual during One Day

1 '24 Hours Survey' and Surveyees

2 Linguistic Amount in a Day

3 Frequent Forms

4 Time Used for Reading, Writing and Radio Listening

5 Sentence and 'Pause Group' Length in Spoken Language

6 Tables of Frequent Words in Frequency Order

7 Matching Handwriting with Taperecording

Index

THE NATIONAL LANGUAGE RESEARCH INSTITUTE
YOTUYA, SINZYUKU, TOKYO

1953

国立国語研究所報告 5

地域社会の言語生活

——鶴岡における実態調査——

1953年5月25日印刷
1953年5月30日発行

¥ 600.00

著 者 国立国語研究所

発行者 株式会社秀英出版
代表者 有光次郎

印刷者 株式会社細川活版所

発行所 株式会社秀英出版

東京都中央区銀座1の5
電話・京橋(56) 8671
振替口座・東京 119739

—(国立国語研究所報告)—

- | | | | |
|----|--------------------------------|------|--------------|
| 1. | 八丈島の言語調査 | A 5判 | 430頁
290円 |
| 2. | 言語生活の実態
— 白河市および附近の農村における — | A 5判 | 362頁
300円 |
| 3. | 現代語の助詞・助動詞
— 用法と実例 — | A 5判 | 304頁
260円 |
| 4. | 現代語の
語彙調査 婦人雑誌の用語 | B 5判 | 346頁
500円 |
| 5. | 地域社会の言語生活
— 鶴岡における実態調査 — | A 5判 | 316頁
600円 |

—(国立国語研究所資料集)—

- | | | | |
|----|-----------------------------|------|--------------|
| 1. | 国語関係刊行書目
— 昭和18年～24年まで — | A 5判 | 68頁
45円 |
| 2. | 語彙調査
— 現代新聞用語の一例 — | A 5判 | 108頁
80円 |
| 3. | 送り仮名法資料集 | A 5判 | 228頁
200円 |

- | | | | |
|------------|-------------|------|--------------|
| 昭和
24年度 | 国立国語研究所年報 1 | A 5判 | 230頁
200円 |
| 昭和
25年度 | 国立国語研究所年報 2 | A 5判 | 154頁
160円 |
| 昭和
26年度 | 国立国語研究所年報 3 | A 5判 | 158頁
160円 |

- | | | | |
|-----------|----------|------|--------------|
| 文部省
著作 | 国語審議会報告書 | A 5判 | 208頁
150円 |
|-----------|----------|------|--------------|

— 附 議 事 要 録 —

(昭和24年6月～27年4月まで)

株式会社 秀 英 出 版 発 行

東京銀座1の5・電話京橋(56)8671・振替東京119739